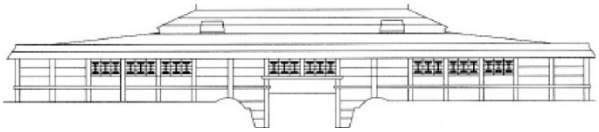
令和４年度　紀伊風土記の丘年報　第50号

紀伊風土記の丘研究紀要　第12号



和歌山県立紀伊風土記の丘

令和４年度

紀伊風土記の丘年報

第50号

目　　次

Ⅰ　施設の概要　・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　博物館活動　・・・・・・・・・・・　2
　1　展示　・・・・・・・・・・・　2
　2　普及活動　・・・・・・・・・・・　15
　3　研修・実習等　・・・・・・・・・・・　18
　4　広報活動　・・・・・・・・・・・　22
　5　ボランティア活動　・・・・・・・・・・・　23
　6　管理運営・環境整備　・・・・・・・・・・・　25
　7　特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業　・・・・・・・・・・・　26

Ⅲ　入館者の動向　・・・・・・・・・・・　33

Ⅳ　紀伊風土記の丘協議会　・・・・・・・・・・・　34

Ⅴ　調査・研究　・・・・・・・・・・・　34

Ⅰ　施設の概要

当館は、特別史跡「岩橋千塚古墳群」の保全と公開活用をはかるため、1971 年（昭和 46）8 月 1 日に設置された、県立の考古・民俗系博物館施設である（登録博物館 1972 年（昭和 47）6 月 20 日）。総面積 672,988 ㎡（特別史跡 629,944 ㎡）の園内には、約 500 基の古墳や文化財民家集落、万葉植物園、資料館などを整備している。

①古墳群

園内には約 500 基の古墳が分布している。石棚と石梁のある特徴的な構造を持った横穴式石室や、竪穴式石室、箱式石棺など 14 基の古墳の内部施設を見学できるように公開している。園内は、ハイキングコースをともなっており、自然に触れながら文化財に親しめるよう整備している。特別史跡の面積は 629,944 ㎡、管理団体は和歌山県である。

②移築民家

園内には県内各地より移築された重要文化財「旧柳川家住宅　主屋・同前蔵」及び「旧谷山家住宅」、県指定有形文化財「旧谷村まつ氏住宅」及び「旧小早川梅吉氏住宅」を保存・公開展示している。重要文化財 2 件は日時を定めて床上の公開やイベント等を実施、県指定 2 件は体験学習の場として活用し、茅葺屋根の保全のため日常的にカマドやイロリを使った燻蒸を実施している。

③和船収蔵施設

館蔵の県指定有形民俗文化財「日高地域の地曳網漁用具及び和船」の一部は、屋外の和船収蔵施設で保存展示、その他の有形民俗資料や文献史料は資料館内収蔵庫にて保管（非公開）している。

④万葉植物園

万葉植物を中心とした植物園で、紀伊国と関連ある四季折々の万葉植物が鑑賞できる。万葉集に歌われた約 170 種の植物のうち約 80 種を植栽し公開している。敷地面積は 1,650 ㎡、万葉歌碑 5 基を設置している。

⑤復元竪穴住居

和歌山市鳴神の音浦遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居跡をモデルに平成８年に復元し、古代体験学習の場として活用している。木造茅葺で、面積は 23.40 ㎡である。

⑥資料館

弥生時代の高床倉庫をイメージして建てられた資料館では、岩橋千塚古墳群や県内で出土した遺物を中心に考古資料及び民俗資料を常設展示し、季節ごとに開催する企画展・特別展で考古学・民俗学に関するテーマ展示を実施している。また、古代モノ作り体験などの体験学習の場としても供している。鉄筋コンクリート平屋一部地階で、延面積 1,592.50 ㎡（展示室面積 517.6 ㎡）である。令和４年２月 17 日付で国の登録有形文化財に指定されている。

紀伊風土記の丘に関連する指定文化財　一覧

国指定特別史跡	岩橋千塚古墳群	面積　629,944㎡		
国指定重要文化財	旧柳川家住宅　主屋	木造瓦葺２階建	131.7㎡	海南市内より移築
	前蔵	木造瓦葺２階建	62.5㎡	
	旧谷山家住宅　主屋	木造瓦葺２階建	89.25㎡	海南市内より移築
	倉部分	木造瓦葺平屋建	19.2㎡	
	和歌山県大日山 35 号墳出土品			園内より出土
登録有形文化財（建造物）	紀伊風土記の丘松下記念資料館	鉄筋コンクリート造平屋建地階付	1,593㎡	園内建築
県指定有形文化財	旧谷村まつ氏住宅	木造瓦葺平屋建	62.2㎡	有田川町内より移築
	旧小早川梅吉氏住宅	木造瓦葺平屋建	38.4㎡	日高川町内より移築
	有本銅鐸	1 点		和歌山市内より出土
	小松原銅鐸	1 点		御坊市内より出土
	立野遺跡出土品	532 点		すさみ町内より出土
県指定有形民俗文化財	日高地域の地曳網漁用具及び和船	用具 87 点　文献資料３点　和船１艘		日高町内より寄贈
	保田紙の製作用具	用具 54 点		有田川町内より寄贈

Ⅱ　博物館活動

1　展示

(1)　企画展および特別展

①春期企画展「古代『紀伊国』の成り立ち～奈良・平安時代のわかやま～」

期　　間：令和４年３月 19 日（土）～６月 19 日（日）

会　　期：69 日（当該年度分）【前年度 38 日間】

内　　容：古代の「紀伊国」は、『日本書紀』の記述から７世紀の末頃には成立していたと考えられ、行政区画として７つの「評」（のちの「郡」）に分けられた。このころ、畿内と各地方を結ぶ官道のひとつである南海道が紀伊国内にも整備されたと考えられる。県内では、国府と推定される遺跡や、飛鳥時代から平安時代の郡の役所である「郡衙」関連施設、寺院、集落などの遺構がみつかっている。

本展示では、遺跡から出土した瓦や、役人たちが使用した硯、文字の書かれた土器、土馬や人形などの祭祀具、火葬墓に用いた蔵骨器などを展示し、７世紀から 10 世紀頃における古代の紀伊国の成り立ちとその変化について紹介した。

入館者数：4,225 人【前年度 1,432 人】　内有料入館者数：794 人【前年度 433 人】

資料名	遺跡名	点数	所有者	市町村	時代
第１章　古代南海道と紀伊国府を探る					
須恵器 蓋坏・皿	府中遺跡	3	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
土師器 皿・高坏	府中遺跡	3	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
須恵器 蓋付・土錘（網漁のおもり）	府中遺跡	5	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
鴟尾	府中遺跡	1	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
軒丸瓦	府中遺跡	1	個人	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 平瓶・蓋坏 土師器 高坏	吉田遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
墨書土器	吉田遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
須恵器 蓋坏・高坏	川辺遺跡	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 蓋坏 土師器 台付皿 黒色土器 椀	加太遺跡	4	和歌山市	和歌山市	奈良・平安時代／８・11 世紀
製塩土器	藻崎遺跡	4	和歌山市	和歌山市	奈良・平安時代／８～９世紀
第２章 紀伊国の役所と寺					
須恵器 壺・高坏	川辺遺跡	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 蓋坏・高坏	川辺遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
土師器 鍋	川辺遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
墨書土器・刻書土器・蓋付	相方遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／ 12 世紀
土師器 皿・蓋 須恵器 蓋坏	関戸遺跡	6	個人	和歌山市	飛鳥～平安時代／７～９世紀
土錘（網漁のおもり）	関戸遺跡	11	当館	和歌山市	飛鳥～平安時代／７～９世紀
須恵器 硯（円面硯）	西国分廃寺	一式	和歌山県教育委員会	岩出市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
丸瓦・平瓦	西国分廃寺	2	和歌山県教育委員会	岩出市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
軒丸瓦・軒平瓦	西国分廃寺	10	和歌山県教育委員会	岩出市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
土師器 皿 須恵器 蓋坏	西国分Ⅱ遺跡	5	和歌山県教育委員会	岩出市	奈良時代／８世紀
製塩土器	粟島遺跡	7	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
墨書土器	粟島遺跡	1	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
須恵器 蓋坏・有蓋壺蓋	粟島遺跡	2	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
軒丸瓦・軒平瓦	粟島遺跡	3	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
軒丸瓦・軒平瓦	紀伊国分寺跡	4	和歌山県教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀

資料名	遺跡名	点数	所有者	市町村	時代
軒丸瓦	紀伊国分寺跡	4	和歌山県教育委員会	紀の川市	平安時代／９世紀
鬼瓦	紀伊国分寺跡	1	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
緑釉陶器・中国製陶磁器・三彩陶器	紀伊国分寺跡	3	紀の川市教育委員会	紀の川市	平安時代／９～10 世紀
平瓦	佐野寺跡	1	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥時代／７世紀
軒丸瓦・軒平瓦	佐野寺跡	7	和歌山県教育委員会	かつらぎ町	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
須恵器 蓋坏	西飯降Ⅱ遺跡	4	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
土師器 坏・皿	西飯降Ⅱ遺跡	3	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
須恵器 円面硯	西飯降Ⅱ遺跡	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	奈良時代／８世紀
須恵器 台付長頸壺・横瓶	西飯降Ⅱ遺跡	2	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	奈良時代／８世紀
須恵器 蓋坏・製塩土器	丁ノ町・妙寺遺跡	10	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
墨書土器	丁ノ町・妙寺遺跡	2	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
須恵器 円面硯	丁ノ町・妙寺遺跡	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
軒丸瓦	名古曽廃寺	3	和歌山県教育委員会	橋本市	飛鳥時代／７世紀
軒丸瓦	田殿廃寺跡	1	当館	有田川町	奈良時代／８世紀
木簡（複製品）	平城京跡	1	当館（原品：奈良文化財研究所）	奈良市	奈良時代／８世紀
軒丸瓦・軒平瓦	道成寺	2	個人	日高川町	平安時代／９世紀
須恵器 蓋坏・すり鉢	堅田遺跡	9	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代／８世紀
土師器 皿・坏・高坏	堅田遺跡	4	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代／８世紀
土錘（網漁のおもり）	堅田遺跡	4	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代／８世紀
鑿・砥石	堅田遺跡	2	御坊市教育委員会	御坊市	奈良時代／８世紀
石製銙帯（巡方）	片山遺跡	1	和歌山県教育委員会（和歌公園管理事務所万葉館保管）	みなべ町	平安時代／９世紀
須恵器 蓋坏・有蓋壺蓋	粟島遺跡	2	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
軒丸瓦・軒平瓦	粟島遺跡	3	紀の川市教育委員会	紀の川市	奈良時代／８世紀
鴟尾（複製品）	堂ノ谷瓦窯跡	1	当館（原品：田辺市教育委員会）	田辺市	奈良時代／８世紀
墨書土器	田ノ口遺跡	2	和歌山県教育委員会	白浜町	平安時代／９世紀
土師器 坏・蓋 須恵器 蓋坏	田ノ口遺跡	4	和歌山県教育委員会	白浜町	平安時代／９世紀
錘（秤竿の「権」か）	田ノ口遺跡	1	和歌山県教育委員会	白浜町	平安時代／10～11 世紀
土師器 小皿・椀 黒色土器 椀	田ノ口遺跡	9	和歌山県教育委員会	白浜町	平安時代／11 世紀
灰釉陶器 椀・段皿	田ノ口遺跡	3	和歌山県教育委員会	白浜町	平安時代／11 世紀
第３章 名草郡の古代氏族					
須恵器 壺・蓋坏	鷺ノ森遺跡	4	和歌山市	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 平瓶・壺・蓋坏 土師器 皿	鷺ノ森遺跡	10	和歌山市	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
土錘（網漁のおもり）	鷺ノ森遺跡	6	和歌山市	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 蓋坏	鷺ノ森遺跡	3	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
銅製 鰐口	鷺ノ森遺跡	1	和歌山市	和歌山市	平安時代／10 世紀
須恵器 壺 刻書土器	且来Ⅵ遺跡	1	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 円面硯	且来Ⅵ遺跡	1	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
土師器 皿・蓋 須恵器 蓋坏	且来Ⅵ遺跡	5	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
土師器 坏・甕 須恵器 蓋坏	且来Ⅵ遺跡	6	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
移動式竈か	且来Ⅵ遺跡	1	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
須恵器 蛸壺・製塩土器	且来Ⅵ遺跡	4	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
円面硯	且来Ⅴ遺跡	1	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
軒丸瓦・平瓦	薬勝寺廃寺	3	当館	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
鴟尾	薬勝寺廃寺	1	当館	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
須恵器 蓋坏・短頸壺	大日山Ⅰ遺跡	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
鳥形硯 蓋	大日山Ⅰ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀

資料名	遺跡名	点数	所有者	市町村	時代
土師器 鍋・甕	秋月遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
土師器 皿・蓋・鉢 須恵器 蓋坏	秋月遺跡	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
土管	秋月遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
墨書土器	秋月遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／９世紀
土師器 坏	秋月遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／９世紀
軒丸瓦・軒平瓦	秋月遺跡	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／11 世紀
黒色土器 片口鉢	秋月遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／11 世紀
墨書土器	鳴神Ｖ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
須恵器 円面硯	鳴神Ｖ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
灰釉陶器 椀 緑釉陶器 椀	鳴神Ｖ遺跡	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／10 世紀
軒丸瓦・軒平瓦	上野廃寺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
隅木蓋瓦	上野廃寺	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
塼	上野廃寺	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
鉄釘・不明金銅製品	上野廃寺	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７～８世紀
平瓦	山口廃寺	3	当館	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
軒丸瓦	山口廃寺	1	当館	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
第４章 祈りのかたち					
土馬	鳴神Ｖ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
土馬	川辺遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
斎串	秋月遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良・平安時代／８～12 世紀
馬形（木簡を転用）	秋月遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
第５章 火葬墓の広まり					
三彩釉骨蔵器（複製品）	名古曽火葬墓	一式	橋本市教育委員会（原品：重要文化財 京都国立博物館）	橋本市	奈良時代／８世紀
石櫃（複製品）	名古曽火葬墓	一式	橋本市教育委員会（原品：重要文化財 京都国立博物館）	橋本市	奈良時代／８世紀
銅製蔵骨器（有蓋台付浅鉢）	大同寺墳墓	一式	大同寺	和歌山市	飛鳥・奈良時代／７世紀末～８世紀
鉄釘	大谷山 38 号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
壺・銅銭（冨壽神寶）	大谷山 38 号墳	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／９世紀
須恵器 有蓋壺（蔵骨器）	鳴滝２号墳	一式	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
銅銭（萬年通寶・神功開寶）	吉田遺跡	3	和歌山県教育委員会（和歌公園管理事務所 万葉館保管）	和歌山市	奈良時代／８世紀
須恵器 蓋坏	吉田遺跡	一式	和歌山県教育委員会（和歌公園管理事務所 万葉館保管）	和歌山市	奈良時代／８世紀
須恵器 有蓋壺（蔵骨器）	吉田遺跡	2	和歌山県教育委員会（和歌山講演管理事務所 万葉館保管）	和歌山市	奈良時代／８世紀
銅銭（和同開珎）	青木古墓	3	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代／８世紀
銅製鋳帯（鉈尾）	青木古墓	1	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代／８世紀
須恵器 坏蓋	青木古墓	1	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代／８世紀
人骨・歯	青木古墓	一式	和歌山県教育委員会	湯浅町	奈良時代／８世紀

②夏期企画展「くだものの民具―うめ・かき・みかんの農業遺産―」

期　　間：令和４年７月 16 日（土）～９月３日（日）

会　　期：44 日【前年度 38 日間】

内　　容：和歌山では、温暖な気候を利用して古くから果樹を盛んに栽培し、その果実を商品作物として生産・加工してきた。なかでも、今日でも和歌山の特産物として知られるうめ・かき・みかんは、全国屈指の生産量とシェアを誇り、長い歳月をかけて生産技術の改良が重ねられ、商品くだものとして地域を挙げての振興が図られている。本展示では、江戸時代から近現代にかけて栽培・生産された和歌山になじみ深いくだものにまつわる民具と生産技術を展示するとともに、くだもの栽培の歴史や変遷、日本を代表する農業遺産にも選ばれる農業システムの特色について紹介した。

入館者数：1,471 人【前年 791 人】　内有料入館者数：435 人【前年 360 人】

資料名	点数	所蔵	所在地	時代
第１章　うめ栽培の歴史と技術				
明治・大正・昭和の梅干し	3	みなべ町梅振興館	みなべ町	明治中期・大正末期・昭和初期
梅籠	1	みなべ町梅振興館	みなべ町	昭和時代
ゴーラ	1	個人	みなべ町	昭和時代
吊り皮	1	個人	みなべ町	平成時代
蜜切り刀	5	個人	みなべ町	昭和時代
燻煙機	1	個人	みなべ町	昭和時代
ボツリ	1	みなべ町教育委員会	みなべ町	昭和時代
丸甕（梅干し用）	1	みなべ町教育委員会	みなべ町	昭和時代
魚干し籠	1	みなべ町教育委員会	みなべ町	昭和時代
梅干し籠	1	個人	紀の川市	昭和時代
草刈り鎌	1	個人	印南町	昭和時代
梅拾い用漁網	1	個人	印南町	昭和時代
梅樽すくい用タモ	1	個人	印南町	平成時代
収穫用コンテナ	6	個人	印南町	平成時代
第２章　かき栽培の歴史と技術				
収穫籠	2	個人	紀の川市	昭和時代
竹ぼて籠	1	個人	紀の川市	昭和時代
かき採り籠	1	四喜の会	かつらぎ町	平成時代
いない籠	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
かんぎ	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
かき取り袋	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
皮むき用かみそり	2	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
皮むき機	2	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
へた取り籠	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
編み錘	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
くくり台	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
串入れ箱	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
押し棒	1	四喜の会	かつらぎ町	昭和時代
剥皮鎌	1	個人	かつらぎ町	平成時代
粗皮むき	1	個人	かつらぎ町	平成時代
剪定バサミ	1	個人	かつらぎ町	平成時代
採りバサミ	1	個人	かつらぎ町	平成時代
しゃっぺり	5	個人	かつらぎ町	平成時代
染め型紙	1	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	昭和時代
渋地椀	3	当館	海南市	昭和時代
番傘	1	当館	海南市	昭和時代
渋団扇	1	当館	和歌山市	昭和時代
第３章 みかん栽培の歴史と技術				
みかん籠	1	有田市教育委員会	有田市	明治 38 年
明石籠	1	有田市教育委員会	有田市	明治時代
テボ	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
芽切り包丁	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
剪定バサミ	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
採りバサミ	3	有田市教育委員会	有田市	昭和～平成時代
タテ	3	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
みかん測り	2	有田市教育委員会	有田市	明治～大正時代
水崎式選果機	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
刷り板	7	有田市教育委員会	有田市	昭和時代

資料名	点数	所蔵	所在地	時代
手箕（選別用）	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
手箕（土木用）	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
備中鍬	2	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
鋤簾	1	有田市教育委員会	有田市	昭和時代
唐鍬	1	当館	有田川町	昭和時代
つるはし	1	当館	有田川町	昭和時代
シャベル	1	当館	有田川町	昭和時代
採り込み籠	1	海南市教育委員会	海南市	大正 10 年
背負い籠	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
貯蔵箱	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
日方籠	1	海南市教育委員会	海南市	昭和 10 年
夏みかん籠	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
手提げ籠	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
みやげ籠	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
竹割り用小刀	1	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
みかん木箱	4	海南市教育委員会	海南市	昭和時代
革製あつし	1	海南市教育委員会	海南市	大正～昭和時代
革製ばっち	1	海南市教育委員会	海南市	大正～昭和時代
革製手さし	2	海南市教育委員会	海南市	大正～昭和時代
紀州蜜柑伝来記	1	和歌山県立図書館		享保 19 年
南海包譜稿本	1	和歌山県立図書館		文政元年
紀州蜜柑録	1	和歌山県立図書館		明治 15 年
紀州蜜柑帳	1	和歌山県立図書館		大正 2 年

③秋期特別展「紀氏、大地を開く―宮井用水と耕地開発―」

期　　間：令和４年 10 月１日（土）～ 12 月４日（日）

会　　期：57 日【前年度 56 日間】

内　　容：紀氏は岩橋千塚古墳群を築き、『古事記』・『日本書紀』に朝鮮半島で活躍したことが記される古代豪族として知られる。古墳時代以降には紀国造家として国を治める一方で、紀伊国一宮として祭祀の中心的な役割を占め日前・国懸神宮を奉斎した。そして中世には和歌山平野一円を神領として支配し、羽柴秀吉の紀州攻めを経てもなお、その系譜は現代にもつながる。総延長 28 ㎞にも及ぶ宮井用水は、紀氏により古墳時代に築かれた「名草溝」を原形とし、現在も和歌山平野を潤す。宮井用水には、古墳時代以降にその延伸や取水口変化してきた歴史があり、それに伴って流域の耕地開発が行われてきたことが、文献史料とともに、近年の発掘調査成果からも明らかとなってきた。本展示では、考古資料と文献史料の展示を通じて、古墳時代から中世、そして現代まで続く紀氏と宮井用水を探った。宮井用水掘削と耕地開発ははるか昔にさかのぼり、現在もみられる水路と水田の景観に歴史があることを紹介した。

入館者数：3,947 人【前年 4,348 人】　内有料入館者数：629 人【前年 613 人】

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	時代
プロローグ　紀氏とは					
紀伊国造印		1	個人	和歌山市	平安時代／ 10 世紀
紀伊国造次第		1	個人	和歌山市	戦国時代／ 16 世紀
版本 日本書紀 一、自十四至十五		1	和歌山県立博物館		江戸時代
神名帳	高岡家文書	1	個人	紀美野町	戦国時代／ 16 世紀
版本 先代旧事本紀			和歌山県立博物館		江戸時代
版本 古語拾遺		1	和歌山県立博物館		江戸時代
鉄剣	花山８号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
滑石製管玉・臼玉・勾玉、ガラス製臼玉	花山８号墳	13	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
金製勾玉	車駕之古址古墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
馬冑（複製品）	大谷古墳	1	和歌山市立博物館	和歌山市	古墳時代中期
円筒埴輪	大谷古墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代中期
馬具（剣菱形杏葉）	大谷山 22 号墳	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器　有蓋台付無頸壺・有蓋台付壺・有蓋高坏、蓋	大谷山 22 号墳	10	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
形象埴輪（人物･武人･巫女形埴輪）	大日山 35 号墳	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
馬具（引手・雲珠・鞍金具・杏葉）	大日山 35 号墳	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	年代
ガラス製丸玉、滑石製臼玉、土製丸玉、銀製梔子玉・空玉、碧玉製平玉・管玉	大日山 35 号墳	16	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
ガラス製小玉・粟玉・臼玉・トンボ玉・銀製空玉・メノウ製切子玉	天王塚古墳	一連	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
三角飾り金具、歩揺金具、銀製四葉形金具	天王塚古墳	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
胡籙、鉄鏃	天王塚古墳	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器有蓋台付壺、土師器甕、装飾付器台	天王塚古墳	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
ガラス小玉・丸玉、水晶製平玉	将軍塚古墳（前山Ｂ53 号墳）	42	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
銀耳環	将軍塚古墳（前山Ｂ53 号墳）	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代後期
須恵器台付壺・高坏	将軍塚古墳（前山Ｂ53 号墳）	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
トンボ玉・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製管玉	山東 22 号墳	一連	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
金製装飾	山東 22 号墳	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期
須恵器台付壺・瑯、土師器台付壺・小形甕	井辺１号墳	4	和歌山市	和歌山市	古墳時代終末期
第１部　紀氏、大地を開く					
第１章　名草溝の源流、宮井用水前史					
弥生土器壺・甕・深鉢	徳蔵地区遺跡	5	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
直柄平鍬・広鍬未製品	徳蔵地区遺跡	2	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
磨石・石棒・石鍬・石鏃・石錐・扁平片刃石斧・石庖丁	徳蔵地区遺跡	13	みなべ町教育委員会	みなべ町	弥生時代前期
石棒	太田・黒田遺跡	1	当館	和歌山市	弥生時代前期
弥生土器壺・紀伊型甕	神前遺跡	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期～中期
太形蛤刃石斧・鑿状片刃石斧・石庖丁	神前遺跡	12	和歌山県教育委員会	和歌山市	弥生時代前期～中期
鋤	岡村遺跡	2	海南市教育委員会	海南市	弥生時代中期
鋤	岡村遺跡	1	和歌山県教育委員会	海南市	弥生時代中期
鋤		1	当館	和歌山市	近現代
鋤		1	海南市教育委員会	海南市	近現代
屋根形木製品	井辺遺跡（県調査）	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
土師器直口壺・小型丸底壺	井辺遺跡（県調査）	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
祭祀具（刀形・剣形・鏃形・槍形・鳥形木製品、鏑矢）	井辺遺跡（県調査）	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
農工具（紡織具・横槌・木錘・把手・部材・椅子・直柄平鍬・曲柄平鍬・田下駄）	井辺遺跡（県調査）	10	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
ウシ大腿骨・椎骨、イルカ椎骨	井辺遺跡（県調査）	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
鎧	井辺遺跡（市 22 次）	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
鋤	井辺遺跡（市 22 次）	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
腰掛	井辺遺跡（市 22 次）	1	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
直柄平鍬・泥除	井辺遺跡（市 30 次）	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
剣形槽・横槌	井辺遺跡（市 30 次）	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
弥生土器鉢・甕・高坏・手焙形土器	井辺遺跡（市 27 次）	4	和歌山市	和歌山市	弥生時代後期
砥石、石錘	井辺遺跡（市 27 次）	3	和歌山市	和歌山市	弥生時代後期
曲柄又鍬・直柄平鍬・羽子板	津秦Ⅱ遺跡（市 10 次）	3	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
金銅製鈴	神前遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
土師器壺・高坏・小型器台・小型丸底壺・鳥形土器	大日山Ⅰ遺跡	15	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
ミニチュア土器・土版・モモの種実	大日山Ⅰ遺跡	18	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
刀子、鹿角装刀子柄	大日山Ⅰ遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	年代
滑石製勾玉・有孔円盤・紡錘車・異形石製品	大日山Ⅰ遺跡	10	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
土師器甕・直口壺・鉢・小型丸底壺・小型器台	鳴神Ⅳ遺跡	8	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期
杭	鳴神Ⅳ遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期
土師器直口壺・二重口縁壺	鳴神Ⅴ遺跡（市３次）	2	和歌山市	和歌山市	古墳時代前期
韓式系土器長胴甕・鍋・甑	音浦遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
陶質土器壺・小形壺	音浦遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代中期
土師器複合口縁壺・高坏・直口壺・小型丸底壺	音浦遺跡	46	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
ミニチュア土器	音浦遺跡	9	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
滑石製紡錘車・管玉	音浦遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
屋根形木製品	鳴神Ⅱ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
家具（四脚付盤・腰掛）	鳴神Ⅱ遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
農工具（斧柄･鋤柄･竪杵･天秤棒･横槌、木錘）、未製品、サルノコシカケ	鳴神Ⅱ遺跡	18	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
把頭	鳴神Ⅱ遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
建築部材（扉・柱）	鳴神Ⅱ遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代前期～中期
建築部材（梯子・柱）、木槽	野田地区遺跡	4	有田川町教育委員会	有田川町	古墳時代前期
須恵器器台、土師器二重口縁壺・高坏	野田地区遺跡	3	有田川町教育委員会		古墳時代前期
第２章　大開発の時代と宮井用水の成立					
版本日本書紀　自十六至十七		1	和歌山県立博物館	和歌山市	江戸時代
須恵器坏身・坏蓋	川辺遺跡（県調査）	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器高坏・坏身・坏蓋	川辺遺跡（県調査）	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
土馬	川辺遺跡（県調査）	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	飛鳥時代～奈良時代
漆を入れた須恵器壺	川辺遺跡（市６次）	1	和歌山市	和歌山市	飛鳥時代／７世紀
土師器鍋・移動式竈・坏・皿	且来Ⅵ遺跡	4	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
須恵器坏身・坏蓋	且来Ⅵ遺跡	3	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
製塩土器、硯、刻書土器「乃部」	且来Ⅵ遺跡	6	海南市教育委員会	海南市	飛鳥時代／７世紀
紀伊国那賀郡司解（複製品）	東寺文書	1	和歌山県立博物館（原品は国立歴史民俗博物館）		平安時代／承和 12 年（845）
須恵器坏・壺・横瓶、土師器坏	西飯降Ⅱ遺跡	7	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
須恵器坏身・坏蓋・皿・硯	丁ノ町・妙寺遺跡	7	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
製塩土器、墨書土器「禾■」	丁ノ町・妙寺遺跡	5	かつらぎ町教育委員会	かつらぎ町	平安時代／９世紀
和同開珎・萬年通寶	太田・黒田遺跡（市３次）	43	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀後半
須恵器壺・坏蓋・坏身	秋月遺跡（県２次）	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
土師器坏、製塩土器	秋月遺跡（県２次）	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
馬形「大田」・斎串	秋月遺跡（県２次）	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代／８世紀
土師器坏身・坏蓋、須恵器坏	鳴神Ⅴ遺跡（県調査）	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代～平安時代
硯・墨書土器「大」	鳴神Ⅴ遺跡（県調査）	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代～平安時代
灰釉陶器皿	鳴神Ⅴ遺跡（県調査）	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代～平安時代
緑釉陶器埦・皿	鳴神Ⅴ遺跡（県調査）	7	和歌山県教育委員会	和歌山市	奈良時代～平安時代
須恵器坏	津秦Ⅱ遺跡(市 10 次)	3	和歌山市	和歌山市	平安時代／９世紀
土錘	津秦Ⅱ遺跡(市 10 次)	5	和歌山市	和歌山市	
紀伊国在田郡司解（複製品）	東寺文書	1	当館（原品は教王護国寺）		平安時代／仁寿４年(854)
須恵器壺・坏、土師器坏	野田地区遺跡	5	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
人形	野田地区遺跡	5	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
机・下駄・柄鏡形	野田地区遺跡	3	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
檜扇	野田地区遺跡	10	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
大足（田下駄）	野田地区遺跡	1	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
土師器坏・台付皿、黒色土器埦	野田地区遺跡	4	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
犂	野田地区遺跡	2	有田川町教育委員会	有田川町	奈良時代～平安時代
犂		1	当館	和歌山市	近現代
瓦器埦、土師器小皿	野田地区遺跡	4	有田川町教育委員会	有田川町	平安時代～鎌倉時代

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	年代
小刀、箸状木製品	野田地区遺跡	2	有田川町教育委員会	有田川町	平安時代～鎌倉時代
漆器椀・皿	野田地区遺跡	3	有田川町教育委員会	有田川町	平安時代～鎌倉時代
位牌形	野田地区遺跡	1	有田川町教育委員会	有田川町	平安時代～鎌倉時代
笹塔婆	野田地区遺跡	26	有田川町教育委員会	有田川町	平安時代～鎌倉時代
複弁蓮華文軒丸瓦・宝相華唐草文軒平瓦	秋月遺跡（市８・９次）	2	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代
土師器土釜・竈・甑	秋月遺跡（県５次）	4	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代～鎌倉時代
土師器皿・台付皿	秋月遺跡（県５次）	23	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代～鎌倉時代
直川保松門名重書案　紀実俊解状案	栗栖家文書	1	個人	和歌山市	鎌倉時代／建久３年（1192）
紀伊国在庁官人等解案	林家文書	1	和歌山市立博物館	和歌山市	平安時代／大治２年（1127）
ウマ臼歯、ウシ骨	神前遺跡	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代～鎌倉時代／12 世紀～14 世紀
瓦器埦、須恵器坏・壺、青磁碗	神前遺跡	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代～鎌倉時代／12 世紀～14 世紀
宮井掛耕地図　三田村大字和田		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代
土師器釜・埦・皿・台付皿、東播系須恵器捏鉢	和田岩坪遺跡	5	和歌山県教育委員会	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
瓦器埦・皿	和田岩坪遺跡	12	和歌山県教育委員会	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
須恵器埦	相方遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／12 世紀
墨書土器「大二」、刻書土器「大」	相方遺跡	2	和歌山県教育委員会	和歌山市	平安時代／12 世紀
瓦器埦	相方遺跡	1	和歌山県教育委員会	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
高社寄進料田坪付注文	歓喜寺文書	1	歓喜寺	和歌山市	鎌倉時代／元享元年（1321）
沙弥定宗屋敷畠寄進状	歓喜寺文書	1	歓喜寺	和歌山市	南北朝時代／貞和２年（1346）
平範重垣内寄進状	歓喜寺文書	1	歓喜寺	和歌山市	南北朝時代／正平16 年（1364）
瓦器埦、青磁埦、東播系須恵器捏鉢	津秦Ⅱ遺跡（市 25 次）	5	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
土師器皿・台付皿・釜	津秦Ⅱ遺跡（市 25 次）	5	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
土師器皿・盤・釜	津秦Ⅱ遺跡（市 27 次）	6	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
瓦器埦、青磁埦、瓦質土器羽釜	津秦Ⅱ遺跡（市 27 次）	4	和歌山市	和歌山市	鎌倉時代／13 世紀
紀武光畠地宛行状	神前家文書	1	和歌山県立博物館	和歌山市	戦国時代／享禄４年（1531）
第３章　中世終焉と宮井用水　太田城水攻めをめぐって					
総光寺由来幷太田城水責図		1	真言宗惣光寺	和歌山市	江戸時代
総光寺中古縁起		1	真言宗惣光寺	和歌山市	江戸時代／元和２年（1616）
太田城由来幷郷士由緒書		1	個人	和歌山市	江戸時代
根来寺焼討太田責細記		1	個人	和歌山市	江戸時代／慶安３年（1650）
再版　紀伊国名所図会		1	当館		
鬼瓦	太田･黒田遺跡（市 12 次）	2	和歌山市	和歌山市	戦国時代 ／16 世紀
伏間瓦「■文十八年三月」	太田･黒田遺跡（市 12 次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代 ／16 世紀
巴文軒丸瓦・宝珠唐草文軒平瓦・花文軒平瓦	太田･黒田遺跡（市 12 次）	4	和歌山市	和歌山市	戦国時代 ／16 世紀
土師器皿・釜・香炉	太田･黒田遺跡（市 22 次）	5	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
瀬戸美濃系陶器天目茶碗・皿	太田･黒田遺跡（市 22 次）	2	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
備前焼擂鉢	太田･黒田遺跡（市 22 次）	2	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
青磁碗、青花皿・小坏	太田･黒田遺跡（市 22 次）	3	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
円盤状銅製品（懸仏か）	太田･黒田遺跡（市 75 次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
銅銭	太田･黒田遺跡（市 75 次）	2	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
円盤形鉛インゴット	太田･黒田遺跡（市 75 次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
滑石製権	友田町遺跡（市 10 次）	1	和歌山市	和歌山市	奈良時代／８世紀
仕上砥	友田町遺跡（市 10 次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
真鍮製小柄	友田町遺跡（市 10 次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
備前焼擂鉢・大甕・瀬戸美濃系陶器土瓶・埦・皿	秋月遺跡（県９次）	6	和歌山県教育委員会	和歌山市	室町時代～戦国時代

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	年代
青磁碗、白磁碗	秋月遺跡（県９次）	3	和歌山県教育委員会	和歌山市	室町時代～戦国時代
火縄銃	秋月遺跡（県９次）	1	和歌山市立博物館	和歌山市	江戸時代
備前焼擂鉢	太田城水攻め堤跡（市７次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
鉛製鉄砲玉	太田城水攻め堤跡（市７次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
鉄片（土掘具か）	太田城水攻め堤跡（市７次）	2	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
堤断面（剥ぎ取り）	太田城水攻め堤跡（市７次）	1	和歌山市	和歌山市	戦国時代／16 世紀
第４章　受け継がれた土木技術　宮井用水と紀州流					
井沢系図		1	個人	海南市	江戸時代／18 世紀
井澤弥惣兵衛愛用水差		1	個人	海南市	江戸時代／18 世紀
肥前系陶磁器碗	岡村遺跡	4	和歌山県教育委員会	海南市	江戸時代／18 世紀
水盛台（復元品）		一式	橋本市教育委員会	橋本市	現代
大畑才蔵愛用品（通い箱・折りたたみ尺・コンパス・墨壺）		4	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
地方幷普請方覚書	大畑家文書	1	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
普請方冊子	大畑家文書	1	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
牛枠、あんどん枠（復元品）		2	小田井土地改良区	紀の川市	現代
正本　地方の聞書（才蔵記）	大畑才蔵関連文書	1	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
稿本　地方聞書	大畑才蔵関連文書	1	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
抄本　地方聞書	大畑才蔵関連文書	1	個人	橋本市	江戸時代／18 世紀
掛樋（模型）		1	小田井土地改良区	紀の川市	現代
伏樋（模型）		1	小田井土地改良区	紀の川市	現代
名草郡用水明細図（トレース）	中筋家文書	1	和歌山市立博物館	和歌山市	江戸時代／18 世紀後半以前
紀伊国名草郡宮井筋和田川下タ坂田村初弐ケ村伏樋修繕人夫着到帳	坂田村文書	1	和歌山県立文書館	和歌山市	明治時代／明治 10 年（1877）
紀伊国名草郡宮井筋和田川下タ坂田村初弐ケ村伏樋修繕人夫着到帳村控	坂田村文書	1	和歌山県立文書館	和歌山市	明治時代／明治 10 年（1877）
両村立合吹樋修繕中諸色損料物支払帳	坂田村文書	1	和歌山県立文書館	和歌山市	明治時代／明治 10 年（1877）
第２部　王権と豪族による開発　古事記・日本書紀に記された開発と考古学成果					
版本日本書紀　自十一至十三、自二〇至二二		2	和歌山県立博物館	和歌山市	江戸時代
纒向大溝（模型）	纒向遺跡	1	桜井市教育委員会	桜井市	古墳時代前期
矢板	纒向遺跡	2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	桜井市	古墳時代前期
土師器小型丸底壺	纒向遺跡	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	桜井市	古墳時代前期
土師器庄内形甕	纒向遺跡	1	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	桜井市	古墳時代前期
東海系土器（S 字口縁台付甕）	纒向遺跡	2	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	桜井市	古墳時代前期
鋤・鋤柄・直柄平鍬	纒向遺跡	3	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	桜井市	古墳時代前期
木槽	纒向遺跡	1	桜井市教育委員会	桜井市	古墳時代前期
鋤・又鋤・直柄平鍬・曲柄平鍬	城島遺跡	10	桜井市教育委員会	桜井市	古墳時代前期
刀剣装具（把縁・把頭・鞘尻・鞘）	布留遺跡（三島（里中）東・西地区）	17	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期
須恵器坏身・坏蓋・高坏、土師器器台・小形壺	布留遺跡（杣之内（樋之下・ドウドウ）地区）	7	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期
滑石製紡錘車・有孔円盤・勾玉、銅製有孔円盤	布留遺跡（杣之内（樋之下・ドウドウ）地区）	8	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期
土製ガラス玉鋳型	布留遺跡（杣之内（樋之下・ドウドウ）地区）	3	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期
ウマ下顎骨・骨・橈骨	布留遺跡（杣之内（樋之下・ドウドウ）地区）	3	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期

資料名	遺跡名／文書名	点数	所蔵	市町村	年代
鉄鉗、鉄斧	布留遺跡（杣之内（樋之下･ドウドウ）地区）	2	埋蔵文化財天理教調査団	天理市	古墳時代中期
小修羅（複製品）	三ツ塚	1	大阪府立近つ飛鳥博物館（原品は藤井寺市教育委員会）	藤井寺市	古墳時代中期
敷粗朶工法（複製品）	亀井遺跡	1	大阪府立狭山池博物館	大阪狭山市	古墳時代中期～後期
須恵器坏身・坏蓋・高坏・壺・俵瓶・瓿	東池尻・池ノ内遺跡	10	橿原市教育委員会	橿原市	古墳時代後期
円筒埴輪、鞴羽口	東池尻・池ノ内遺跡	2	橿原市教育委員会	橿原市	古墳時代後期
須恵器壺・坏身・甕・壺、円筒埴輪	古市大溝	13	大阪府教育委員会	羽曳野市	古墳時代中期～奈良時代
円筒埴輪	青山２号墳	1	大阪府教育委員会	藤井寺市	古墳時代中期
須恵器坏蓋・高坏・高坏蓋	青山２号墳	4	大阪府教育委員会	藤井寺市	古墳時代中期
円筒埴輪	矢倉古墳	2	大阪府教育委員会	羽曳野市	古墳時代後期
馬具（ｆ字形鏡板付轡、剣菱形杏葉）	軽里４号墳	3	羽曳野市教育委員会	羽曳野市	古墳時代中期
円筒埴輪	軽里４号墳	1	羽曳野市教育委員会	羽曳野市	古墳時代中期
家形埴輪	軽里４号墳	1	羽曳野市教育委員会	羽曳野市	古墳時代中期
須恵器坏身・坏蓋・高坏・埦・短頸壺・横瓶・提瓶・瓿	狭山池１号窯	17	大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市	飛鳥時代／７世紀前半
敷葉工法（切り取り）	狭山池	1	大阪府立狭山池博物館	大阪狭山市	飛鳥時代／７世紀初頭
狭山池（模型）	狭山池	1	大阪府立狭山池博物館	大阪狭山市	
土師器小形甕、須恵器平瓶・短頸壺・高坏蓋	下水主遺跡	9	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	城陽市	飛鳥時代／７世紀前半
曲げ物底板	下水主遺跡	2	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	城陽市	飛鳥時代／７世紀前半
須恵器坏・壺	薩摩遺跡	2	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
土師器皿・甕・ミニチュア甕	薩摩遺跡	5	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
須恵器水差・壺、黒色土器埦	薩摩遺跡	3	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
鉛釉陶器壺・鉛釉陶器壺（複製品）	薩摩遺跡	2	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
土師器皿、須恵器坏	薩摩遺跡	13	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
和同開珎、承和通寶	薩摩遺跡	4	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
銅製品	薩摩遺跡	1	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
土師器皿	薩摩遺跡	5	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
承和通寶	薩摩遺跡	5	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
木樋栓	薩摩遺跡	1	奈良県立橿原考古学研究所	高取町	平安時代／９世紀末～10世紀末
エピローグ　宮井用水と耕地開発					
宮井水利組合沿革史		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	昭和時代／昭和17年（1942）
宮井普通水利組合土地臺帳		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代／明治27年（1894）
日誌　宮井口役所		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代／明治41年（1908）
宮井龍の口樋門竣工記念寫眞帖		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	昭和時代／昭和10年（1935）
宮井掛耕地図 鳴神村		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代
宮井掛耕地図 西和佐村大字岩橋		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代
宮井掛耕地図 宮村大字津秦		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代
宮井掛耕地図 三田村大字和田		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	明治時代
樋門巻き上げ機		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	昭和時代～現在
樋門巻き上げ機ハンドル		1	紀の川左岸土地改良区	和歌山市	昭和時代～現在

写真１　秋期特別展展示風景（第１部）

写真２　秋期特別展展示風景（第２部）

④冬期企画展「遺跡への眼差し～きのくに考古学研究の 120 年史～」

期　　間：令和５年１月 21 日（土）～２月 26 日（日）

会　　期：32 日間【前年度 38 日間】

内　　容：紀北地域に所在する岩橋千塚古墳群は、明治期の調査に始まり、現在に至るまで古墳の損壊・盗掘・消滅と、保存の歴史が繰り返されてきた。また紀南地域では、明治から昭和初期にかけて、浦宏らの「紀南考古学会」や、巽三郎らの「紀南考古学同好会」など在野の活動により、遺跡の踏査や発掘調査が精力的に行われた。本展では、岩橋千塚古墳群の採集資料や地域で保管されてきた資料や、在野の研究者の収集資料や調査の図面・日誌などの発掘調査記録を通し、明治期から戦後において地域の遺跡の研究と保存に奔走した地元の研究者や市民の活動を紹介した。

入館者数：813 人【前年 776 人】　内有料入館者数：265 人【前年 280 人】

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
第１章　考古学とは					
『通論考古学』（濱田耕作著）		1	個人		大正 11 年（1916）
実測器具		9	個人		現代
第２章　　岩橋千塚古墳群をめぐる人々					
須恵器 装飾付壺	伝岩橋千塚古墳群	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
蓋形埴輪、巫女形埴輪	伝岩橋千塚古墳群	2	個人	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 瓊	伝岩橋千塚古墳群	1	個人	和歌山市	古墳時代後期
伝岩橋千塚古墳群出土品	伝岩橋千塚古墳群	一式	個人	和歌山市	古墳時代
円筒埴輪	伝岩橋千塚古墳群（鳴神村藤谷）	2	個人	和歌山市	古墳時代後期
馬具 杏葉、辻金具	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）	4	当館	和歌山市	古墳時代後期
鉄鏃（長頸鏃）	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）	2	当館	和歌山市	古墳時代後期
鉾 石突	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）	1	当館	和歌山市	古墳時代
金製飾金具	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）	2	当館	和歌山市	古墳時代後期
銀環	伝岩橋千塚古墳群（海草郡西和佐村）	2	当館	和歌山市	古墳時代後期
石見型埴輪	花山 12 号墳	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
馬形埴輪	花山出土	1	当館	和歌山市	古墳時代中～後期
須恵器 台付壺	花山古墳出土	1	当館	和歌山市	古墳時代後期
土師器 小型台付坩、小型丸底壺	埴山（花山）出土	2	個人	和歌山市	古墳時代前期
人物埴輪、犬形埴輪、馬形埴輪、猪形埴輪	鳴神出土	4	個人	和歌山市	古墳時代後期
花山古墳群の破壊を報じる新聞記事	岩橋千塚古墳群	1	当館	和歌山市	昭和時代
遺跡パトロール報告書	岩橋千塚古墳群	1	当館	和歌山市	昭和時代
墳丘測量図（関西大学調査）	天王塚古墳	1	当館	和歌山市	昭和 39（1964）年
管玉	伝岩橋千塚古墳群	2	和歌山大学	和歌山市	古墳時代中期
勾玉	伝岩橋千塚古墳群	2	和歌山大学	和歌山市	古墳時代中期～後期
耳環	伝岩橋千塚古墳群	2	和歌山大学	和歌山市	古墳時代後期

資料名	遺跡名	点数	所蔵	所在地	時代
和歌山師範学校収集品	伝岩橋千塚古墳群	一式	和歌山大学	和歌山市	古墳時代
円筒埴輪	伝岩橋千塚古墳群（鳴神村藤谷）	2	和歌山大学	和歌山市	古墳時代後期
須恵器 蓋坏、瓶	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）	3	和歌山大学	和歌山市	古墳時代後期
石見型埴輪	伝岩橋千塚古墳群（岩橋字大岩谷）		和歌山大学		古墳時代後期
浦宏による実測図	岩橋千塚古墳群	2	高山寺	和歌山市	昭和時代
第３章 紀北・紀中の遺跡をめぐる人々					
須恵器 瓶、壺	陵山古墳	2	橋本市教育委員会	橋本市	古墳時代中期
土師器 高坏、壺	陵山古墳	2	橋本市教育委員会	橋本市	古墳時代中期
浦宏による実測図（遺物）	陵山古墳	1	高山寺	橋本市	昭和時代
浦宏による実測図（石室）	陵山古墳	1	高山寺	橋本市	昭和時代
琴柱形石製品	丸山古墳	1	高山寺	紀の川市	古墳時代中期
ガラス製小玉	丸山古墳	7	高山寺	紀の川市	古墳時代中期
縄文土器（鷹島Ⅰ式）	鷹島遺跡	一式	当館	広川町	縄文時代中期前半
縄文土器（鷹島Ⅱ式）	鷹島遺跡	一式	当館	広川町	縄文時代中期前半
縄文土器 深鉢	鷹島遺跡	1	和歌山県教育委員会	広川町	縄文時代晩期
名田地区遺跡分布図		1	御坊市教育委員会	御坊市	昭和時代
墳丘測量図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
横穴式石室実測図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
遺物出土状況図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
須恵器 蓋坏 実測図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
管玉・臼玉実測図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
刀子・剣実測図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
勾玉・臼玉・鉄鏃実測図	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
埋蔵文化財発掘調査届書写	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	2	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
「史跡 切目崎の塚穴」原稿	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
新聞スクラップ	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
発掘状況写真	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
調査日誌	崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）	1	御坊市教育委員会	印南町	昭和時代
須恵器 短頸壺	崎山 15 号墳（印南町）	1	御坊市教育委員会	印南町	古墳時代後期～飛鳥時代
須恵器 坏	崎山 13 号墳（印南町）	1	御坊市教育委員会	印南町	飛鳥時代
南紀考古学同好会 調査記録映像		4	御坊市教育委員会		昭和時代
第４章　紀南の遺跡をめぐる人々					
縄文土器	高山寺貝塚	4	高山寺	田辺市	縄文時代早期
貝類（ハイガイ）	高山寺貝塚	2	高山寺	田辺市	縄文時代
貝類（サルボウ）	高山寺貝塚	11	高山寺	田辺市	縄文時代
遺跡メモ	高山寺貝塚	1	高山寺	田辺市	昭和時代
遺跡平面図	高山寺貝塚	1	高山寺	田辺市	昭和時代
縄文土器トレース図	高山寺貝塚	1	高山寺	田辺市	昭和時代
縄文土器 深鉢（複製品）	高山寺貝塚	1	当館	田辺市	縄文時代早期
須恵器 短頸壺、坏	綱不知岩陰遺跡	5	高山寺	白浜町	古墳時代後期
滑石製紡錘車	綱不知岩陰遺跡	1	高山寺	白浜町	古墳時代
遺物実測図	綱不知岩陰遺跡	1	高山寺	白浜町	昭和時代
遺跡全景図・平面図	綱不知岩陰遺跡	1	高山寺	白浜町	昭和時代
遺跡断面図	綱不知岩陰遺跡	1	高山寺	白浜町	昭和時代
浦宏 考古日誌		5	高山寺	白浜町	昭和時代

⑤春期企画展「岩橋千塚古墳群のはじまり～花山地区の古墳～」

期　　間：令和５年３月 19 日（土）～３月 31 日（水）（令和４年度分）

会　　期：12 日（当該年度分）【前年度 11 日間】

内　　容：岩橋千塚古墳群は総数 900 基にもおよぶ古墳が所在し、10 地区に分かれる。このうち、花山地区は岩橋千塚古墳群で最も古い４世紀末から５世紀初頭に古墳がつくられはじめる、いわば「岩橋千塚古墳群のはじまり」を象徴する地区である。一方で、花山地区の古墳がいつまで造られたのかはあまり知られていない。本展では、花山地区の古墳で出土した副葬品などを通じ、この地区における古墳の特徴や時期的な変遷について紹介した。

入館者数：224 人【前年 386 人】　内有料入館者数：84 人【前年 164 人】（※資料一覧は、次号に掲載）

（2）企画展・特別展以外の展示

①スポット展「天王塚古墳のあゆみ」

期　　間:令和４年８月 20 日（土）～９月 16 日（日）

会　　期：24 日

内　　容：天王塚古墳連絡道路開通及び貯水タンク撤去にかかる県民意見を契機とし、現在の天王塚古墳に至るあゆみを古写真などを展示して紹介した。また、併せて天王塚古墳の貯水タンクの設置前・後や岩橋千塚古墳群の古写真の募集を行った。

主な展示品：天王塚古墳古写真、調査図面

写真３　スポット展展示風景

②ミニ展「作品展　みんなでつくろう！　夢の博物館」

期　　間：①第１回作品展　令和４年５月１日（日）～５月 31 日（火）
②第２回作品展　令和４年７月 30 日（土）～８月 18 日（木）

会　　期：① 31 日　② 20 日

内　　容：子ども達が自由な発想で新しい博物館の形を考え、絵や工作で作品にするワークショップを開催した（第１回 令和４年３月 27 日（日）、第２回 令和４年７月 24 日（日））。作品展では、第１回の作品８点（小学１年生１点、３年生２点、４年生２点、６年生２点、中学２年生１点）及び第２回の作品４点（小学１年生、３年生、４年生、５年生・各１点）を展示した。

③令和４年度博物館実習・インターンシップ学生企画ミニ展「柳川家の食卓」

期　　間：令和４年８月 27 日（日）～９月 22 日（木）

会　　期：24 日

内　　容: 和歌山県立紀伊風土記の丘で令和４年８月 23 日(火)～８月 27 日(土)に実施した博物館実習(学芸員資格の取得を目指す大学　生等による学外実習）およびインターンシップに参加した９名の実習生による展示実習。園内に移築保存されている「重要文化財　旧柳川家住宅」にゆかりの食を彩る漆器を展示し、海南市黒江の商家におけるかつての暮らしの一端を紹介した。また、くらしの中の「かわいい食器」を実習生の感性で選び出して展示した。

主な展示品：金柑絵銘々盆、黒塗八十椀、猫足膳など

④ミニ展「ジュニア学芸員研究応募作品展」

期　　間：令和４年 12 月 13 日（火）～令和５年１月 15 日（日）

会　　期：26 日

内　　容：令和４年７月１日から 11 月 15 日にかけて社会科歴史分野に関する小学生及び中学生の自由研究作品を募集した令和４年度「チャレンジ！ジュニア学芸員」について、応募作品全 17 点（小学生個人の部・14 点、中学生個人の部・２点、団体の部・１点）を展示した。

主な展示品：※「２　普及活動 ②第９回チャレンジ！ジュニア学芸員」の項を参照

⑤ミニ展「和歌山市立西和佐小学校作品展　紀伊風土記の丘夢の博物館計画」

期　　間：令和５年３月 30 日（木）～４月９日（日）

会　　期：11 日

内　　容：令和４年２月に西和佐小学校図画工作科授業で、紀伊風土記の丘再編整備に伴う展示・収蔵設備基本設計のうち子供向け展示の内容について、児童が内容を提案し絵画作品とした。ミニ展では、全作品 73 点を資料館ロビーで展示し、来館者に新館建設に係る計画及び、基本設計に伴う地域の小学校との連携について広く周知する機会を提供した。

2 普及活動

（1）ものづくり体験

タイトル	実施日	参加人数
勾玉づくり（学校・団体）	春秋遠足等	1,674
埴輪づくり（学校・団体）	春秋遠足等	1,769

（2）催しもの

タイトル			実施日	参加人数
展　示	春期企画展	古代『紀伊国』の成り立ち	3/19(土)～6/19(日)	4,225
	夏期企画展	くだものの民具	7/16(土)～9/4(日)	1,434
	秋期特別展	紀氏、大地を開く	10/1(土)～12/4(日)	3,797
	冬期企画展	遺跡への眼差し	1/21（土）～2/26（日）	813
	春期企画展	岩橋千塚古墳群のはじまり	3/18 土）～6/18（日）	224
講　座	学芸員講座	岩橋千塚⑱	7/10（日）	29
	学芸員講座	岩橋千塚⑲	9/12（日）	22
	学芸員講座	岩橋千塚⑳	12/25（日）	27
	学芸員講座	熊野⑦	7/3（日）	18
	学芸員講座	熊野⑧	9/4（日）	30
	学芸員講座	熊野⑨	2/19(日)	13
	展示講座①	春期企画展	4/17（日）	22
	展示講座③	夏期企画展	8/14（日）	7
	展示講座④	冬期企画展	2/12（日）	7
	館長講座①	旅と博物館①シンガポール・マレーシア編	7/9（土）	17
	館長講座②	旅と博物館②タイ王国編	11/12（土）	14
	館長講座③	旅と博物館③インドネシア編	3/18（土）	8
	ボランティア養成講座①		5/14（土）	2
	ボランティア養成講座②		5/28（土）	4
	ボランティア養成講座③		6/11（土）	4
	ボランティア養成講座④		6/25（土）	3
	特別展　展示解説①		10/15（土）	7
	特別展　展示解説②		11/23（水・祝）	16
	特別展　シンポジウム①	※ 16 頁に掲載	10/16（日）	71
	特別展　シンポジウム②	※ 17 頁に掲載	10/23（日）	58
	特別展　シンポジウム③	※ 17 頁に掲載	11/6（日）	71
	特別展　シンポジウム④	※ 17 頁に掲載	11/20（日）	48
フィールドワーク	古墳ガイドツアー①	大谷山地区	4/24（日）	中止
	古墳ガイドツアー②	大谷山地区	1/29（日）	29
	古墳公開	連絡道路完成記念天王塚古墳石室限定公開	8/27(日)	10
	古墳公開	連絡道路完成記念天王塚古墳墳丘限定公開	8/27(日)	54
	古墳公開	天王塚古墳	3/5（日）	71
	民家ガイドツアー	旧谷山家住宅・旧小早川家住宅	11/13（日）	4
	風土記の植物①		4/29（金・祝）	9
	風土記の植物②		9/17（土）	15
	風土記の植物③		11/19（土）	5
	風土記の植物④		3/4（土）	19
	風土記の昆虫①		5/21（土）	10
	風土記の昆虫②		7/23（水）	8

タイトル			実施日	参加人数
モノづくり	埴輪づくり		10/8（土)･15（土)･22（土)･29（土)･11/5（土)･12（土)･19（土)･26（土)･12/3（土)･10（土)･17（土)･24（土)1/7（土)･14（土)･21（土)･28（土)･2/4（土）・11（土・祝）・18（土）・25（土)･3/4（土)･11（土)･18（土)･25（土）	106
	ＧＷモノづくり体験	ハニワ	5/1（日）・3（火・祝）	111
	ＧＷモノづくり体験	まが玉	5/4（水・祝）・5（木・祝）	51
	夏休みモノづくり体験	ハニワ（２回／日）	7/30（土)、31（日）	140
	夏休みモノづくり体験	まが玉（２回／日）	8/6（土)、7（日）	83
ワークショップ	実物大埴輪づくり①		6/18（土）	10
	実物大埴輪づくり②		11/27（日）	4
	実物大埴輪づくり③		2/26（日）	10
	鋳造体験	銅鐸	8/17（土）	17
	カラー勾玉づくり		9/11（日）	24
その他	ふどきっず①	田植え	5/29（日）	26
	ふどきっず②	水鉄砲	7/17（日）	29
	ふどきっず③	稲刈り	10/9（日）	25
	ふどきっず④	土器炊飯	12/4（日）	22
	ふどきっず⑤	紙すき	1/22（日）	20
	ふどきっず⑥	卒業制作	3/12（日）	21
	夢の博物館		7/24（日）	4
	夏休み風土記きっず何でも相談室		8/13（土）	2
	ジュニア学芸員研究発表	※ 17 頁に掲載	12/11(日)	17
	県民ワークショップ「皆で作ろう！新博物館」		2/23(木・祝)	5
	第 11 回風土記まつり		3/19（日）	120

【主な催しものの内容】

①特別展シンポジウム

・令和４年度秋期特別展シンポジウム（第１回）「紀伊国造が築いた岩橋千塚古墳群と宮井用水」

開催日：令和４年 10 月 16 日（日）13:30 ～ 16:30

場　所：紀伊風土記の丘資料館ピロティ

内　容：講演 寺西貞弘氏（和歌山地方史研究会参与）「紀伊国造と大和王権」

報告 丹野　拓氏（和歌山県教育庁）「紀伊国造と岩橋千塚古墳群」

報告 冨加見康彦氏（元和歌山県立紀伊風土記の丘）「古代の用水路とその管理集団」

写真１　特別展シンポジウム開催状況

写真２　特別展関連シンポジウム討論状況

・令和４年度秋期特別展シンポジウム（第２回）「古代・中世における和歌山平野の開発」
開催日：令和４年 10 月 23 日（日）13:30 ～ 16:30
場　所：紀伊風土記の丘資料館ピロティ
内　容：講演 額田雅裕氏（元和歌山市立博物館館長）「和歌山平野の地形と土地開発」
報告 坂本亮太氏（和歌山市立博物館）「紀の川下流域における荘園の成立と展開－水をめぐる問題から－」
報告 田中元浩（当館）「大治２年塩入荒野の開発と中世宮井用水」

・令和４年度秋期特別展シンポジウム（第３回）「太田城水攻めと宮井用水」
開催日：令和４年 11 月６日（日）13:30 ～ 16:30
場　所：紀伊風土記の丘資料館ピロティ
内　容：講演 新谷和之氏（近畿大学准教授）「天正 13 年太田城水攻めの実像」
報告 大木　要氏（和歌山市）「発掘調査成果から考える太田城と太田城水攻め」
報告 藤藪勝則氏（(公財）和歌山市文化スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）「太田城水攻め堤と宮井用水」

・令和４年度秋期特別展シンポジウム（第４回）「ここまでわかった古代の土木技術」
開催日：令和４年 11 月 20 日（日）13:30 ～ 16:30
場　所：紀伊風土記の丘資料館ピロティ
内　容：講演 小山田宏一氏（大阪府立狭山池博物館館長）「古代治水灌漑の土木技術」
報告 河内一浩氏（日本考古学協会会員）「古市大溝の評価をめぐって」
報告 田中元浩（当館）「宮井用水の起源と歴史」

②第９回 チャレンジ！ジュニア学芸員

趣　　旨：考古学に関する小中学生の研究成果を募集・表彰し、その成果を発表する場を設けることで、小中学生が考古学の楽しさを知るとともに、資料をまとめプレゼンテーションをする力をつけるなどの研究活動を推奨する機会とする。
応募内容：和歌山県内の考古学や歴史学など社会科歴史的分野に関係する研究成果で、学校外で未発表のもの。レポート・作品・歴史新聞など形態は問わない。
対　　象：和歌山県内の小学校・中学校および特別支援学校の小学部または中学部のいずれかに在籍する児童・生徒、または和歌山県在住の児童・生徒。
応募点数：17 点

【個人研究部門・小学生の部】

最優秀賞「縄文時代の食生活の研究③」河野仁宥（和歌山市立川永小学校５年生）
優秀賞　「和歌山の養蚕」河野日香（和歌山市立川永小学校３年生）
奨励賞　「上杉謙信霊屋と高野山」瀬元優奈（和歌山市立内海小学校６年生）
奨励賞　「家庭科新聞①涼しく快適に過ごす住まい方②洗濯の歴史」森下心音（和歌山県立和歌山盲学校小学部６年生）

【個人研究部門・中学生の部】

最優秀賞「横穴式石室の双璧　天王塚古墳と大野窟古墳～古代人の死生観と日本神話～」岩橋直也（和歌山市立高積中学校３年生）
優秀賞　「赤木城とは」宮本璃香（和歌山市立明和中学校２年生）

【団体研究部門】

最優秀賞「古代人の衣・食・住の変遷を辿る！～文明の進化の確認～」和歌山市立高積中学校科学部

・関連イベント：第９回「チャレンジ！ジュニア学芸員」優秀作品表彰式及び研究発表会・学芸員体験

開催日時：令和４年 12 月 11 日（日） 13：30 ～ 16：30

場　　所：紀伊風土記の丘資料館　研修室

作品展示：令和４年 12 月 13 日（火）～令和５年１月 15 日（日）

3　研修・実習等

（1）博物館実習

・令和４年度博物館学芸員実習

期　間：令和４年８月 23 日（火）～８月 27 日（土）

参加者：博物館実習５名（大阪大谷大学）

インターンシップ４名（高野山大学、大阪芸術大学、奈良女子大学、帝塚山学院大学）

内　容：紀伊風土記の丘の博物館活動（講義）　考古資料の保存と活用　民俗資料の保存と活用 教育普及事業 岩橋千塚古墳群の整備事業

展　示：展示資料の調査（旧柳川家住宅・漆器類）、展示企画・立案

展示（「柳川家の食卓」）８月 27 日（土）～９月 22 日（木）

（2）職場体験実習（インターンシップ）・職場体験学習

当館では、「中学生職場体験学習」及び「和歌山県教育庁等におけるインターンシップ」による中・高校生対象の実習の受け入れを行った。

中学生インターンシップ

受け入れ実績なし	期日	実施せず	対象	実施せず
	内容	実施せず		

高校生インターンシップ

和歌山大学教育学部附属特別支援学校高等部	期日	令和４年７月 27 日（水）～ 29 日（金）	対象	２年生２名
	内容	園内の維持管理業務、資料整理業務		
県立和歌山ろう学校	期日	令和４年７月 27 日（水）～ 29 日（金）	対象	１年生１名
	内容	園内の維持管理業務、資料整理業務		
県立和歌山盲学校	期日	令和４年７月 27 日（水）～ 29 日（金）	対象	２年生１名
	内容	園内の維持管理業務、資料整理業務		

大学生インターンシップ

高野山大学 大阪芸術大学 奈良女子大学 帝塚山学院大学	期日	令和４年８月 24 日（火）～ 28 日（土）	対象	３回生４名
	内容	博物館実習と同内容		

（3）教員対象の研修

当館の学校向けプログラム等の理解を図るため、教員対象の研修（中堅教諭等資質向上研修:教育センター学びの丘と連携、地域社会体験研修）を受け入れている。

10 年経験者研修（学校との連携協力による授業作り）	期 日	令和４年８月 30 日（木）・31 日（金）
	対 象	中堅教諭等資質向上研修対象教員 29 名（30 日：15 名、31 日 14 名）
	内 容	学校との連携・協力による博物館づくり・授業づくりの研究―社会教育施設と学校教育の関わり方―」をテーマに、資料館展示・施設、教育普及、博学連携活動等の問題の洗い出しとその改善策の検討を行い、併せて博物館施設の活用方法を検討した。

（4）博学連携

来館により、古墳、民家、展示室及び広い園内の見学や考古・民俗資料を利用した古代生活体験及び昔のくらし体験などの幅広い学習活動を行っている。また、移動博物館により、当館に来館できない学校へ職員が赴き、地域の歴史や昔のくらしの解説、昔のくらし体験・モノ作り体験の指導を行っている。

○来館校数、来館者数

来館校数は118校、来館者数は6,048人（引率教員451人を含む）。校種別では小学校が95校と約90.1％を占めている。また、月別来館校数では５月に29校（24.6％）11月に22校（18.7％）、10月に20校（17.0％）、６月に13校（11.0％）と続き、春（４、５、６月）、秋（10、11月）の遠足シーズンで84校と全体の約８割を占めている。

４～５月は小学校６年生の社会科に対応した『古代生活体験』、10～11月は小学校3･4年生の社会科に対応した『「昔のくらし」体験学習』を行う学校が多い。

校種別来館校数・来館者数

校種	校数	割合（%）	来館者数	割合（%）
幼稚園・保育所・こども園	6	5.1%	226	3.7%
小学校	95	80.5%	5506	90.1%
中学校	3	2.5%	172	2.8%
高等学校	4	3.4%	79	1.3%
特別支援学校	6	5.1%	54	0.9%
短大・大学・専修学校	4	3.4%	11	0.2%s

月別来館校数

月	幼・保	小学校	中学校	高等学校	特別支援	短大・大学	計	割合（%）
4月	1	9	1				11	9.32%
5月		29					29	24.58%
6月		13					13	11.02%
7月		3			1		4	3.39%
8月		1					1	0.85%
9月				2			2	1.69%
１０月	4	15			1		20	16.95%
１１月		14	1	2	1	4	22	18.69%
１２月		4					4	3.39%
1月		1			1		2	1.69%
2月	1	4					5	4.24%
3月		2	1		2		5	4.24%
計	6	95	3	4	6	4	118	100.00%
割合（%）	5.08%	80.51%	2.54%	3.39%	5.08%	3.39%	100.00%	

○『古代生活体験』のプログラム

・古代学習：資料館の展示や古墳の見学、火おこしや竪穴住居での体験をとおして、古代の人々の生活について学ぶ。

・古墳めぐり：古墳群をめぐり、古墳の大きさや形、多さ、石室の中の広さや暗さ、体感温度などを実際に肌で感じる。

・風土記の丘オリエンテーリング：紀伊風土記の丘の園内にある古墳と江戸時代の移築民家をグループ行動でまわり、見学と調べ学習を実施する歴史体験学習。

・モノ作り体験：モノ作りの歴史や方法などの解説を聞きながら、石や粘土から勾玉やハニワを作る体験をする。

○『昔のくらし体験学習』のプログラム

来館団体一覧

来館日	団体名称	人数
4月15日	山崎北小学校	130
4月15日	根来小学校	91
4月20日	高野口小学校	51
4月21日	堺市立神石小学校	47
4月22日	東貴志小学校	19
4月22日	上岩出小学校	66
4月26日	みどり幼稚園	76
4月26日	桃の木台小学校	67
4月27日	応其小学校	32
4月28日	和佐小学校	63
5月6日	小倉小学校	54
5月6日	大阪狭山市立南第三小学校	87
5月6日	楠見小学校	63
5月6日	湊小学校	22
5月10日	山東小学校	45
5月11日	四箇郷北小学校	43
5月12日	あやの台小学校	59
5月17日	智辯学園和歌山小学校	140
5月19日	貴志小学校	64
5月19日	川永小学校	45
5月20日	岡崎小学校	84
5月20日	貴志南小学校	53
5月24日	砂山小学校	47
5月24日	楠見東小学校	65
5月24日	松江小学校	71
5月26日	有功小学校	55
5月26日	鳴滝小学校	13
5月26日	岸和田市立山直南小学校	59
5月26日	中之島小学校	47
5月27日	西和佐小学校	57
5月27日	芦原小学校	21
5月27日	新南小学校	40
5月27日	八幡台小学校	76
5月27日	雑賀小学校	110
5月27日	和歌山YMCA国際福祉専門学校	13
5月28日	松原トレッキングクラブ	8
5月28日	歴史・考古学の集い	45
5月28日	放課後デイオーパアスリートクラブ	15
5月31日	浜宮小学校	76
6月1日	山野小学校・江川小学校・和佐小学校	32
6月3日	安原小学校	87
6月10日	堺市立市小学校	57
6月17日	四箇郷小学校	87
6月24日	衣奈小学校・白崎小学校・由良小学校	49
6月30日	高松小学校	67
6月30日	紀伊小学校	86
7月8日	福島小学校	25
7月8日	西脇小学校・西脇みらい分校	80
7月14日	和歌山ろう学校	5
7月14日	麦の郷就労支援センターつれもて	15
7月31日	一般社団法人紀の国森社中	36
9月22日	慶風高等学校	36
10月6日	広小学校	34
10月7日	丸栖小学校	60
10月7日	亀川小学校	69
10月9日	和歌山市視覚障害者福祉協会	31
10月13日	西和佐幼稚園	48
10月14日	中央小学校	67
10月14日	南広小学校	30
10月14日	中野上小学校	48
10月19日	宮小学校	97
10月19日	御霊小学校	63
10月20日	田殿小学校	42
10月20日	笠田小学校	55
10月20日	たちばな幼稚園	97
10月21日	泉南市立砂川小学校	100
10月21日	港小学校	17
10月27日	和歌山ろう学校	6
10月28日	鳥屋城小学校	27
10月28日	保田小学校	39
11月1日	宮原小学校	43
11月2日	長田小学校	34
11月2日	箕島小学校	42
11月2日	下津小学校	43
11月4日	黒江小学校	36
11月8日	藤戸台小学校	167
11月10日	岐阜工業高等専門学校	40
11月11日	切目小学校	32
11月11日	京都府建築士事務所協会	20
11月15日	印南小学校	32
11月17日	和歌山大学教育学部付属特別支援学校	14
11月18日	三田小学校	65
11月18日	南部小学校	57
11月18日	西和佐小学校	137
11月18日	内海小学校	60
11月24日	清流小学校	27
11月25日	高城小学校	30
11月26日	麦の郷紀の川生活支援センター	7
11月30日	アンキッズアカデミー	34
12月2日	楠見西小学校	28
12月2日	初島小学校	29
1月26日	ひまわり園	15
1月31日	咲楽小学校	11
2月3日	上秋津小学校	27
2月8日	西和佐保育所	15
2月10日	藤並小学校	104
2月21日	和歌山大学教育学部付属特別支援学校	6
2月21日	西和佐小学校	79
2月28日	安楽川小学校	52
3月2日	和歌山ろう学校	3
3月10日	きのかわ支援学校	20
3月10日	和歌山信愛中学校	94
3月14日	西和佐小学校	40
3月15日	西和佐小学校	40

・昔のしごと体験：センバコキで米の脱穀、背負子や天秤棒で物を運ぶ、石臼できな粉を挽くなどを体験する。

・民家見学・体験：　園内に移築された民家で、昔の生活の場所の見学及びカラウス搗きの体験をする。

　また、遠足・社会見学では古代生活体験・古墳めぐりなどフィールド活動やモノ作りに重点を置き、後日に移動博物館（出前授業）として日を設定し、学校周辺の遺跡等を単元とした講義を実施する場合もある。岩橋千塚の古墳を広く知ってもらいたい当館としては、体験学習と講義を合わせた系統的な学習となり、よりよいプログラムの組み合わせである。

主な活動プログラムの利用状況一覧

	考古・歴史学習			民俗・民家学習
	古代生活			昔のくらし体験（民具・民家ワークショップ、昔のしごと、あそび体験）
	古代生活体験	モノ作り体験		
	火おこし	勾玉	埴輪	
4月	5	4	3	
5月	16	8	16	
6月	5	5	3	
7月	1		4	
8月				
9月				
10月	3	7	4	11
11月	5	3	6	2
12月	2			1
1月		1		
2月	1	1	1	2
3月	4	2		1
計	42	31	37	17

令和４年度の来館校の活動プログラムの利用状況は、一覧表のとおりである。

○移動博物館（出前授業）

遠方の学校や交通機関を利用しての来館が困難な学校、遠足で古墳めぐりを実施後に講義を希望する学校、カリキュラムにおいて時間数確保のため来館して学習することが困難な学校や団体等を対象として、「移動博物館（出前授業）」を実施している。

職員が直接出向き、モノ作りや昔のくらし体験活動を行う他、「和歌山の歴史」「学校周辺の歴史」など「ふるさと学習」に係る講義や本物の土器や装身具に触る体験など、学校のニーズに応じて学習支援を行っている。

また、小学校のＰＴＡ・育友会・子どもセンター学童保育等の活動や公民館・資料館等の生涯学習活動においてもモノ作り体験等を実施している。

実施にあたり、県内公立学校の教育課程に位置づけた学習については、県教育委員会総務課の「エキスパート職員派遣事業」を活用している。依頼の時期や地域によっては直接相談に応じている。

移動博物館（出前授業）の利用状況

和歌山市立湊小学校	期日	令和４年６月７日（木）	対象	小学生 20 名
	内容	勾玉づくり体験（エキスパート職員派遣事業）		
和歌山市立藤戸台小学校	期日	令和４年６月 24 日（火）･7 月１日（金）	対象	小学生 143 名
	内容	埴輪づくり体験		
有田川町立小川小学校	期日	令和４年６月 28 日（火）	対象	小学生 10 名
	内容	埴輪づくり体験（エキスパート職員派遣事業）		
和歌山県立きのかわ支援学校	期日	令和４年７月 12 日（火）	対象	高等部９名
	内容	埴輪づくり体験（エキスパート職員派遣事業）		
和歌山市立楠見西小学校	期日	令和４年７月 13 日（金）	対象	小学生 25 名
	内容	埴輪づくり体験		
海南市立加茂川小学校	期日	令和４年７月 20 日（金）	対象	小学生 13 名
	内容	埴輪づくり体験		
わかやま市民生協	期日	令和４年８月３日（水）	対象	一般・小学生 25 名
	内容	勾玉づくり体験		
海南市立下津第一中学校・下津小学校	期日	令和４年８月 23 日（火）	対象	小中学生６名
	内容	勾玉づくり体験（エキスパート職員派遣事業）		
みどり幼稚園	期日	令和４年９月 16 日（火）	対象	園児 67 名
	内容	埴輪づくり体験		
海南市立日方小学校	期日	令和４年 10 月 12 日（火）	対象	小学生 19 名
	内容	埴輪づくり体験　（エキスパート職員派遣事業）		
和歌山市立西和佐小学校	期日	令和４年 10 月 12 日（火）･15 日（金）	対象	小学生 94 名
	内容	埴輪づくり体験		
和歌山県立紀伊コスモス支援学校	期日	令和４年 11 月 15 日（火）	対象	中学部 16 名
	内容	勾玉づくり体験		
紀の川市立池田小学校	期日	令和４年 11 月 16 日（水）	対象	小学生 67 名
	内容	昔のくらし体験		
岩出市立根来小学校	期日	令和４年 11 月 22 日（火）	対象	小学生 87 名
	内容	勾玉づくり体験		
和歌山市立西和佐小学校	期日	令和４年 12 月 13 日（火）･14 日（水）	対象	小学生 78 名
	内容	紀伊風土記の丘と岩橋千塚古墳群（新館ワークショップ）		
和歌山市立藤戸台小学校	期日	令和４年 12 月 15 日（木）	対象	小学生 161 名
	内容	昔のくらし体験		
海南市立日方小学校	期日	令和４年 12 月 16 日（金）	対象	小学生 19 名
	内容	勾玉づくり体験・火おこし体験（エキスパート職員派遣事業）		
印南町立切目小学校	期日	令和５年１月 27 日（金）	対象	小学生 12 名
	内容	昔のくらし体験（エキスパート職員派遣事業）		
白浜町立北富田小学校	期日	令和５年２月 14 日（火）	対象	小学生 13 名
	内容	郷土の祭りに関する講義		
有田市立初島小学校	期日	令和５年２月 28 日（火）	対象	小学生 25 名
	内容	埴輪づくり体験		

4　広報活動　（令和５年３月 31 日現在）

①資料提供（展示やイベント毎にチラシ等の資料を提供）

県教育記者クラブへの資料提供数　14 件

新聞等記事等掲載数　28 件

②情報提供（定期刊行物に展示やイベント等の情報を提供）

「県民の友」（毎月発行：和歌山県広報課）

和歌山文化情報誌「ワカピー」（隔月発行：和歌山県 編集：一般財団法人和歌山県文化振興財団）

「わかやま探検ミュージアム」（隔月発行：白光印刷株式会社）

「輝く！紀の国の教育」（年２回：和歌山県教育広報紙：和歌山県教育庁教育総務局総務課）

「教育ラジオ番組　はばたく紀の国」（和歌山県教育庁教育総務局総務課）

③情報提供（不定期）

「朝日新聞和歌山版」（朝日新聞社）

「毎日新聞和歌山版」（毎日新聞社）

「読売新聞和歌山版」（読売新聞社）

「朝日新聞大阪南部版　折込カレンダー」（ASAPORT）

「ニュース和歌山」（ニュース和歌山）

「紀伊民報」（紀伊民報）

「日高新報」（日高新報社）

「熊野新聞」（熊野新聞社）

「紀州浪漫」（和歌山リビング新聞社）

「リビング和歌山」（和歌山リビング新聞社）

「泉州ぱど　SWing」（関西ぱど）

「ＷＩＴＨ　ＮＥＷＳ」（https://withnews.jp/）（朝日新聞社）

「産経ニュース」（https://www.sankei.com/）（産経新聞社）

④インターネット・データによる情報提供

「ホームページの公開」（http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp）

「インターネットミュージアム」（https://www.museum.or.jp）

「縁結び大学」（https://next-level.biz/）（株式会社ネクストレベル）

「どぐうぐる」（https://db.dogugle.com/museum/show/260）（どぐうぐる）

「るるぶ.com、JTB サイト「るるぶ観光データベース」（http://rurubu.com）

「まっぷる観光ガイド」（http://www.mapple.net）（株式会社昭文社）

「イベントバンクプレス」（https://www.eventbank.jp/）（株式会社イベントバンク）

⑤テレビ・ラジオによる情報提供

和歌山放送「しそまるの全開！金曜日」令和４年５月 13 日（古墳ガイドブック）

J:COM チャンネル和歌山「ウィークリートピック和歌山」令和４年５月 28 日（HANI-1 選手権）

テレビ和歌山「6waka イブニング」令和４年６月８日（古墳ガイドブック）

和歌山放送「wbs ニュース 5」令和４年８月 19 日（HANI-1 選手権表彰式）

ＮＨＫ和歌山局「ギュギュっとわかやま」令和４年９月 13 日（スポット展）

ＮＨＫ和歌山局「LIVE ニュース」令和４年８月 25 日（和歌山県立紀伊風土記の丘）
和歌山放送「しそまるの全開！金曜日」令和４年９月 16 日（秋期特別展）
和歌山放送「きのくに教育の窓」令和４年 10 月 11 日（秋期特別展）
テレビ和歌山「きのくに 21」令和４年 10 月 23 日（秋期特別展）
ＦＭ 802「ホリデースペシャル」令和４年 11 月３日（秋期特別展）
ＮＨＫ和歌山局「ニュース明日の県内」令和４年 11 月 27 日（秋期特別展）
ＮＨＫ和歌山局「ニュース明日の県内」令和５年１月 27 日（冬期企画展）

⑥パンフレット・チラシ等による情報提供

・令和４年度イベントガイドの配布
・各イベントのチラシの配布（随時、学校・各種団体等へ持ち込み）

⑦その他

・紀の川市校長会説明（令和４年８月 27 日）
・和歌山市校長会説明（令和４年９月２日）
・紀伊風土記の丘メールマガジン（毎月１日）

５　ボランティア活動

紀伊風土記の丘ボランティア（平成 23 年４月設置）は、利用者に対して園内の古墳・民家・万葉植物園等の解説や、資料館の展示解説、学校遠足や体験教室における補助・助言・指導等の活動を行っている。令和４年度のボランティア登録者数は 35 名である。

令和４年度に実施したボランティア関連事業及びボランティア活動は、以下のとおりである。

（1）ボランティア養成講座

・日程：令和４年５月 14 日（土）、28 日（土）、６月 11 日（土）、25 日（土）　毎回 13:30 ～ 15:30　研修室及び園内で講義
・受講者数：４名　（うち修了者４名）

（2）ボランティア研修会

・令和４年度夏期・冬期・春期企画展及び秋期特別展に係る展示ガイド研修
・館外研修：海南市

写真１　古墳ガイドツアー開催状況

写真２　ボランティア養成講座開催状況

（3）ボランティア活動

①古墳・資料館等ガイド解説

令和４年度　事前申込みガイド実績（団体等）

活動日	活動内容	申込み者	申込み者所在地	参加人数	対応人数
4 月 21 日	資料館・古墳ガイド	個人	紀の川市	4	2
5 月 1 日	資料館・古墳ガイド	個人	東京都	7	5
5 月 4 日	古墳ガイド	個人	愛知県	4	1
5 月 27 日	資料館・民家ガイド	和歌山 YMCA 国際福祉専門学校	和歌山市	11	5
5 月 28 日	古墳・資料館ガイド	松原トレッキングクラブ	大阪府	11	4
5 月 28 日	古墳・資料館ガイド	歴史考古学の集い	大阪府	45	9
6 月 7 日	資料館ガイド	個人	兵庫県	4	1
6 月 19 日	古墳・資料館ガイド	個人	—	2	1
6 月 24 日	古墳ガイド	シニア自然大学校	大阪府	20	8
7 月 8 日	資料館ガイド	個人	—	4	1
7 月 14 日	資料館ガイド	障害者就業支援センターつれもて	和歌山市	15	4
7 月 14 日	資料館ガイド	和歌山県立和歌山ろう学校	和歌山市	2	1
9 月 22 日	古墳・資料館ガイド	慶風高校	和歌山市	30	6
10 月 9 日	資料館・民家ガイド	和歌山市視覚障害者福祉協会	和歌山市	30	6
10 月 16 日	古墳・資料館ガイド	個人	滋賀県	3	1
10 月 22 日	古墳・資料館ガイド	大阪府高齢者大学校矢倉会	大阪府	10	3
10 月 27 日	古墳ガイド	個人	大阪府	2	1
2 月 28 日	古墳ガイド	緑が丘歴史サークル	兵庫県	21	3
3 月 4 日	古墳・資料館ガイド	上富田町市ノ瀬公民館	上富田町	20	5
3 月 4 日	古墳・資料館ガイド	阪南まちおこし夢テラス	大阪府	15	5
合計		21 件		280 名	72 名

令和４年度　資料館待機ガイド実績（個人等）

活動日	活動内容	申込み者	申込み者所在地	参加人数	対応人数
4 月 9 日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府	4	3
4 月 17 日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府他	10	2
4 月 21 日	古墳ガイド	個人	兵庫県	4	2
5 月 1 日	資料館ガイド	個人	滋賀県	14	3
5 月 8 日	資料館ガイド	個人	—	4	1
5 月 15 日	資料館ガイド	個人	京都府	10	3
5 月 28 日	古墳ガイド	個人	大阪府	2	1
5 月 20 日	資料館ガイド	個人	—	10	3
6 月 1 日	古墳・資料館ガイド	個人	—	2	1
6 月 4 日	資料館ガイド	個人	—	5	2
6 月 19 日	資料館ガイド	個人	—	2	1
6 月 24 日	古墳・資料館ガイド	個人（シニア自然大学校）	—	18	8
6 月 26 日	資料館ガイド	個人	大阪府	3	2
7 月 3 日	資料館ガイド	個人	大阪府	5	4
7 月 8 日	古墳・資料館ガイド	個人	—	4	4
7 月 17 日	資料館ガイド	個人	—	5	1
7 月 31 日	資料館ガイド	個人	—	6	1
8 月 7 日	資料館ガイド	個人	—	5	1
8 月 14 日	資料館ガイド	個人	—	5	1
8 月 20 日	資料館ガイド	個人	大阪府	4	2
8 月 28 日	資料館ガイド	個人	海南市	12	2
9 月 11 日	資料館ガイド	個人	海南市	16	3
10 月 2 日	資料館ガイド	個人	東京都他	11	3
10 月 23 日	資料館ガイド	個人	—	2	1
10 月 27 日	古墳ガイド	個人	—	2	1
10 月 30 日	資料館ガイド	個人	—	4	2
11 月 10 日	古墳・史柳雄館ガイド	個人	岐阜県	3	1
11 月 15 日	資料館ガイド	個人	—	11	2
11 月 20 日	資料館ガイド	個人	—	2	2
11 月 27 日	資料館ガイド	個人	奈良県	2	2
12 月 11 日	資料館ガイド	個人	北海道	5	3
1 月 8 日	古墳・資料館ガイド	個人	愛知県	2	2

活動日	活動内容	申込み者	申込み者所在地	参加人数	対応人数
1 月 15 日	古墳・資料館ガイド	個人	―	3	3
2 月 5 日	古墳・資料館ガイド	個人	大阪府他	10	1
3 月 12 日	資料館ガイド	個人	―	1	2
3 月 26 日	古墳・資料館ガイド	個人	神奈川県他	10	2
合計		37 件		222 名	79 名

②学校遠足・体験教室における補助等

ゴールデンウィークモノづくり体験（４～５月）、夏休みモノづくり体験（８月）、学校遠足（４～６月、10 月）、ふどきっず（４月、７月、10 月）の体験補助・指導・助言を行った。

③その他

古墳ガイドツアー①（大谷山地区）において運営に参加予定だったが、雨天によりイベント中止。古墳ガイドツアー②（令和５年１月 29 日）において運営・古墳ガイドを実施した。天王塚古墳連絡道路開通記念石室公開では運営・古墳ガイドを行った。

この他、ボランティア有志による曜日別勉強会（水曜日・土曜日）、ガイド用教材の作成を行った。

（４）ボランティア活動１０年継続者の表彰

【令和４年度対象者（平成 25 年度：第３期ボランティア登録者）】該当者なし

6 管理運営・環境整備

（１）文化財の維持管理

特別史跡「岩橋千塚古墳群」周辺の整備及び重要文化財民家等の維持管理

①古墳群周辺の整備

・園内笹草等除去処分業務（2,090 千円）

公園内の最高所にある将軍塚古墳をはじめ、公開古墳の周辺や小古墳群が見学できる地域及び周辺などを入園者を安全かつ快適に利用できるように面積 100,000 ㎡の笹草除去を業者委託により行った。（令和４年 10 月～令和４年 11 月）

・天王塚古墳笹草等除去処分業務（1,079 千円）　２回実施

天王塚古墳調査作業の安全確保及び調査環境を整備するために面積 4,730 ㎡の笹草除去を業者委託により行った。（令和４年６月～令和４年 11 月）

②重要文化財民家等維持管理

・民家防虫防除等（161 千円）

重要文化財民家（旧柳川家、旧谷山家）、県指定文化財民家（旧小早川家、旧谷村家）、復元竪穴住居に薬剤処理を行った。（令和４年 12 月）

（２）資料館及び史跡公園内の管理・環境整備

来館者･来園者の安全、快適性･利便性を確保するため、職員による進入路、園路の補修、樹木剪定、草刈り・落ち葉清掃等史跡公園内の管理環境整備を行っている。また、業務委託により警備、清掃、防火設備管理等資料館及び公園内の維持管理並びに危険木伐採等の補修整備を行っている。

①史跡公園内の管理・環境整備

・幹線園路及び公開古墳の清掃、園内周辺の落ち葉清掃及び芝草刈り、樹木の剪定
・園内の倒木の撤去、排水路の浚渫
・移築民家４軒及び和船展示施設の管理、茅葺き民家と竪穴住居の燻蒸、防火用水の管理、石垣
・竹垣の管理補修
・進入路、万葉植物園等の植物への水遣り及び万葉植物園の竹柵等設置
・毛虫発生時の殺虫剤散布、ハチの巣駆除

②資料館及び園内の施設・維持管理

・資料館及び園内の警備業務委託（4,961 千円）
・資料館清掃及び園内トイレ清掃の業務委託（2,904 千円）
・電気保安管理、浄化槽維持管理、防火設備管理及び貯水槽清掃の業務委託（492 千円）
・建築基準法１２条に基づく定期点検業務（53 千円）

③資料館及び園内の主な修繕整備

・旧柳川家住宅前街路等修繕（456 千円）（７月）　・旧谷村家住宅前漏水修繕（957 千円）（９月）
・給水管漏水修繕（937 千円）（10 月）　・揚水管・園路給水管漏水修繕（950 千円）（11 月）
・竪穴住居東側園路給水管漏水修繕（651 千円）（11 月）　・給水管引込管漏水修繕（803 千円）（12 月）
・防火水槽等修繕（6,377 千円）（２月～３月）　・レストハウス西側給水管漏水修繕（385 千円）（２月）
・レストハウス北側園路給水管漏水修繕（425 千円）（２月）　・診療所前給水引込管漏水修繕（531 千円）（３月）・空調機修繕（990 千円）（３月）　・資料館屋根改修工事（51,497 千円）（令和４年 12 月～令和５年３月）

④園内工事

・連絡道路建設工事（101,143 千円）（令和３年９月～令和４年７月）※総事業費
・天王塚古墳整備工事（31,142 千円）（令和４年 12 月～令和５年３月）

7　特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業

（1）保存修理事業

①特別史跡岩橋千塚古墳群歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業（国庫補助事業）

事業費　40,427,040 円（国庫補助額　20,213,000 円）

・天王塚古墳連絡道路設置工事
天王塚古墳の墳丘にある構造物解体・撤去（貯水タンク１基、貯水タンク関連コンクリート造施設１棟、モノラック１基、散水用配管）を行った。また、墳丘整備のために必要な工事用仮設道路（幅約４ｍ、長さ約 180 ｍ※全体の 2/3）の設置を行った。併せて仮設道路の範囲に該当する伐木・場内仮置きした。

・古墳保存修景工事
毀損の進む石室を保護するため砂・真砂土で埋め戻しを行うとともに、削平された墳丘に対して盛土による保護・修景を実施した。令和４年度は前山 B132 号墳の石室を砂で埋め戻し、真砂土により墳丘を復元後、種子ネットにより緑化を図った。

・雨水対策整備工事
前山 A13 号墳及び大日山 35 号墳の石室については、滞水により石室公開を中断するとともに、石材劣化の進行が懸念されていた。このため、保存のための整備として、両古墳の石室への雨水・細粒土流入防

止及び排水機能の回復を目的とした雨水対策工事を実施した。

・副園路整備工事

古墳群を安全に見学するため、前山 A 地区の A47 号墳～ A46 号墳（園路①）及び A96 号墳～ A46 号墳（園路②）に至る２か所の散策路（副園路）に擬木階段の設置を行った。

・天王塚古墳整備工事施工監理業務

・整備検討会議他

②特別史跡岩橋千塚古墳群歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業（石垣調査）（国庫補助事業）

事業費　5,169,961 円（国庫補助額　2,583,000 円）

・前山Ａ 67 号墳、前山Ａ 99 号墳、将軍塚古墳（前山 B53 号墳）横穴式石室３次元計測委託業務

前山Ａ 67 号墳横穴式石室 1 基（81 ㎡）の 3D レーザー測量、前山Ａ 99 号墳横穴式石室 1 基（45 ㎡）、将軍塚古墳（前山Ｂ 53 号墳）横穴式石室１基（61 ㎡）の Sfm/MVS による 3 次元計測およびオルソ画像作成を実施した。

・前山Ａ 23 号墳横穴式石室 3 次元計測委託業務

石室等の孕みが確認された前山 A23 号墳横穴式石室１基（32 ㎡）について、次年度に実施予定であったものを先行して実施し、Sfm/MVS による 3 次元計測およびオルソ画像作成を行った。

・報酬・共済費・費用弁償

③地域の特色ある埋蔵文化財活用事業（国庫補助事業）

事業費　5,062,162 円（国庫補助額　2,531,000 円）

・埋蔵文化財３次元計測等業務

重要文化財の埴輪５点と県指定文化財の銅鐸１点の Sfm/MVS による３次元データの取得を行った。その他の考古資料について、デジタルデータ取得用機器を賃借し、３次元デジタルデータの取得と写真撮影を行った。

・特別史跡岩橋千塚古墳群等デジタルデータ作成業務

特別史跡岩橋千塚古墳群のパノラマ撮影による高精細の写真撮影や既に石室の３次元計測デジタルデータを取得している古墳の墳丘及び未取得の古墳の墳丘・石室計 30 基、資料館展示室について、360 度カメラを用いた 360 度全天球写真の撮影を実施し、デジタルデータを取得した。

・データベースサイト等の構築及び台帳作成・データ移行業務

埋蔵文化財のデータベースを掲載及び検索できるサイトを委託で作成し、公開した。また、台帳の作成を行い、作成データと既存の埋蔵文化財に関する PDF 等データ計 100 件を、新たに設置予定のデータベースサイトへと委託で移行・整備した。

・「和歌山県紀伊風土記の丘」３次元デジタルデータ等公開用ホームページ作成業務

令和４年度に委託及び直営で取得した埋蔵文化財の３次元デジタルデータを掲載するウェブページを委託で作成した。また、作成したページは、既存の紀伊風土記の丘ホームページと接続し、公開した。

④重要文化財　和歌山県大日山 35 号墳出土品美術工芸品保存修理事業（国庫補助事業）

事業費　4,072,582（国庫補助額　2,035,000 円）

・重要文化財和歌山県大日山 35 号墳出土品（埴輪 25 点、須恵器６点、附（埴輪残欠 10 点、須恵器残欠２点）のうち、劣化が進む埴輪について、抜本的な修理を実施する。このうち３分割焼成の家形埴輪１点、胡籙形埴輪１点の保存修理を令和４～６年度に実施する計画とし、令和４年度は、これらの運搬、解体、クリーニング、強化を実施した。

⑤ 特別史跡岩橋千塚古墳群整備検討会議

第１回整備検討会議　　令和４年 10 月７日　於　紀伊風土記の丘（小野・禰冝田・増渕委員）

第２回整備検討会議　　令和４年３月３日　　於　紀伊風土記の丘（和田・小野・禰冝田・増渕委員）

整備検討会議の構成

氏　名	所　属　等	専　門　等
小野　健吉	大阪観光大学 教授	遺跡整備
禰冝田　佳男	大阪府立弥生博物館 館長	考古学
増渕　徹	京都橘大学 教授	遺跡整備
松木　武彦	国立歴史民族博物館 教授	考古学
和田　晴吾	兵庫県立考古博物館 館長	考古学
中村　浩道	当館　館長	考古学

写真１　天王塚古墳連絡道設置工事

写真２　前山 B132 号墳保存修景工事

写真３　前山 A13 号墳雨水対策整備工事

写真４　副園路整備工事（前山 A67 号墳～前山 A47 号墳）

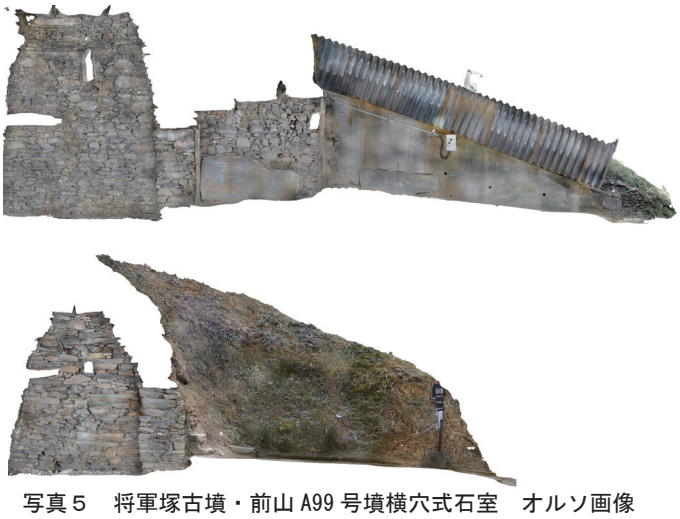
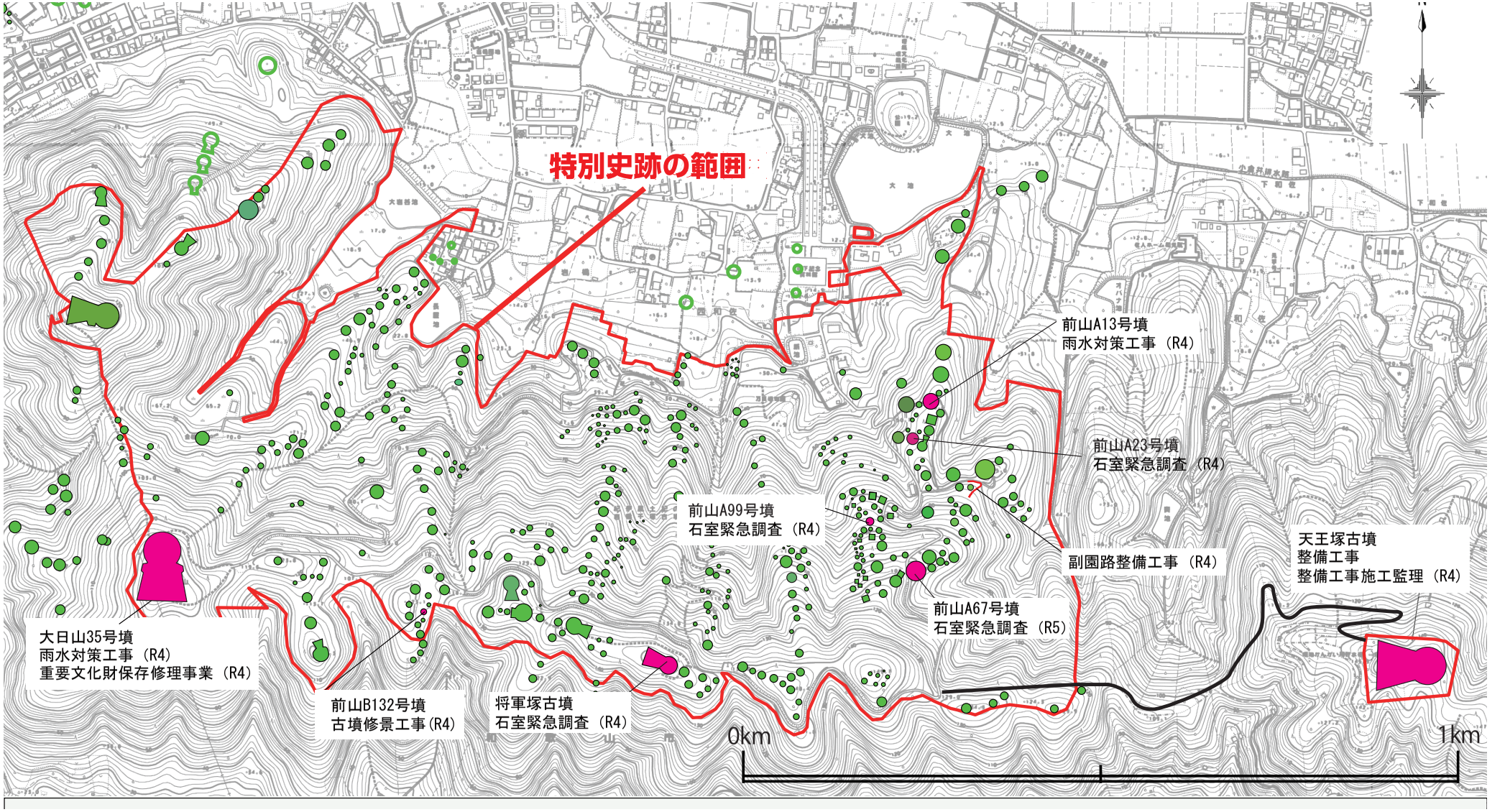


写真５　将軍塚古墳・前山 A99 号墳横穴式石室　オルソ画像

写真６　埋蔵文化財３次元計測（野井銅鐸）



令和４年度　特別史跡岩橋千塚古墳群等保存整備事業　位置図（S=1/7,000）

（2）調査報告

①古墳保存修景工事（前山Ｂ 132 号墳）に係る石室実測調査報告

１）調査の目的

特別史跡岩橋千塚古墳群では、経年劣化による土砂の流出及び石積みの崩落、支障木の繁茂により毀損が進む古墳について、墳丘及び埋葬施設の保存のための整備として古墳保存修景工事を実施している。令和４年度は前山Ｂ 132 号墳を対象とし、工事を実施した。古墳保存修景工事では、埋葬施設の清掃の後、その内部を養生砂及び真砂土で埋戻し、地表面に植生マットを敷設し、保存と修景を両立させる。そこで、埋戻しに先立って埋葬施設の記録作成として、前山Ｂ 132 号墳の実測調査を行った。

２）既往の調査

今回調査の対象とする前山Ｂ 132 号墳の周辺では、前山Ｂ地区のうち前山Ｂ 130・131・134 号墳については昭和 41 年に関西大学によって埋葬施設の実測調査が行われている（関西大学 1967）。また、平成 19 年度に詳細測量調査を実施し、前山Ｂ 130 号墳周辺については地形測量図を作成している（紀伊風土記の丘 2009）。前山Ｂ 132 号墳をはじめとして発掘調査は実施されておらず、副葬品の内容や古墳の詳細な時期は不明である。

３）調査の方法

埋葬施設の内部の流入土除去及び支障木伐採、露出石材の清掃の後、記録作成を行った。記録作成の方法についてはこれまで手実測による図化と写真撮影を実施してきたが、令和４年度からフォトグラメトリ（SfM/MVS）により作成した３次元データからオルソ画像を生成し、このオルソ画像を用いた図化と写真撮影を行うこととした。これにより記録作成に係る作業時間を短縮することができた。

４）調査の成果

ア　墳丘

前山Ｂ 132 号墳は前山Ｂ地区に所在し、岩橋山塊主稜線上から南に派生する尾根筋東側に立地する。尾根筋の頂部には前山Ｂ 130・131・134 号墳が存在し、直径 14 ～ 17 ｍの墳丘規模をもつ。一方、尾根筋東側には、直径５～ 10 ｍの墳丘規模をもつ小規模な円墳が存在する。

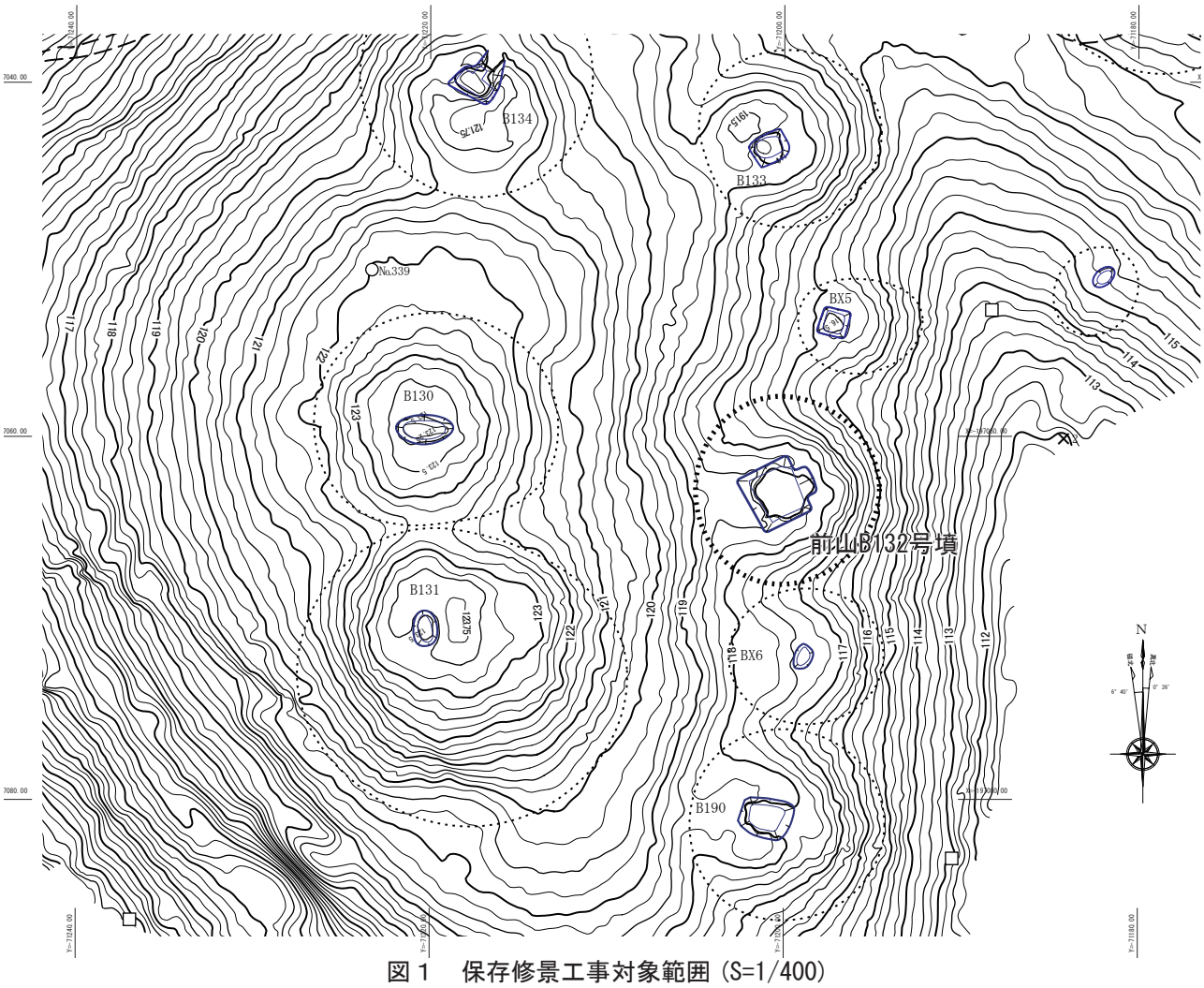


図１　保存修景工事対象範囲（S=1/400）

前山Ｂ 132 号墳は、直径約 10.4 m、高さ 4.6 mの円墳であり、東西に長い楕円形を呈する。墳丘西側は尾根筋を利用し、墳丘東側に盛土を行うことで墳丘を築く。現況では樹木の繁茂はわずかであるが、天井石は取り除かれており、墳丘頂部から北東側にかけて石材が散乱する。墳丘上からの遺物の出土は認められなかった。

イ　埋葬施設

埋葬施設は、東北東側に開口する横穴式石室である。玄室奥壁及び両側壁、前壁が残存し、床面及び玄室前道、羨道は流入土により不明である。天井石は欠失するが、玄室中央部分に長さ約 1.1 m、幅約 0.5 m、厚さ 0.25 mの石材が落ち込む。現状の計測値で玄室幅は 1.82 ～ 1.88 m、玄室長は約 1.98 m、玄門幅約 1.1 m、奥壁幅約 1.85 m、石積み残存範囲での玄室高は約 1.5 mを測る。玄室の平面形は正方形に近い。

奥壁及び右側壁については石積みの残存状況は良好であるが、左側壁から左前壁は抜き取りまたは崩落により上部は欠失する。石積みは石材の小口面を壁体に用いる小口積みとし、小口長辺を横に用いるのを基本とするが、一部は長辺を縦に用いる。奥壁上部の中央には、突起状に突出した石材が認められる。控え積みは認められないか、１石程度となる。石積みの順序については前壁と側壁の関係では前壁が先行し、奥壁と側壁の関係では下部では右側壁が奥壁に先行し、奥壁が左側壁に先行するが上部はそれぞれ交互となる。埋葬施設の床面からの遺物の出土は認められなかった。

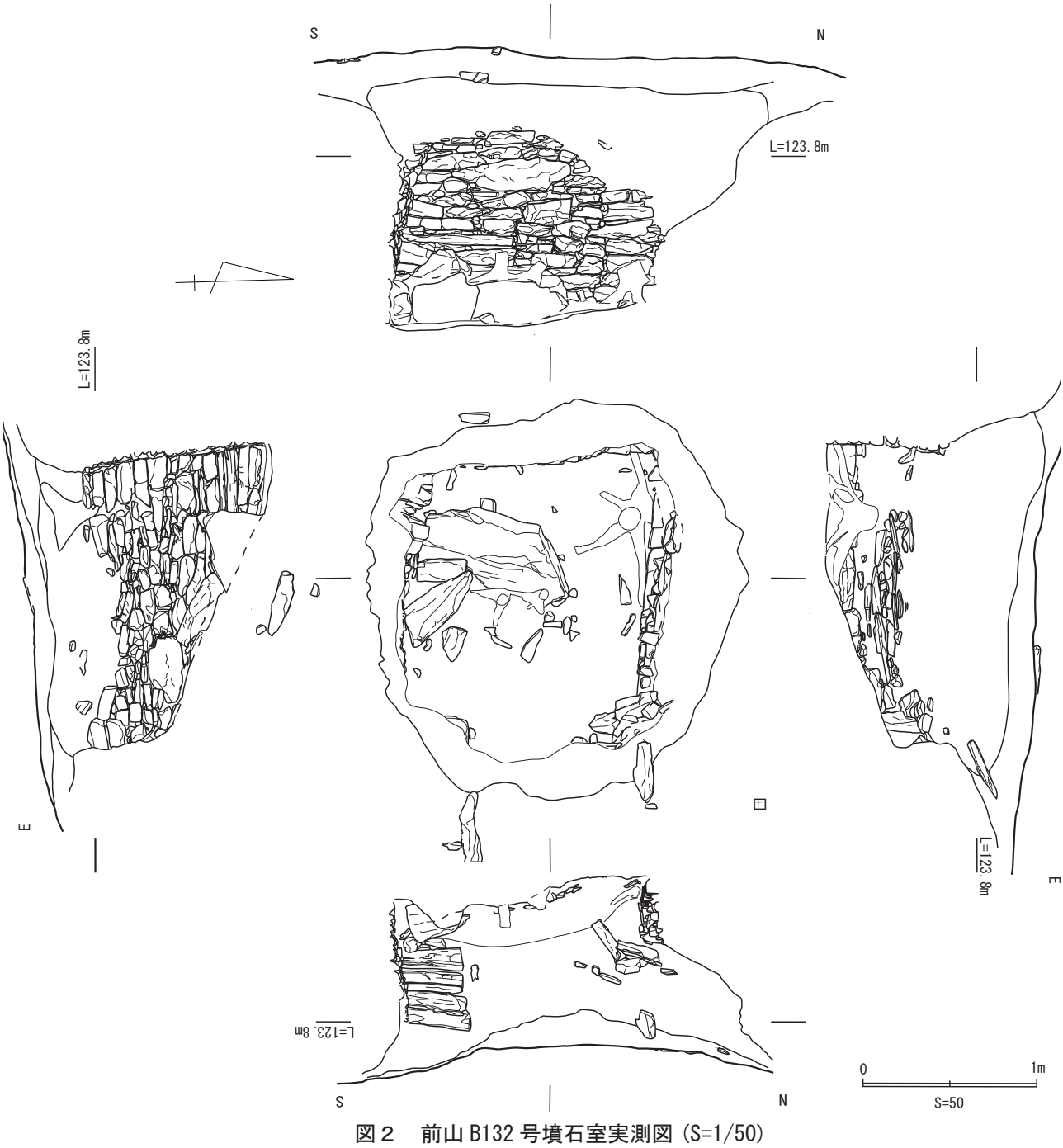


図２　前山 B132 号墳石室実測図 (S=1/50)

【参考文献】
関西大学文学部考古学研究室　1967『岩橋千塚』
和歌山県立紀伊風土記の丘 2009『平成 19 年度　紀伊風土記の丘年報』第 35 号

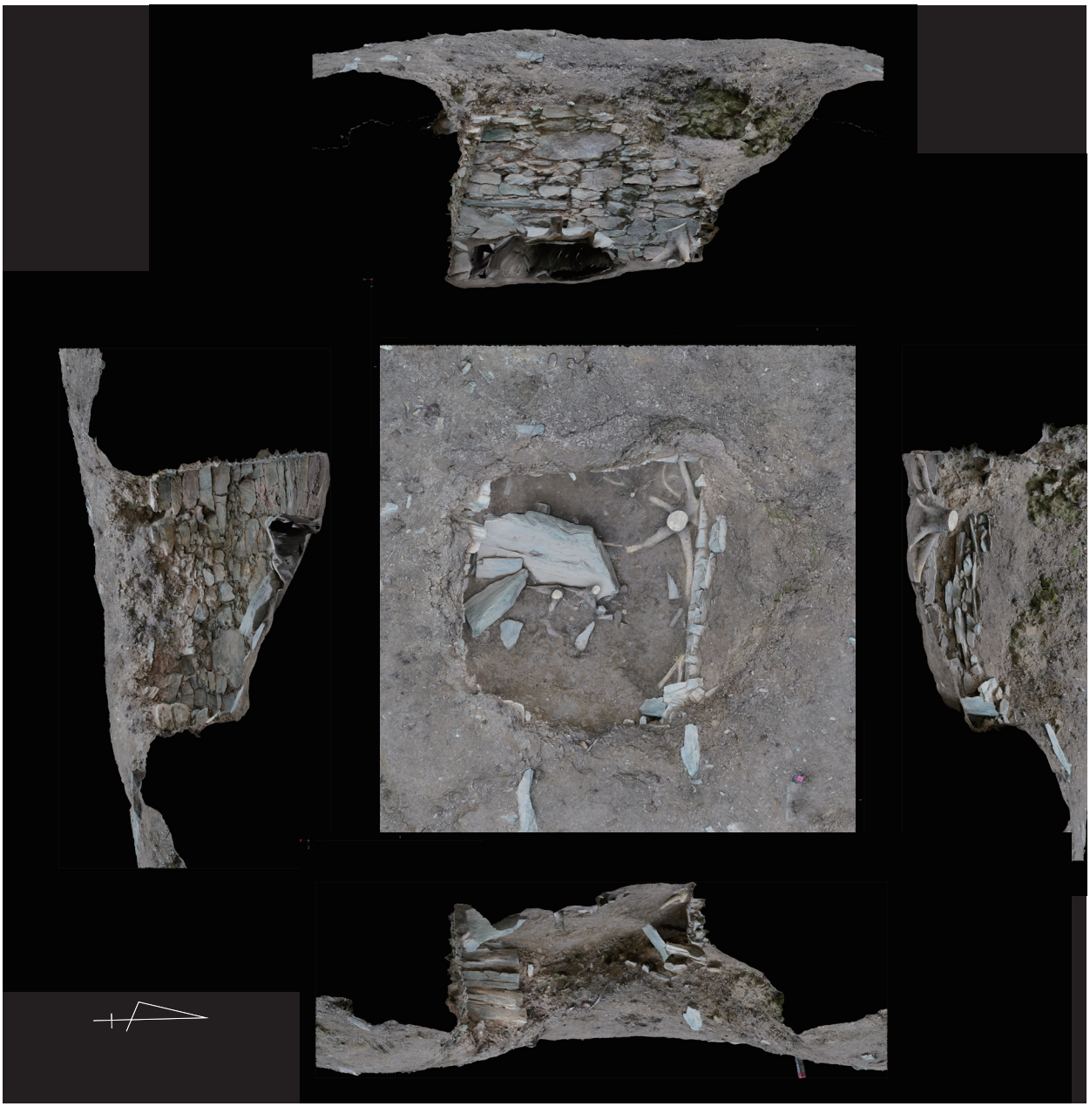


図３ 前山 B132 号墳石室オルソ画像 (S=1/60)

写真１　前山 B132 号墳石室全景（南から）

写真２　前山 B132 号墳石室全景（北西から）

Ⅲ　入館者の動向

年度別資料館入館者及び園内利用者数（令和５年３月 31 日）

年度	（年目）	開館日数	資料館入館者							園内利用者	
			有料			無料			合計		
			個人	団体	小計	個人	団体	小計			
46	1	199	48,684	23,825	72,509			0	72,509		
47	2	301	42,409	27,003	69,412			0	69,412		
48	3	305	26,924	26,038	52,962			0	52,962		
49	4	293	22,950	26,937	49,887			0	49,887		
50	5	295	19,878	30,365	50,243			0	50,243		
51	6	294	14,937	24,339	39,276			0	39,276		
52	7	295	12,334	29,302	41,636			0	41,636		
53	8	291	10,870	24,200	35,070			0	35,070		
54	9	303	9,667	25,231	34,898			0	34,898		
55	10	304	10,831	27,300	38,131			0	38,131		
56	11	294	10,262	22,140	32,402			0	32,402		
57	12	292	8,760	21,687	30,447			0	30,447		
58	13	295	8,021	21,065	29,086			0	29,086		
59	14	295	8,386	23,343	31,729			0	31,729		
60	15	263	7,428	23,782	31,210			0	31,210		
61	16	294	6,313	18,245	24,558			0	24,558		
62	17	295	5,993	15,998	21,991			0	21,991		
63	18	291	5,629	14,533	20,162			0	20,162		
1	19	295	6,244	16,559	22,803			0	22,803		
2	20	296	6,409	13,987	20,396			0	20,396		
3	21	293	6,216	14,209	20,425			0	20,425		
4	22	296	6,615	11,723	18,338			0	18,338		
5	23	290	5,883	11,153	17,036			0	17,036		
6	24	290	4,370	10,498	14,868	800		800	15,668		
7	25	288	3,966	8,809	12,775	3,621		3,621	16,396		
8	26	297	5,457	8,220	13,677	3,112		3,112	16,789		
9	27	305	5,670	8,169	13,839	3,773		3,773	17,612		
10	28	296	5,524	8,355	13,879	4,256		4,256	18,135		
11	29	296	4,520	7,606	12,126	3,988		3,988	16,114		
12	30	281	3,817	8,121	11,938	3,454		3,454	15,392		
13	31	306	4,963	8,733	13,696	4,182		4,182	17,878		
14	32	305	4,530	8,266	12,796	3,606		3,606	16,402		
15	33	307	4,741	8,448	13,189	3,991		3,991	17,180		
16	34	300	3,555	364	3,919	6,452	13,243	19,695	23,614	3,173	（民家利用者数）
17	35	122	2,052	156	2,208	5,649	11,621	17,270	19,478	15,006	（民家利用者数）
18	36	290	3,688	60	3,748	6,625	11,321	17,946	21,694	12,125	（民家利用者数）
19	37	309	3,017	535	3,552	6,212	10,795	17,007	20,559	11,292	（民家利用者数）
20	38	308	3,756	380	4,136	5,986	11,388	17,374	21,510	208,074 3,260	（園内利用者数） （民家利用者数）
21	39	307	3,128	297	3,425	5,426	10,289	15,715	19,140	210,235 2,730	（園内利用者数） （民家利用者数）
22	40	308	4,667	236	4,903	7,173	9,142	16,315	21,218	206,579 3,058	（園内利用者数） （民家利用者数）
23	41	301	3,326	346	3,672	4,683	11,182	15,865	19,537	210,368 2,395	（園内利用者数） （民家利用者数）
24	42	301	3,580	392	3,972	5,280	9,613	14,893	18,865	209,743 2,519	（園内利用者数） （民家利用者数）
25	43	300	3,580	302	3,882	5,152	10,402	15,554	19,436	208,844	（園内利用者数）
26	44	300	3,758	184	3,942	5,356	8,774	14,130	18,072	195,303	（園内利用者数）
27	45	300	3,140	87	3,227	4,930	8,255	13,185	16,412	198,511	（園内利用者数）
28	46	300	3,791	180	3,971	5,929	8,113	14,042	18,013	186,367	（園内利用者数）
29	47	300	4,026	143	4,169	6,492	8,715	15,207	19,376	191,821	（園内利用者数）
30	48	302	3,073	93	3,166	5,363	7,544	12,907	16,073	187,899	（園内利用者数）
元	49	302	3,515	49	3,564	7,082	7,245	14,327	17,891	197,181	（園内利用者数）
2	50	297	1,963	29	1,992	2,797	3,119	5,916	7,908	194,419	（園内利用者数）
3	51	300	2,742	61	2,803	4,045	4,432	8,477	11,280	195,188	（園内利用者数）
4	52	298	2,816	38	2,854	3,985	5,399	9,384	12,238	197,696	（園内利用者数）
合計		15,185	422,374	582,121	1,004,495	139,400	170,592	309,992	1,311,487		

＊無料入館者　平成６年 11 月３日から、65 歳以上及び障害者等を無料とする。平成 16 年４月１日から、高校生以下を無料とする。平成 16 年度から高校生以下の団体の人数は「無料」の人数に含む。

＊園内利用者　平成 16 年 10 月 20 日から民家（文化財民家４棟および復元竪穴住居）の利用者を集計（19 年度で終了）。平成 20 年４月１日から自動利用カウンターにより、紀伊風土記の丘全体の園内利用者の集計を開始。
平成 20 年度以降の民家利用者数は、行ったイベント参加者を集計した。

Ⅳ 紀伊風土記の丘協議会

和歌山県博物館協議会条例に基づき、紀伊風土記の丘の博物館運営に関し、館長の諮問に応じ、館長に意見を述べる機関として設置している。令和４年度は対面方式で２回開催した。

①開催状況

令和４年度　第１回紀伊風土記の丘協議会
　期　日：令和４年７月８日（金）　　会　場：紀伊風土記の丘　研修室
　議　題：（１）会長及び副会長の選出並びに評価部会委員の指名について
　　（２）令和３年度事業実施報告について　（３）令和４年度事業予定について

令和４年度　第２回紀伊風土記の丘協議会
　期　日：令和４年 11 月 11 日（金）　　会　場：紀伊風土記の丘　研修室
　議　題：（１）令和４年度の事業進捗　　（２）令和５年度の事業計画（案）について
　　（３）令和３年度の評価部会による評価報告

紀伊風土記の丘協議会 名簿

氏　名	所属・役職等
和田　晴吾	兵庫県立考古博物館　館長
高瀬　要一	元紀伊風土記の丘　館長
酒井　千佳	前和歌山市立広瀬小学校　校長
千森　督子	和歌山信愛大学　教授
鳥居　賀柄子	元和歌山市子ども総合支援センター職員
平野　真理	一般社団法人ガールスカウト和歌山県連盟　監事
福田　光男	元和歌山市立雄湊小学校　校長
増渕　　徹	京都橘大学　教授
松木　武彦	国立歴史民俗博物館　教授
森　　隆男	元関西大学　教授
山神　達也	和歌山大学　准教授
山田　みゆき	株式会社テレビ和歌山　報道制作本部 制作部長待遇 アナウンサー

Ⅴ　調査・研究

（1）考古資料等の収集・調査に関すること

①資料の寄贈

書籍 一括

②調査研究活動

＊藤井幸司
　〇執筆等
　・「『水中遺跡ハンドブック』について」『月刊文化財 2022 年６月号』第一法規（５月 24 日）
　・「日本列島最新速報 2022- 古墳時代」『発掘された日本列島 2022』文化庁（６月１日）
　・「エピローグ」『二ュース和歌山』連載わかやま古墳めぐり（12 月 24 日発行）
　〇発表等
　・「地域活性化のきっかけとして－地域固有の資源である文化財を活かした地域ファンづくりにむけて－」那賀振興まちづくり連絡会議（９月 15 日）

＊萩野谷正宏
　〇執筆等
　・「園部円山古墳」「室山古墳群」「丸山古墳」「船戸山古墳群」『二ュース和歌山』連載わかやま古墳めぐり（５月 28 日、８月 27 日、９月 24 日、10 月 22 日発行）
　・「横穴式石室と群集墳－近畿」『季刊考古学』160 号雄山閣（８月１日）
　・「令和３年度秋期特別展シンポジウム記録」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘　川島秀一・中園成生・寺前直人・穂積裕昌・蘇理剛志と共著（3 月 31 日刊行）
　〇発表等

・春期企画展講座（４月 17 日）

＊田中元浩

〇執筆等

・「和歌山県日高郡みなべ町城山古墳群の研究－紀中における前・中期古墳の再検討－」『紀伊考古学研究』第 25 号　紀伊考古学研究会　岩井顕彦と共著　（8 月 31 日刊行）

・「高野山が築いた石積み堤防」『産経新聞』防災・減災わかやま連載記事（6 月 26 日発行）

・『紀氏、大地を開く－耕地開発と宮井用水－』令和 4 年度紀伊風土記の丘秋期特別展図録（10 月 1 日刊行）

・「大治２年塩入荒野の開発と中世宮井用水」『令和４年度秋期特別展「紀氏、大地を開く－宮井用水と耕地開発－」特別展シンポジウム予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘（10 月 16 日刊行）

・「宮井用水の起源と歴史」『令和４年度秋期特別展「紀氏、大地を開く－宮井用水と耕地開発－」特別展シンポジウム予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘（10 月 16 日刊行）

・「音浦遺跡と宮井用水 ～ 紀氏、大地を開く」『ニュース和歌山』連載わかやま古墳めぐり（11 月 26 日発行）

・「湯浅町天神山古墳の研究－巽三郎氏収集資料と関連資料から－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘　中原七菜子と共著（3 月 31 日刊行）

〇発表等

・「大治２年塩入荒野の開発と中世宮井用水」令和４年度秋期特別展シンポジウム②　「古代・中世における和歌山平野の開発」　於：紀伊風土記の丘（10 月 23 日）

・「宮井用水の起源と歴史」令和４年度秋期特別展シンポジウム④　「ここまでわかった古代の土木技術」　於：紀伊風土記の丘（11 月 20 日）

・「紀氏、大地を開く」和歌山ロータリークラブ卓話　於：ダイワロイネットホテル和歌山（11 月 22 日）

・「宮井用水の起源と歴史」ボランティアの会研修会　於：紀伊風土記の丘（12 月２日）

・「紀伊半島の海と古墳時代」連続講座岩橋千塚第 20 回　於：紀伊風土記の丘（12 月 25 日）

＊金澤舞

〇執筆等

・「紀伊の滑石製品と祭祀」『紀伊の滑石製品』紀伊考古学研究会第 25 回大会資料集　紀伊考古学研究会（11 月 10 日刊行）

・「和歌山の歴史を守り、伝えたスゴイ人―岩橋千塚古墳群と郷土史研究家　田中敬忠―」『わかやまの子どもと教育』第 86 号　和歌山県国民教育研究所（12 月 1 日刊行）

・「和歌山県立紀伊風土記の丘におけるデジタル・アーカイブとその活用」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用５』奈良文化財研究所（１月 31 日）

・「宮田啓二『昭和二七年秋冬　岩瀬千塚古墳群　調』－大日山地区編①－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘　石丸彩・瀬谷今日子 ・冨永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加と共著（３月 31 日刊行）

・「【資料紹介】紀の川市黒土古墳の再検討－紀の川中流域古墳の出土品１－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘　河内 一浩と共著（３月 31 日刊行）

〇発表等

・文化庁作成・遺跡から地域の魅力を発掘！「いせきへ行こう！」vol.22「解説！「発掘された日本列島 2022」（５）我がまちが誇る遺跡３～岩橋千塚古墳群と紀氏の遺跡－和歌山県編」於：動画配信（７月 12 日）

・連続講座岩橋千塚第 19 回「岩橋千塚古墳群の竪穴系埋葬施設－前山 A100・111 号墳の発掘調査－」於：紀伊風土記の丘（９月 18 日）

・紀伊考古学研究会第 25 回大会「紀伊の滑石製品と祭祀」於：和歌山市あいあいセンター福祉交流館（11 月 10 日）

＊上村緑

〇執筆等

・「水と古代のわかやま」『わかやまの子どもと教育』第 85 号　和歌山県国民教育研究所（９月 1 日刊行）

・「学芸員の仕事―和歌山県立紀伊風土記の丘の場合―」『2022 年度近畿地区文化財専門職説明会資料集』

（1月 29 日刊行）
・「岩橋千塚古墳群の芽吹き―花山地区の古墳―」『わかやまの子どもと教育』第 87 号　和歌山県国民教育研究所（3月 1 日刊行）
・「紀北の岩橋型横穴式石室における埋葬行為―棺体配置・屍床構造について―」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘（3月 31 日刊行）
○発表等
・連続講座岩橋千塚第 19 回「埋葬儀礼からみた岩橋型横穴式石室」於：紀伊風土記の丘（9月 18 日）
・考古学研究会関西例会第 234 回「紀北の横穴式石室の埋葬行為と土器儀礼」於:オンライン（12 月 3 日）
・2022 年度近畿地区文化財専門職説明会「学芸員の仕事―和歌山県立紀伊風土記の丘の場合―」於：同志社大学（1月 29 日）
・岩出市ふれあい学級（出張！県政おはなし講座）「特別史跡岩橋千塚古墳群と紀伊風土記の丘の仕事」於:岩出市内各公民館（2月 3 日、8 日、10 日、22 日）
・展示講座③（冬期企画展）於：紀伊風土記の丘（2月 12 日）

（2）民俗資料の収集・調査に関すること
①資料の寄贈
・衣生活資料　52 点、花園地域の生活資料　4点
・生活資料　　7点（和歌山市）

②調査研究活動
＊蘇理剛志
○執筆等
・「近畿地方の新型コロナ禍における民俗学的現況」（特集 日本民俗学の研究動向　第二部　新型コロナ禍における民俗学）『日本民俗学』第 310 号　日本民俗学会（5月 31 日刊行）
・コラム「宮井をめぐる農の祭祀 ―稲を育む「専女（とうめ）」の祭り―」『令和 4 年度秋期特別展　紀氏、大地を開く―宮井用水と耕地開発―』展示図録　和歌山県立紀伊風土記の丘（10 月 1 日刊行）
・コラム「廣八幡の田楽について」『令和 4 年度特別展　濱口梧陵と廣八幡宮―法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財とともに―』展示図録　和歌山県立博物館（10 月 15 日刊行）
・「周作人「童謡論資」注釈（その 1）」『歌謡―研究と資料』第 15 号　歌謡研究会　王 蘭、牛承彪、宋天鴻、韓寧爛、永池健二と共著（11 月刊行）
・「資料紹介　柳川コレクション資料目録（4）―商い具・生活用具を中心に― 」『紀伊風土記の丘研究紀要』
第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘（3月 31 日刊行）
・「令和 3 年度秋期特別展シンポジウム記録（紀伊半島をめぐる海の道と文化交流）」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号　和歌山県立紀伊風土記の丘　川島秀一・中園成生・寺前直人・穂積裕昌・萩野谷正宏と共著（3月 31 日刊行）
○発表等
・熊野本宮大社正遷座百三十年記念 学芸員出張講座「熊野本宮大社 例祭よもやま話」於・熊野本宮大社（4月 10 日）
・紀州の和菓子と文化を考える会　講演「和歌祭と和歌山城下のくらし」於・和歌山県公館（5 月 14 日）
・学芸員講座「熊野」（第 7 回）「熊野の信仰と祭り（3）―熊野速玉大社の祭礼行事と記録映像―」於・紀伊風土記の丘（7月 3 日）
・和歌山県神道青年会研修会　講演「見つめなおそう、地元の祭り」於・海南 nobinos（8月 9 日）
・展示講座①（夏期企画展）於・紀伊風土記の丘（8月 14 日）
・長崎学講座スタンダード　講演「長崎・紀州の旅と文化交流―旅網・鯨・巡礼―」於・長崎歴史文化博物館（9月 10 日）
・おはまおりセミナー 2022　講演「和歌山県沿岸部の祭礼とお浜降り」於・千葉県立中央博物館（11 月 6 日）

職員名簿（令和４年度）

職　名		氏　名
館　　長		中　村　浩　道
副　館　長		西　山　耕　司
教育企画員		堂　本　淳　也
課　名	職　名	氏　名
総　務　課	課　長	畑　﨑　伸　仁
	主　任	玉　井　俊　充
	主　任	藤　井　達　也
	主　査	川　﨑　康　弘
	主　事	植　田　拓　真
	公園内環境整備職員（会計年度任用職員）	青　木　一　法
	清掃作業員（会計年度任用職員）	岩　上　宏　子
	移築民家管理等職員（会計年度任用職員）	大久保　善　博
	受付等窓口業務職員（会計年度任用職員）	奥　山　容　子
	業務補助職員（会計年度任用職員）	桂　　誠　志
	業務補助職員（会計年度任用職員）	雑　賀　　陽
	移築民家管理等職員（会計年度任用職員）	林　　智津子
	公園内環境整備職員（会計年度任用職員）	松　本　　誠
学　芸　課	専門員（学芸課長）	藤　井　幸　司
	主任学芸員	萩野谷　正　宏
	主査学芸員	蘇　理　剛　志
	主査学芸員	田　中　元　浩
	学芸員	金　澤　　舞
	学芸員	上　村　　緑
	業務補助職員（会計年度任用職員）	大　川　赳　司
	体験学習補助員（会計年度任用職員）	植　松　裕　太
	埋蔵文化財調査員（会計年度任用職員）	立　岡　瑞　穂
	埋蔵文化財整理補助員（会計年度任用職員）	玉　井　朱　美
	埋蔵文化財整理補助員（会計年度任用職員）	谷　口　敦　子
	園内植物管理職員（会計年度任用職員）	松　下　　太

紀伊風土記の丘研究紀要
第 12 号

【論　　考】

和歌山県における経塚（下）　中村　浩（浩道）・・・1

御坊市阪東丘２号墳の研究－紀伊風土記の丘館所蔵資料と巽三郎収集資料から－
田中元浩・佐藤純一・濵﨑範子・横臼彩江・・・20

【研究ノート】

宮田啓二『昭和二七年秋冬　岩橋千塚古墳群　調』－大日山地区編②－
石丸　彩・上村 緑・金澤　舞・瀬谷今日子・冨永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加・・・40

【資料紹介】

雑賀崎の漁業史（２）－一本釣り漁師の漁業歴と漁具－　萩野谷正宏・池田佳祐・・・52

【活動報告・シンポジウム開催記録】

シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」討論記録
川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・櫻井敬人・蘇理剛志・萩野谷正宏・・・60

執筆者一覧

中 村　浩（浩道）	和歌山県立紀伊風土記の丘 館長	考古学
萩 野 谷 正 宏	和歌山県立紀伊風土記の丘 主任学芸員	考古学
蘇 理 剛 志	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	民俗学
田 中 元 浩	和歌山県立紀伊風土記の丘 主査学芸員	考古学
金 澤　　舞	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学
上 村　　緑	和歌山県立紀伊風土記の丘 学芸員	考古学

＜外部執筆者　五十音順＞

池 田 佳 祐	漁業・Fisherman’s Table & Stay 新七屋代表	漁業史
石 丸　　彩	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 技師	考古学
川 島 秀 一	東北大学災害科学国際研究所 シニア研究員	民俗学
櫻 井 敬 人	太地町歴史資料室 学芸員・ニューベッドフォード捕鯨博物館 顧問学芸員	海事史
佐 藤 純 一	白浜町教育委員会　学芸員	考古学
瀬谷 今日子	和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 主任	考古学
寺 前 直 人	駒沢大学 教授	考古学
冨 永 里 菜	和歌山市産業交流局文化スポーツ部文化振興課 主査	考古学
中 園 成 生	平戸市生月町博物館・島の館　館長	民俗学
中 西 瑠 花	有田市教育委員会 主事	考古学
仲 原 知 之	公益財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 主任	考古学
馬 場 彩 加	田辺市教育委員会生涯学習課 事務員	考古学
濵 崎 範 子	公益財団法人和歌山県文化財センター埋蔵文化財課 技師	考古学
穂 積 裕 昌	三重県埋蔵文化財センター　所長	考古学
横 臼 彩 江	京都府立大学文学部歴史学科	考古学

＜論　考＞

和歌山県における経塚（下）

中村　浩（浩道）

はじめに

本稿は、『紀伊風土記の丘研究紀要』第 11 号所収の「和歌山県における経塚（上）」の続編である。県内経塚の研究史及び、本稿に記載のない経塚各説については、上記の論考を参照されたい。なお、各経塚の番号及び図版番号は、前号からの通番である。

１．経塚各説（続）

（８）高尾山経塚（内容については前号参照）

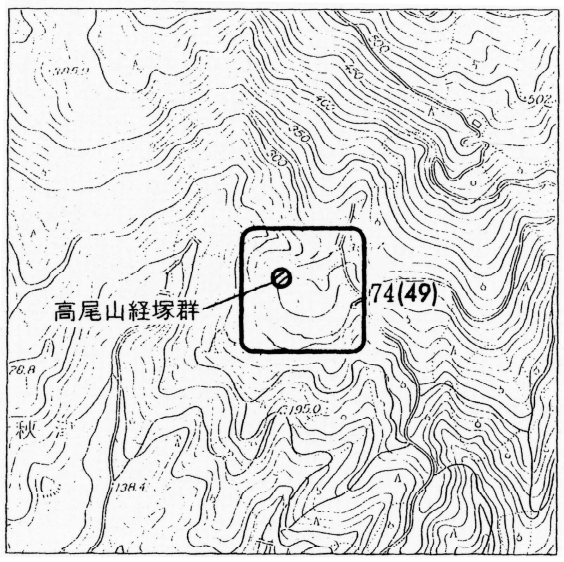
（９）仮庵山経塚（かりほやま）　田辺市湊

闘鶏神社の裏山で仮庵山と呼ばれる標高 20 m の丘陵がある。昭和 32 年田辺市教育委員会が発掘調査を行った。丘陵中腹のものを第１号経塚とし、丘頂のものを２号経塚、３号経塚とする。１号と２号の距離は約 35 m、２号経塚と３号経塚の間はわずかに 1.5 mほどの距離で、２号経塚は丘陵からや下がった斜面にある。１号、３号経塚はすでに破壊されていた。

１号経塚は、基底部のほか周囲に置かれた河原石の一部が径 1.8 mの環状に残存するのみであった。環状列石の内外に合子片が散乱していたが、現状のままと思われる副葬品は、中心部の底に刀子と瓦器皿があり、その東端に完形の合子と小型の硯があった。

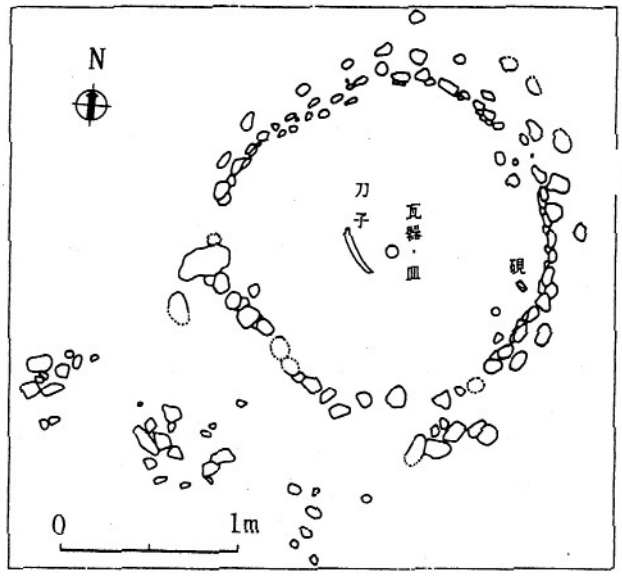
２号経塚　上部径 1.6 m× 1 m、下部径 1.4 m× 0.8 m、深さ 0.6 mの土壙の北端に、小石室が半ば破壊されて残っていた。小石室は縦横ともに約 0.36 m、深さ 0.27 m、長さ７～８m、厚さ５～７mの割石積みである。蓋石２枚は石室内に落ち込んでいた。床面は地山のままで床石はなく石室内に据えた甕の下部間隙には割石を詰めていた。

外容器は、鎌倉時代に比定される常滑焼甕で、蓋石の落ち込みによって破壊され、経筒も圧迫されて腐蝕状態で検出された（第７、８図）。石室内の副葬品は、外容器と室内との狭い間に平形合子と大型壺柄合子蓋が落ち込んでいた。石室外では二石の上に置かれた割石に混じって、合子、刀子、瓦製経筒片、青白磁椀片、須恵質甕片、古銭が攪乱状態で検出されている。

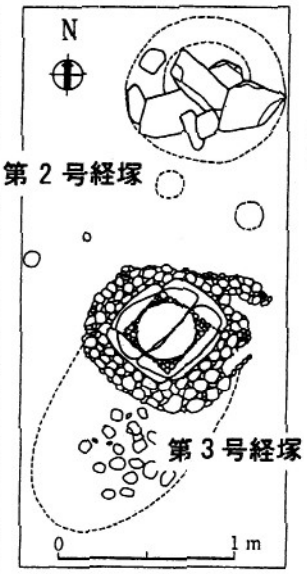


第６図　高尾山経塚位置図および出土遺物実測図

1　仮庵山経塚配置図

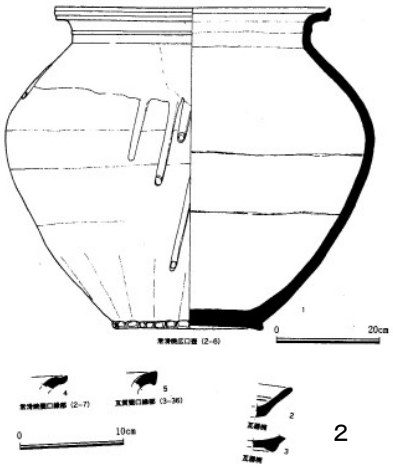


2　第1号経塚

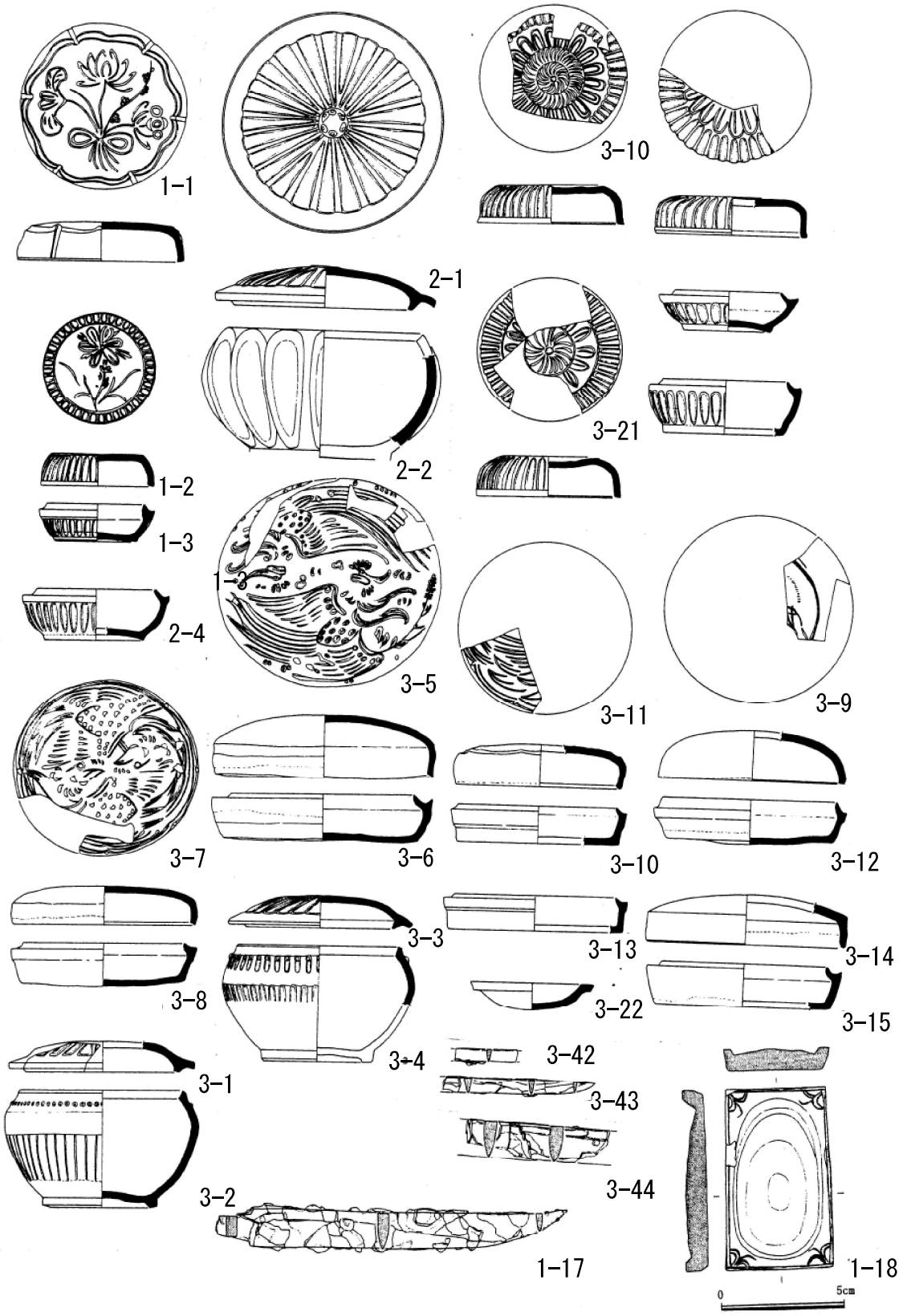


3　第2・3号経塚

第７図　仮庵山経塚位置図（第１、第２、第３号経塚）



第８図　仮庵山経塚第２号経塚出土遺物実測図（１．銅製経筒、２．常滑焼広口壺）



第９図　仮庵山経塚第１号、２号、３号経塚出土遺物

３号経塚　土壙は摺鉢形で、上部径 0.9 m、下部径 0.6 m、深さ 0.4 m、内部には石室に用いたと思われる板石や割石の糸部が残存していた。埋納品は土壙内で平安時代末に比定される常滑焼甕の口縁部小片が残存していたにすぎず、土壙外では青白磁合子、須恵質甕小片、瓦器椀片、古銭などが散布状態であった。

埋納品は、１号経塚では刀子１、平形青白磁合子 10、瓦器皿１、瓦器片若干、陶製硯１、ガラス製木魂、２号経塚からは、銅板製経筒１、常滑甕１、平形青白磁合子１、壺形青白磁合子１、３号経塚からは、常滑焼甕片若干、須恵質甕数片、平形青白磁合子５、壺形青白磁合子３、瓦器椀片若干、刀身片１、古銭４、ガラス製小玉３である。このうち硯は小型の陶製で、長方形の縁を額縁状に線描きし、四隅には素朴な線刻草葉文をあしらっている。

合子は青白磁製で平形合子の多くは蓋または身の残欠であり、完形品は３合のみである。その文様は二重捩菊文が多く、草花文や蓮華文もあるが、双鳳と双鴛文を型抜きした珍重すべきものもある。壺形合子は１合のみ完形品で、他は残欠である。全体に木片の付着はなく、抜き身のまま埋納されたものと思われる。文様は中央に芯を配した菊花状花形文で、胴部には花弁状縞文が見られる。口縁部に小さい円形乳文を配したものもある。刀子は小柄状残欠と短刀状のもので、後者は身に反りがあり、茎の目釘部分に釘らしい残欠がある。

(10) 本宮経塚　東牟婁郡本宮町本宮（現田辺市本宮）

熊野本宮大社の旧社地の川向い、七越峯山麓の供崎から北方に位置する。文政８年（1825）に社地の石垣を修復するため石材を採取した時、崩落した砂礫の中から経筒が出土したという。構造などは不明である。

埋納品は、銅製経筒、陶器製外容器、仏像が各１と、銀器残欠若干である。このうち経筒は高さ 31.6 ㎝、径 33 ㎝で、現存する経筒の中で最大の容積を持つ。蓋は緩やかに甲盛りのある被せ蓋で、その頂に突起状の紐をつけている。筒身は太くその頂に突起状の紐をつけている。筒身は太く大きな銅板製の円筒である。陶製外容器は、高さ 39 ㎝、径 41㎝、であり、銘文７行 61 文字が外側に線刻されている。この銘文から保安２年（1121）に大般若経 600 巻を 50 巻ずつ 12 分して埋納されたことがわかる。

(11) 備崎経塚　東牟婁郡本宮町本宮（現田辺市本宮）

備崎経塚が本格的に知られたのは、平成元年（1989）12 月から平成２年（1990）２月下旬に実施した、国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査よって得られた成果が最初である（黒石 1990）。この調査でＡ、Ｂ両地点に経塚の可能性のある遺構の分布が確認され、とくにＡ地点は標高 158 ｍの頂上付近に位置し、約 10 ｍ余りの平坦地が見られる。さらに周辺には 20 ～ 30 ㎝の川原石が散乱し、須恵器の破片なども採集されたことから、備宿の建物跡の可能性も考えられている。Ｃ地点からは瓦質の経筒或いは外容器などが採集された。

また大黒石と呼ばれる巨大な洞窟の割れ目からは瓦質の土器が採集され、修験関係の修法場と推定されている。また同時に丘陵の高所で平坦面が確認され、備宿の可能性も指摘した。（中村 2002）。その後、当該地域が世界遺産登録のコアゾーンに含まれることから、本格的な調査が行われることとなった。平成 13 年（2001）12 月 11 日から平成 14 年（2002）２月 15 日の間、大谷女子大学（現在の大阪大谷大学）によって調査を実施し、第一地点で 32 遺構、及び第三地点７遺構以上、少なくとも 39 カ所の経塚遺構を確認した。

とくに検出遺構は、上部を攪乱で損なってはいたが、基礎部分は、ほぼ整然とした形で残されており、貴重な情報を得ることができた。やがて周辺を踏査された山本義孝氏によって備崎の磐座遺構の紹介などがあった（山本 2006）。

この調査で対象としたのは、備埼丘陵に所在することが確認された７地点の経塚遺構群の内、第一、第三地点の２カ所である。第一地点は備埼丘陵先端部に位置する経塚遺構群である。ただし周

辺に散乱していた川原石は、いずれも丘陵裾を流れる熊野川からもたらされたものであり、丘陵地山はは本来岩盤質である。

調査開始段階には、散乱状況から相当な攪乱が予想され、積石の攪乱は表面上は確認できなかった。さらに石の堆積状況の検討から旧状が大きく損なわれているとみられるものについては適宜除去しながら進めていった。これらの検討の結果、丘陵先端から４群のこれら積石群を区として理解し、先端から順に、すなわち北から南へのＡ，Ｂ，Ｃ,Ｄ区としてブロックを区分して調査を進めた。

第一地点では、下層遺構の確認数に差が認められた。内訳はＡ区―11 カ所、Ｂ区―４カ所、Ｃ区―12 カ所、Ｄ区―５カ所及び第三地点７遺構、内訳はＡ区―２カ所、Ｂ区―５カ所以上の、少なくとも 39 カ所の経塚遺構を確認した。

第三地点は丘陵鞍部に位置しており、大きく３ブロックに区分されるが､調査の対象としたのは、丘陵先端部のＡ区と中間部のＢ区の積石群についてであり、Ａ区で２カ所、Ｂ区で５カ所の積石群の確認があった。Ａ区については西側に分布する遺構群の調査を実施し、全体の石材清掃、除去などの精査は、今後の遺跡保存を考慮して実施しなかった。

確認した経塚遺構について、位置関係などについて詳細に検討してみると、第一地点については、Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ区がそれぞれグループとして捉えられるという特徴を持つ。さらにＢ，Ｃ区とＤ区の構造には大きな差異が認められる。また出土遺物からも第１地点のＢ，Ｃ区とＡ，Ｄ区には大きく採集遺物に差があることがわかる。すなわちＡ -10 号経塚とＤ―２号経塚には青銅製の経筒の出土がみられるのに対し、他の区ではそれらが全く見られない。またＡ区についてはＡ -10 号経塚以外に遺物の出土が見られない。このことはＡ区の遺構の攪乱が著しかったことを物語っている。Ｂ区では土器皿（Ｂ - ２)。瓦質経筒（Ｂ - １）山茶碗（Ｂ - １、２）などが採集されている。しかしＢ区では全体に出土遺物が少ないという特徴があり､Ａ区と同様に攪乱が著しい。

Ｃ区については攪乱痕跡が見られたものの、下層面では土坑の確認などがあり、比較的残存度合いが良好であった。とくにＣ区では須恵質経筒が２点以上出土し､陶器（四耳壺）､大型陶器甕（外容器）などが見られる。一方、Ｄ区では常滑焼壺２点のほか土師質経筒、須恵質経筒をはじめ大型の陶器甕（外容器）などが出土している。

第三地点ではＡ区で、陶器外容器（Ａ－１)、影青合子､陶器経筒､陶器外容器（Ａ区）の出土、Ｂ区では、陶器片、土師器（Ｂ - １)、陶器外容器底部２点、影青合子、青銅製小仏像（Ｂ－２)、瓦器皿（Ｂ区）、陶器片（Ｂ－４、５）が採集されている。

これら採集された陶器の破片はいずれも経筒、あるいは外容器を形成していた陶器の一部であり、現状では接合不能なものについてもかつては完全な製品であったものと考えられる。

遺構の残存状況と遺物の採集状態、当該経塚の攪乱状況を考えると次のようになるだろう。

まず丘陵先端部分に位置した第一地点Ａ区の各遺構は上層部分を覆っていた石材が大半排除された状態であり、経塚の核心部分の攪乱が十分に考えられた。このことは採集遺物が著しく少ないことから証明されるだろう。Ｂ区についても丘陵鞍部ということもあり、覆っていた石材の流出が見られたが、先端部分のＡ区よりは攪乱が少ない。Ｃ区、Ｄ区については丘陵基部及び斜面部分であることから、攪乱の及んでいた可能性はＡ、Ｂ区よりは少ないことがわかる。

第三地点は、丘陵のわずかな平坦部分に構成された経塚であったこともあってＢ区については多くの石材が除去されていた。しかし、幸い石室の底部に敷かれた底板の存在が、Ｂ－２号経塚の小仏像採集という偶然を呼んだものと考えられる。

以上、今回確認された経塚遺構について記述してきた｡当初から攪乱は予想されていたとはいえ、予想以上に攪乱されていることから、少なからず落胆を禁じえなかった。しかし調査を進めていくにしたがって、攪乱の目的が遺物の奪取にあり、その達成後は放置されており、一定以上に攪乱さ

れていないことがわかった。明らかに攪乱行為によって旧位置を移動した遺物の確認は残念なことではあったが、当該遺構群が経塚群であることのへの証明でもあった。攪乱を受けた上層部分の撤去後は、経塚単位の確認も可能となり、それらの形成過程の考察も可能となった。いずれにしても今回の調査が､備崎経塚の存在確認のためであり、本格的な遺構の調査は後日に委ねざるを得なかったのはいささか残念ではあったが、文化財の保存を考慮すればそれもやむをえないものであり、大方の支持は得られるであろう。

(12) 滝尻王子経塚　　田辺市中辺路町栗栖川

滝尻王子神社境内で経塚が営まれた明確な文献的徴証はないが､完形品の合子（青白磁壺型合子、青白磁唐草文平型合子、青白磁唐花文合子），胡州鏡、秋草双鳥鏡などの出土品から、経塚の造営が徴証される。造営時期などについては明らかではないが、出土遺物などから平安時代後半と推定される。

(13) 近露王子経塚・高原経塚　　田辺市中辺路町近露小字北野

常滑焼壺、経筒、青白磁合子片、水晶玉などが出土し、田辺市教育委員会で保管されている。

(14) 那智山経塚　　東牟婁郡那智勝浦町市野々

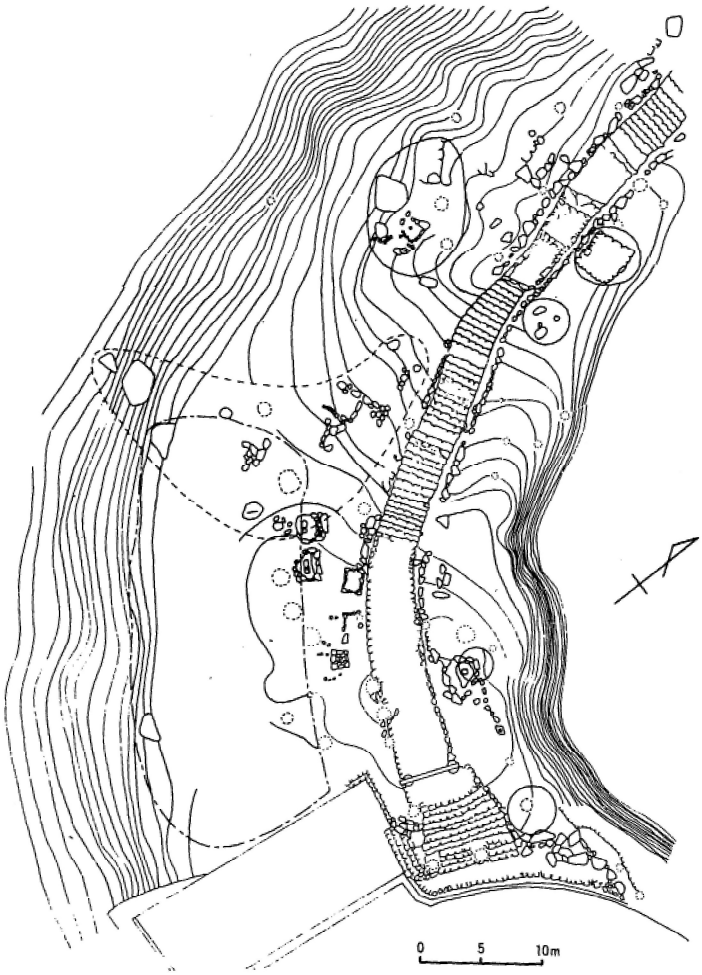
大正７年（1918）３月 11 日熊野三所権現の１つである夫須美神社の西約５町のところで、郷社飛瀧神社への参詣道路の左側に俗称沾池の付近の保安林が解除され、銅仏仏具など 150 点余りが出土、採集された（第１次)。

第２回目の発掘は、大正７年（1918）３月 17 日である。第１回の発掘において仏像仏具などを得たことから、さらに多くのものが埋納されている可能性を持って、多くの新たなる参加者を得て掘り出したものである。この時には経筒 61 個分など 106 点が出土採集された。第３回は大正 13 年（1924）３月、飛瀧神社境外所有地において岩窟内から三鈕素文鏡、白磁香炉、陶製椀の３点を採集した。以上の各回の採集品は東京国立博物館に寄贈され、調査研究が行われ、『那智発掘仏教遺物の研究』として報告、出版されている。

次に昭和５年（1930）の発見がある。この年には２回にわたって発見があり、第１回目は、郷社飛瀧神社参道清掃のため地均し中に偶然遺物を発見したもので、保元元年（1156）銘および建久三年（1192）銘などの経筒 43 点他、観音菩薩像など３体などが出土した。第２回目は同一地域においてさらに、古銭７点、経筒６点が出土した。

さらに昭和 39 年（1964）には飛瀧神社境内で砕石中に経筒片、同蓋、古銭、高台付き銅器片などが出土している。

やがて昭和 39 年（1964）から昭和 40 年（1965）にかけて青岸渡寺防災道路工事に伴う緊急調査として和歌山県教育委員会が発掘調査を実施した。遺物の散布状況から 27 箇所の遺構の存在が推定されている。出土遺物は甚大な量に及び、特に山茶碗、小皿が全体の 80%を占めている。



第 10 図　那智山経塚全体図

昭和 43 年（1968）、昭和 44 年（1969）には３回にわたって那智大社が主体となり、國學院大學大場磐雄団長の元、発掘調査が行われた。第１回は、昭和 43 年（1968）8 月 20 日から 27 日まで、第２回は同年 10 月 9 日から 20 日まで、第３回は昭和 44 年（1969）８月 1 日から 15 日まで行われた。調査は参道入口から約 60m の間にわたる両側の地域で行われた。

それら成果の一部は『那智経塚―その発掘と出土品―』として公刊されている。それによると、遺跡は標高 225m と 250m の間にあり、等高線が乱れてやや広い「平」が作られ、そのためお滝参道付近では、等高線に逆らうように高みができている。北の鬱蒼とした杉の間隠れに大滝がみえる経塚はこの高みを廻って営まれ、さらに南西の斜面には大きな立石が散在し、そこでも経塚や修法遺跡がみられる。なお大正時代に多くの遺物を出した沾池は現在駐車場のアスファルト下になっていると推定される。

那智経塚の遺構として２つの類型があるとされる。その１つは、巨石をめぐって、その下や周りに作られた経塚である。まず顕著な例として１号遺構が挙げられている。１号遺構は、径約２m、高１mの地山にめり込んだ亀形の石で、そこには少なくとも３つの経筒の存在が確認された。Aは、やや離れたところに石室状の囲いを作り玉石をつめて青銅製の経筒を置き、上に平らな石を置いたものである。B、Cは石と地表の間隙を利用して中に玉石をつめ、経筒を立ててあった。ともに小型の経筒で室町期のものである。Aの経筒内には、腐食した経巻が残っていた。Cは、鉄製経筒であったが、腐食が著しく原型の復元が困難であった。A，B，Cともに伴出品は見られなかった。南西の斜面には多数の巨石が露出しており、この類型の遺構が多かったと推定される。しかし変化を受けやすい地形であるために遺物は多く採集されたにも関わらず遺構は確認されなかった。また、これらの石は目につきやすいため、盗掘者の絶好の目印となり、一層激しい攪乱を受けたものと思われる。

もう１つの類型として石を四角な壇状に組んでその中心に石室状の場所を作り、ここに経巻やそのほかの品物を納めた遺構である。これは、この上部施設の状態が確認されていないが石を塚のように盛ったと考えられるので、伝統的な経塚造営の形に入るものと考えられる。

代表的な例としては、20、22、24 号遺構がある。これらの３つの遺構は、重なり合って１つの長方形のプランに見えるが、配列をよく観察すると時代の異なる３つの経塚が一部重複しながら造られたことがわかる。

20 号遺構は、最も良好な状態で発見されたもので、中心の平らな石の下に、鎌倉時代初期と思われる常滑焼の甕があり、その下に鉄製の刀子が置いてあった。

この類型は、第２次発掘区の滝に向かう斜面に多く、遺構が重なり合ってあたかも階段のように見える。これに類すると思われるものは、いまだ調査の及んでいない参道入り口鳥居付近の高みを測る各所に認められる。以上述べた２つの類型は必ずしも独立しているものではなく、例えば２類のもので明らかに巨石を意識した場所にあったり、一辺あるいは二辺に地山の大きな石を利用しているものもある。

さらに修法遺構についても触れている。すなわち経塚の造営が修験道と深く関連しているのは熊野三所権現の一角を占める那智山の性格から見て当然といえる。しかし修験者の活動が経塚のみ係わっていたことではないことは明らかである。

そういった活動の跡を残すものとして、第２号巨石下にあった遺構の遺物を挙げることができる。それは西側斜面上にある幅 3.5 m、高さ３m の巨石で、その正面の裾石を取り除くと、ようやく人一人が入ることができる隙間があった。内部の床面はごろごろした自然石の重なりで、その上に小型銅仏や御正躰の化仏が発見された。やや離れて金銅製経筒があったが、その表面にも炎による煤痕が認められた。その状態は後世の投げ込みと考えることも不可能ではないが、占地場所の特殊性や遺物が散乱せずに固まっていることなどか

ら、山伏が行った祭儀（修法）の跡と考えるべきであろう。また、ここから滝壺までに至る地域に明らかに火を使用したとみられる洞窟があることによっても、そのような活動を跡づけることができそうであると結論付けられている。

次いで出土遺物について、金工品では経筒、鏡、仏像、御正躰、仏具、貨銭、鉄利器と、さらに陶磁器があり、陶磁器では中国陶磁器、常滑焼、渥美焼、瀬戸焼、その他として記述されており、それぞれの出土地点と遺構との関連図面が添えられている。

このうち金工品も経筒については、大正の発掘で 60 点、昭和初年に 40 点、昭和 44 年（1969）の調査で 50 点、神社が採集したものを加えると 200 点近い数が推定され、時代別にみるとほぼ平均的な割合を示す。ほかに鉄製のものが５点ほど記録されているが、材料が脆弱なため、原形の復元、時代の判定ともに不明なものが多い。

鏡では、大正期で 11 面（うち１面は胡州鏡）、昭和初年に４面、神社所蔵が６面、昭和 44 年（1969）調査などで６面の合計 27 面が発見されている。うちの大部分が平安末期の和鏡である。仏像は、経塚に埋められているのは一般的ではないが、いくつか知られている。特に那智では金銅仏が大正期に 13 点、昭和初期に２点と全国に例がないほど多数が発見されている。しかもこれらの中には飛鳥・白鳳・奈良時代のものが多く、それが那智経塚の特殊性を強めている。昭和 44 年（1969）では、上記系統に入る仏像は確認されなかったが、御正躰が経塚で発見される例は少ない。貨銭は経塚に伴って発見されることが多く、しかもそのほとんどが中国銭である。昭和５年（1930）までに 119 枚が見つかっており、第２次調査だけでも 300 枚を超えている。

鉄利器では、１号巨石付近から剣身、２号巨石北辺から短刀、20 号遺構より刀子、表採品として鉄戈及び火打ち鎌などが発見されている。神社所蔵品には、数点の刀子片とほかに鏃、鈴などがあるが、いずれも腐蝕が著しい。なお１号巨石近くの剣は那智大社神宝の不動剣を思わせる。陶磁器では、中国陶磁器の青磁、青白磁の四耳壺、合子、椀、花瓶と褐色釉の経筒がある。日本産陶磁器は、常滑焼（甕―経筒外容器約 20）、渥美焼（経筒約 70、甕、壺、山茶碗、小皿、大平鉢など）、瀬戸焼（四耳壺、瓶子、山茶碗など）がある。これらのほか須恵質、土師質、瓦器など近在の産物と考えられるものである。甕、広口壺、小皿などがあるが時期は明らかではない。調査以前の出土品で那智出土と伝えられる瓦製経筒が報告されている。

なお出土した銘文及び全国での出土例 254 例の検討から、12 世紀と 16 世紀初めという２つのピークがあることが明らかとなった。しかも全国に分布している熊野神社の勧請年代のパターンが経塚と同じ動きと同様な動きを見せるのは、そこに介在している人々の活動と熊野信仰との関係を示唆しているようで、頗る興味深いと結ばれている。

なお、これらの銘文及び全国での出土例 254 例の検討から、12 世紀と 16 世紀初めという２つのピークがあることが明らかとなった。しかも全国に分布している熊野神社の勧請年代のパターンが経塚と同じ動きと同様な動きを見せるのは、そこに介在している人々の活動と熊野信仰との関係を示唆しているようで、頗る興味深いと結ばれている。

(15) 新宮経塚群　　新宮市権現山

新宮経塚は、新宮市千穂ヶ峯を主峰とする権現山にあり、神倉山、庵主池、如法堂経塚群に分かれる。

神倉山１号経塚　コトビキ岩が重なりあって出来た奥行約６ｍ、幅２ｍ、東西に細長い洞窟が第１号経塚である。この経塚は瓦製経筒を主としたもので、板石組み合わせ小石室の痕跡が５カ所に認められたが、これらは土の圧迫と過去幾度かの社地改修工事によって破壊、乱掘されたため、銅製経筒も瓦製経筒もすべて破砕し、著しい量の破片となって発見された。これらの内復元できたのは、陶壺・筒片でわずかに２個、瓦製経筒３個に過ぎない。これに対し青白磁の合子、刀子などの伴出遺物が見られ、これらによって当該地に経塚が造営されていたことがわかる。砕石層からは、銅製

経筒の蓋５点と鉄製経筒の蓋１点が出土しているが、それらの筒部分の破片は認められなかった。

神倉山２号経塚　コトビキ岩北側岩盤の土壌の少ない制約された地域にあり、多種多様な遺物が埋納されていたことから出土状態は複雑を極めた。この経塚は砕石層中に造営された小石室群が主体である。石室の外側は砕石で囲まれ、石室は扁平な割石で組み立てられ板石を天井として覆っていた。石室内からは３個の銅製経筒が出土している。そのほか陶壺に経石が納入されていたものや小砂利に混じて水晶念殊辻玉、青白磁八角合子、火中して折れ曲った和鏡が納入されていたものがある、その他の陶壺には土砂だけが充満していた。須恵器の経壺もあったが、砕石続合わせ石室とともに破壊され下半分は失われていた、この出土地点付近には経石が最も多く散乱しており、あるいはこれらが壺に入れられていたのかもしれない。また蓋として用いられた陶製片口が出土している。瓦製経筒の完形品１点も石室不明ながらほかの経筒に混じて出土している。その他の瓦製経筒はそれらを埋納していた石室とともに破壊状態で確認された。銅製経筒は総数 11 点出土しており、１点を除いて１か所に集中しており、横倒しの状態で板石の間隙から発見された。

在銘の銅製経筒は一括埋納されていた北端に他のものと並んで確認されており、１つは蓋を失っており、他の１つは花傘型の蓋を伴っていた。また完全な箱形石室に収められていたものは、水のたまった筒内に紙本の経巻残欠が６巻納入されており、青白磁合子１点と和鏡１点が出土した。また銅製経筒群と混在して青銅製の笄と鏡面に線刻した熊野三所権現御影を持つ瑞花鶯鴛文鏡も発見されている。なお出土地点、層位も不明な遺物として陶製椀、土師器小皿などの破片多数のほか古銭 68 点などがみられる。さらに上層部の礫石に混じって経石がほぼ全目にわたって散布していた。

神倉山３号経塚　コトビキ岩西側の断崖絶壁の岸上に近い岩盤の間隙を利用して造られた経塚である。石室中央に陶製経筒、筒内には木炭が縦位置に詰められ小型の合子１点が納められていた。蓋上には八花胡州鏡が置かれていた。石室の壁と経筒との間の下部に和鏡１面と瑠璃小玉 30 点、露飾棒１点を納入した壺形合子が置かれ、石室空隙には木炭と木炭末との混合物が充填されていた。また石室の蓋石となっていた２枚の板石の上に刀子４点と合子２点、ほかに和鏡３点、黄釉皿２点が置かれていた。

庵主池第１経塚　この経塚の営造地は、神倉山や如法堂の例と異なり、岩盤そのほかの地勢に制約されない立地にあり、比較的広範な地を占め、平坦な地形が自由に選ばれている。この経塚は大壺を経壺として埋納していた。壺内には土壌が充満しており、遺物は蓋と石室側壁との中間に認められた。六花胡州鏡１面が置かれ、壺肩部付近から刀子１点、さらに反対側から地蔵菩薩泥像の破片、さらに石室蓋石上部から陶椀破片が出土した。

庵主池第２経塚　砕石積みの石室には陶器片で蓋をした経筒が納められ、それに銅製経筒４本が納入され底には壺の高さの３分の１まで木炭が封入されていた。ほかの伴出遺物は、石室と経壺の間隙から白磁合子１点、鉄槍残欠２点、和鏡１枚、土師器深皿１点、さらに反対側から刀子片１点が出土した。なお経筒内底部に紙本経巻が泥状となって確認されている。

庵主池破壊経塚　第一経塚の北約５ｍの地点で、直径 1.5 ｍ、深さ 0.9 ｍの穴を地山に掘り込んで造った割石積み組み合わせ石室の主体部の崩壊したものが発見され、和鏡１面、鉄鈴１点、火打ち鎌５点が遺構底部の木炭土中から出土した。

如法堂第１経塚　石室内の下に納置された経巻は、土中において破損して数片となり、拇指頭大の小礫が破損壺内に充たされていた。また伴出遺物として懸仏１体と普通懸仏の台板につけられる花瓶１点が板石底部から出土した。次に板碑が埋納されていた上部石室は、下部石室の標識としてその石室に付随した遺構かどうかや、上下石室が同時期のものかどうかについては問題が残る。なお下部石室の経壺は鎌倉期の常滑壺であり、板碑についても神倉経塚と比較検討すると鎌倉期とさ

れ、上下両石室は同時築造と推察される。なお懸仏は、年代的に室町期を遡りえないのであることから、混入品の可能性が濃いとされる。

如法堂第２経塚　銅製経筒１本を漸く納めることができる程度に板石を組み合わせて石室に納められた銅製経筒には木炭灰末が混じる土砂で充たされていた。石室底部外側から刀子残欠、石室上方から古銭、さらに遺構から少し離れたところから瑞花鶯鴛文鏡１面が採集されている。

如法堂第３経塚　如法堂址の経塚所在地最東端の急斜面の崖上に築かれた板石を長方形箱型に組み合わせた石室に、ほぼ同じ大きさの銅製経筒２個が納置されていたが、経筒内は土砂のみで遺物は認められなかった。

如法堂第４経塚　第３経塚の北側に営造され，陶製経筒を主体とした簡単な経塚である。しかし経筒底部の朱状物の上には純金円板線刻仏像が納められていた。なお朱状のものは朱書き経文の経紙が水分によって腐食溶解し、沈殿残存したものと思われる。

如法堂第５経塚　経壺２個が第３経塚と同様式で納置された経塚である。経壺の内容物は２個とも土砂のみであった。一方の壺は、破損しており、他方の壺の肩部に刀子２本と青白磁合子１点が見いだされた。石室側壁部と壺の間隙には木炭末が土砂と混合して充満していた。

如法堂第６経塚　第３経塚の上層部に位置し、石室を持つ経塚で陶製経筒が納置されていた。石室の上部に重ねて築かれていた石室内に銅製経筒が納められていた。これは３本の経筒を三重に入り組ませてあり、最も細身の筒を中くらいの太さの筒に入れ、それを最も太身の筒に入れてあった。最細身の筒の中からは紙本の経巻の残欠が塊状となって散見された。

神倉神社境内礫石経塚群　経塚所在地点は幾回も追納が繰り返されたところである関係から他の遺物は勿論仏像類も出土状態は混乱を極めている。礫石経納入経筒は幸い破壊を免れたものである。本経塚の年代は記年銘のある遺物がないため絶対年代は不明であるが、遺構の土層、石室の構造、経壺の推定年代経石の書体など総合的に考えて鎌倉時代を降らぬものと考えられる。経壺は破壊遺構から出たものであるが、付近に経石が大量に散乱していたことから推量して経壺中の経石が壺から出て散乱したものと認められる。また未発掘地域の最上層をなす砂利層の中にも多くの経石の混入が認められることから、この上層部の位置する岩陰にも別に礫石経塚が営まれていたと想像される。ちなみに経石を壺に入れて埋納した経塚の一例として新宮市に寛政九年（1632）銘の埋納碑を伴うもの現存している。

神倉山「中ノ地藏堂址」礫石経塚　神倉神社参道の急勾配をなす石階の中途北側に「中ノ地蔵」堂址と伝えられる約十坪程度の平坦な段地があるが、この上方の急傾斜面に直径１m程度の竪穴を地面に掘り込み経石を埋納した礫石経塚がある。書写経は少量で粒の揃った無地礫石が大量に露出している。内部構造は未調査ため不明である。

庵主池礫石経塚　庵主池経塚遺構から、南側へ約１mの山岳頂から斜面にかけて長さ３m、幅約１m、厚さ約 20㎝の帯状小礫が敷き詰められ、小礫のうちに経石が混じている。内部構造は不明である。さらに第１経塚から北側へ尾根を降った崖上突端部にも直径約１mの竪穴に経石と礫石を埋納した跡があり、ここにも礫石経塚の遺跡を認めるが、内部構造は不明である。

如法堂礫石経塚　如法堂第１経塚出土の経壺の内容物が小礫石のみであった。この小礫石は一字一石経の消滅したものとも考えられるとすれば、神倉山と同形式の礫石経塚とも考えられる。この経塚の上部の表土下に幅１m、長さ３m、深さ約 20㎝のほぼ梯形に近い範囲に、経石混じりの礫石が敷き詰められた礫石経塚があり、その上部の地上に標識として建てられていた江戸期造立の埋経碑が倒伏して台石とともに半ば土に埋もれていた。碑銘によると、10 人の修行僧が逆修善根のため一字一石に書写した法華経を承応３年(1654)に埋納したものであることが知られる。

速玉大社御旅所礫石経塚　御旅所の神田上方の小丘裾部の傾斜地にあり、傾斜面を切り拓き三方を

石垣で築いた壇を造り、それに大量の経石を含む莫大な量の小礫石を円錐状に積み上げたものであった。銅製経筒が埋納されていたが、その一つは円錐形礫石積の上から約 50㎝の深部にあったと思われる。経の書体はほかのものと比較すると全般的に粗末で不揃いなものが多かった。経塚の造営年代は経筒の銘文から推すに江戸時代と考えられる。

速玉大社境内礫石経塚群　大社背後に広がる境内の森林中に造られた礫石経塚群で、新宮地域では最大規模を持つ。地表面にみられるだけでも第１経塚～第３経塚まで記録されている。

うち最大とみられる第１号経塚は、直径 13 m、高さ３mの饅頭形をなし、大量の経石が露出しており、しかも無地の礫石は少量である。頂上部には埋経碑に類する阿弥陀三尊梵字石を安置し、これを取り囲むかのように長大な形の川原石に五大梵字を書写した梵字石２基を２カ所に埋めている。経石としては、長さ８㎝、幅４㎝前後の河原石に 10 字から 20 字を墨書した多字一石経と思われるもの、梵字のみを両面に墨書したものなどが混在している。経石の大きさも大小様々で礫石経塚としては多彩な様相を呈している。かつて台風により倒れた大木を取り除いた際、第１経塚の一辺が露呈し、泥像類が出土したことがある。なお当時の記録では、大形の地蔵菩薩像が礫石上層部に散在して見られ、小型の地蔵菩薩像と化仏泥像とが礫石下層部に集中して出土したとのことである。また前記下層部から藤原期と思われる線刻十一面観音像残欠とその裏面に笹塔婆断片が付着して出土している。

宮井戸礫石経塚　新宮市阿美神社の前方、旧宮戸神社の岩山頂上部に造営されたもので、岩盤の一部に梵字が刻まれている。頂上の小台地は荒廃著しく､経石は散乱して経塚の旧状は窺い知れない。なお宮戸神社と速玉大社までの距離は西北約２㎞である。

経筒、経壺は、銅製、鉄製、陶質、瓦質と材質によっても分類される。またそれらの蓋および身の残欠を合わせると総数 350 点を数える。銅製経筒はすべて無節円筒式である。銅製経筒の完形品は 19 点で、製作手法としては鋳造のものと銅板製のものとがあり、鋳銅製が 13 点、鍍金・鍍銀の痕跡を求めるものや鋳放しのものなどが混在している。蓋には宝珠つまみ付き被蓋のものが多く、鋳造のものと銅板製のものとがあり、銅経筒の蓋のみが 24 点出土している。それに見合う経筒部分が見いだせない点は、那智山経塚の状況とも共通する。記年銘を有する経筒は２点である。すなわち「建治元年乙亥十一月九日、信濃国井上源氏の女」が如法経８巻を埋納供養したものであり、他のものは筒身に「弘安二年辛巳二月八日」とある。これら２点の絶対年代の明らかな経筒の型式からほかの経筒の年代を推定すると、藤原時代様式とみられるものが 10 点、鎌倉時代様式が９点となる。また経筒の蓋残欠について見ると総数 20 数点あり、青銅製 14 点（打ち出し９点、鋳造５点）である。ただし鉄製が２点（鋳造）含まれている。つまみは宝珠 11 点、乳首形１点、無しが２点である。直径は６～９㎝で比較的大型品が多いとされている。

鉄製経筒は、神倉山経塚から蓋が２点、如法堂跡経塚から１点出土している。すべて鉄鋳造製で、直径約８㎝前後のものである。

石製経筒では蓋残欠のみで筒は失われている。花崗岩製で外筒の蓋とみられる。その型式は、つまみ付き外蓋式で内側は抉り取りとなっている。石製経筒は一般に銅製経筒の外容器として使用されたものである。

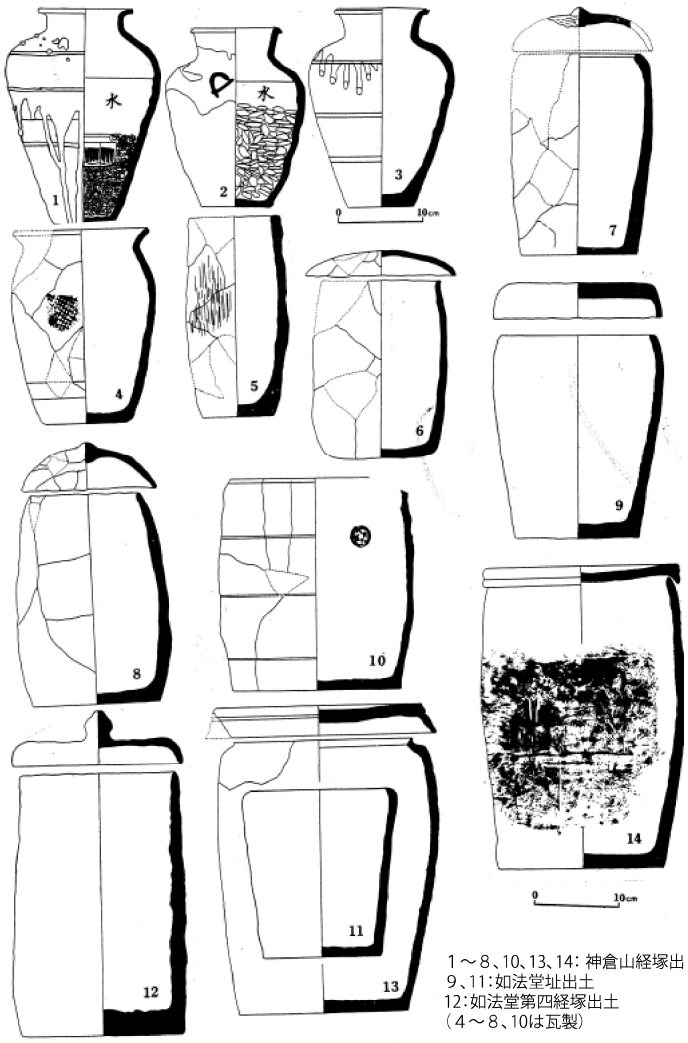
陶製経筒は一般的には銅製経筒の外容器としてされて出土するが、神倉山第３経塚及び如法堂第４経塚に見られるごとく経巻を直接納入したものが多いようである。当該経筒はその破損品とともに 26 点出土している。製作手法はすべて輪積みでろくろ成形を行っている。須恵器と同様焼成良好堅緻で、灰白色を呈する。これらのうちには器面に山水画を陰刻した山水文経筒とも称すべきものが１点出土している。陶製経筒が銅製経筒に先行するように思えるとも記述されている。瓦製経筒は、粗製と精製の二者があり、破損品とともに

総数11点みられる。精製品は少なく、１点のみである。那智山第３経塚ではこれと同形式の経筒の蓋のみの出土例が報告されている。器形については壺型と円筒形があり、筒身に三段の刻文を引いたものと平安時代以降の河原に見られる格子状叩き、縄目叩きを施したものが見られ、まったく瓦製の手法が用いられている。

陶製経壺の出土量は24点で、陶製経筒に比較してはるかに多い。形状から大型品と小型品に分かれるが、小型品は８点あり、遺構との関連が明らかなものは５点で、いずれも長年の間にたまった水が充満しており、経巻納入の痕跡は見られず、経石とみられる礫扁平な小礫石を納入していたものが多いようである。大型品には壺口縁部から推すところ経甕とでも表現するのが適切なものもある。なお経壺について見れば，庵主池第２経塚で見るように内側に４本の経筒が納入されており、明らかに陶製の外容器として使用された例である。また庵主池第１経塚、如法堂第１経塚の出土例は礫石経の納入容器として使用された例であろう。

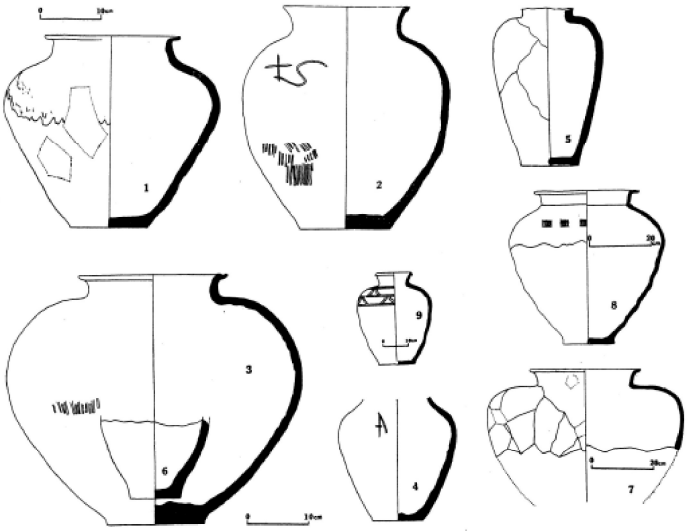
経筥類は、如法堂経塚から木製経筥の付属金具の残欠らしきものが数点出土している。しかしこの破片のみからは原型を窺い知ることは困難である。かつその出土状況も明らかではない。したがって経筥が当該経塚に埋納されていたかどうかは不明である。

経巻類、当経塚で経筒内から紙本経巻が完形状態で出土したものは見られなかった。神倉山第２経塚出土銅経筒内に紙本経巻が腐朽固結して、いわゆるローソク経となったものが６巻残存していた。そのうちの１点のみが割箸状の軸木にまかれた原型をとどめている。他の５本も軸木に巻かれていた形跡は認められる。その他如法堂第６経塚出土の３本組み合わせになった銅経筒内に腐朽固結した残塊が３点残存していたが、当例では軸木に巻かれていたかどうかは不明である。経巻軸



1～8、10、13、14：神倉山経塚出
9、11：如法堂址出土
12：如法堂第四経塚出土
（4～8、10は瓦製）

第11図　新宮経塚群出土遺物実測図（陶製経壺及び陶製経筒）



1、4、5、6、7：神倉山経塚群出土　2：庵主池第一経塚出土
8：庵主池第一経塚　3：如法堂第一経塚出土
9：如法堂第五経塚出土

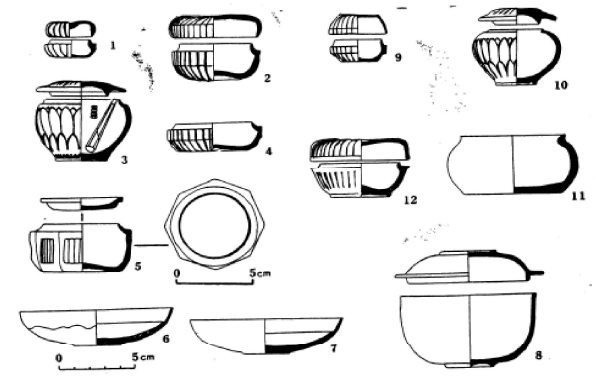
第12図　新宮経塚群出土遺物実測図（陶製経壺）

金具の残欠とみられるものが１点検出されたが、これは唯一の出土例である。

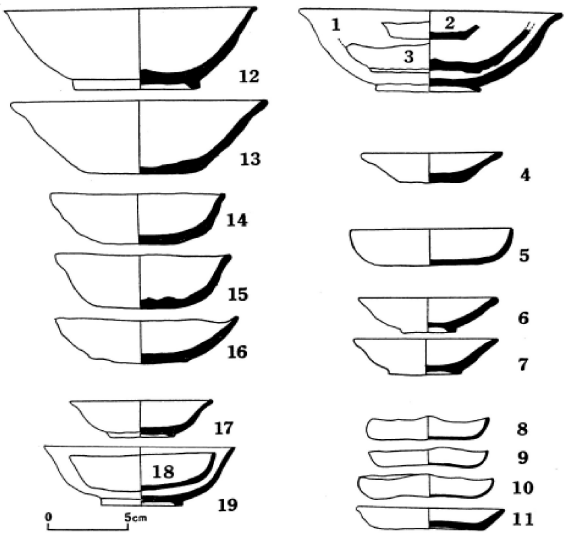
経石類は、当経塚群には必ず礫石経塚を伴うのが通例である。したがってその経石は経塚所在地点の地表に無数に散在し、それらがどの遺構に埋納されていたものか現状では明らかにしえない。経石の大きさも様々で、墨書の書体も大きさも種々様々なものがある。

青白磁合子とその他の合子類については、経塚奉賽具として埋納された青白磁のほとんどは中国宋時代の製品とされているが、当経塚出土の合子も同じく宋代景徳鎮製品とされている。出土数は破片共で、15 点である。うち４点は神倉山第３経塚から出土したもので、全経塚完存遺構からの出土数量中最大である。青白磁合子の形態は平型品 13 点、壺形品２点で前者が圧倒的多い。またこれらの蓋には美麗な菊花文・草花文、唐草文が浮き彫りされている。神倉山第２号経塚では、八角形合子が出土している。これは中蓋・外蓋付式であるが、外蓋は失われている。器の底部には判読不可能な墨書が認められる。この合子は、陶経壺に納められていたものである。庵主池第２経塚から土師器深皿が１点だけ青白磁合子と伴出している。その他の青磁器では高麗青磁蓋物、青磁埦破片と黄釉皿などがある。

鏡鑑類は、当経塚からは、和鏡９面、唐式鏡２面、胡州鑑２面の合計 13 面出土している。鎌倉期の鏡１面のほかはいずれも藤原期のもので、形態については円鏡、八花鏡、六花鏡、稜鏡, 多度鏡などに分類できるが、通例藤原時代に盛行した花鳥文の和鏡が最も多く出土している。鎌倉期の鏡面には、仏像（竜樹菩薩像）を線刻しその鏡背に「平久守」と墨書し、鏡背外区に二孔を穿った亀甲地双雀があり、庵主池経塚の仏像類が集中出土した地点と同一の傾斜面から出土した。神倉山第２号経塚出土唐式鏡は、熊野三所権現本地仏像が鏡面に

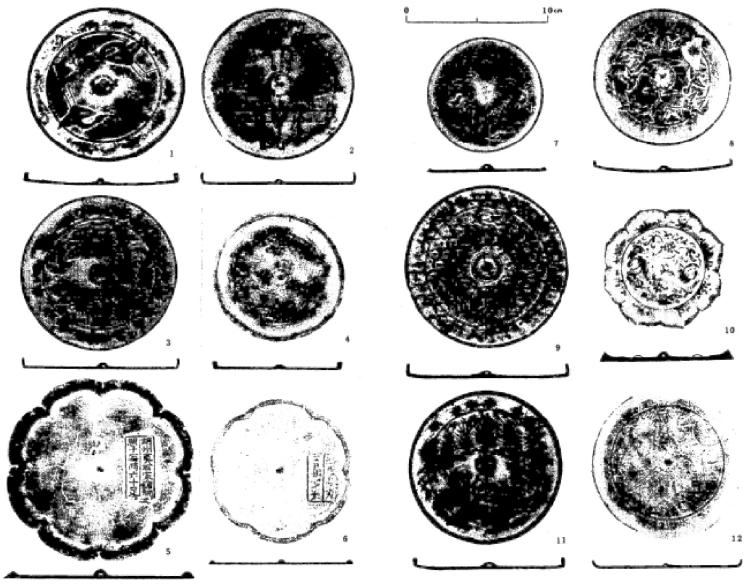


１～８：神倉山経塚出土 ９～11：庵主池経塚出土 12：如法堂経塚出土



１～11：神倉山経塚群出土 12～16：庵主池経塚出土 17～19：如法堂経塚出土
８～11：手捏製土器

第 13 図　新宮経塚群出土遺物実測図（土器・陶磁器類）



１～５、７、８：神倉山経塚出土　６、９、11、12：庵主池経塚出土
10：如法堂址出土

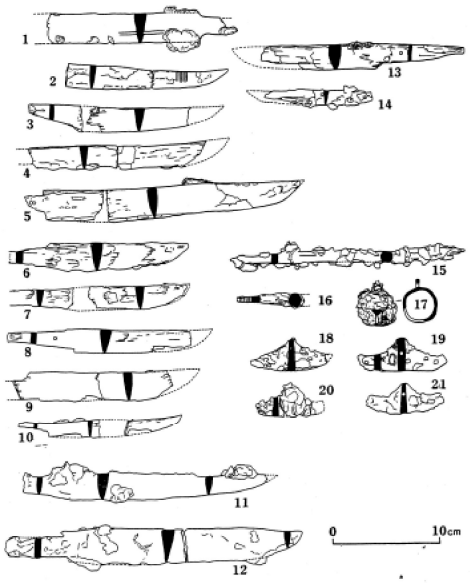
第 14 図　新宮経塚群出土遺物拓影（鏡鑑類）

線刻されているが数片に破損している。

胡州鏡２面のうち神倉山第３経塚出土の八花鏡は経筒の上に載せてあったもので、恰も経巻を鎮めるといった感じが現れており、古来の鏡の功徳によって経巻を悪魔から守るという信仰を見たようで興味深い。庵主池第１号経塚出土の１面は、厚手の和紙残欠が鏡面に附着していた。これと同様の例は、粉河町経塚などでみられる。

刀子類では、 残片を含めて 20 数点出土しているが、その原型を窺えるものはわずかである。神倉山第３号経塚出土刀子は、広いもので刃幅 3.3cm、他のものは２cm であり、背幅は最大のもので１cm、最小のもので 0.5cm であり、通じて細身の直刀式刀子である。茎は、全部を通じて短くその断面は梯形である。刀の先に纏糸の痕跡が認められたが、その他のものには蛸茎拵え痕跡は全く認められなかった。

神倉山第２経塚出土の鎌倉期経筒と伴出した刀子にも前項刀子と共通性のある特徴見られる。しかし直接に刀子の年代を推定するのは困難である。如法堂第５経塚出土刀子は２本とも錆化が著しい。刀身長さ、は、刀茎の長さ４倍５倍あり、太身と細身の二種類あり、細身ものにはやや反りが見られる。藤原期経筒が出土した如法堂第２経塚出土刀子残欠は、刀身に樋が作られている。



１:如法堂経塚所在地出土 ２～５:神倉山第３経塚出土 ６、７:神倉山第２経塚出土 ８:庵主池経塚出土 ９、10:神倉山第２経塚出土 13、14:神倉山第１経塚出土 15～21:庵主池経塚出土

第 15 図　新宮経塚群出土遺物実測図（４）

鉄槍は、庵主池第２号経塚から２本の鉄槍身残欠が出土した。これは那智山経塚出土例に酷似する外形を持つ。とくに身部断面円形、茎部断面が、稍梯形に近いという２点が那智例と相似する。和歌山県内では、旧日高郡龍神村の東経塚出土例が知られる。

火打ち鎌は、庵主池第３経塚から５点出土している。形状は二等辺三角形の両辺を少し曲げあげた形をなし、三角形の頂部には紐通しのため一孔を穿つ。高さ３cm、長さは８cm 内外で、残欠１点を除いて４点は、わずかながら形式差が認められる。

古銭は神倉山第１経塚と第２経塚から 92 点出土している。如法堂経塚では５点、庵主池経塚からは「天開元宝」１点が出土している。神倉山第３経塚所在地点と庵主池第２経塚所在地点では全く確認されていない。神倉山第２経塚からは「朝鮮通宝」２点が出土している。そのほか青銅笄、鉄鈴などが出土している。

当経塚出土の陶製片口は，復元し得たもの２点の他に３点分の破片が出土している。口縁部には、注口部を作り出し、高い高台を伴う。この片口は実用品が大形経壺の蓋として転用されたものであろう。当経塚では藤原期ないしは鎌倉期の経壺に伴っている。

陶製椀としては、大型椀山茶碗と呼ばれている須恵質の大形椀がある。精製品と粗製品とがあるが、前者のほうが多い。口縁部が外曲したものが多く、稀に内曲した平底の精製品も見られる。

小型皿は、大体の器形はは大型椀と同様であるが、精製と粗製の区別は認められない。一部に釉薬の施されたものがある。また高台のない、糸切底のもの、糸切目の上に簡素な高台を付したものなどがある。なお小型品は、大型品に比較して出土量は少ない。

土師質皿類は、神倉山経塚群所在地の上・下層を通じて攪乱状態で出土している。いわゆる燈明皿と称される形状で、口縁から大きく内曲させた手づくねの小型皿で、色調は黒褐色ないしは灰褐

を呈し、薄手で脆弱なものが大半である。したがって破損品が多く完形品は極めて少ない。この他にレンガ色を呈する赤色土師質椀破片および灰白色で、厚手の手づくね製浅皿も出土している。

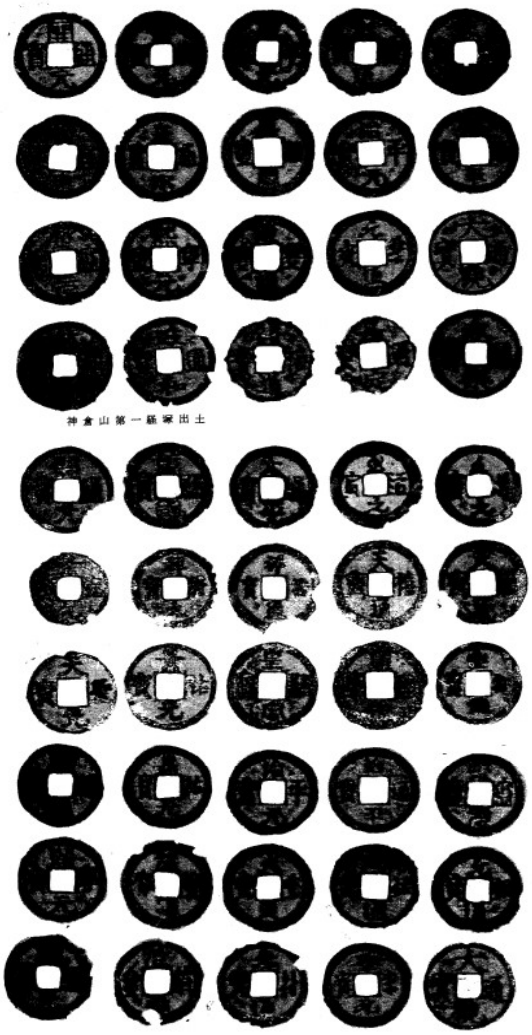
また、神倉山「コトビキ岩」の岩陰から20数片の銅鐸片が出土している。現在のところコトビキ岩の岩陰に埋められていたものが、最初の経塚造営で掘り出され細片化したものが偶然経塚遺構内に紛れ込んだものと考えられている。

以上のほか、玉類、仏教関係遺物などの記述がある。さらにまとめとして経塚の造営年代に関する雑考、仏像類に関する考察がみられる。

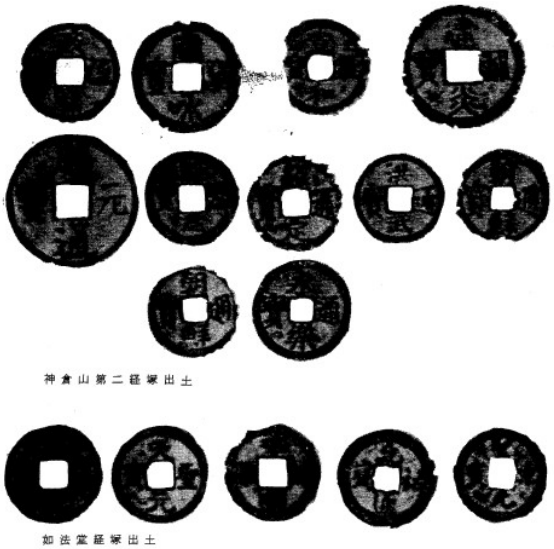
(16) 高野山奥之院遺跡　　伊都郡高野町高野山

昭和40年（1965）は弘法大師開創1150年に当たり、その記念事業として御廟前の灯籠堂改築と御廟の端垣修理・植樹が行われた。この時多数の遺物が出土したので調査委員会によって調査が行われた。

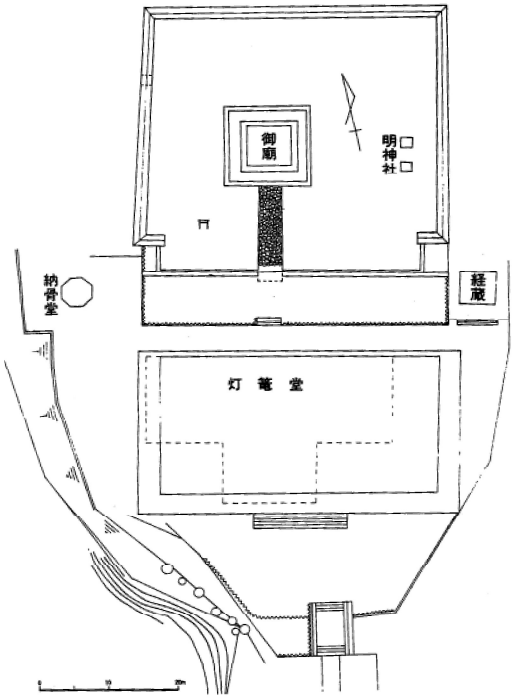
灯籠堂地区　昭和37年（1962）6月、に新灯籠堂の基礎工事中に多数の納骨器と一石五輪塔などが出土した。しかし工事を急いだためか、工事完了後になってようやく散乱した遺物を収集し、層



第16図　新宮経塚群出土古銭拓影（1）



第17図　新宮経塚群出土古銭拓影（2）



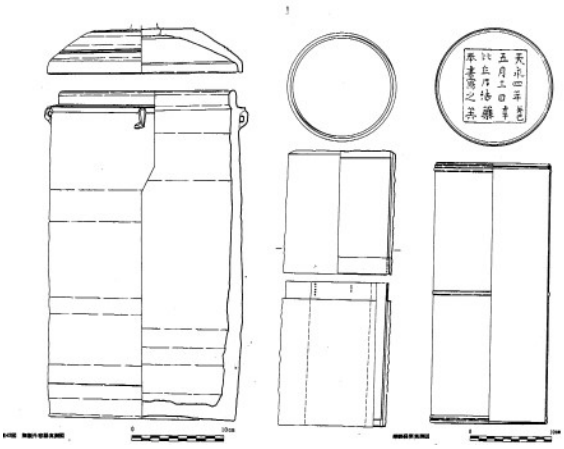
第18図　高野山奥の院平面図

層位を一部確認する程度に終わったのは残念であった。出土遺物は陶磁製納骨器があり、国産では瀬戸窯（灰釉三耳壺、仏花瓶、小壺、茶入れ、水滴など）、常滑窯（灰釉四耳壺）、土師器（正中三年蓋付小壺、燈明皿）、瓦質小壺など、中国製陶磁では南宋白磁四耳壺、水注、北宋の青白磁合子、皿などがある。金属製納骨器には、筒形納骨器、同小型形納骨器、同蓮弁形納骨器があり、他に竹製納骨器が出土している。

御廟内地区　奥之院御廟は、空海入定の地として弘法大師信仰の中心であり、禁足の霊地でもある。このため遺物の出土状態は不明であるが、御廟内の表土下で集中的に発見された。ここでは多数の納骨器と共に経筒も出土した。

出土遺物のうち国産陶器では瀬戸窯（灰釉三耳壺、同四耳壺、卯花文壺など）、常滑窯（三筋壺）、渥美窯（広口壺）、須恵質（甕）、十瓶山窯（広口壺）、瓦製（筒形容器、小壺）中国製陶磁器では、北宋から南宋時代のもので青白磁合子残欠多数のほか、青磁有蓋鉢、花瓶、水注、瓶子、白磁四耳壺、褐釉瓶子、四耳壺、天目茶碗残欠など、金属製納骨器では正応５年（1292）在銘銅製納骨器をはじめ、多くの青銅製筒形納骨器、鉄製納骨器、和鏡、宋銭など、又金銅仏の胎内と五輪塔の一部に穴を穿って納骨用としたものもあった。

天永４年（1113）在銘経筒は御廟の端垣に近い地下１ｍで偶然発見された。陶質の外容器は筒形で上端に小孔がある三耳を付け、印篭形の蓋がついていた。その裏面には「諸行無常是生滅法々己寂滅為楽永久二年甲午九月十日壬午奉埋之尼法楽」の墨書銘がある。またその外容器内に円筒形土製経筒がおさめられ、筒の上には方形の枠内に「天永四年芡巳五月三日壬午比丘尼法薬奉書写之矣。」と銘文が陽鋳されている。経筒内に円筒形桧材の漆塗容器があってこの容器の底に経巻 11 巻、供養目録、法楽願文を経秩で包納して組紐で結び、さらに麻紙で包んで納入されている。このように内容はきわめて豊富で、保存の良好な資料は，わが国経塚遺物の中でも特に優れたものといえる。



第 19 図　高野山奥の院出土遺物実測図

なお、法薬願文の末尾には、「為期弥勒慈尊出世之時殊占弘法大師入定之地而己仰願慈尊兼憐懲期願伏請大師常護持斯経必按其三会之席（中略）永久二年三月十五日比丘尼法薬敬白」とある。この法薬尼は、曼荼羅裏面の墨書銘から永承七年（1052）に生まれ、埋経が行われた永久二年（1114）には 63 歳であったことが知られる。

以上が遺跡・遺物の概要であるが、御廟内では平安時代末に埋経と納骨が同じ場所で営まれている点に注目したい。納骨が中心で、御廟周辺では平安時代末から鎌倉時代のものが多く、納骨容器も中国宋代の舶載陶磁器や鎌倉時代の瀬戸窯などで、当時としては貴重な容器を使用していた。また、経筒と同系の銅製筒形容器を使用するのに対して、御廟前方の灯篭堂敷地内の出土のものは、一部御廟内と同じ遺物を含んでいるが、瀬戸窯でも小型の各種容器を利用し、銅製筒形容器なども小型のものが多い。地下の純骨層から考えて、高野聖によって諸国から集められたもの、あるいは個人で納骨されたものを一括埋納したのであろう。時代も鎌倉時代から江戸時代初期までに及んでおり、高野聖の回国、納骨活動と中世庶民信仰を知る資料といえよう。

ここでは高野山を弥勒浄土とする信仰があり、経塚が営まれたのである。しかし一方では高野山を極楽浄土とする信仰もあって、これは鎌倉時代以降、多くの念仏聖によって盛んに回国唱導され、高野山奥の院は、念仏と納骨を中心とする聖地と

なって今日に至っている。奥の院遺跡にみられる納骨用容器、経塚遺物がきわめて類似している点については今後両者の関係が究明されなければならない。

御廟は小馬蹄形の台地上に営まれているが、昭和52年（1977）には御廟台地東側の低地から、昭和53年（1978）には東側前方部にある石田三成奉納の経蔵礎石の下から、南宋白磁壺、瀬戸、備前、渥美窯系の納骨壺などが検出された。

(17) 小峯寺遺跡　　橋本市境原

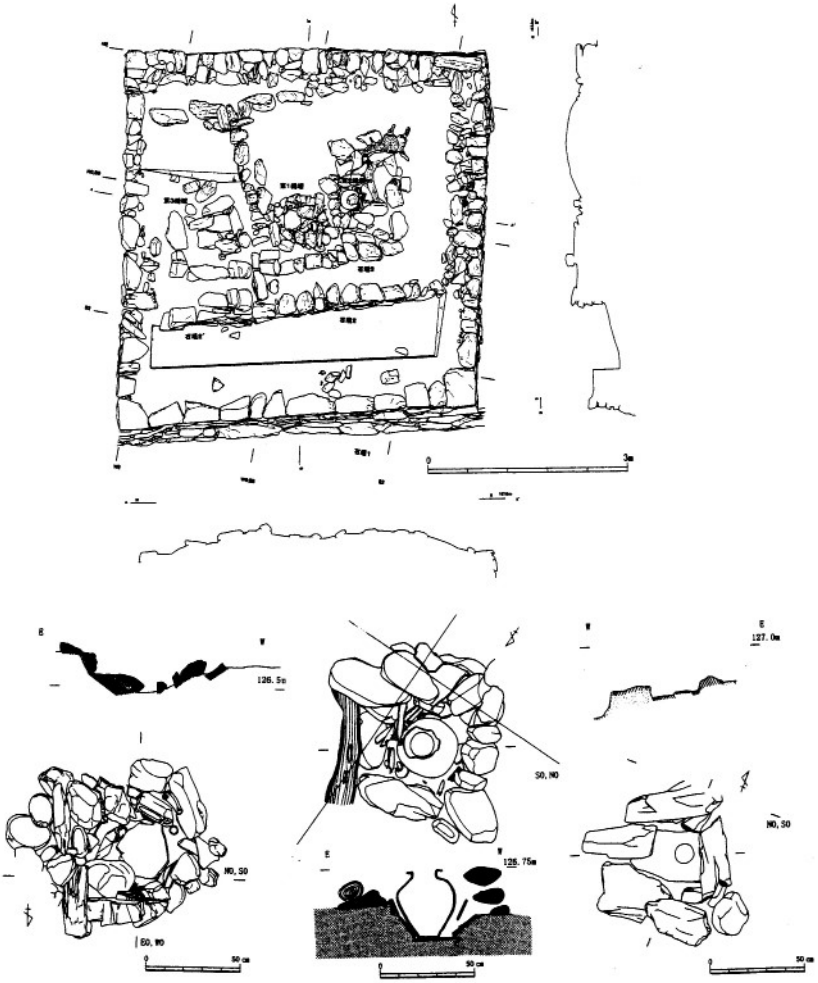
小峯寺は、橋本市立境原小学校の南西約400 m、標高約210 mの山頂にある。役行者を開基とする白凰３年（675）の創建と伝え、当初は修験道の寺院であった。本堂、薬師堂、鐘楼、行者堂、護摩堂、庫裡などの建物があり、そのほか室町期とみられる宝篋印塔２基、十三重塔１基、一石五輪塔７基などがある。現在真言宗御室派の寺院である。

昭和47年（1972）に住宅開発計画に伴い和歌山県教育委員会が緊急調査を実施した。古い建物は確認されなかったが、本堂の北第一トレンチから腐蝕土直下から一字一石経が約30点出土した。これが、直径２～３㎝の礫石に一字ないし複数の文字を墨書したもので「佛」「何」「仆」「彼斥」「功徳」「阿誌」「徐蚫蝮」などと書かれている。これらは庶民生活の安寧や幸福を祈る気持ちが込められている。この経塚はすでに破壊されており、他の伴納品は発見されなかった。

(18) 隅田八幡神社経塚
橋本市隅田町垂井

平成９年（1997）度の隅田八幡宮正遷宮に伴って境内整備事業が行われた際、多くを破損した経筒１点（経筒１）が偶然発見された。その報を受けて、和歌山県教育委員会と連絡を取るとともに関係者間で対応を協議し、まずは緊急調査により記録保存を図った。しかし複数の経塚の存在が明らかとなり、さらに１基が良好な保存状態を保っていたことなどから、緊急調査では対応しきれなくなったため、平成10年度（1998）において本調査を実施することとなり、本調査は平成10年（1998）10月12日から実施した。

経塚発見に至る前は、一辺５m余の正方形に近近い四角形に石垣で台地が造り出され、南側正面の一部を除いて周囲の石垣上に土塀がめぐらされ、その地山は塚状に盛り上げられていた。塚中央の頂上には「元中第二乙丑（1385）五月　日」銘のある宝筐院塔が立つ。経塚の周囲をめぐる石垣の南側は神社本殿と背後の微高地を区画する東西の石垣と共有し、その石垣上には本社が並ぶ。さらに、その背後には社叢がひろがっている。



第20図　橋本市隅田八幡神社経塚 遺構実測図

最終的にこの経塚は少なくとも４つの画期があったと考えられる。

第１期　当地に経塚の築造された平安時代末期で第二経塚出土の常滑焼甕、銅鏡等多くの遺物によって裏付けられる。当地域の在地文書である『隅田文書』（和歌山県指定文化財）にもこのころからあらわれる。

第２期　瓦器の用いられる 13 世紀（鎌倉時代）で、弘安 10 年（1287）からしばしば法華経供養の行事が行われたことがうかがえる（『隅田文書』）。第２経塚上半の石組の間から瓦器片が出土しており、手が加わったことが推察される。第２経塚が中心となる 10 尺四方の石組（石垣２）はこの時期の築造と考えられる。

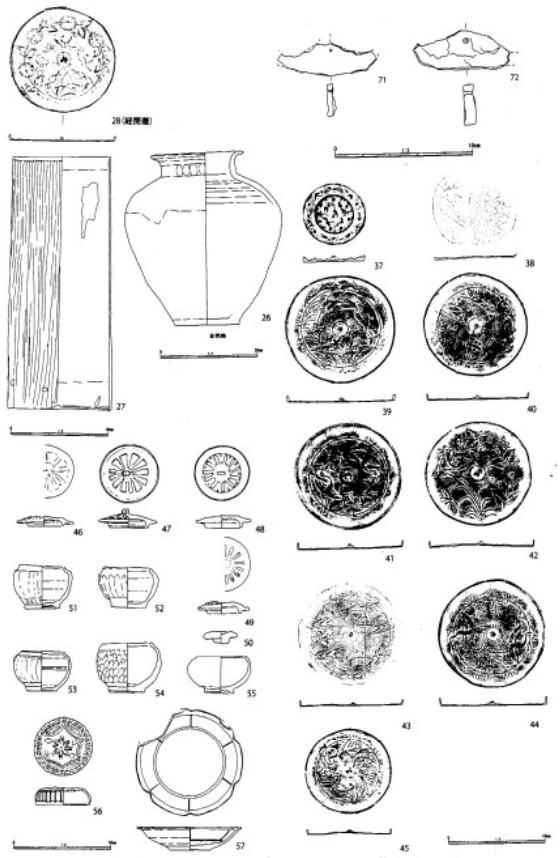
第３期　第１経塚の外容器とみられる備前焼甕の時期である。南北朝時代～室町時代前期で、経塚上の宝篋印塔正中２年（1385）がこの時期にあたる。この時期は第１経塚の中央に位置する形となる。また第３経塚が設けられたのもこの時期と推察される。このとき石垣３が築かれ、３つの経塚が並んだ壇が造られたものとみられる。

第４期　周囲をめぐる石垣（石垣１）の下に江戸時代末期のものとみられる瓦片が入っており、江戸時代に最後の外周石垣が築造され、現在の形となった。

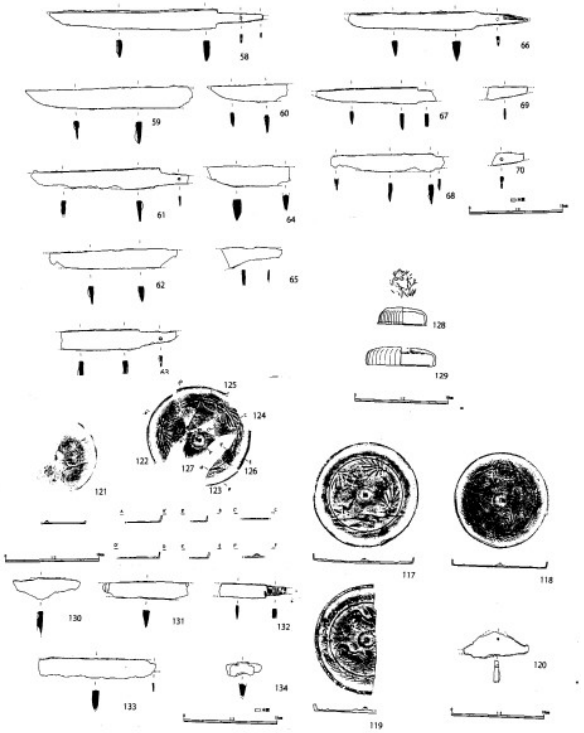
このように隅田八幡神社経塚は、平安時代末期の経塚であることが判明し、当時の遺物がまとまった形で出土した。またそれぞれの遺構が明らかになるとともに、経塚そのものの調査例は極めて稀で、本調査で得た資料は非常に貴重なものといえよう。

以上のほか和歌山県には次のごとくの経塚が知られている。

①木の本経塚（和歌山市木ノ本）②柏経塚（日高郡日高町柏）③吉原経塚（日高郡美浜町吉原）④小山経塚（日高郡川辺町平川）⑤平ノ壇経塚（日高郡美山村猪ノ谷）⑥上山路経塚（日高郡龍神村上山路東）⑦古屋経塚（日高郡印南町古屋）⑧古井経塚（日高郡印南町古屋）⑨西岩代経塚（日高郡南部町岩代）⑩熊岡経塚（日高郡南部川村熊岡）



第 21 図　橋本市隅田八幡神社経塚 遺物実測図・ 拓本（経壺・経筒・陶磁器・鏡鑑類）



第 22 図　橋本市隅田八幡神社経塚 遺物実測図・ 拓本（刀子・陶磁器・鏡鑑類）

⑪松ケ谷経塚（田辺市松ケ谷）⑫飯盛山経塚（西牟婁郡中辺路町栗栖川）⑬静川経塚（東牟婁郡本宮町静川）

２．むすびにかえて

以上、和歌山における経塚について、報告されている内容を紹介・記述してきた。これらからわかる当該地域における経塚は、熊野三山、および高野山地区での営造例は、すべての経塚の典型的な例が確認される。那智山地域においては 200 例を超える経筒の出土がある。しかしそれ以外の地域での営造例は多くはないといえる。すなわちこれらの地区とりわけ熊野三山地域に集中して営造されているということになる。

ところでわが国にはいかほどの経塚が構築されてきたのだろうか。関秀夫 1984『経塚地名総覧』によると、北海道から鹿児島県に至る各地に経塚が分布しており、その遺跡分布量は 1005 カ所を超える。時期的には平安時代末期から江戸時代まで多種多様である。

いずれにせよ熊野神社は全国にネットワークを巡らせており、その中全国を回遊して経塚誘致に活動する熊野聖あるいは旦那の活動があった。高野山についても高野聖の活動があり、彼らが全国を回遊して納骨や経塚営造を勧進した成果が現在和歌山に残されている納骨遺跡であり、経塚遺跡の一つであるといえよう。

【参考文献】

石田茂作 1928「那智発掘仏教遺物の研究」『帝室博物館学報』第５　東京国立博物館

石田茂作ほか 1975「高野山奥之院の地宝」『和歌山県文化財学術調査報告書』第 6 冊

伊勢田進 1958「闘鶏神社の仮庵山経塚遺跡」『田辺文化財』２

伊勢田進 1974「高尾山経塚群」『田辺の指定文化財』１　田辺市教育委員会

上野　元 1958「熊野新宮地域の経塚」『熊野誌』１

大岡康之 1990『平成 10 年度　隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会

大場磐雄 1970『那智経塚―その発掘と出土品』熊野那智大社

大岡康之 1990『平成 10 年度　隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会

大場磐雄 1970『那智経塚―その発掘と出土品』熊野那智大社

羯磨正信・吉田宜夫 1973「南海電鉄橋本地区住宅開発計画区域内文化財調査概要」和歌山県教育委員会

黒石哲夫 1990『東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査概報』和歌山県教育委員会

阪田宗彦 2002「東京国立博物館収蔵熊野本宮経塚出土品が語るもの」『大谷女子大学博物館調査報告書』第 46 冊

佐々木彩乃ほか 2023『隅田八幡神社経塚発掘調査報告書』橋本市教育委員会

巽　三郎 1957「新宮神倉山経塚発掘調査報告」『考古学雑誌』42-4

巽三郎・上野元 1968『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館

巽　三郎ほか 1953　『願成寺発掘調査報告』　願成寺

東京国立博物館 1985『那智経塚遺宝』東京国立博物館

中村　浩ほか 2002「「熊野本宮備埼経塚群発掘調査報告書」『大谷女子大学博物館調査報告書』第 46 冊

中村　浩 2022「熊野本宮備崎経塚について」「紀伊風土記の丘研究紀要」第９号　和歌山県立紀伊風土記の丘

橋本観吉・菅原正明・林義彦・大河内智之・浜岸宏一 2012『闘鶏神社学術調査報告書』闘鶏神社学術調査委員会

山本義孝 2006「修験道」『鎌倉時代の考古学』高志書院

和歌山県立博物館 2007『熊野本宮大社と熊野古道』和歌山県立博物館

＜論考＞

御坊市阪東丘2号墳の研究
－紀伊風土記の丘館所蔵資料と巽三郎収集資料から－

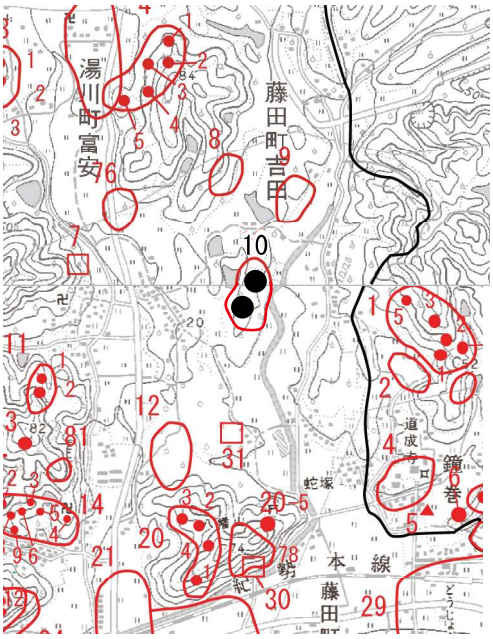
田中元浩・佐藤純一・濵﨑範子・横臼彩江

はじめに

御坊市藤田町吉田に存在する阪東丘２号墳は、道成寺北西の阪東丘と呼ばれる小丘陵上に立地する（第１図）。昭和 27 年（1952）５月 19 日、果樹園の開墾に伴い埋葬施設が発見された。その後の巽三郎氏による発見者への聞き取りによって、埋葬施設の状況が復元され、「内部主体副葬品出土図」（以下、「御坊市史掲載図」とする。）として『御坊市史』（巽 1981）に掲載されている。

阪東丘２号墳は不時発見ではあるが、同じ丘陵上で発見された阪東丘１号墳とともに和歌山県内では数少ない未盗掘古墳の一つであり、銅鏡出土古墳でもある。このため副葬品の組成が明確であり、古墳時代中期の紀伊半島の古墳築造動向を考えるうえで重要である。

現在、出土遺物は、和歌山県立紀伊風土記の丘（以下、「当館」とする。）及び和歌山県教育委員会（以下､「県教委」とする。）に所蔵されている。さらに、御坊市教育委員会（以下、「市教委」とする。）にも所蔵資料が存在しており、出土遺物とともに発見時の聞き取りを基にした未公表の巽氏作成原稿が存在する。



第１図　阪東丘古墳群（10）位置図（S=1/25,000）
阪東丘１号墳、阪東丘２号墳の位置関係は不明

これらについては正式な報告が刊行されておらず、実測図等については御坊市史掲載図のみであるため、出土状況や遺物の検討については十分になされていない。そこで、本稿では阪東丘２号墳の未公表の巽氏作成原稿と出土遺物の図化資料を公開し、紀中地域の中期古墳について新たな知見を提供することにしたい。　（田中）

１．発見時の状況

阪東丘２号墳の発見時の状況について、巽氏作成原稿を掲載する。そして、報告内容及び未公開写真、巽氏作成原図にもとづき、副葬品の配置及び埋葬施設の構造について報告する。

紀伊国藤田村阪東丘第２号墳に就いて

巽　三郎

日高郡藤田村北吉田小字阪東丘[1] 古墳について

１）序

昭和 27 年５月 19 日湯河村大字小松原〇氏[2] が阪東丘の所有畑に笹根の侵入[3] はなはだしきため、土を深く掘かえしたところ地下約 150 ㎝より祝部土器把手附埦、鏡、勾玉、小玉、刀剣、鉄鏃等を出土す。発掘者〇氏の厚意により出土地点の実測、出土状態の復原、遺物の実測等をなしえたので、この際にその概略を報告し先学諸氏のご教示をお願いしたい。

２）阪東丘古墳の位置

安珍清姫で名高い南紀名刹道成寺の参道を石段下で左に折れ、右に蛇塚を眺めて暫く田ぼ道を行くと富安川に達す。川に沿って上富安へ径を約２丁程登ると右手に阪東丘と呼ばれる海抜 15m の独立した台地がある。現在は台地は開墾されて畑と

なっているが、往時は相当数の古墳が台地上に営まれてあったらしく、現在でも畑表面中に無数の須恵器破片を採集し得る。阪東丘における古墳の発掘はこれにて2回目であって第１回は明治７年にやはり阪東丘エナガ原開墾中〇氏が刀剣、槍、鏡、銅釧、勾玉、小玉、鏃等を発掘し出土物は全部現東京国立博物館に採納せられている。しかし出土地点に関しては明治７年のひさしき過去のことにて発掘者もすでに故人となられた現代ではその地を明示し得る人はいないが、ただ今回出土地と同一畑中にありたるは確実である。

３）他遺跡との関係

阪東丘は現在は独立した台地のごとき観あるも往時は上富安向山が南に延びて阪東丘にて一応台地状を留めていたものと思われ、これが開墾治水によって独立丘となったものと思われる、現在坂東丘の東側の富安川に接して松林の少し残れる地がありこの地になお二、三の古墳（底径４ｍ、高さ２ｍ）と思われるものが残存し、この北端の墓地より20年程前土地の人が開墾中地下２尺の所より小型の横穴式古墳を多数発見した記録がある。はるか西方の亀山丘陵には亀山古墳群、北西に向山古墳群、北方は上富安古墳群、東方丘陵上には箱谷艾谷古墳群、南方は八幡山古墳群があって四方はすべて古墳群によって囲まれている。筆者の調査範囲では北方の古墳群のほとんどは後期古墳であった。阪東丘は上代集落立地として好適の台地であったと考えられる（第　図参照）。

４）出土状況

当日高地方において発見されたる古墳はほとんど開墾その他諸工事等に際して偶然に発見されたものが多いことは先述したとおりであるが、今回の出土は幸いに発掘直後であり、出土現場は出土当時そのままに残され、〇氏は諸所の開墾作業中に今まではかような遺物を掘り当てたことしばしばあり自然とこの種の遺物については少なからず興味をもっておられたので出土状況もその大枠を知ることができたのである。

阪東丘の表土は平均60㎝にして、赤色礫石を混じた地山に達する処が多くエナガ原表土も45㎝で地山になる。出土地の地層の断面（＊本文第２図）より推定するに副葬品出土地点の南北約230㎝中心部高さ120㎝の部分以外の地層は地山で自然のままの地層をなしているにかかわらず出土地の部分の地層は明瞭に他の部分と区別しうる。これは多分人工的に土を動かしたものと思われる。すなわちこの古墳の主体部はうしなわれ、わずかに未耕のままに残された部分が遺存するにすぎない。なお封土の上方に河原石が一列にならべているのは多分古墳築造の際、封土築造中平らにして一度葺石を行い更にその上に封土をもったものと考えられるが底部に河原石の少ないのはいかなる理由によるものか不明なり。

５）副葬品出土状況

遺物の配列状態は記憶新たな〇氏の復原はといいながら、相互の距離は勿論正確とはいえないが、出土当時と大差なき程度の復元図を作成することができた（＊本文第２図）。まず北端に把手付小坩が口縁をやや北東に斜けて置かれ、この中に硝子製勾玉を４個、鉄腐片３、硝子小玉、コハク小玉４個を納め。約40㎝南に鏡を中心にメノウ勾玉５個を放射状に配して置かれてあり、さらに95㎝南の方に直刀２、剣１が身を南北に並列し無数の鏃が乱雑に刀剣を取囲むような状態にて発見されたものである。而して坩鏡刀剣の遺物は大体一直線上にあり遺物の両端の距離は約160㎝であって遺物の配列状態は後世に移動したものとは考えられない。しかし石廓（槨）とおぼしき機構は全然見きわめられず、掘下工事中にもかような石廓らしきものもなかったとのことであった。第１回出土の郡誌記載に石廓とあるも床に河原石を敷けるとのみあり。石廓らしき構造の記録は認められず、この付近に石廓の石と思われるものの存在、および搬出せるものも認められず両古墳共にこれを発掘に際して破壊されるものと考定しても副葬品の整然たる配列状態は後世に移動せる形跡を認められない。以上諸点を総合して本古墳の構造主体は多分小礫石をもちいて構築せる竪穴式古墳であったろうと考えられる。

６）古墳の構造

本古墳についてはまず構造から論ずべきであるが、発掘者の語る処から考えてもあるいは発掘現

場を見しても容易に理解しうるのであるが全く石廓らしき遺構が見当たらない。●拳大の割石が散乱しているのみであった。

須恵器の副葬は後期古墳の副葬品に見られる須恵器の副葬目的とは全く異なるものであって当古墳の須恵器は勾玉等とともに、当時では宝器的な所有物であったものを玉と同様に見て副葬されたものとみるのが無難であろう。

表　阪東丘第１号墳及第２号墳出土遺物一覧表

出土品 墳名	第１号墳	第２号墳
１ 鏡	漢式六獣鏡(径14.4㎝)	漢式二神四獣鏡（径12.8㎝）
２ 剣	三葉環柄	鉄剣
３ 刀	細身刀　長6.85寸	太身大刀、細身刀
４ 槍	袋ホ鉄槍（５寸５分）	
５銅器	銅釧長３寸、幅９分	
６ 鏃		鉄鏃（平根）無数
７勾玉	瑪瑙２個、滑石25個、碧玉１個	瑪瑙５個、硝子４個
８管玉	碧玉３個	瑪瑙１個、碧玉３個
９小玉	（滑石800個）（ガラス350個）	コハク37個、硝子300個
10土器		把手付祝部土器坩
その他	三葉環式柄頭[4]	不明金具片３
土師器		高坏片、当古墳か不明
構造	縦穴式石室	木棺？

＊１号墳から柄頭三葉環式のものが出土している。

阪東丘２号墳の埋葬施設の発見状況の詳細は、発見者からの聞き取りに基づいた御坊市史掲載図が存在するが、市教委所蔵資料として未公表の巽氏作成原稿及び御坊市史掲載図の巽氏作成原図を新たに確認した。この巽氏作成原図は土層断面や土色など御坊市史掲載図には記載がない情報もあり、貴重な資料といえることから、再トレースを行い、巽氏作成原稿からわかる所見とともに検討を加える（第２図）。

巽氏作成原図は、発見者から埋葬施設内の出土状況を聞き取り、復元されたものである。また、このほかに調査中の阪東丘２号墳の埋葬施設を撮影した写真は２点存在する（写真１・２）。写真１は東壁を北西から、写真２は東壁を南西から撮影したものとみられるが、詳細は不明である。阪東丘２号墳は、発見当時すでに墳丘の大部分が削

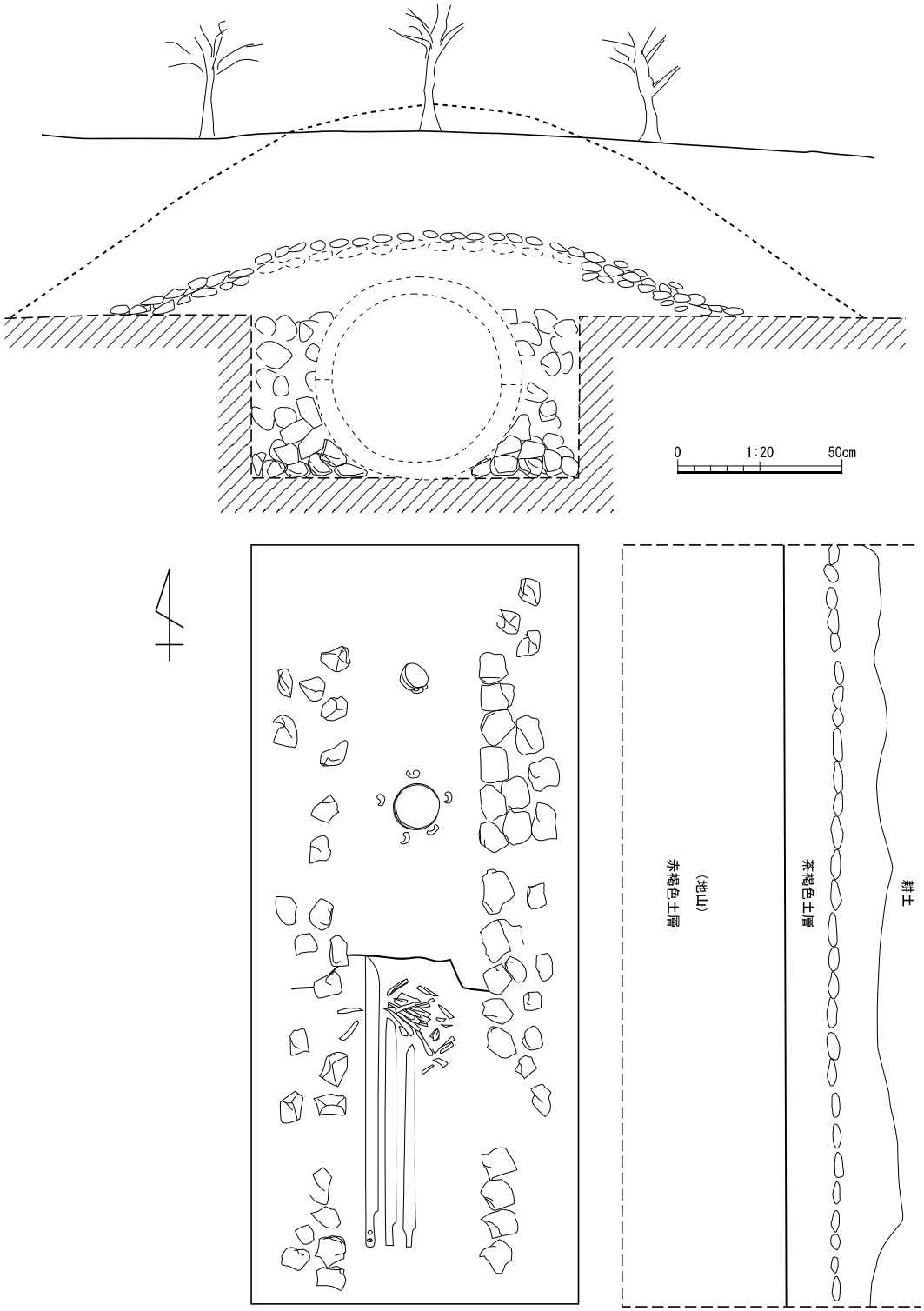
写真１　埋葬施設出土状況１（北西から）

写真２　埋葬施設出土状況２（南西から）

写真３　発見時の武器類

平されていたようだが、巽氏は埋葬施設の上部に河原石を並べ、さらにその上から盛土を行ったと推察している。土層断面観察の記述から、埋葬施設の構築は、①基盤層である地山を掘削する。②木棺を設置し、周囲に割石を込める。③礫を含む茶褐色土で棺を覆い、上部に川原石を並べる。④墳丘盛土を行う、という手順を想定している。

巽氏は、周囲の事例から、埋葬施設に伴う礫群を竪穴式石槨に伴う石積みとすることには否定的である。なお、床面は平面図に記載された断面から、平らであり粘土棺床などは認められない。こ

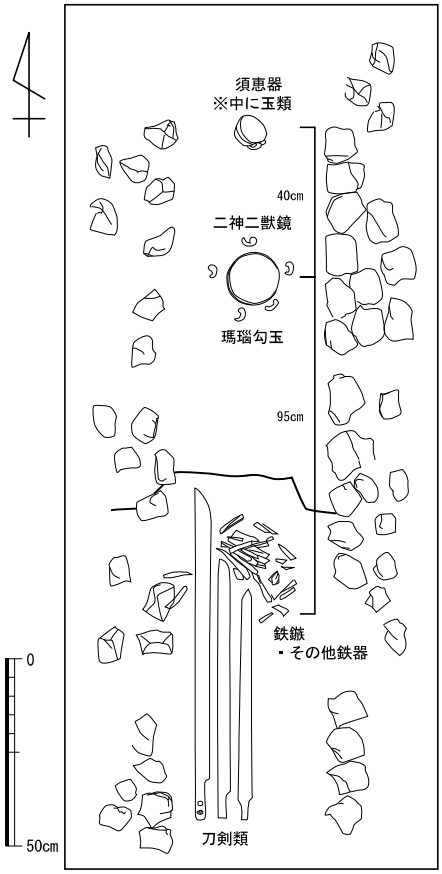


第２図　巽氏作成原図トレース図 (S=1/20)

のため、木棺直葬の可能性が考えられるが、写真１・２及び巽氏作成原図には埋葬施設東側に整然と礫群が並んでいる。巽氏の原稿の記述には埋葬施設周囲の埋土に礫が混じり、間に割石を込めるとあることから、埋葬施設は礫を用いた構造である。このため、竪穴式石槨または礫槨の可能性も残る。ただし、写真は、埋葬施設の限定的な範囲しか撮影されておらず、埋葬施設の構造については現状では不明である。

副葬品の出土状況については、巽氏作成原図では図面縮尺と原稿で記述された距離が一致しない部分があるため、原稿の記述をもとに一部修正を加えた（第３図）。

副葬品は礫群の内側に整然と並ぶことから、全



第３図　巽氏作成原図トレース図（修正後）

て棺内より出土したと考えられる。ただし、出土状況については、発見者からの聞き取りとともに巽氏の解釈を反映しているため、注意が必要である。

巽氏作成原図及び巽氏作成原稿の記述からは、人骨及び歯に関わる記述はなく、遺存していなかったと考えられる。また、副葬品は大きく分けて①北側：須恵器及び須恵器に封入された玉など(琥珀棗玉・滑石管玉・臼玉・ガラス勾玉)、②北側中央：鏡・瑪瑙勾玉、③南側：鉄刀・鉄剣・鉄鏃の３箇所に区分することができる。このうち瑪瑙勾玉については、鏡を中心に放射状に置かれており、刀剣類は棺の主軸に並行するように置かれていたという記述がある。

次に、副葬品の配置から埋葬された遺体の頭位方向について検討する。鏡の副葬配置についてはすでに多くの先行研究がある（今尾 1991、福永 1995、岩本 2004)。岩本崇氏は鏡の副葬位置について、三角縁神獣鏡を対象とするが「棺内頭部型」「棺内頭足分離型」「棺外包囲型」に分類し、古墳時代中期中葉以降では鏡の副葬位置が棺内頭部型にほぼ限られると指摘している（岩本 2004)。これらの点から阪東丘２号墳の埋葬施設についても、②北側中央：鏡・瑪瑙勾玉が配置された範囲を頭部から体部付近と想定すると、埋葬頭位は北位であり、①北側：須恵器及び須恵器に封入された玉は頭側、③南側：鉄刀・鉄剣・鉄鏃は足側にかけて配置されていたと考えられる。　　（濵﨑）

２．出土遺物

（１）資料の現状

現在、出土遺物は、当館及び県教委、市教委において展示･収蔵されている。出土位置及び所蔵、『御坊市史』との照合は表のとおりである（第１表)。これらは本来、同一出土地点のものであるが、分有されて所蔵された経緯については不明である。

当館所蔵資料は、二神二獣鏡１、ガラス小玉 116（１連)、須恵器把手付埦１である。館蔵品収蔵目録からは、旧和歌山県立図書館で保管されていたものが昭和 46 年（1971）の当館開館に併せて移管されていることがわかるが、巽氏からの寄託書類は存在しない。

県教委所蔵資料は、鉄剣１、鉄刀２、鉄刀に付着した鉄鏃１が存在する。こちらの所蔵の経緯は、不明である。

市教委所蔵資料は、琥珀製棗玉 56、ガラス小玉 13、滑石製管玉３、滑石製臼玉１、その他の銅製品１、鉄製品１、木製品１である。玉類はガラス瓶及びプラスチックケースに収められ、須恵器把手付埦から出土したことを示すラベルが存在する。また、阪東丘出土とされる須恵器片２が存在する。以上は令和元年（2019）に巽淳一郎氏より寄贈された巽三郎氏収集資料である。

なお、巽氏が執筆した『御坊市史』及び『和歌山県考古図録』（和歌山県 1955）には掲載されているが､所在を確認できなかった資料が存在する。これらについては実測図や写真などの記録類のみであるが、参考資料として適宜提示することとする。　　（田中）

第１表　阪東丘２号墳出土遺物一覧表

本稿番号	名称	員数	出土位置	『御坊市史』掲載番号	所蔵	備考
1	二神二獣鏡	1	棺内（②北側中央）	図版27 - 32	当館	
2	須恵器把手付埦	1	棺内（①北側）	図面31 - 22	当館	
3	鉄剣	1	棺内（③南側）	図面31 - 25	県教委	
4	鉄刀	2	棺内（③南側）	図面31 - 23・24	県教委	4－1・2
5	鉄鏃	1	棺内（③南側）		県教委	鉄刀に付着、頸～茎部
6	ガラス小玉	116	棺内（不明・①北側埦内）		当館	6－1～116 、１連
	ガラス小玉	13	棺内（①北側埦内）	図版28 - 33	市教委	砕片26点以上
7	琥珀棗玉	8	棺内（①北側埦内）	図面30 - 13～20	市教委	7－1～9
	琥珀棗玉	48	棺内（①北側埦内）	図版28 - 33	市教委	5㎜以上の半欠を計数、砕片多
8	滑石管玉	3	棺内（不明）	図面30 - 10～12	市教委	8－1～３
	滑石臼玉	1	棺内（①北側埦内）		市教委	8－4
9	鉄製品	1	棺内（①北側埦内）	図面30 - 30	市教委	9－1
	銅製品	1	棺内（①北側埦内）	図面30 - 31	市教委	9－2
	木製品	1	棺内（①北側埦内）		市教委	9 - 3
参考１	須恵器甕	2	阪東丘採集		市教委	1号墳、2号墳以外の出土か
参考２	瑪瑙勾玉	5	棺内（②北側中央）	図面30 - 1～5	不明	鏡周辺に放射状に配置
参考３	ガラス勾玉	4	棺内（①北側埦内）	図面30 - 6～9	不明	滑石か
参考４	瑪瑙管玉	2	棺内（②北側中央）		不明	
参考５	刀子	1	棺内（③南側）	図面31 - 26	不明	
参考６	鉄鏃	3	棺内（③南側）	図面31 - 27～29	不明	
参考７	ガラス小玉	２連	棺内（不明）		不明	巽氏宅で過去に確認
参考８	土師器高坏	1	墳丘内	図面31 - 21	不明	

（２）銅鏡（第４図）

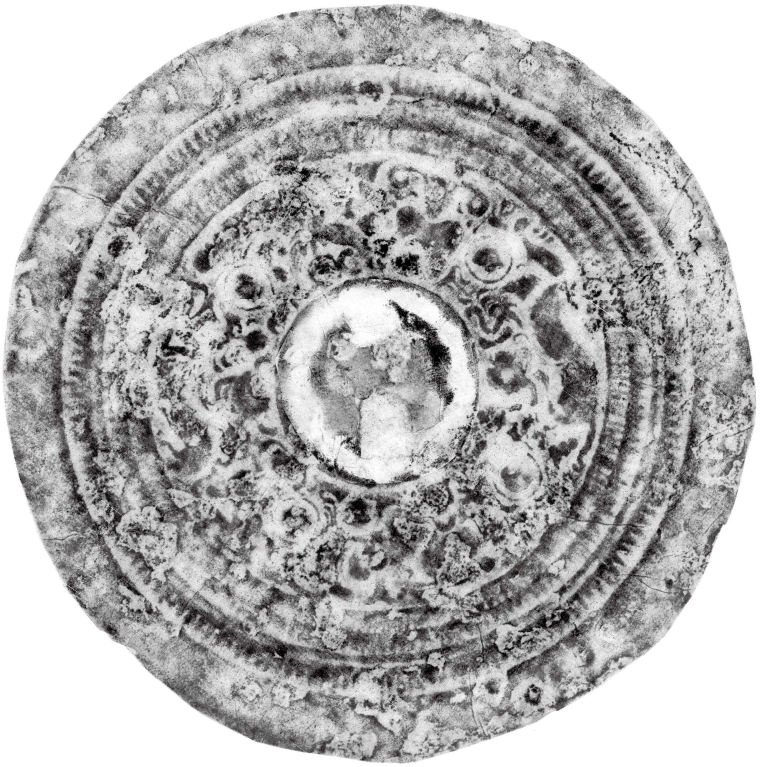
二神二獣鏡（１）は、平縁をもつ倭鏡である。写真、断面実測図とともに欠損のない状態の拓影を掲載した。巽氏報告からは棺内北側中央から出土し、周囲には瑪瑙製勾玉が放射状に置かれていたことがわかる。

面径は直径12.7㎝､厚さは内区で1.5～2.0㎜、外区で3.0㎜、鏡面の反りは3.0㎜である。重量は169 ｇである。

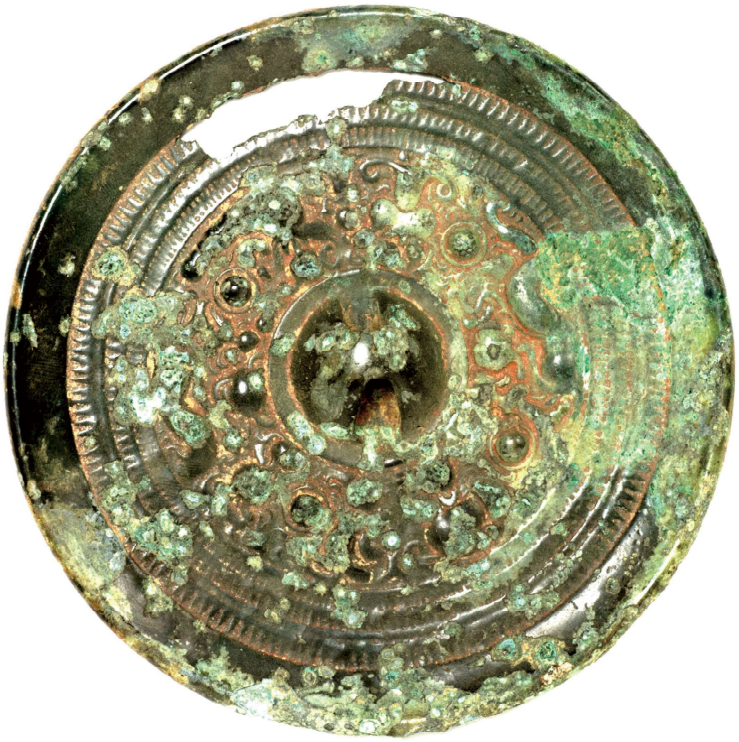
外区の一部を欠損するが、これは発見時には認められておらず、出土後の保管過程で欠損が生じたとされる｡各所に錆に覆われた部分が目立つが、昭和46年（1971）頃に撮影された写真からは大きな変化はない。錆化のため文様や高く突出した箇所では、剥離が生じている。また、鏡面の中央には細い繊維状の痕跡が認められる。鏡背面は文様の凹部を中心に全面に赤色顔料が遺存する。

紐座は円座となり、紐孔は円形のものがやや大きく開けられる。内区主文様は４つの乳により区画し、４区画のそれぞれに神像と獣象を交互に配置する。乳は円座に乗り、半球状を呈する。神像は座像とみられ、立像とみられる大きな脇侍１体がそれぞれ伴う。肩部には雲気の表現がそれぞれ認められる。獣像は、顔面が正面を向くものと、側面を向き鳥頭で表現されたものがある。体はそれぞれ横向きで表現される。

内区外周部は櫛歯文帯、内向する突線付鋸歯文帯からなる。外区は圏線で区画し、外向する突線付鋸歯文帯を巡らせる。縁は平縁であり、端部はやや丸く終わる。主文様からは、斜縁神獣鏡Ａ類（森下1991、岩本2017）、二神二獣鏡Ⅱ系（下垣2003）に分類され、古墳時代前期中葉に製作された倭鏡である。同種の主文様の構成は山口県白鳥古墳や奈良県佐紀丸塚古墳、三重県筒野１号墳に類例があり、本古墳例については、文様構成や表現が白鳥古墳例に類似し、岩本氏により古相に位

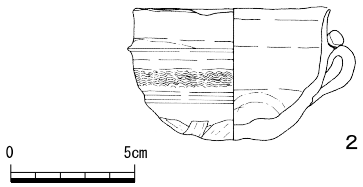


1



0　5cm

第４図　二神二獣鏡実測図（拓影・写真 S=4/5）



第５図　須恵器把手付埦実測図（S=1/3）

置付けられている（岩本 2023）。製作年代は前期Ⅳ期から前期Ⅴ期（大賀 2002a）[5] を下降しない時期としておく。（田中）

（３）土器（第５図）

須恵器把手付埦（２）は棺内（北側）に置かれており、内部にはガラス勾玉、ガラス小玉、コハク棗玉、滑石臼玉などが納められていた。

把手付埦は片側に断面円形の把手がＤ字形に取り付き、把手の上部に断面円形の装飾が付着する。底部はわずかな平底であり、口縁部は外反しつつ立ち上がる。体部は短く丸みをおびた埦形を呈する。口縁部径は 7.8 ㎝、器高は 5.3 ㎝であり、小型品である。

外面は口縁部下には断面三角形の低い突出部をもち、胴部下半には凹線を施し、この間を区画する。この区画には、４条１対の櫛状工具による櫛描波状文を施文する。底部は静止ヘラケズリを施す。内面は口縁部、体部、底部にそれぞれ、回転ナデを施す。

口縁部はややひずみが認められる。外面全体には自然釉が付着し、口縁部の突出部には釉が厚く付着する箇所がある。また底部内面付近には、自然釉が円形に付着する。

丸みをおびた埦形であり、口縁部に対して器高が低く、口縁部が短く外反する。把手は断面円形であるが細い。Ⅰ型式２段階（中村 1978）に該当し、下降しても３段階までと判断できる。このため、TK216 型式期から TK208 型式期（田辺 1966）に相当すると考えられる。

この他、市教委所蔵資料として須恵器甕口縁部及び体部片（参考１）が存在するが、巽氏の報告にあるように、当古墳以外からの出土とみられる。（田中）

（４）武器（第６図・第７図）

巽氏報告によると、武器類は棺内南側付近から出土したとされる。現時点で、その所在が確認できたのは、鉄剣１点、鉄刀２点、鉄鏃１点の４点のみである。また、それぞれ原形をほとんど留めておらず、錆化の影響による劣化と表面の剥離が著しい。これらの破片は、カウントできない小片を除き、117 点にものぼる。ここに所在不明の鉄鏃や鉄刀子（の破片）が混じる可能性も否定できないが、確実に同定できる資料はないと判断した。今回、市教委所蔵の巽氏資料の原図（実測図・トレース図）と現存資料を比較検討し、一部再実測のうえ、巽氏作成原図（原寸大の実測図）を再トレースした図面を提示する。

鉄剣　鉄剣（３）は、そもそも出土時点で大きく破損し分割されており、崩壊が進んだ現在では、１個体に復元することは難しい。図面上（巽氏作成原図）では、残存長 61.9 ㎝、刃関幅 3.9 ㎝に復元できる。現存資料を熟覧することにより、御坊市史掲載図面と比較して、木質の遺存状態を良好に観察することができたことから、再トレース時に反映させている。しかしながら、鉄剣の分類と編年の基準となる柄部分については明瞭に遺存せず、鞘部分にのみ木質が良好に遺存している。

鉄刀　鉄刀（4-1、2）は、大小２点出土している。いずれも切先を欠損するため、当初より全長を把握できない。より長大な鉄刀１（4-1）は、現存長 80.7 ㎝、最大幅 3.5 ㎝、最大厚 0.9 ㎝、図面上（巽氏作成原図）では、残存長 82.1 ㎝、刃関幅 3.9 ㎝に復元できる。茎尻は、やや欠損しているふうにもみれるが、一文字尻茎と想定しておきたい。

鉄刀２（4-2）は、現存長 50.8 ㎝、最大幅 2.5 ㎝、最大厚 0.7 ㎝、図面上（巽氏作成原図）では、残存長 66.5 ㎝、刃関幅 3.4 ㎝に復元できる。接合関係は不明であるものの、同一個体とみられる破片を含めると、全長が 80 ㎝近くになる。茎尻は、一文字尻茎であろう。鉄刀１、２ともに装具については判然としない。

鉄刀の刃関幅の変化に着目した斎藤大輔氏の編年に依拠すると、鉄刀１は一文字尻茎系列ｃ類（刃関幅 3.5 ～ 3.9 ㎝）、鉄刀２は一文字尻茎系列ｂ類（刃関幅 3.2 ～ 3.4 ㎝）に該当する。鉄

剣と鉄刀の出土比率も踏まえ、おおむね刀剣様式中期第２段階新相～３段階（TK73-TK208 型式期併行）に比定しておきたい（斎藤 2020）。

鉄鏃　鉄鏃１（５）は、これまで未報告の個体である。鉄刀１の刀身部に銹着していた。鏃身部と茎部端部を欠損するが、頸部～茎部の一部が遺存している。現存長 5.1 ㎝、頸部幅 0.7 ㎝、茎部幅 0.6 ㎝であり、茎部には木質がうすく認められる。鉄鏃１は、鉄刀１の影響による銹化が著しいため、関部の形状や口巻痕跡は確認できないが、矢柄先端形状は楕円筒形を呈している。

（佐藤）

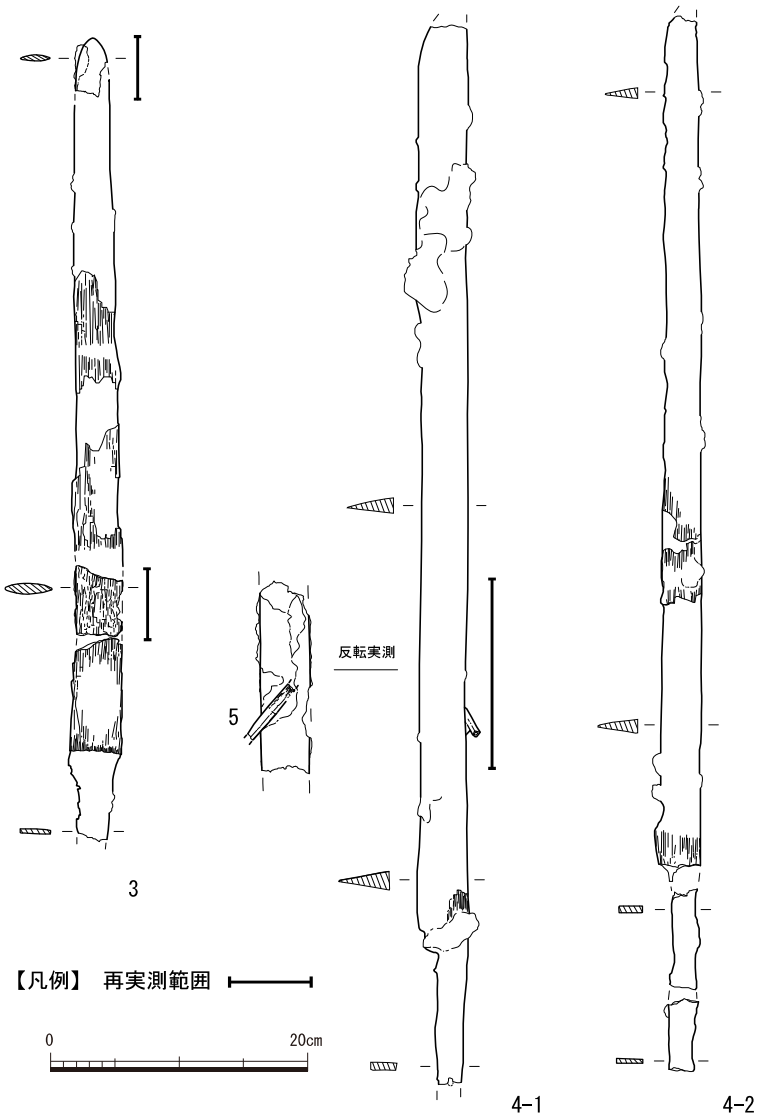
（５）玉類　（第８～10 図､第２～４表）

ガラス小玉　ガラス小玉については、巽氏によって 300 点出土したと報告される。しかし現在当館が所蔵するガラス小玉は計 116 点であり、残りのガラス小玉の所在は明らかではない[6)]。以下では当館所蔵のガラス小玉について、肉眼観察による検討結果を記すとともに、各分類の代表的な資料の実測図を掲載する。

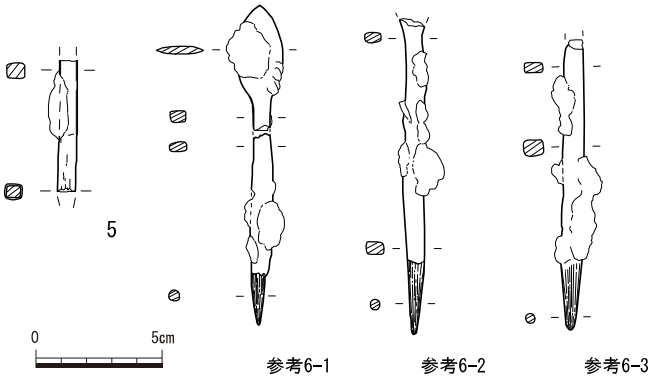
ガラス小玉は製作技法の違いによって３種類に大別できる。すなわち引き伸ばしたガラス管を分割して小玉を製作する引き伸ばし法。ガラス片を鋳型内に充填し、鋳型ごと加熱して小玉を作成する鋳型法。ガラス片を軟化させたのち型に押し付けて成形し、中央に軸を差し込んで小玉を作成する加熱貫入法である（大賀 2002b）。

このうち大部分を占めるのは、引き伸ばし法で作られたガラス小玉である。孔内が平滑で、孔に対して平行する気泡列が認められる点から判別される。色調の違いや法量、研磨の有無によって、以下の５種類（A ～ E 類）に細別できる。

A 類は紺色透明を呈し、直径 0.7cm 前後の大型のもので、31 点が該当する。孔と平行する白色の筋が認められる。いずれも端面には加熱整形による丸味を残していることから、列島内に流入してからそれほど時間が経過していないと考えられる。製作技法や色調、法量から判断するに、A 類は植物灰ガラスを基礎ガラスとする、コバルト着色のガラス小玉（Group ⅢB）（Oga and Tamura2013）である可能性が高い。Group ⅢB



第６図　鉄剣・鉄刀実測図（S=1/6）



第７図　鉄鏃実測図（S=1/3）

は直径 0.6cm 以上の大型品が多数含まれている点で、典型的なインド・パシフィックビーズとは区別されている（Francis1990、大賀 2002c）。

B 類は淡紺色～紺色透明を呈し、直径が 0.3cm 前後の小型のもので、22 点が該当する。いずれも端面に丸みを残す。製作技法や色調から判断するに、高アルミナタイプのソーダガラスを基礎ガラスとする、コバルト着色のガラス小玉（Group ＳⅡＢ）に相当するとみられる。

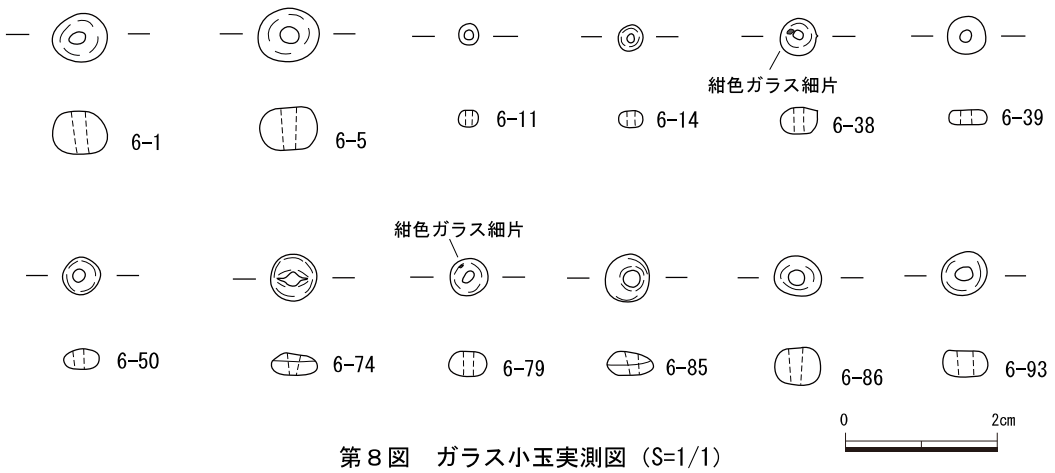
C 類は淡青色～青色透明を呈し、直径が 0.4～0.5cm を測るもので、51 点が該当する。いずれも端面は丸みを帯びる。製作技法や法量においては B 類との共通点が看取されるが、色調は B 類よりも緑がかる。以上から、B 類と同様に高アルミナタイプのソーダガラスを基礎ガラスとするものの（Group ＳⅡB）、C 類は銅着色によるものと考えられる。Group ＳⅡB にはきわめて多様な色調のガラス小玉があるが、大部分が引き伸ばし法で製作され、直径が 0.6cm 以下となるという特徴を有しており、典型的なインド・パシフィックビーズに相当すると強調される（大賀 2002c）。

D 類は淡青色透明を呈し、直径が 0.5cm 前後のもので、３点が該当する。いずれも再研磨が顕著に認められる。このように端面に明確な研磨痕をもつものは、一定の中断期を挟んだのち再出現するガラス小玉にみられるとの指摘があり、製作時期から一定の伝世期間を経過した可能性が示されている（大賀 2020）。端面の様相は異なるものの、法量や色調はＣ類と近似することから、D 類も高アルミナタイプのソーダガラスを基礎ガラスとする、銅着色のガラス小玉（Group ＳⅡＢ）であると推測される。

E 類は紺色透明を呈する。他のコバルト着色の紺色透明ガラス小玉に比べ、紫色味が強い。直径が 0.5cm 前後を測るもので、５点が該当する。D 類と同様に、再研磨が顕著に認められる。孔は大きくいびつである。紫がかった紺色の発色には、コバルトイオンとマンガンイオンが関与するとの指摘があり、マンガンイオンはソーダ石灰ガラスよりもカリガラスのなかで赤味が強くなるという（伊藤 1996、田村 2013）。したがって、E 類はその色調から、中アルミナタイプのカリガラスを基礎ガラスとする、コバルト着色のガラス小玉（Group ＰⅠ（紺大））にあたるとみられる（大賀 2020b）。

鋳型法で製作されたガラス小玉（F 類）は孔内が荒れ、透明度も低く、しばしばガラス小玉表面に溶け切れなかったガラス片が付着していることから判別される。阪東丘２号墳では２点確認され、いずれも全体としては淡青色を呈するが、紺色の部分も認められる。藤田等氏によると、この方法でガラス小玉を製作する際は、粘性が乏しい鉛ガラスよりも、粘性があり表面張力が高いソーダガラスの方が多用されるという（藤田 1994）。以上を踏まえると、F 類のガラス小玉は、淡青色のソーダガラス片に、少量の紺色ソーダガラス片を混ぜたものを溶かして製作された可能性が高い。

加熱貫入法で製作されたガラス小玉（G 類）は



第８図　ガラス小玉実測図（S=1/1）

第２表　ガラス小玉計測表

番号	製作技法	色調	法量（cm）			重さ（g）	本稿分類
			最大径	厚さ	孔径		
6-1	引き伸ばし	紺色透明	0.73	0.55	0.15	0.36	A
6-2	引き伸ばし	紺色透明	0.71	0.53	0.14	0.41	A
6-3	引き伸ばし	紺色透明	0.77	0.51	0.13	0.45	A
6-4	引き伸ばし	紺色透明	0.62	0.65	0.15	0.45	A
6-5	引きのばし	紺色透明	0.77	0.57	0.20	0.43	A
6-6	引き伸ばし	紺色透明	0.76	0.52	0.19	0.40	A
6-7	引き伸ばし	紺色透明	0.68	0.45	0.13	0.35	A
6-8	引き伸ばし	紺色透明	0.65	0.56	0.12	0.39	A
6-9	引き伸ばし	紺色透明	0.72	0.55	0.16	0.40	A
6-10	引き伸ばし	紺色透明	0.70	0.52	0.11	0.36	A
6-11	引き伸ばし	淡紺色透明	0.28	0.21	0.09	0.02	B
6-12	引き伸ばし	淡紺色透明	0.29	0.15	0.09	0.02	B
6-13	引き伸ばし	淡紺色透明	0.27	0.17	0.09	0.02	B
6-14	引き伸ばし	紺色透明	0.34	0.19	0.11	0.03	B
6-15	引き伸ばし	紺色透明	0.32	0.21	0.10	0.03	B
6-16	引き伸ばし	紺色透明	0.28	0.13	0.11	0.02	B
6-17	引き伸ばし	淡紺色透明	0.29	0.15	0.11	0.02	B
6-18	引き伸ばし	淡紺色透明	0.29	0.14	0.11	0.02	B
6-19	引き伸ばし	淡紺色透明	0.31	0.13	0.10	0.02	B
6-20	引き伸ばし	淡紺色透明	0.31	0.12	0.13	0.01	B
6-21	引き伸ばし	淡紺色透明	0.28	0.14	0.08	0.01	B
6-22	引き伸ばし	淡紺色透明	0.26	0.17	0.09	0.02	B
6-23	引き伸ばし	紺色透明	0.33	0.17	0.09	0.03	B
6-24	引きのばし	紺色透明	0.33	0.13	0.11	0.02	B
6-25	引き伸ばし	淡紺色透明	0.28	0.19	0.10	0.02	B
6-26	引き伸ばし	淡紺色透明	0.27	0.16	0.10	0.02	B
6-27	引き伸ばし	紺色透明	0.30	0.11	0.11	0.01	B
6-28	引き伸ばし	淡紺色透明	0.27	0.16	0.10	0.02	B
6-29	引き伸ばし	淡紺色透明	0.26	0.17	0.09	0.02	B
6-30	引き伸ばし	紺色透明	0.33	0.16	0.09	0.02	B
6-31	引き伸ばし	紺色透明	0.33	0.16	0.08	0.03	B
6-32	引き伸ばし	淡青色透明	0.45	0.25	0.10	0.07	C
6-33	引き伸ばし	青色透明	0.45	0.27	0.12	0.07	C
6-34	引き伸ばし	青色透明	0.43	0.26	0.13	0.07	C
6-35	引き伸ばし	青色透明	0.44	0.26	0.12	0.07	C
6-36	引き伸ばし	青色透明	0.43	0.30	0.13	0.08	C
6-37	引き伸ばし	青色透明	0.42	0.26	0.12	0.06	C
6-38	鋳型	青色不透明	0.47	0.32	0.09	0.09	F
6-39	引き伸ばし	淡青色透明	0.47	0.17	0.15	0.06	D
6-40	引き伸ばし	淡青色透明	0.49	0.19	0.15	0.08	D
6-41	引き伸ばし	淡青色透明	0.50	0.19	0.16	0.07	D
6-42	引き伸ばし	青色透明	0.53	0.42	0.18	0.14	C
6-43	引き伸ばし	青色透明	0.44	0.36	0.10	0.09	C
6-44	引き伸ばし	紺色透明	0.48	0.24	0.19	0.08	E
6-45	引き伸ばし	青色透明	0.38	0.36	0.12	0.08	C
6-46	引き伸ばし	紺色透明	0.43	0.29	0.19	0.08	E
6-47	引き伸ばし	青色透明	0.47	0.33	0.16	0.11	C
6-48	引き伸ばし	青色透明	0.51	0.23	0.13	0.09	C
6-49	引き伸ばし	青色透明	0.42	0.36	0.15	0.09	C
6-50	引き伸ばし	青色透明	0.48	0.21	0.14	0.07	C
6-51	引き伸ばし	青色透明	0.43	0.35	0.15	0.01	C
6-52	引き伸ばし	青色透明	0.39	0.38	0.11	0.10	C
6-53	引き伸ばし	青色透明	0.52	0.43	0.14	0.17	C
6-54	引き伸ばし	青色透明	0.46	0.31	0.11	0.09	C
6-55	引き伸ばし	青色透明	0.51	0.23	0.16	0.08	C
6-56	引き伸ばし	青色透明	0.55	0.24	0.14	0.01	C
6-57	引き伸ばし	青色透明	0.52	0.41	0.14	0.17	C
6-58	引き伸ばし	青色透明	0.60	0.36	0.21	0.17	C
6-59	引き伸ばし	青色透明	0.55	0.40	0.15	0.18	C
6-60	引き伸ばし	青色透明	0.52	0.37	0.13	0.14	C
6-61	引き伸ばし	青色透明	0.47	0.36	0.09	0.11	C
6-62	引き伸ばし	青色透明	0.58	0.43	0.11	0.15	C
6-63	引き伸ばし	青色透明	0.57	0.25	0.16	0.13	C
6-64	引き伸ばし	青色透明	0.51	0.39	0.12	0.13	C
6-65	引き伸ばし	青色透明	0.54	0.35	0.20	0.13	C
6-66	引き伸ばし	青色透明	0.46	0.42	0.16	0.11	C
6-67	引き伸ばし	青色透明	0.53	0.40	0.15	0.15	C
6-68	引き伸ばし	青色透明	0.43	0.32	0.17	0.08	C
6-69	引き伸ばし	淡青色透明	0.51	0.20	0.15	0.07	C
6-70	引き伸ばし	紺色透明	0.50	0.35	0.15	0.11	E
6-71	引き伸ばし	青色透明	0.52	0.35	0.18	0.12	C
6-72	引き伸ばし	淡青色透明	0.53	0.36	0.13	0.14	C
6-73	引き伸ばし	青色透明	0.53	0.32	0.20	0.13	C
6-74	加熱貫入	淡青色透明	0.59	0.27	0.17	0.12	G
6-75	引き伸ばし	青色透明	0.51	0.37	0.16	0.13	C
6-76	引き伸ばし	淡青色透明	0.50	0.35	0.17	0.12	C
6-77	引き伸ばし	青色透明	0.49	0.32	0.19	0.09	C
6-78	引き伸ばし	青色透明	0.40	0.38	0.13	0.08	C
6-79	鋳型	淡青色透明	0.47	0.30	0.12	0.10	F
6-80	引き伸ばし	淡青色透明	0.50	0.32	0.16	0.10	C
6-81	引き伸ばし	淡青色透明	0.51	0.19	0.19	0.07	C
6-82	引き伸ばし	淡青色透明	0.56	0.17	0.17	0.07	C
6-83	引き伸ばし	青色透明	0.58	0.30	0.20	0.13	C
6-84	引き伸ばし	淡青色透明	0.50	0.20	0.14	0.07	C
6-85	加熱貫入	淡青色透明	0.56	0.23	0.20	0.11	G
6-86	引き伸ばし	淡紺色透明	0.51	0.45	0.22	0.21	B
6-87	引き伸ばし	紺色透明	0.54	0.45	0.13	0.20	A
6-88	引き伸ばし	紺色透明	0.50	0.40	0.17	0.14	A
6-89	引き伸ばし	青色透明	0.52	0.33	0.14	0.13	C
6-90	引き伸ばし	青色透明	0.47	0.42	0.13	0.12	C
6-91	引き伸ばし	淡青色透明	0.54	0.44	0.14	0.18	C
6-92	引き伸ばし	青色透明	0.53	0.34	0.17	0.14	C
6-93	引き伸ばし	紺色透明	0.55	0.32	0.21	0.14	E
6-94	引き伸ばし	紺色透明	0.57	0.30	0.18	0.15	E
6-95	引き伸ばし	紺色透明	0.68	0.44	0.19	0.27	A
6-96	引き伸ばし	青色透明	0.56	0.50	0.18	0.24	C
6-97	引き伸ばし	青色透明	0.56	0.37	0.17	0.16	C
6-98	引き伸ばし	紺色透明	0.69	0.44	0.18	0.31	A
6-99	引き伸ばし	紺色不透明	0.65	0.43	0.17	0.25	A
6-100	引き伸ばし	紺色透明	0.74	0.51	0.17	0.40	A
6-101	引き伸ばし	紺色透明	0.67	0.53	0.18	0.37	A
6-102	引き伸ばし	紺色透明	0.73	0.52	0.19	0.35	A
6-103	引き伸ばし	紺色透明	0.67	0.56	0.16	0.36	A
6-104	引き伸ばし	青色透明	0.66	0.35	0.24	0.20	C
6-105	引き伸ばし	紺色透明	0.68	0.47	0.17	0.34	A
6-106	引き伸ばし	紺色透明	0.66	0.48	0.22	0.31	A
6-107	引き伸ばし	紺色透明	0.70	0.41	0.22	0.29	A
6-108	引き伸ばし	紺色透明	0.73	0.48	0.22	0.39	A
6-109	引き伸ばし	紺色透明	0.78	0.42	0.22	0.34	A
6-110	引き伸ばし	紺色透明	0.67	0.48	0.20	0.36	A
6-111	引き伸ばし	紺色透明	0.71	0.56	0.18	0.42	A
6-112	引き伸ばし	紺色透明	0.70	0.46	0.16	0.32	A
6-113	引き伸ばし	紺色透明	0.64	0.56	0.16	0.37	A
6-114	引き伸ばし	紺色透明	0.70	0.49	0.18	0.31	A
6-115	引き伸ばし	紺色透明	0.71	0.59	0.15	0.44	A
6-116	引き伸ばし	紺色透明	0.73	0.44	0.16	0.31	A

1）上記のガラス小玉は現在連状で保管されている。遺物番号は結び目から時計回りに付した。

2）法量の計測には最小読み取り値0.01mmのデジタルノギスを使用し、小数点第三位を四捨五入した値をcmに換算した。

3）重量の計測には最小読み取り値0.001gの計量器を使用し、小数点第四位を四捨五入した。

側面観が算盤玉状となり、一方の孔の径が大きくなる点から判別される。阪東丘２号墳では２点みられる。いずれも透明度が高い淡青色透明を呈し、直径は0.5cm前後を測る。製作技法と色調の組み合わせから、プロト高アルミナタイプのソーダガラスを基礎ガラスとする、銅着色のガラス小玉（Group SVC）であると考えられる。

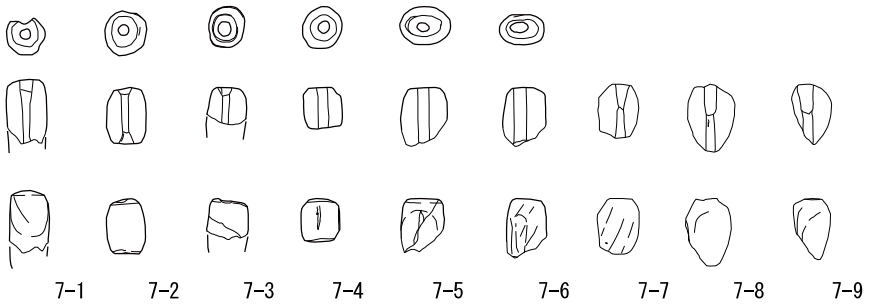
ガラス小玉については、大賀氏によってその変遷が示されている。氏によると、本稿でA類としたGroup ＳⅢＢは中Ⅳ期（大賀2002a）以降に流通するという。一方で、D類と想定したGroup ＳⅡＢや、E類とみたGroup ＰＩ（紺大）は中Ⅰ期～中Ⅱ期の流通が指摘されるものである。これに対し、G類としたGroup ＳＶＣは前Ⅴ期～前Ⅶ期の流通が指摘されている（大賀2020b）。

以上から、当古墳から出土したガラス小玉は資料数としては寡少ではあるものの古相のガラス小玉が認められるが、下限としてはA類が流入する中Ⅳ期に設けられる。（横臼）

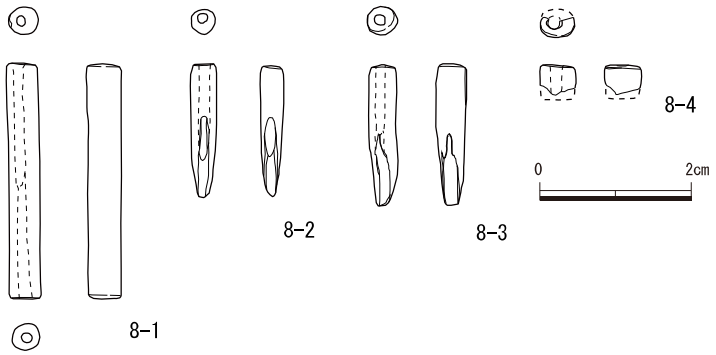
琥珀棗玉　琥珀棗玉は、巽氏の報告によれば37点出土しているとされ、『御坊市史』には８点が報告されている。現状では『御坊市史』掲載以外にも48点の存在を確認した。劣化が著しく、破片となっている資料も多い。これらは５㎜以上の半欠を計数しているため、同一個体も含む。全形のわかる『御坊市史』掲載資料である７点のほかに、穿孔方法がよくわかる資料３点の実測図を提示した（第９図、第３表）。

いずれも断面楕円形を呈し、上下端にゆるやかな平坦面をもち体部がやや膨らむ。紐通し孔の穿孔は小口付近に直径0.2cm前後の広い孔があり、中央部分は直径0.18cm前後の直線的な孔が確認できるもの（a、7-1～3）、小口から直線的な直径1.8㎜の孔をもつもの（b、7-4～6）、直径0.1～0.18cm前後の孔をもち両面穿孔が確認できるものが存在する（ｃ、7-7～9）。また、紐通し孔の内面に赤色顔料の付着が認められるものもある（7-2・3）。（田中）

滑石管玉・臼玉　滑石管玉は、直径0.5㎝で長さ３㎝の管玉（8-1）と直径0.3～0.4㎝の細身のやや短い管玉（8-2・3）が存在する（第10図、第４表）。いずれも両面穿孔であり、破面から両面穿孔が確認できるもの（8-2・3）、穿孔が上下でやや位置が異なるものがある（8-1）。滑石臼玉は、１点出土した（8-4）。下端を欠損する半欠品であり、ガラス小玉片、琥珀棗玉、砂とともに須



第９図　琥珀製棗玉実測図（S=1/1）



第10図　滑石製管玉及び臼玉実測図（S=1/1）

第３表　琥珀棗玉計測表

番号	法量（cm）				重さ（g）	分類		その他
	最大長	最大幅	最小幅	孔径		穿孔	形態	
7－1	(0.82)	0.52	0.4	0.2	0.2	a	楕円形	『御坊市史』図面30－14
7－2	0.73	0.58	0.35	0.2	0.3	a	楕円形	『御坊市史』図面30－13 紐通し孔に赤色顔料付着
7－3	(0.48)	0.5	0.38	0.2	0.1	a	楕円形	『御坊市史』図面30－15 紐通し孔に赤色顔料付着
7－4	0.53	0.48	0.36	0.18	0.2	b	楕円形	『御坊市史』図面30－19
7－5	(0.75)	0.6	0.4	0.18	0.19	b	楕円形	『御坊市史』図面30－20
7－6	(0.78)	0.55	0.45	0.18	0.15	b	楕円形	『御坊市史』図面30－17
7－7	(0.75)	(0.5)	(0.32)	0.1	0.15	c	楕円形	『御坊市史』図面30－18
7－8	(0.9)	(0.6)	(0.31)	0.15	0.15	c	楕円形	
7－9	(0.8)	(0.5)	(0.29)	0.1～0.18	0.1	c	楕円形	

第４表　滑石管玉・臼玉計測表

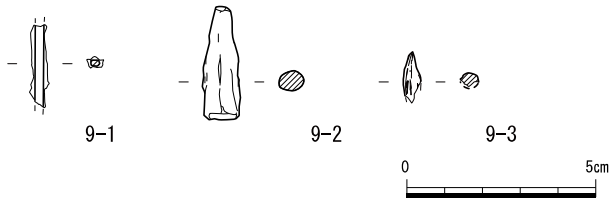
番号	法量（cm）				重さ（g）	分類	その他
	最大長	最大幅	最小幅	孔径		穿孔	
8－1	3.1	0.5	0.4	0.15	0.9	両面	『御坊市史』図面30－10
8－2	(1.75)	3.2	3.0	0.15	0.2	両面	『御坊市史』図面30－11
8－3	(1.9)	4.0	3.5	0.9	0.25	両面	『御坊市史』図面30－12
8－4	(0.35)	0.5	0.45	0.15	0.1		

恵器把手付埦に納められていた。　（田中）

（６）その他　（第11図）

『御坊市史』において刀剣類と共に鉄器として遺物実測図が紹介されている資料が２点存在する。今回、さらに１点の資料を確認した。巽氏作成原稿の「不明金具片３」に対応する。出土位置については須恵器把手付埦より出土したとみられる。

鉄製品（9-1）は残存長2.2cm、厚さ0.5㎝で断面形状は方形を呈する。大半が欠損しているとみられるが、一方がわずかに細くなることから小型鉄針の可能性が考えられる。また、銅製品(9-2)は薄い銅板を丸めて筒状や弾状に成形しているようだが、用途は不明である。背面には木質の痕跡らしきものがみられる。木製品（9-3）は、先端を尖らせる。淡緑色に変色するため銅製品に接していたものとみられる。（濵﨑）



第11図　その他（鉄製品・銅製品・木製品）実測図（S=1/2）

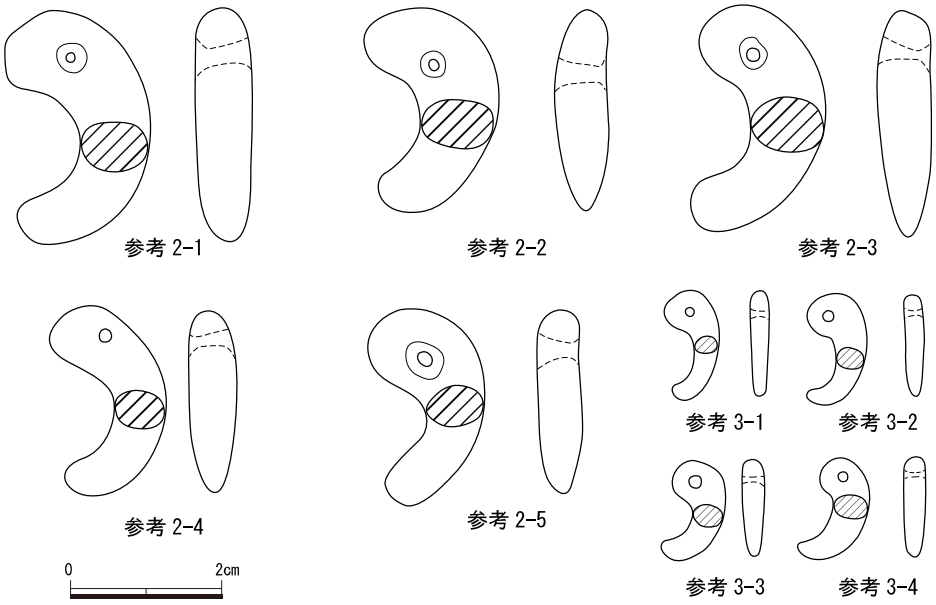
（７）不明遺物（第７・12・13図、写真４・５）

瑪瑙勾玉　瑪瑙勾玉５点（参考２）については、『御坊市史』の実測図（第12図）から判断すると、全長は3.0～3.8cmで、厚さは約0.7cmである。頭部から尾部まで厚さの変化はあまりなく、側面は扁平な形状を呈している。いずれも一方の孔の径が大きくなることから片面穿孔とみられ、なかには片面穿孔に特有な円錐形の割れが認められるものもある。以上は、中期後半の山陰系勾玉にみられる特徴と合致する（大賀2009）。したがって、阪東丘２号墳の瑪瑙製勾玉の製作時期は中期後半とみることができる。　（横臼）

ガラス勾玉　ガラス勾玉４点（参考３）については『御坊市史』の実測図（第12図）から検討すると全長は2.0cmほどであり、厚さは約0.4cmを測る。頭部から尾部まで厚さの変化はなく、側面観は扁平である。薄い板状の勾玉であることを鑑みるに、阪東丘２号墳のガラス勾玉は、実際は滑石勾玉である可能性も考えられる。板状の滑石勾玉は中期後半に特徴的な玉であり（大賀2002d）、当古墳の瑪瑙勾玉の時期と合致することからも蓋然性が高い。　（横臼）

瑪瑙管玉　瑪瑙管玉２点（参考４）については実測図も記述もなく、詳細は不明である。（横臼）

刀子　刀子（参考５）の出土状況については、巽氏作成原稿において明確な記述がなされていない。同様に巽氏作成の出土遺物一覧表においても刀子の項目がみえない。巽氏作成図面上では、全長13.9㎝に復元され、完形品とみられる。茎部はやや上反りするとともに、断面形状は長方形となる。刃部に対して、関部周辺を境に、柄部がやや大きく描かれ木質のような表現がなされることから、装具の存在が想起される。しかしながら、資料が現存しないことから、その構造や材質については言及できなかった。　（佐藤）



第12図　瑪瑙勾玉・ガラス（滑石）勾玉実測図（S=1/1）

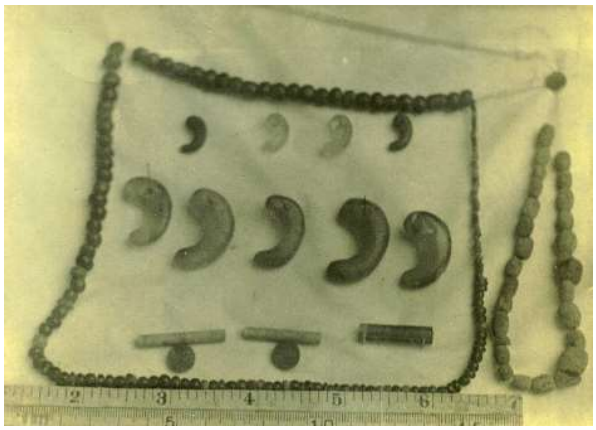
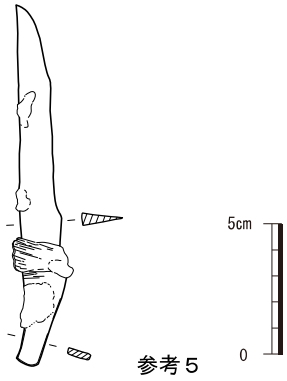


写真４　巽三郎氏撮影遺物写真（玉類）



第13図　刀子実測図（S=1/3）

鉄鏃　鉄鏃２（参考 6-1）は、『御坊市史』において完形品として図示されているが、原図では鏃身関部直下でふたつに破損している。これらの接合が可能であったのかどうかは判然としないが、少なくともトレース図では一個体となっている。全長 12.6 ㎝、鏃身部長 4.1 ㎝、茎部が少なくとも３～４㎝程度と仮定すると、頸部長は５㎝前後とみられる。鏃身部は、原図では柳葉形、『御坊市史』では長三角形状を呈している。いずれにせよ、やや幅広の平面形であったとみられる（写真５）。

鉄鏃３（参考 6-2）と鉄鏃４（参考 6-3）は、鏃身部を欠損する。それぞれ残存長 11.5 ㎝、12.4 ㎝であり、鉄鏃２と比較して、頸部の長大化が著しい。

鉄鏃２をほぼ完形であると仮定したうえで、鏃身部と頸部・茎部の比率から判断すると、頸部が伸長化した最終段階の短頸鏃であると考えられる。その一方で、鉄鏃３、４については、鏃身部を欠き、全体のプロポーションが不明なものの、頸部が 10 ㎝前後となることから、定型化した長頸鏃群との評価が可能であろう。定型化以前の長頸鏃は、頸部が 10 ㎝をはるかに超え、20 ㎝に迫る長大なものであり、それらが漸次的に短身化していくことがすでに指摘されている（鈴木 2003、川畑 2015）。

阪東丘２号墳出土鉄鏃については、長頸鏃が定型化に向かい、短頸鏃がいまだ併存する段階（鈴木中期Ⅲ～Ⅳ段階）と評価しておきたい（鈴木 2003）。さらに、短頸鏃が併存することを、より

写真５　巽三郎氏撮影遺物写真（刀子・鉄鏃）

重視すれば、Ⅳ段階でも古相（TK208 型式期併行）に位置付けてよいかもしれない。

また、巽氏報告においては、刀剣類の周辺に鉄鏃が無数に出土したと記載されており、遺物出土状況復元図からも多量の鉄鏃らしき表現がみられる。あくまでも発見者からの聞き取りによる復元図であることは念頭に置かねばなるまいが、本稿で報告した資料以外にも多量の鉄鏃が出土していた（定型化した長頸鏃の多量副葬か）ことは明記しておきたい。（佐藤）

ガラス小玉　ガラス小玉（参考７）については、巽氏撮影の遺物写真に 150 点程度が連状になったものがみられる（写真５）。写真をみるに直径が約 0.6cm となる大型品が 40 点以上はあり、これは当館所蔵資料とは異なる様相を示す[6)]。巽氏報告において阪東丘２号墳からはガラス小玉が計 300 点出土したと記載されているが、当館所蔵 116 点と写真にみられる 150 点、そして市教委所蔵資料 13 点を合わせると 279 点となり、300 近い点数になることは注目に値する。以上を勘案すると、写真掲載資料は巽氏宅に保管されていたというガラス小玉２連に該当する可能性がある。

（横臼）

土師器高坏　土師器高坏（参考８）については、墳丘盛土から出土したとされる。坏部が屈曲する大型有稜高坏であり、『御坊市史』では破片を図上復元している。古墳時代中期前半の所産であるが、墳丘盛土からの出土であり、古墳の築造時期を示すものとはならない。（田中）

３．阪東丘２号墳の編年的位置と派生する諸問題

（１）阪東丘２号墳の編年的位置付け

以上のように阪東丘２号墳の出土遺物について検討した。年代が判明する資料については表のとおりである（第５表）。

須恵器把手付埦は、その形状から初現期のものより新しく TK216 型式期を中心とし、TK208 型式期までに位置付ける。資料的な制約は否めないものの、鉄刀は斎藤編年中期第２段階新相～３段階（TK73 ～ TK208 型式期併行）に、鉄鏃は鈴木編年中期Ⅲ～Ⅳ段階古相（TK216 ～ TK208 型式期併

第５表　阪東丘２号墳出土遺物の編年的位置づけ

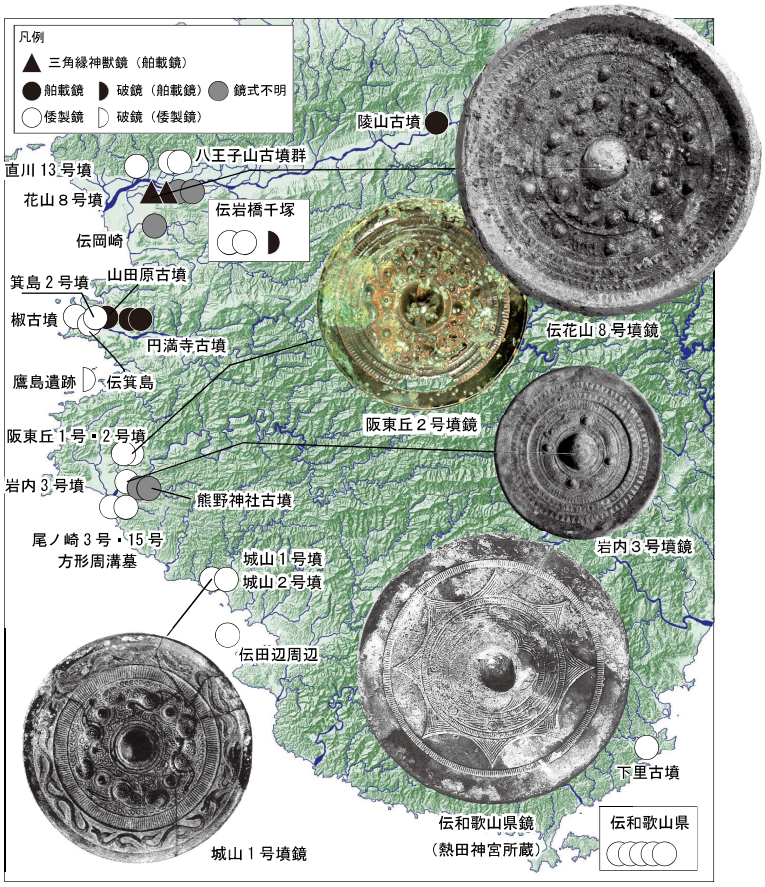
	布留１	布留２		布留３		TG232	TK73	TK216	TK208
	前Ⅲ期	前Ⅳ期	前Ⅴ期	前Ⅵ期	前Ⅶ期	中Ⅰ期	中Ⅱ期	中Ⅲ期	中Ⅳ期
二神二獣鏡		━━	━━						
須恵器把手付埦								━━	━━
鉄剣・鉄刀						鉄刀１・２	━━	━━	━━
鉄鏃								━━	━━
ガラス小玉			G類			D・E類		A類 ━━	
琥珀棗玉			━━	━━	━━	━━	━━	━━	━━
滑石管玉		両面穿孔	━━	━━	━━	━━	━━	━━	━━
滑石臼玉			━━	━━	━━	━━	━━	━━	━━
瑪瑙勾玉（参考）								━━	━━
土師器高坏（参考）					墳丘盛土	▒▒	▒▒		

行）に位置付けている（斎藤 2020、鈴木 2003）。

また、ガラス小玉はＡ類が中Ⅳ期以降に日本列島に流入するとされるものであり、ガラス小玉の年代の下限を示す。また、Ｇ類は前Ⅴ期～前Ⅵ期に、Ｄ類・Ｅ類は中Ⅰ期・中Ⅱ期にそれぞれ日本列島に流入するとされるものであるが、出土数はわずかであり、ガラス小玉総体としては中Ⅳ期に位置付けられる。これらの点から、当古墳は古墳時代中期中葉から後葉に築造されたものとみてもよいだろう。

一方、二神二獣鏡については倭鏡であり、主文様の構成から山口県白鳥古墳出土の斜縁二神二獣鏡との類似性が指摘できる。岩本氏の位置付けでは、前Ⅳ期（岩本前Ⅲ期）を下降しない時期（岩本 2023）とされる。このため、文様の表現から前Ⅳ期または前Ⅴ期としておく。これについては土器や刀剣、玉類と比べて明らかに製作年代が古いことから製作後の伝世や一定の保有期間を経たものとみてよいだろう。

（田中・佐藤・横臼）



第 14 図　紀伊における古墳時代前・中期の銅鏡分布図

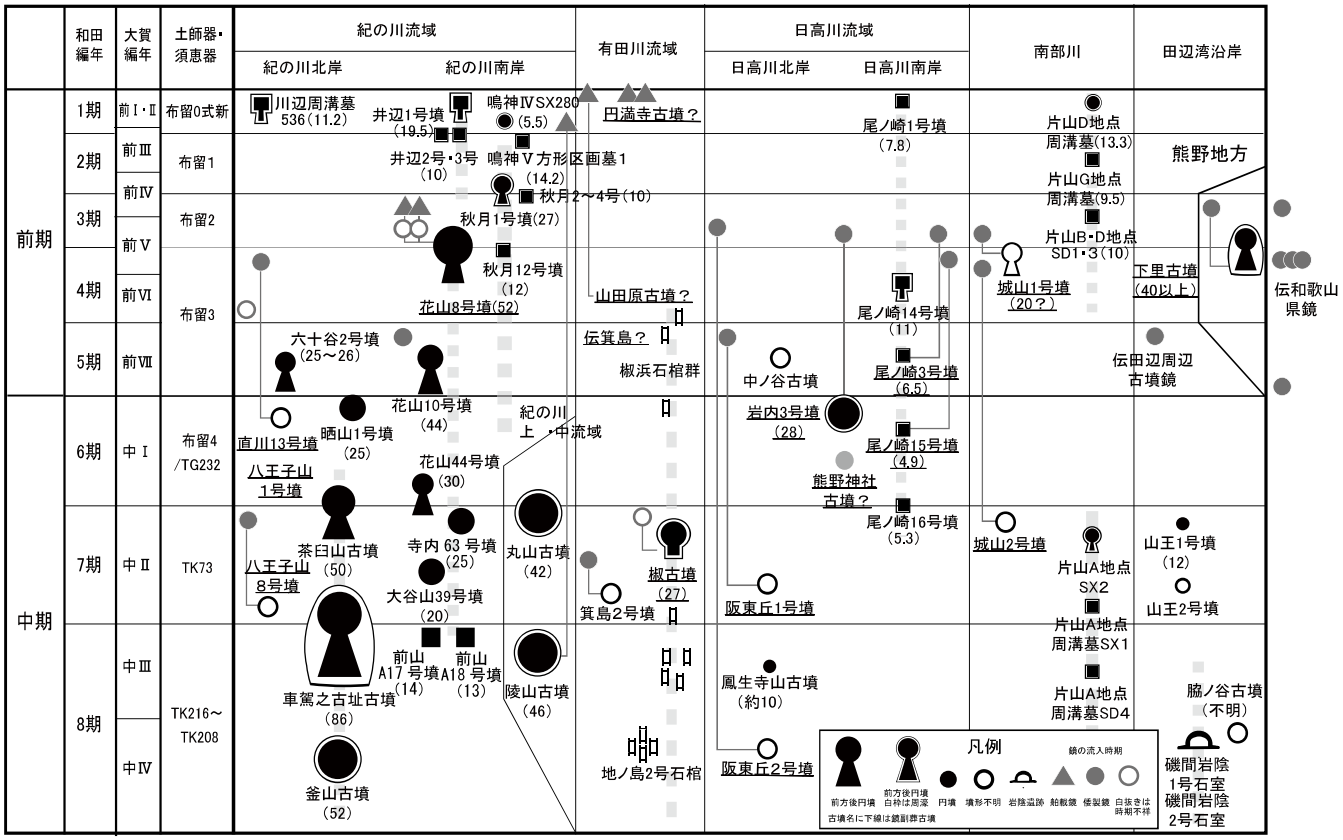
（２）銅鏡の分布と伝世・長期保有

阪東丘２号墳からは、古墳時代前期中葉から後葉に製作された銅鏡が出土した。紀伊地域では銅鏡、特に倭鏡の出土は紀中地域に多く、紀伊半島の前期・中期古墳の分布の南限付近に位置する（田中・岩井 2022、第 14 図）。これらの古墳では、面径 9.3 ～ 14.4 ㎝の小型の倭鏡の出土が顕著である。また、外表施設や墳丘に不十分な点を残すが、本古墳のように埋葬施設や副葬品配置などの点で、古墳祭祀を十分に受容しているといえるだろう。こうした状況を王権中枢の視点からみれば、前期中葉から後葉にこれまで古墳が不在だった地域をネットワークの拠点に組み入れるべく、ルートの開拓と交流関係の構築が図られたといえる（橋本 2010、下垣 2018）。

一方、阪東丘２号墳の副葬品の編年的位置からは、銅鏡の製作時期と土器及び鉄刀、鉄鏃、ガラス小玉からみた古墳の築造時期には時期差が認められ、銅鏡の副葬までに伝世または一定の保有期間が認められる。同様に、紀伊地域では、阪東丘２号墳の他にも同様の銅鏡の副葬までに伝世または一定の保有期間を認めるべき古墳が、岩内３号墳（捩文鏡）、阪東丘１号墳（二神四獣鏡）、尾ノ崎３号墳（五神像鏡）、尾ノ崎 15 号墳（珠文鏡）、城山２号墳（内行花文鏡か）など複数認められる。

しかし、銅鏡、特に倭鏡は、その授受から副葬について一部の例外を除いて保有期間が短いのが一般的である（下垣 2018）。このため、銅鏡の授受にみる王権中枢と紀伊地域の首長との関係がそのまま古墳の築造動向に示されていない可能性がある。

そこで、銅鏡の入手時期と古墳の築造時期を整理すると次のとおりとなる（第 15 図）。多くの地域では銅鏡の授受と古墳築造と副葬が一体のものであるため、前期中葉から後葉にかけて古墳の築造が活発化するが、紀伊地域、特に紀中地域ではこの時期には銅鏡の授受に終始し、銅鏡は有力集



第 15 図　紀伊における前・中期古墳の編年と銅鏡の製作年代

団内で保有され、すぐさま古墳築造へと至らない。この点を各地域における古墳築造の政治的選択性という側面から評価すれば、紀伊においては古墳の築造時における副葬品として銅鏡の授受が行われたのではなく、自らの集団の有力性を示す器物として、銅鏡が入手されたと考えることもできる（田中・岩井 2022）。阪東丘２号墳の銅鏡の伝世・長期保有からは、以上の点を補強できる。一方、銅鏡の授受から副葬までのさほど保有期間が認められない花山８号墳、下里古墳、城山１号墳については、墳丘の規模や埋葬施設、副葬品の質と量、舶載鏡または 15 ㎝以上の倭製鏡を保有するという点で、王権中枢との強い関係性を反映していると考えられる。　（田中）

おわりに

本稿では、阪東丘２号墳出土遺物の図化資料と巽氏作成原稿を紹介し、古墳の編年的位置付けとそこから派生する問題について言及した。県内には古くに調査や発掘が行われ、現状の研究水準から再検討を要する古墳出土資料が数多く存在する。引き続き、こうした再検討を通じて、地域から古墳時代像を明らかにしたい。　（田中）

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々からご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

岩本　崇、岩井顕彦、大賀克彦、巽淳一郎、前田和彦

本稿の執筆は田中、佐藤、濵﨑、横臼が協議の上、はじめに、２（１）・（２）・（５）・（７）、３、おわりにを田中が、１、２（６）を濵﨑、２（３）・（７）・３の一部を佐藤が、２（５）・（７）・３の一部を横臼が執筆した。

【註】

１）本文中の標記は阪東岡だが周知の埋蔵文化財包蔵地名に合わせて、阪東丘と表記する。

２）発見者については伏字とする。

３）旧漢字及び非常用漢字は現代風に改めた。

４）『御坊市史』では素環頭柄頭に改められている。

５）本稿での時期区分はそれぞれの遺物の編年的位置付けを

重視しつつも、共通の編年として大賀克彦氏の編年観に従い記述する（大賀 2002a）。

６）巽氏宅で確認されたという２連のガラス小玉が残りのガラス小玉にあたる可能性も考えられるが、未実見のため詳述は控えたい（第１表：阪東丘２号墳出土遺物一覧表）。

【参考文献】

伊藤　彰 1996『－ガラスにおける－炎と色の技術』アグネ研究センター

今尾文昭 1991「配列の意味」『古墳時代の研究』３雄山閣

岩本　崇 2004「副葬品配置からみた三角縁神獣鏡と前期古墳」『古代』第 116 号　岩本崇 2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』に採録

岩本　崇　2017「古墳時代倭鏡様式論」『日本考古学』第 43 号　日本考古学協会

岩本　崇・上野祥史・谷澤亜里 2023「山口県白鳥古墳と阿多田古墳の副葬品」『器物の「伝世・長期保有」「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持』

大賀克彦 2002a「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　清水町教育委員会

大賀克彦 2002b「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　清水町教育委員会

大賀克彦 2002c「島根県下のガラス製品」『島根考古学会史』第 19 集　島根考古学会

大賀克彦 2002d「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第９巻　小学館

大賀克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』 島根県古代文化センター

大賀克彦 2020a「下北方５号地下式横穴墓出土の玉類」『下北方５号地下式横穴墓』宮崎市文化財調査報告書第 128 集　宮崎市教育委員会

大賀克彦 2020b「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしえの河をのぼる－古川登さん 退職記念献呈考古学文集－』『いにしえの河をのぼる』制作委員会

川畑 純 2015「第１部 第１章 古墳出土鏃の編年」『武具が語る古代史　古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』11 号

巽　三郎 1981『御坊市史』第三巻　史料編Ⅰ　御坊市史編さん委員会

齋藤大輔 2020「第２章 古墳時代刀剣の様式編年」『古墳時代の武装と境界領域』福岡大学人文科学研究科史学専攻考古学専修令和元年（2019）度博士学位申請論文［文学］

下垣仁志 2003「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』49　九州古文化研究会

下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社

下垣仁志 2018『古墳時代の国家形成』吉川弘文館

鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集　帝京大学山梨文化財研究序研究所

田中元浩・岩井顕彦 2022「和歌山県日高郡みなべ町城山古墳群の研究―紀中における前・中期古墳の再検討―」『紀伊考古学研究』第 25 号　紀伊考古学研究会

田辺昭三 1966『須恵邑古窯跡群』Ⅰ平安学園考古学クラブ

田村朋美 2013「日本出土アルカリ珪酸塩ガラスの考古科学的研究－弥生～古墳時代に流通したガラス小玉の再分類－」

中村　浩 1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会

橋本達也 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系

福永伸哉 1995「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部

藤田　等 1994『弥生時代のガラス研究』 名著出版

森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第 74 巻第６号　史学研究会

和歌山県教育委員会 1955『紀伊考古学圖録』和歌山県教育委員会

Oga,K. ,Tamura,T. 2013. Ancient Japan and theIndian Ocean Interaction Sphere:Chemical Com-positions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE) .Journal of Indian Ocean Archaeology. 9:35-65.

Francis,P. 1990. Glass Beads in Asia Part 2. Indo-Pacific beads. Asian Perspectives, 29-1, pp.1-23

【付記】

脱稿後、巽淳一郎氏より阪東丘２号墳出土のガラス小玉に該当する資料の存在について情報提供があった。資料については照合後、阪東丘２号墳の資料として御坊市教育委員会へ寄贈されている。今回の検討では触れることができなかったが、他日を期して検討したい。　（田中）

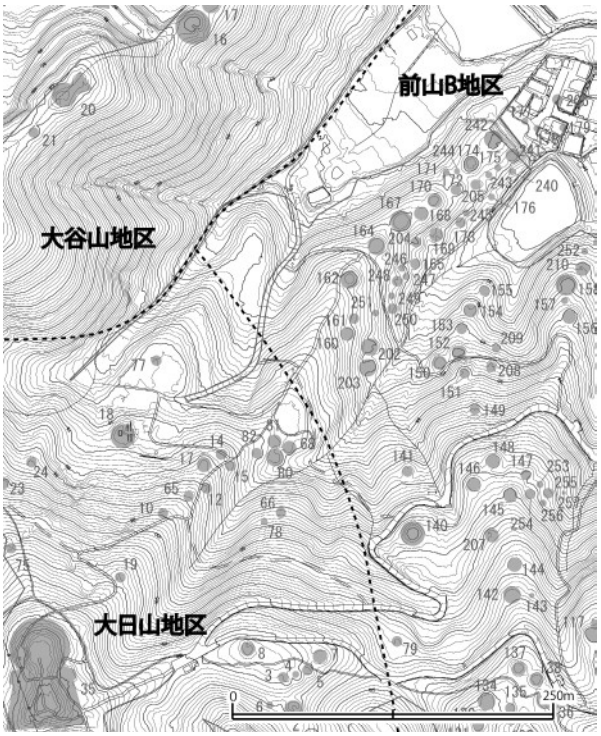
＜研究ノート＞

宮田啓二『昭和二七年秋冬　岩橋千塚古墳群　調』
－大日山地区編②－

石丸　彩・上村緑・金澤　舞・瀬谷今日子・冨永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加

はじめに

『昭和二七年秋冬　岩橋千塚古墳群　調』(以下、「当資料」という。）は、和歌山県の郷土史家である宮田啓二氏が昭和 26 ～ 29 年（1951 ～ 1954）に岩橋千塚古墳群などの踏査や聞き取りの記録を書き留めたものである。当時やそれ以前の岩橋千塚古墳群などの状況を知ることができる大変貴重な資料であることから、令和２年度より有志で当資料の書き起こしを行っている。令和２年度には花山地区、令和３年度には大谷山地区、令和４年度には大日山地区の一部の書き起こしと考察を行った（石丸ほか 2021・2022・2023）。本稿では、令和４年度に記載できなかった現在の大日山・前山Ｂ地区の一部、当資料の大日山第Ⅱ稜について記載している 49 ～ 63・69 ～ 86 頁の書き起こしを掲載し、若干の考察を行う。なお、編集は上村・金澤が行った。



第１図　現在の大谷山・大日山・前山Ｂ地区の古墳分布図（和歌山県教育委員会 2019）　※番号は古墳番号を示す

書き起こしは、およそ各頁数に分けて掲載し、旧字やくずし字[1)]、誤字もすべて原文のままとした。文字が判別できないものは、『□』と表記している。また、補足が必要と思われる箇所には、注記《＊　》を付記した。

今回掲載できなかった残りの頁の書き起こしについては、次年度以降の『和歌山県立紀伊風土記の丘研究紀要』で公開予定である。

なお、当資料に記載されている古墳番号は、現在の古墳番号（和歌山県教育委員会 2019）と異なっている。記載内容をわかりやすくするため、現在の大日山及び前山Ｂ地区と当資料の古墳番号との対応関係を先に示し（図１、表１・２）、書き起こしにも注記する[2)]。ただし、全ての対応をとることは困難であったため、確定的でないものについては「？」を付記、もしくは複数の候補を列記している。

第１表　大日山地区の古墳対応関係①

当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要	備考
Ⅱ稜１号墳	前山 B242 号墳	径 12 ｍの円墳。尾根の最下墳。埋葬施設不明。墳丘に凹みあり。墳丘西側に平坦面あり。	
Ⅱ稜２号墳	前山 B174 号墳	径 15 ｍの円墳。横穴式石室玄室残存。羨道埋没。南面開口。川原石あり。	
Ⅱ稜３号墳	前山 B172 号墳	径 16m の円墳。横穴式石室玄室奥壁崩壊。両側壁完存。羨道南東方向。羨道位置に小白海石及び川原石散乱。墳丘中に土器《＊須恵器》片あり。	
Ⅱ稜４号墳	前山 B170 号墳	径 9m の円墳でこの付近の大墳の一つ。横穴式石室の玄室左壁《＊西壁》完存、右壁《＊東壁》側一部崩壊。	
Ⅱ稜５号墳	前山 B168 号墳	径 5 ｍの円墳。石材抜き取られ痕跡をとどめず。石室右壁《＊西壁》完存、右壁《＊東壁》側一部崩壊。	
Ⅱ稜６号墳	前山 B167 号墳	径 5 ｍの円墳。未掘墳か。墳丘に掘割あり。	
		当資料記載地点は前山 B167 号墳だが特徴不一致。前山 B160 号墳に記載特徴と類似する掘割あり。記載内容誤記か。	
Ⅱ稜７号墳	前山 B164 号墳	径 8m の円墳。横穴式石室の玄室奥壁完存。奥壁上に蓋石残存。床面川原石あり。	
Ⅱ稜８号墳	前山 B162 号墳	径 5.5m の円墳。横穴式石室玄室残存。床面川原石あり。土師器出土。	
Ⅱ稜Ａ号墳	前山 B241 号墳	１号墳Ａ。横穴式石室の玄室半ば残存。墳丘斜面に長さ 1.1m の緑泥片岩あり。	
Ⅱ稜Ｂ号墳	前山 B240 号墳	１号墳《＊前山 B242 号墳》の南下に位置する径 5m の小円墳。墳丘に石材散乱。墳丘下に長尾池に沿う道あり。	

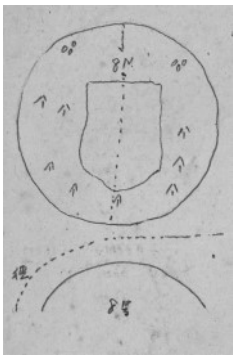
第２表　大日山地区の古墳対応関係②

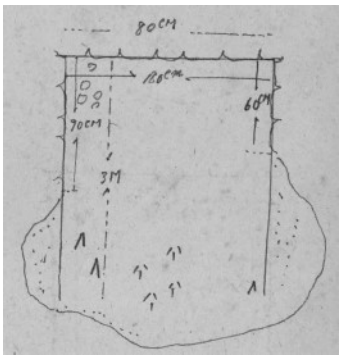
当資料番号	現古墳番号	当資料記載概要	備考
Ⅱ稜Ｃ号墳	前山 B175 号墳	1 号墳《＊前山 B242 号墳》の南下に位置する径 5 ｍの円墳。墳丘にＴ字形の凹みあり。石材 1 個あり。	
Ⅱ稜Ｄ号墳	不明	2 号墳《＊前山 B174 号墳》の南下に位置する径 5 ｍの円墳。横穴式石室玄室北壁完存。墳丘南 2m に道あり。	
Ⅱ稜Ｅ号墳	前山 B243 号墳	2 号墳《＊前山 B174 号墳》の南下 6 ｍに位置する径 6 ｍの円墳。墳丘中央に 3 か所の盗掘穴あり。	
Ⅱ稜Ｆ号墳	前山 B205 号墳	2 号墳《＊前山 B174 号墳》の南下に位置する直径 2.5m の小円墳。墳丘中央に掘削痕あり。	
Ⅱ稜Ｇ号墳	前山 B176 号墳	Ｆ墳《＊前山 B205 号墳》の直下に位置する。石室半ば残存。	
Ⅱ稜Ｈ号墳	前山 B173 号墳（旧前山 BX16 号墳）	径 4 ～ 5 ｍの円墳。両袖式横穴式石室玄室は完存。側壁が上部 50cm で急に湾曲。	
Ⅱ稜Ｉ号墳	前山 B169 号墳	5 号墳《＊前山 B168 号墳》南下に位置する径 10 ｍの円墳。横穴式石室玄室北壁完存。玄室及び羨道蓋石各 1 個残存。羨道と玄室の高さは羨道が 40cm 低い。床底に川原石 1 個あり。	
Ⅱ稜Ｋ号墳	前山 B165 または 246 ～ 249 号墳	径 5m の円墳。墳丘西側に掘割あり。中央凹む。石材 2 個露出。	
Ⅱ稜Ｌ号墳	前山 B250 号墳（旧 BX101）	横穴式石室の玄室完存。東々南に開口。	
Ⅱ稜Ｍ号墳	前山 B202 号墳	長径 10 ｍ、短径 6m の楕円墳。横穴式石室玄室残存。奥壁残存両行。天井石一部残る。床面川原石あり。	
Ⅱ稜Ｎ号墳	前山 B203 号墳	径 6 ～ 7m の円墳。横穴式瀬ｋ氏逸玄室・羨道完存。南北主軸長尾谷平地より急斜面に移る地点に立地。	
Ⅱ稜Ｏ号墳	不明	2 条の浅い掘り割あり。三段大地の最下段に位置し、南は急斜面	69 頁全体図と 60 頁位置図で位置が異なるため、地点が特定できず同定不可。
Ⅱ稜Ｐ号墳	大日山 68 号墳	直径 6 ～ 7m の円墳。横穴式石室の羨道は西面。崩壊激しく内部に板石数枚あり。	
Ⅱ稜Ｒ号墳	大日山 81 号墳（旧 BX9 号墳）	径 5m の円墳。ほとんど崩壊。横穴式石室玄室上部に石 2 個認める。	
Ⅱ稜Ｓ号墳	大日山 82 号墳（旧 BX10 号墳）	長さ 2m、幅 1.5m、深さ 0.6m の凹みあり。凹み内にカマやバケツ類廃棄。道が墳丘の左方に通じる。	
Ⅱ稜Ｔ号墳	大日山 15 号墳	径 1 ～ 1.5m の範囲に発掘痕あり。埋葬施設の石積み認めず。他例から羨道東南向か。	位置は大日山 15 号墳だが特徴一致せず。Ｔ～Ｗ号墳は 69 頁全体図と 60・61 頁配置図で配置が異なる。
Ⅱ稜Ｕ号墳	大日山 14 または 17 号墳	径 7 ～ 10 ｍの円墳。中央に長さ 2m、幅 1.5m の凹みあり。横穴式石室の玄室右壁《＊羨道北面》とみられる場所に石積 3 個あり。	形状等は大日山 17 号墳に類似か。Ｔ～Ｗ号墳は 69 頁全体図と 60・61 頁配置図で配置が異なり厳密な同定不可。
Ⅱ稜Ｖ号墳	大日山 65 または 12 号墳	径 7 ～ 10m の円墳。墳丘に長さ 3m、幅 2m の凹みあり。埋葬施設の石積み不明。羨道西北向か。付近道路面で厚さ 1cm の須恵器片出土。	石積み未確認のため大日山 65 号墳か。69 頁全体図と 60・61 頁配置図で配置が異なり厳密な同定不可。
Ⅱ稜Ｗ号墳	大日山 10 または 15、19、65 号墳	径 5m の円墳。埋葬施設は長さ 1.9m、高さ 0.4m の竪穴式背ｋ氏逸で主軸は南北。蓋石が両側に 2 個残存。	石室の特徴は大日山 15 号墳だが、位置が一致しない。69 頁全体図と 60・61 頁配置図で配置が異なり厳密な同定不可。

１．宮田啓二『昭和二七年秋冬　岩橋千塚古墳群調』書き起こし

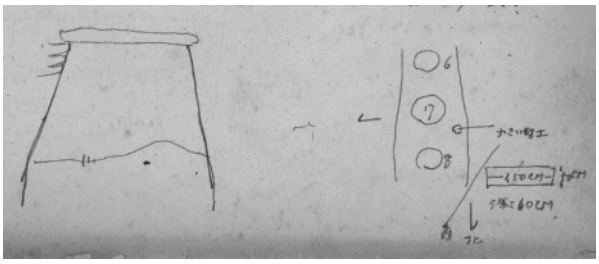
【49 項】

大日南嶺第Ⅱ稜　７号墳《＊前山 B164 号墳》

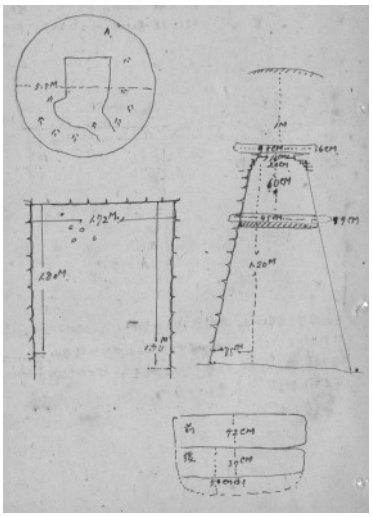




封土高さ南北両面約 4M である　山徑は７号墳《＊前山 B164 号墳》の下方より８号墳《＊前山 B162 号墳》の北辺をめぐり上方に通ずる様になつている　玄室は後壁を完存している。奥壁左隅は床底にして、そこに 5cm ～ 7 ㎝の灰色川原石を散乱している。先づこの石室は半ばを完存して而も石積極めて整正である。隅角石積は交互の手法。後壁上部の蓋石完全で　80CM 厚さ 25CM である　石室上封土約 2M、　玄室高さ 1.90M　70CM あたりより急カーブとなる。

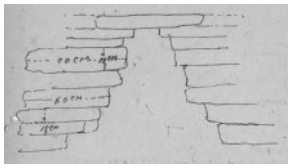


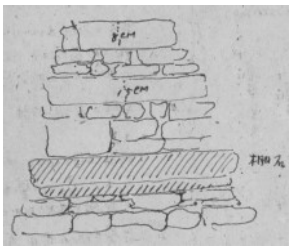
【50・51 頁】

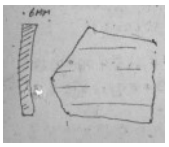


８号墳（実大に口し ㇇）《＊前山 B162 号墳》

玄室内に川原石 2CM ～ 5CM。比較的小さきものを敷く。







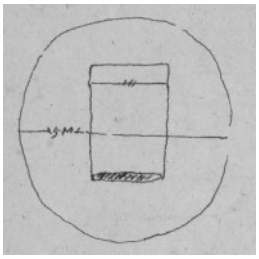
玄室上辺

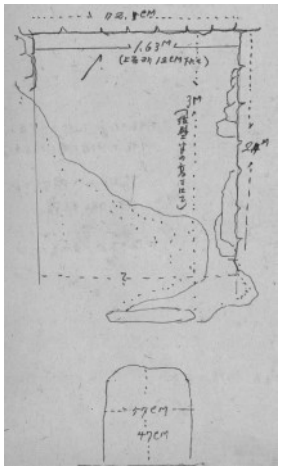
棚石の下部より小石片を差入れ

この形　大日頂上墳《＊大日山35号墳》とは同様手法　積石は大小混じる一般例に倣し稍々粗雑

四隅の石組ハ交互差入の形

1/2図　赤岩褐色　土師器　皿様土器片





【52・53頁】

大南　第Ⅱ稜　J号《＊前山B204号墳》

長尾谷平地巨石の真上にあたる古墳

玄室は半ば完全に存在。凡そ五分之四程度は埋没しているものである　敷石其の他露出していない

周辺土砂崩壊の為　後壁右隅に深さ

左隅はその半分程度露る

右壁の石組錯雑

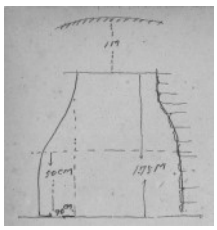
残存右壁の如きは土圧の為に傾斜して且つ整正の壁面を止める等如何に堅緻な構造であるかを察知出来る。

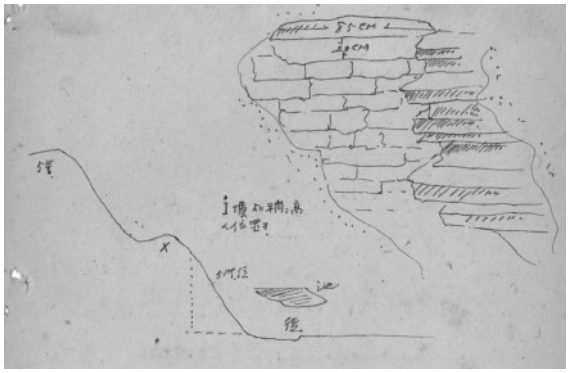
奥壁二隅石積は左右壁を以て後壁を囲む形をとり一見この手法は左右壁の軟弱を思はせる様であるがこの実例に徹して少しも其の患いのない了を立証するものである。

長軸3Mは前壁不明の為推定である　後壁中央部より前方立石にはかりたるもの

緑泥岩、羨門蓋石？上部より発掘せられたる為その儘になっているものかと思う。勿論上部の方を露出しているのである

底面より70CM程度は内面カーブ緩　それ以上図示の如きカーブをとり　前記　号墳と比較してこの形はあらかじめ意図した設計に依り積上げられたものと想像する　上下の間90CMの差がある。封土は現状に於いて約1M



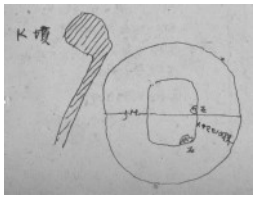


正面見取図

蓋石残欠？下の石より5CMばかり出張る。

I墳≪＊前山B169号墳≫より稍々高く位置す。

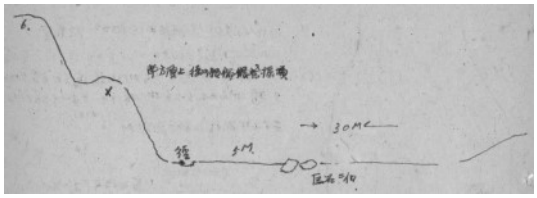
K墳《＊前山B165または246～249号墳》



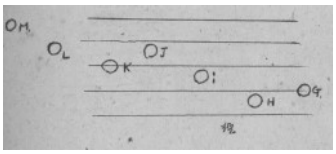
西側に掘割あり、これは戦時中壕を掘りたる跡にて、□恐らくこの墳は他附近の例に倣し、玄室をとゞめていたであろうが、この掘割の上を以て埋めるものと思われ　中央少し凹める形になつて　一見本発掘墳の様に思はる

【54頁】

南方頂上　徳川頼倫候発掘墳≪＊≫

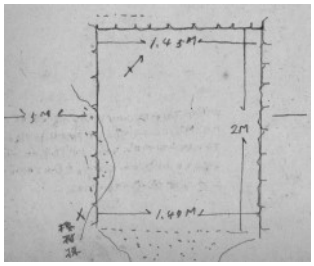


Ｇ－Ｋ《＊前山 B176　号墳－前山 B165、246～249 号墳？》高低図



昭和 27.1.5 午前調

Ｌ墳《＊前山 B250 号墳（旧 BX101)》



玄室を完存する

羨道 150°、東々南

墳丘下１段をなし

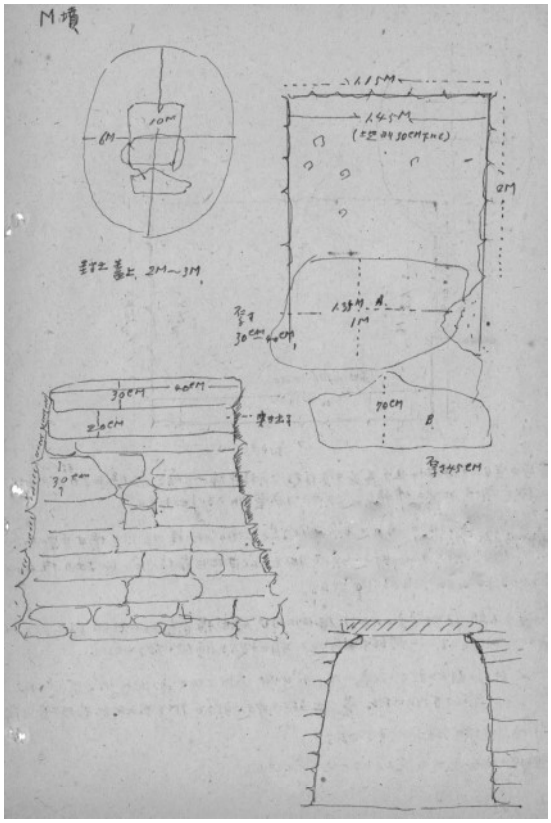
徑に降下す

封土　現在 1m 存。復原 2．5m 程度

石組□《＊総？》体に整面。左右長軸をもつて前後壁を囲む形　五分之四程度埋没。

【55 頁】

M墳《＊前山 B202 号墳》



石組は左右壁にて囲む形を基本として交互差入

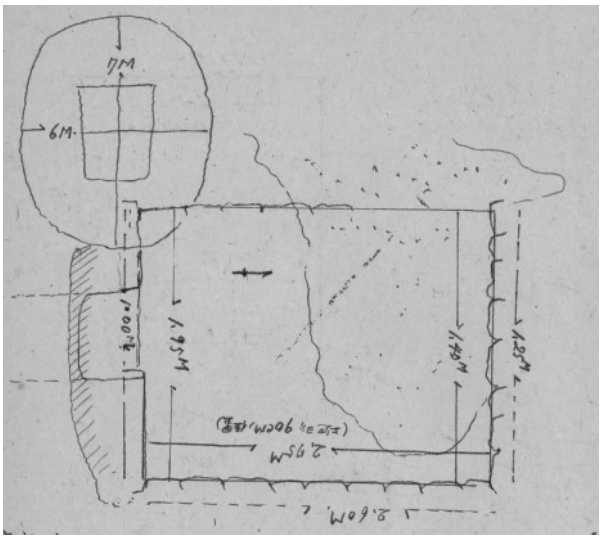
床底敷石　川原石にて 3cm～10 cm　灰、白

積石　下方に小さく上部に大

【56・57 頁】

Ｎ墳《＊前山 B203 号墳》　昭和 27.1.7 午后実調

寒冷也



玄室の完全に保存され、且つ羨道の完存する。この稜中随一である。左壁遍半は封土の崩壊に依り玄室北寄に堆積して　この面より玄室内に入るｱが出来る。殊に本墳にあっては羨道の正南に面することであり、相接するM号墳《＊前山 B202 号墳》は東々南（殆どすべてがそうである）であるに対しこれは主軸を正しく南北に存するｱは一見封土の構想に於いても知るｱが出来興味あるｱ實《＊事実》である。

玄室の石組下方に小上方に大なるは他例に同じ、壁面、構築当初に於ては整正の様であるが、それにしても、一般的徴証とて稍々粗なる傾向を持つものである。

尚又外形の封土に於て、玄室に比し小であり正円でなく南北に少しく長く、これ又一つの特徴をなすものである。蓋石上封土の厚さに於ても１M を数える。比較的土盛の薄きｱ墳丘全体に釣り合うべき厚さである。

全体の五分之二を没していると見るべきである。

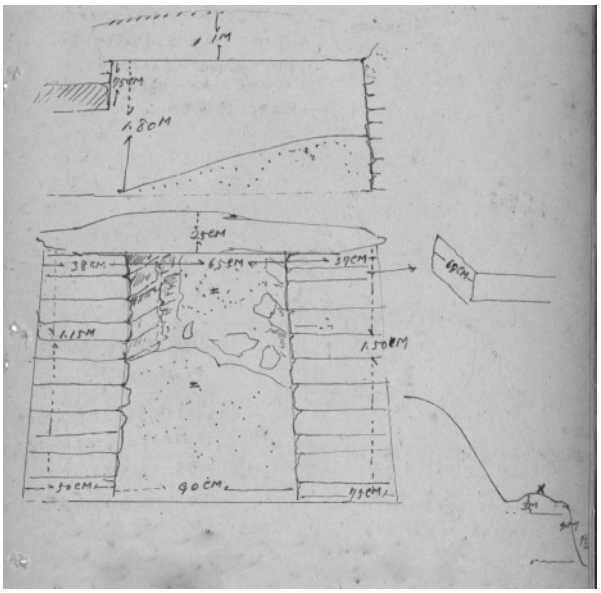
奥壁長さ 1.40M 上辺石積崩壊に依り右壁完存に基準して上辺より 65 cm下方の長さであるｱを附記す

石組　前後壁にて左右壁を囲む形、但し後壁に於てはこの基準にしたがひ交互差入手法を混ず

普通 30 cm厚さ 5CM 程度の石、大なるものにて

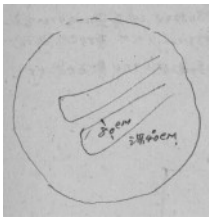
60CM 厚さ 7CM、使用、西南隅は殆んど原形に近く床面を露出しこの部面狭小のため敷石を認めず

玄室は上方に緩き持ち送り形式　此の地点長尾谷平地の急傾斜に移らむとする奥まりたる位置にあり　墳丘上より花山東端部、河北紀伊村西端以東の視角を有す　玄室中鬼羊歯朶密生す。



【58 頁】

Ｏ号墳《＊不明》

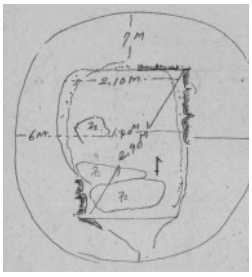


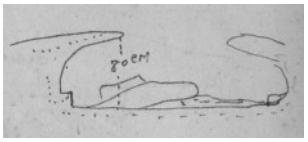
この墳は未発掘の様であり図示する様に東北に面し浅き二條の掘割のあるのは試掘したものであるか或は戦時中の工作になるか不明

この地点は長尾丘陵中央角の平坦部の下方に相當し､かつて何等か人工の跡を見る　三段の台地(幅 10 m位）の最下に位置し　南斜面は急斜面で谷間の徑に達する　下より見れば完全に一墳をなすもこの位置に於て封土頗る顕著でない

Ｐ号墳《＊大日山 68 号墳》

羨道の位置は西《＊正？》面に面している┐N 号墳《＊前山 B203 号墳》と同様である　崩壊埋没甚しく上部石積を湾曲した封土の下に東北角に一部露出　西南角に一部露出する□になる　但しこの両角の存在に依り上辺の寸法を推定する┐が出来る

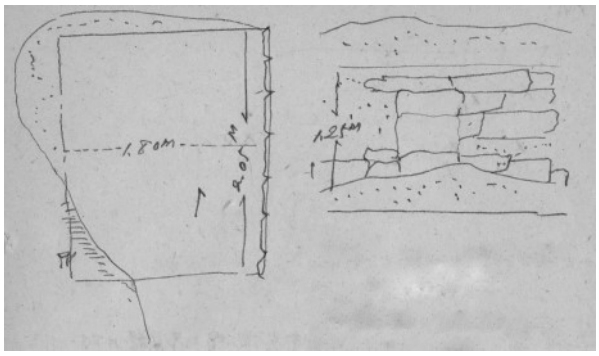




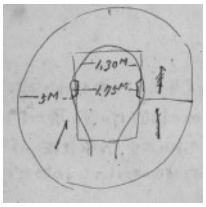
【59 頁】

Ｑ号墳《＊大日山 80 号墳》

右壁面を残存する。他に石材転用されたる為その一部を残すにすぎない　残存石組中最大 75CM 厚さ 14CM　五分之四を没した程度



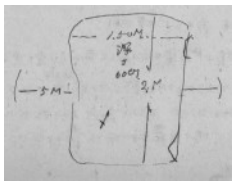
Ｒ号墳《＊大日山 81 号墳（旧大日山 BX ９号墳)》



羨道位置東々南

封土 70CM 現存　殆んど崩壊して玄室上部石二個を認む

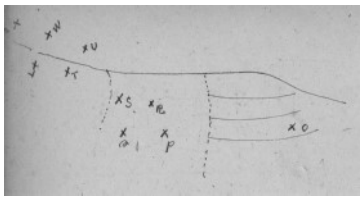
Ｓ号墳《＊大日山 82 号墳（旧 BX10 号墳)》



徑が本墳の左方に通じている（中にカマ、バケツの類をすてているのは旧安藤家（民家）から通じる道がここに出る為也）

【60 頁】

Ｘ号墳《＊大日山 18 号墳》



大日南嶺頂上墳《＊大日山 35 号墳》より第Ⅱ稜に下る最上位に位置する墳である。これも戦争末期に依る壕となり墳丘上に石を散乱しているが既掘本掘判然しない

封土中、5CM ばかり砂岩川原石を認む

本日調査にあたりW墳《＊大日山 10 または 15、19、65 号墳》までを実査確認し一應長尾谷に下り南斜面を確めつつ大日南嶺頂上に達して頂上頂南々東台地の調査を行い更に頂上墳下に□《＊引？》き通る　X墳《＊大日山 18 号墳》を確め曲折して安藤下邸の庭に出て同家庭後にある一丘の古墳なるを確かむる為（既存金龍様と呼ぶ祠にあっている）社殿背後に古墳あることを認め備忘す　即ちX墳《＊大日山 18 号墳》である

この墳は頂上墳《＊大日山 35 号墳》と同様古墳の玄室を利用して前に祠堂を建てたものであるが玄室の位置が原形のままであるかどうか疑問であり　砂をしき天井はコンクリートで固めている長軸 2M 余りであるがすでに羨道よりの格好に於いても変形した冂は明らかである。開口し、古墳の存在を利用した冂は明らかである。

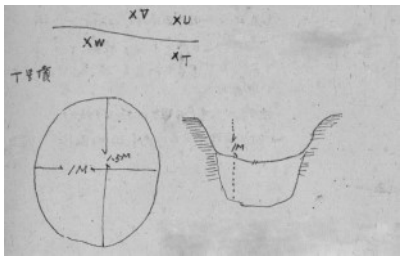
【61 頁】

大日南嶺　第Ⅱ稜

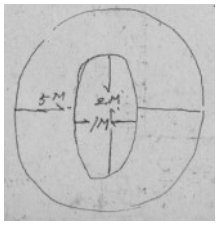
昭和 27. 1.9　午后　3 時出一日没迄調査

（長尾の坤艮《＊南西－北東》に延びたる尾根である。）

T 号墳《＊大日山 15 号墳》

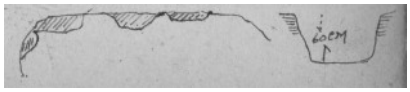


本墳は南斜面長尾谷に墜ち直ちに前山第Ⅰ稜に連続する　図示する様に楕円形に発掘されているが現在すでに玄室石積を認めない。且つ灌木密生しているが、他例に倣して羨道は南面していたもの々様であり、楕円形主軸は(羨道東南向）戌辰《＊西北西－東南東》の方位である。（この地点に出るにはオイワ谷を入り安藤氏下邸門外を山陵にそ《＊出？》って少しく登るを便利とする）

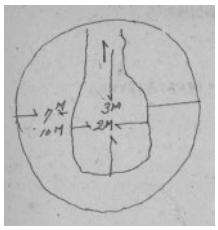


U号墳《＊大日山 14 または 17 号墳》

T 号墳《＊大日山 15 号墳》と同様すでに埋没しているし



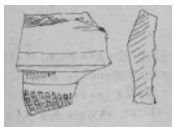
玄室跡に鬼歯朶密生。墳丘北面は直ちにオイワ谷に墜つ　玄室右壁（羨道北面として）に



石積残角石《＊両？》三個を認める

【62・63 頁】

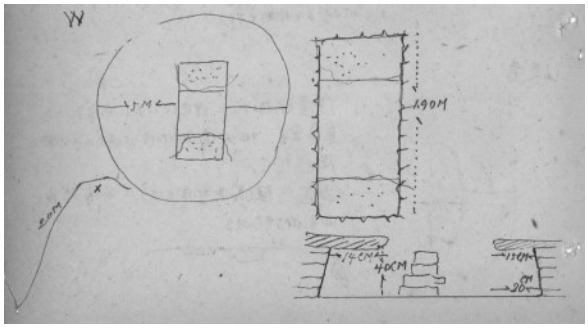
V《＊大日山 65 または 12 号墳》 玄室石積を認めない　発



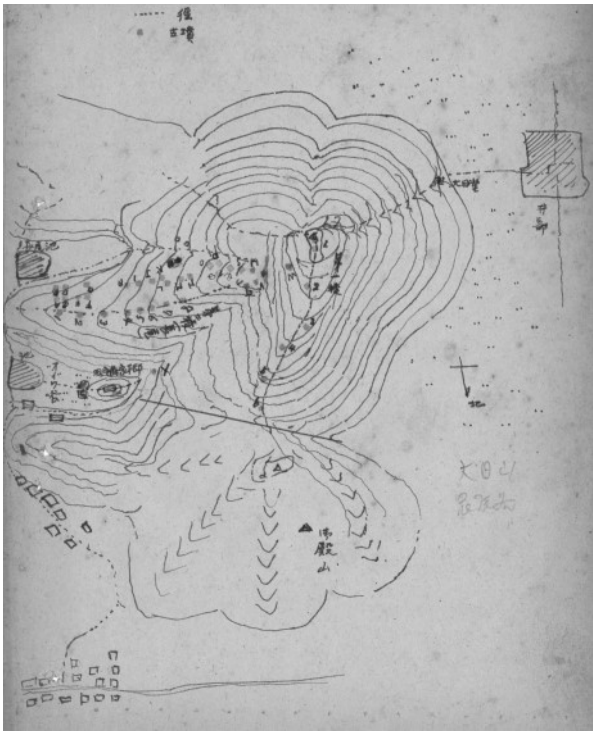
掘の痕跡より見れば羨道西北向の跡を留めてをり、地形は北斜面直ちにオイワ谷に墜ち南面は稜線TUの中間を上昇してV墳南丘下を通る、篠灌木密生　稜線上各墳と同程度の大きさを有するものである　※付近道路面に厚さ 1CM 祝部土器片

W《＊大日山 10 または 15、19、65 号墳》

本墳は第Ⅱ稜中第８号墳《＊前山 B162 号墳》につぐ特色を有するものである。箱式石棺槨《＊竪穴式石室》にして長さ 1.9M で高さ 40CM なる故、凡そ 10CM 程度の細長板石小石片を小口積にて四五個にて足る高さであり　主軸は正南北線上にある。小供の墳として認むべき冂大日北嶺中に見るものと同様である。石室完全に保存され、蓋石を両端に二個をのこす。且ツ左右長壁には傾斜は微弱であるが前後の短壁に於て、5CM 程度上部に傾斜している冂は注目すべき冂である。



蓋上封土は此の墳に於て正確に測るヿが出来るが、1.60M である。封土中に石槨の石の如き大きさのものを含む。篠竹灌木密生。南斜面は直ちに20M 程にて長尾谷に墜ち前山第Ⅰ稜脚に連続す。



【69 頁】大日山略図　第Ⅱ稜調査　宮田啓二

【70 頁】

大日山南嶺

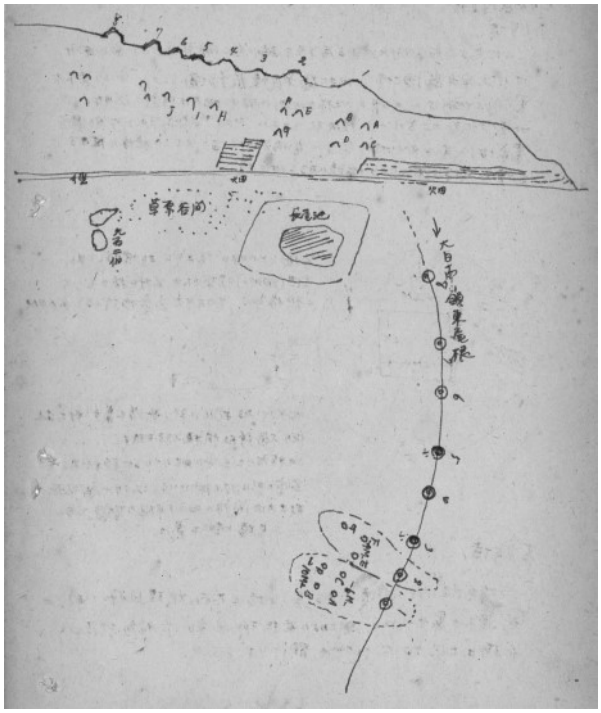
26.12.25・・・・第Ⅱ稜　1 号、2 号墳及ＡＢＣＤＥＦＧ小墳調査完了　山名御殿､安藤家下邸、長尾池、オイワ谷、聞知　花山周辺地形観測　尚前山（共有）大日山　個人持、宮堰川、池ノ谷、□□《＊杉屋？》ノ山等地方は呼称　聞知

【71 頁】

昭和 26.12.25 午后調　晴後曇細雨

枯笹の山極メテ美し

第二陵（長尾）古墳見取写生…前山（長尾池対岸）最低古墳丘ヨリ



【72・73 頁】

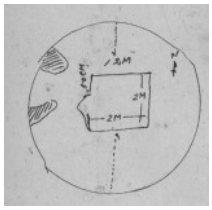
オイワ谷の池の堰を渡り畑に登り、第 1 号墳≪＊前山 B242 号墳≫より調査を開始す　畑地より直ちに疎松笹厚の地に入り、1 号墳≪＊前山 B242 号墳≫はかつて畑地なりし（恐らく戦時中）平坦部の盡きるところにあり

大日南嶺第Ⅱ稜

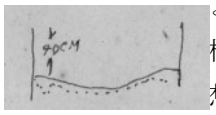
第 1 号墳≪＊前山 B242 号墳≫

※この地点は左右山脚に池ある尾根末端に近く眺望東北一面に開け西に大日南嶺頂上墳≪＊大日山 35 号墳≫及び北嶺第Ⅲ稜最下方墳に対する。これより東下方登り来りし地には一、二墳あつた様な地形であるが現在は形跡を認めない

北面オイワ谷の上方に一丘陵あつて、その上にかつて安藤家老の下邸あり民家農家となる一劃《＊一画》を仰ぐ地形、前方に高橋神社をみる。以下この稜線に関する古墳より大様上述の如き環境にあるを附記する。

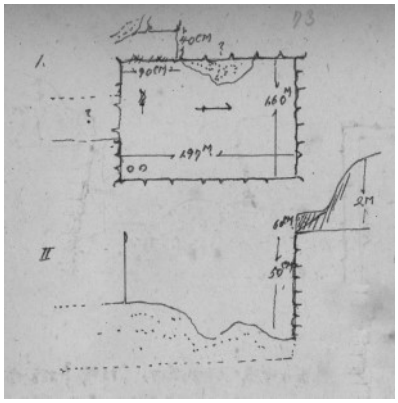


石槨をとどめない　頂上中央より発掘してをり石垣（畑地の）構築のため石材を抜き去ったと想像される。そのためか玄室内

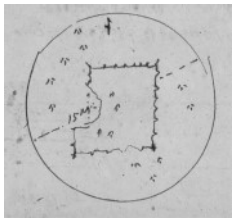


浅くなり 40CM の深さである。
現状に於て笹、灌木、叢生、封土　南面側２箇所より試掘の跡を残す。この程度にて玄室に触れているか疑問であるが玄室の形に掘り抜いているところより一應既掘とする　封土の四周様《＊殊？》に西方は平坦の基盤を有している点 2 号墳≪＊前山 B174 号墳≫と趣きを異にす

第Ⅱ号墳≪＊前山 B174 号墳≫
　墳丘径約 15 m、円墳である。第 1 号墳≪＊前山 B242 号墳≫と大様規模同様である。笹、灌木の叢生の中に頂上より発掘され、玄室は 3/5 程度埋没して石槨は上辺 50 ㎝～30 ㎝を顕している

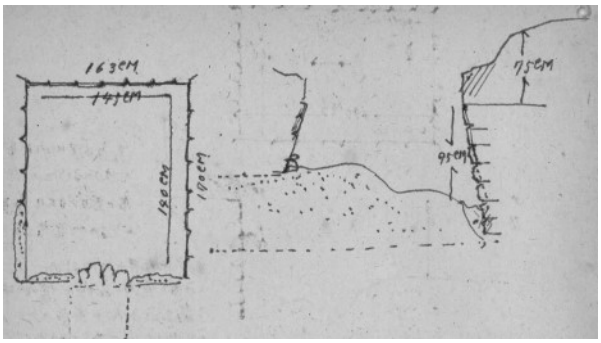


羨道は認められず竪穴式の様に思われるが、土の埋没は 3/5 程度と思われるため羨道を没したと見るのが妥当であろう
　玄室西南面に図示する如く 40CM 凹入りになり、且つ石垣を伴ぶのは中央土の崩出した部面を羨道とみて 1 側の石の欠如したものの様に想像されるが　197CM の長径の示すところやはり羨道南面と見るのが妥当であろう
　東南角に小石二個、共に灰色川原石にて、大 5 ㎝巾 2 ㎝、但しこの位置は床面でなき了明らかにて、本墳に使用されたものの一部露出したものと見る
　北東両面の石積整正にして最大のもの 40CM、厚さ 10 ㎝、細大適宜塩梅している了は他の玄室に見受るところと同様である

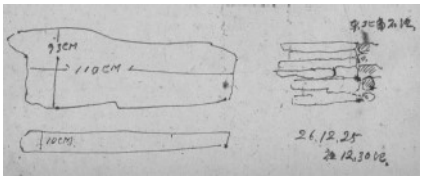


石組１図の如く長軸壁にて短軸を囲える形、封土南斜面に沿って降下し約 5M、1 号墳≪＊前山 B242 号墳≫と異り、封土下方直ちに山稜線に沿う

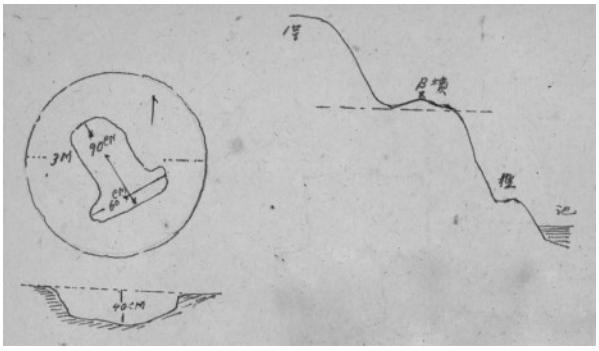
【74 頁】
第 1 号墳附Ａ《＊前山 B241 号墳》



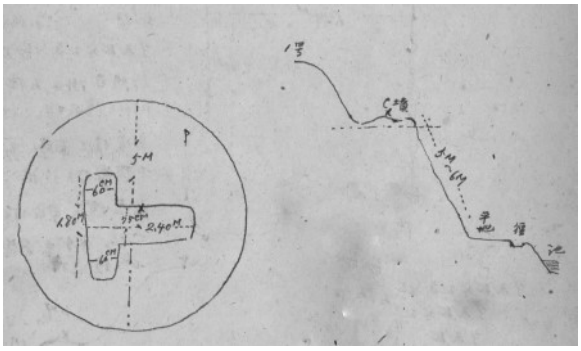
　半ば玄室を存するものである。羨道は埋没の為か判然しない。察するところ 3/5 程度埋没のものと思われる。羨道は南面していたであろうことは、南斜面に構築の封土の現状に於て想像されるがこの面の石材は抜きとられてなく不明である　掘れば底部に石積を存するかも知れない
　但し残存部北東壁は完存し整正である。上辺より 40CM 許りのところで測った尺度の上辺部に約 20 ㎝～30 ㎝の前道ある了は上部に急カーブする構造にて、石組は東西両壁にて（南）北壁を囲む形は前者と変りがない。南壁に長さ 10 ㎝の石をとどめているのは羨道の上壁の様なれば石槨組石最大 50 ㎝、厚さ 10 ㎝、最小のもの 10 ㎝程度
墳丘西斜面に長径 110CM、短径 43CM 厚さ 10CM の緑泥片岩をとどめる



【75 頁】
大日南嶺　第Ⅱ稜調査
第 1 号　Ｂ墳≪＊前山 B240 号墳≫
　小墳である。子供の塚墓の様に思われる。現状石槨をとどめないが附近に 10 ㎝～15 ㎝位の石の散乱するから察してもとは石室を有したもの々様に想像す。封土高さ 1M 程度、塚下長尾池に沿う山徑



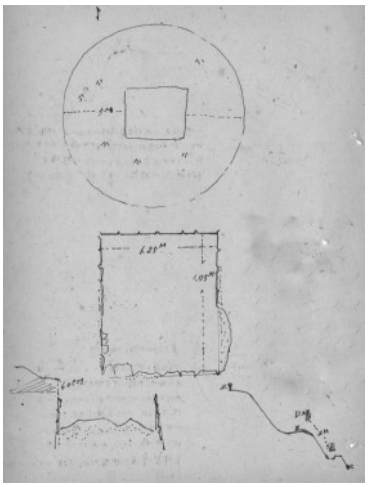
Ｃ墳≪＊前山 B175 号墳≫



長さ 2.40《＊単位抜け》に対して幅 75CM の細長を特色とする　且つ西面主軸とＴ字形をなす。
×印の部に幅 40 ㎝厚さ 5 ㎝の石一個残存するは、かつて石槨の存在を知る。
西面Ｔ字形は羨道の板石を附けたものか、但し、地形としては南面すべきものと思う。2/5 程度埋没と想像される。封土石上に 40CM を数える。

【76 頁】

Ｄ墳≪＊不明≫



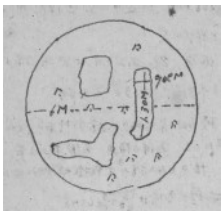
図示玄室尺度はいずれも上辺とする。

北壁一面は完全に保存され東西両壁北角一部南壁一部残存の外は石槨抜取りに依り湾曲をなしている

玄室構造南壁に羨道あるを想像するも現状に於いては崩壊､埋没、竪穴の様な形状である。南斜面 2M ばかりのびて径に達する

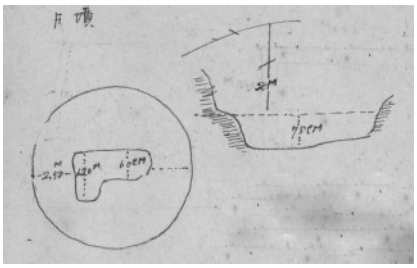
【77・78 頁】

2 号　Ｅ墳≪＊前山 B243 号墳≫



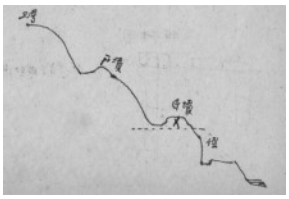
2 号墳≪＊前山 B174 号墳≫下にあつて南墳丘南斜面 6M 位現在径 6M の封土を計算するが図示の如く三箇所に濫掘の跡があり　これらはいずれも玄室に達せず放置されたものの様である。

Ｆ墳≪＊前山 B205 号墳≫



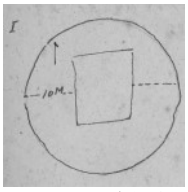
石槨を止めない。墳丘中央稍々南寄に発掘されてをり、径 2 m 余の小墳である。既掘、未掘不明であるが、この程度の封土のものは単簡な石槨を持っていたものでないかと想像する。

Ｇ墳≪＊前山 B176 号墳≫



Ｆ墳≪＊前山 B205 号墳≫の直下に位置し、一見径上の小墳の様に見えるが実際は案外に大きく、且つ、石槨半ば保存されている了驚く墳塚である。先づこの一劃《＊一画》にて最低古墳の一つである。

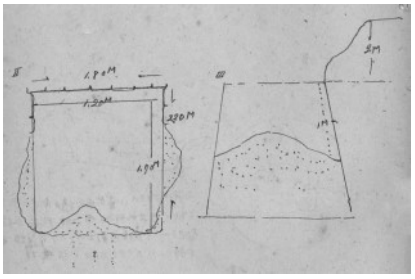
Ｉ《＊前山 B169 号墳》

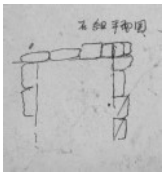


北壁石積完存、北西東角一部残存（各二石残）　羨道埋没して不明、玄室内凡そ 2/5 程度埋没しているものと思われる

Ｉ図、低長 1.80、2.20 ≪＊単位抜け≫は上辺石線より 80CM 下方に測るところである　北壁積石中最大のもの長さ 87CM 厚さ 7 ㎝、90 ㎝厚さ 12CM にして、石材の使用、石組極めて美しく堅緻である　抜きとられたものは附近畑地に使用さ

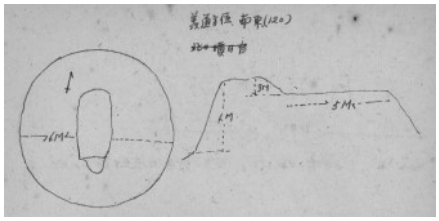
れ為に南西東壁大部分は崩壊している。



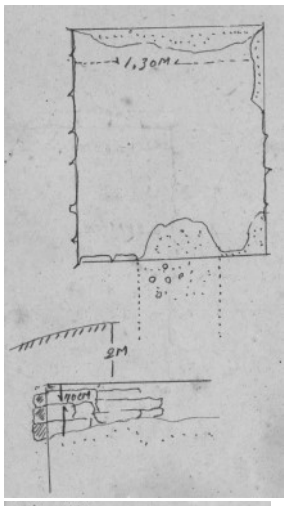


狭き方を囲む定石がこの場合逆になっている｢特色とする　26.12.26 午后 2 時整理中　于時細雨

【79 頁】

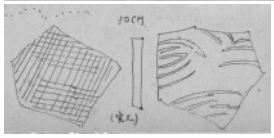


大日南嶺第二稜 3 号墳≪＊前山 B172 号墳≫　昭和 27.1.4. 午后　羨道方位南東（120）



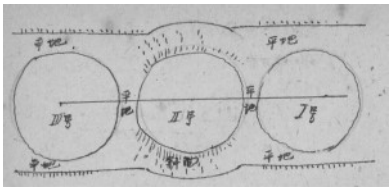
玄室半完。羨道はすでに崩壊して判然しない玄室内埋没状態は凡そ 4/5 を埋めている。

羨道上にあたる位置に本墳敷石と思はれる小石（海石）灰、白色の 3cm 程度の艶あるもの散乱同時灰色川原石を混じている。大は 6 cm、小 3.5 cm



玄室奥壁崩壊、左右両壁は完全、前壁は崩壊している。且つ灌木、笹密生封土中に土器片 1 片混入　石組左右壁にて前後壁を囲む形、他の玄室に対して稍々粗雑なものである｢特色。最大の石長径 50CM

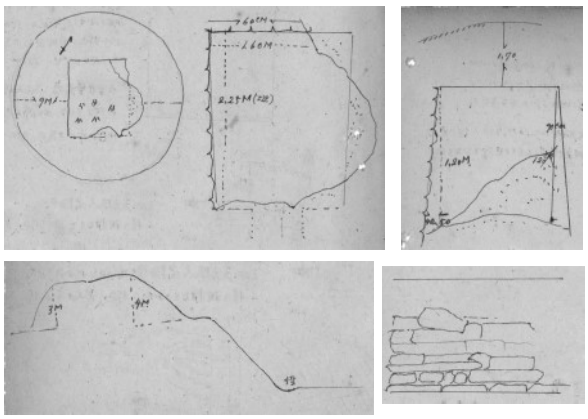
【80 ～ 82 頁】



1 号《＊前山 B242 号墳》、2 号《＊前山 B174 号墳》、3 号墳≪＊前山 B172 号墳≫封土周辺

Ⅱ号墳≪＊前山 B174 号墳≫を中間として Ⅰ《＊前山 B242 号墳》、Ⅲ号《＊前山 B172 号墳》は対象的墳丘下方に平地を持つ

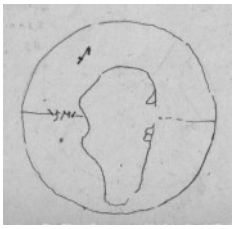
第 2 稜　4 号墳≪＊前山 B170 号墳≫

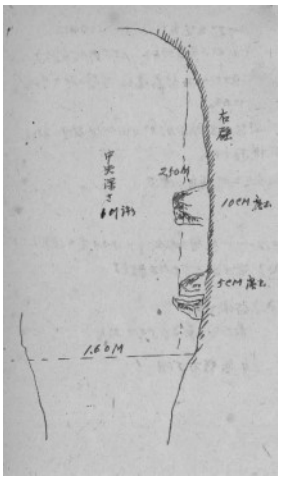


この附近に於ける大墳の一　左右両壁カーブを完存する左壁について見るに約 40 ㎝～ 50CM の差異がある。1.20M の間に於て、左壁の完存する他土砂崩壊して右壁に於て 90CM を残すのみである。底面の状態は不明であるが、畑地石材用に取り去られた模様である。凡そ五分之三、四程度の埋没

石組比較的整正　壁面急カーブ左壁の□□《＊場合？》下に小さき石を使用し上に至るにしたがい大石を使用している　その交互に□に使用されている好例である　最大のもの長さ 45CM 程度床底敷石不明　封土は 1.70M を数える

第 5 号墳《＊前山 B168 号墳》





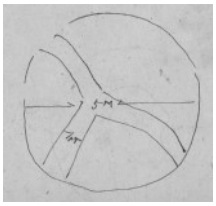
玄室の石材は総べて取り去られ痕跡をとゞめない

凡そ土の凹める形より奥行 2.50M 許り右壁の残存と思われる両三石を遺存する。南面は急斜面にて 10M 許りにて徑に

達する　五分の四程度埋没したものと見るべきである

6 号墳≪＊前山 B167 号墳≫

未掘墳の様に思われる

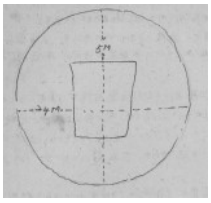


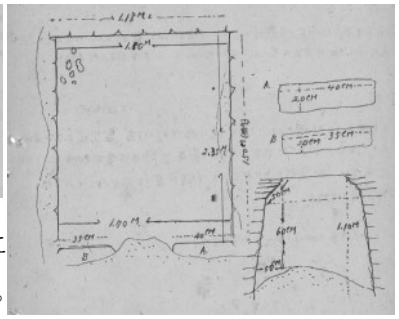
上部に幅 1M 前後の掘割のあるのは戦時中軍の手に依り構造されたものか、古墳としては不自然である。

【83 ～ 86 頁】

大日南嶺第Ⅱ稜

H墳≪＊前山 B173 号墳≫





玄室は完全に保存されている。この附近に於てはかくの如く保存されたもの、例少き中に類例稀な一つである。羨道の位置は土の崩壊に依り埋没しているが、左右羨門の上部の石各一個を露出している了に依り約上辺に於て 1M 巾のものであつた了が分かる。奥壁に近く崩壊の土積を減じ現在 1.10M を側壁に測る了が出来る。

凡そこの部面に於て五分之二程度の埋没と見るべきであろう。床底敷石も奥壁左隅の箇所に於て認められ、すべて川原石を使用し、白、灰、6CM 位のものである。

本墳の特色とするところ左右両壁上部約 50CM 許り急に湾曲する点にてこれは他に認めない構造である。一見、この辺まで石積をなし急に思い出して曲げた格好である。したがつて奥壁上辺に於て、1.18M が下方に 1.80M となる 30 cm～ 40 cm前後両壁に於て上下の差異ありと認められ、左右壁にては約 1M 程度を数える了が出来る。

前壁部の埋没の為、1.70M の幅員は後壁深さの中央部にあたる位置の寸法である。

積石中最大のもの長さ 90CM、厚さ 18CM である。但し整正というには稍々粗雑であり四隅は交互に差入れの形となっている。封土は約 2M 程度。

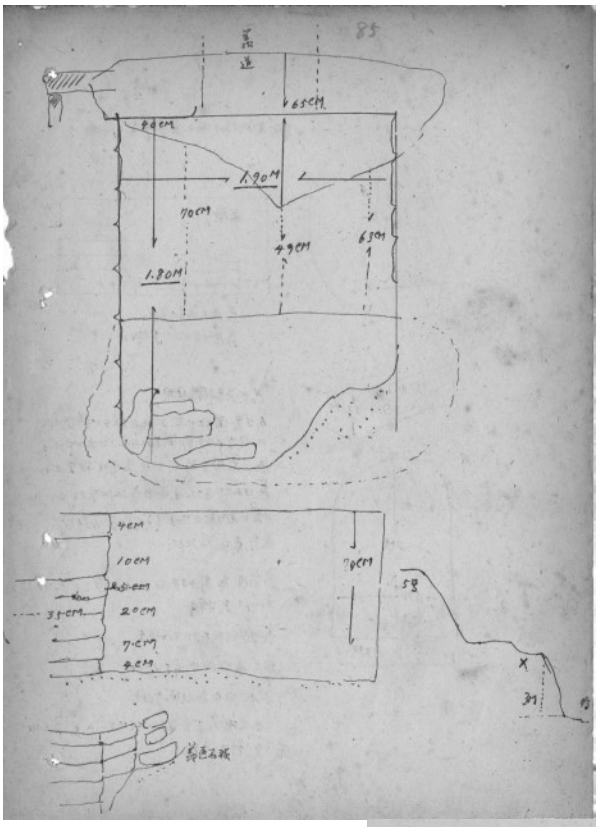
Ⅰ墳≪＊前山 B169 号墳≫

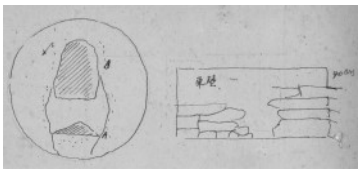
五号《＊前山 B168 号墳》南丘下にある墳である。これは徑に接近している為（約 3 m位）蓋石に巨石を使用してをり、現在二個をとゞめているのは長尾一群の古墳中唯一のものである又玄室もほゞ完形をとゞめてをり、調査に當つて張合のある思ひを持つ　封土径 7M 程度

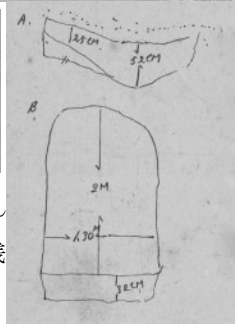
（この古墳蓋石については尚一度調査必要也）

東南面より掘り割り　表面平滑

羨道と玄室の高さは羨道の方 40CM 低い　共に緑泥岩使用　Aは羨道の上に架せられたもので発掘







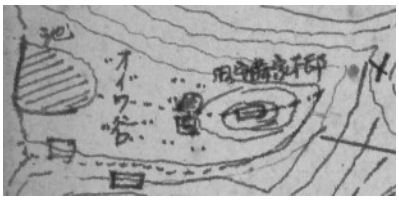
の際に位置の移動を認められこの石の下に羨道の右壁を残す、

下に羨道の右壁を残す、且つ表面は現在土に蓋はれているが裏面は空洞になってをり石の幅を測ることが出来る　最長1.30CM《＊ｍの間違いか》奥行最長123CM　玄室内、底部小さき石を上方に大きく且つカーブを持つ　羨道近くに大きい石を使用　最大長さ40CM厚さ17CM　床底川原石１個7CM　この古墳右下方平地に（谷間）に巨石二個あり　前に記す

３．まとめと考察

以上のように、本稿では、昭和26年（1951）12月～昭和27年（1952）１月に宮田啓二氏が書き残した大日山地区の大日山頂から東の前山Ｂ地区に至る尾根の踏査記録を書き起こした。当資料記載古墳と現在の古墳の同定作業を行ったところ、同定できた古墳については、すでに当該期には現在とほぼ同様の状態であったことが確認された。したがって、今回取り上げた大日山第Ⅱ稜の古墳は、昭和26年以前にすでに盗掘などで損壊していたものと考えられる。

一方、古墳ではないが、当資料で初めて岩橋丘陵にかつて「安藤家下邸」と呼ばれる施設が存在したことが判明した。岩橋千塚古墳群を取り巻く既往の歴史的環境を考えるにあたり、重要な記載である。



第２図　当資料69頁全体図一部拡大

当資料によると、現在の大日山18号墳付近からオイワ谷の池へ延びる丘陵上に「かつて安藤家家老の下邸」があったことが記されており、宮田氏が訪れた際には、その北側には門があったようである。筆者らは令和５年11月23日に現地踏査を行ったが、門（図２中央の２つの四角か）があったとみられる場所には、現在、昭和38年９月に建立された鳥居が建てられており、その痕跡を確認することはできなかった。また、下邸とみられる現地は、南側は草木が生い茂り踏査困難であり、踏査可能な北側では人工的な平坦面や石垣などを確認したが、瓦や陶磁器などは確認できなかった[2]。

この安藤家下邸について、文献史料にあたるなど様々な方法で情報収集を試みたが、現状ではどういった施設であったか何ら手がかりを得ることができていない。しかし、江戸時代に岩橋丘陵周辺が紀州藩附家老安藤家の領地であり、初代田辺藩主である安藤帯刀直次の業績をたたえる石碑が和歌山県立紀伊風土記の丘の安藤塚に建てられていることに鑑みれば、領地を管理するための拠点的な施設が当該場所に存在した可能性も考えられる。今後、江戸時代における岩橋千塚古墳群の取り扱いを考える上で、重要な情報である。

【註】

１）旧字やくずし字などで特に難しいものについては、現代の日本語との対応を示す。「冂」は事、「后」は後、「ゝ」「ゞ」はひらがなを繰り返すときに用いる記号「々」、「當」は「当」に対応する。

２）宮田資料において大日山地区と記載されている範囲の一部は、現在前山Ｂ地区に含まれている。

３）現在の金龍神社入口の北側平坦面で、桟瓦の散布を確認した。この瓦葺建物が金龍神社に関わる施設であったか、安藤家下邸に関わる施設であったか現状では判断できない。当資料によると現在神社内にある大日山18号墳が金龍神社背後にあると記されているため、前者の可能性が高いものと推測される。

【参考文献】

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・冨永里菜・仲原知之2021「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群調』－花山地区編－」『紀伊風土記の丘　研究紀要』第９号　和歌山県立紀伊風土記の丘

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・冨永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加　2022「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群　調』－大谷山地区編－」『紀伊風土記の丘　研究紀要』第10号　和歌山県立紀伊風土記の丘

石丸彩・金澤舞・瀬谷今日子・冨永里菜・中西瑠花・仲原知之・馬場彩加　2023「宮田啓二著『昭和二七年秋冬岩橋千塚古墳群　調』－大日山地区編①－」『紀伊風土記の丘　研究紀要』第11号　和歌山県立紀伊風土記の丘

和歌山県教育委員会2019『特別史跡　岩橋千塚古墳群保存活用計画』

〈資料紹介〉

雑賀崎の漁業史（2）
－一本釣り漁師の漁業歴と漁具 －

萩野谷正宏・池田佳祐

はじめに

本稿は、和歌山市雑賀崎における漁業史の研究を目的として、昭和期に一本釣り漁に従事した漁師の出漁先、漁獲物などにかかる年間漁業歴及び、使用した各種漁具の詳細から、当該期の一本釣り漁の概要を紹介する。

雑賀崎は和歌山市の西南部に位置し、雑賀山の南斜面に集落が展開し、海に面した南側に漁港が位置している。本稿執筆者の一人である池田佳祐は、現在、雑賀崎で漁業と宿泊業「新七屋」を営み、漁船「健勝丸」で小型底引網漁を行うとともに、雑賀崎の歴史や伝統文化を研究する。池田の祖父の健一氏（昭和７年 11 月生）は、曾祖父とともに 12 歳から 20 歳頃まで一本釣り漁に従事していたが、その後は底引網漁へ転換し長年にわたり漁業を営んだ。底引網漁は現在の雑賀崎の主な漁法となっている。また、昭和 20 年代まで長崎県の五島列島から、三重県の志摩半島までの旅漁を経験しており、当時の出漁の詳細や、漁法、雑賀崎の「カタフネ」や「連中」と呼ばれる制度についての情報は、当該地域の漁業史を知るうえで極めて貴重であることから、令和３年度に聞き取り調査を実施し、その概要を池田、萩野谷が報告した（池田佳祐・萩野谷正宏 2022「雑賀崎の漁業史（１）－一本釣り漁師への聞き取り調査から－」『紀伊風土記の丘研究紀要』第 10 号）。

また、池田は祖父健一氏が一本釣り漁に従事していた昭和 20 年代頃における年間を通じた漁業歴を、氏への複数回のヒアリングを経て令和３年度に作成した。当該漁業歴は、前稿のヒアリング内容とともに、一本釣り漁師の出漁範囲を知ることができる貴重な情報である。一方、萩野谷は、健一氏が使用した一本釣り漁関連の漁具類のうち、主要資料である釣具箱及び釣具箱収納漁具のほか、イカ用疑似餌・釣具一式、サワラ用釣具一式について資料調査を実施し、法量、重量等の計測および、一部の実測図作成をおこなった。

本稿は、上記の調査結果の概要を報告するものである。また、本稿で記述する池田健一氏へのヒアリング結果に基づく情報は、前回の報告内容に基づいている。なお、本稿は１を池田・萩野谷が、その他を萩野谷が執筆し、両者の協議により調整をおこなった。

１．年間漁業歴について

池田健一氏が昭和 20 年代まで従事していた一本釣り漁にかかる年間漁業歴は第１表のとおりである。

これによると、年間の漁場は１月・２月が明らかではないが、３月から５月は長崎県の五島列島、６月から８月は和歌山県紀南地域の白浜周辺や紀中地域の有田・由良・日ノ岬周辺、７月から 12 月は紀南地域の周参見・串本・勝浦周辺から三重県の熊野・尾鷲、さらに志摩半島浜島周辺までの海域を漁場としている。このことから、季節ごとに漁場を選定していること、和歌山県紀中から三重県南部の海域を主要な漁場としていたことがわかる。一方、雑賀崎周辺や紀北地域を主要な漁場として選択していない点が特筆される。

なお、３月～５月の五島列島への出漁は、健一氏自身は 20 歳頃に従事した１度のみの経験であるが、健一氏の父は複数回出漁していたという。また１・２月の漁場は不明であるものの、寒い時期にもタイ釣りに出漁していたこと、雑賀崎周辺の双子島沖でイカ用疑似餌を用いたイカ釣りをしていたという証言から、冬期の活動がうかがえる。

対象とする魚種はマダイのほかに、アカハタ、メイチダイ、ブリ、イサギ、タチウオ、サワラなどを対象としており、季節ごとに、特定の魚種を狙い漁場を選択している。漁法は、マダイ、アカハタ、メイチダイ、ブリ、イサギは小エビを餌と

するカブラを用いた一本釣りである。さらに、タチウオは、アジ・サバを餌とする一本釣り、サワラは疑似餌を用いた一本釣り（曳縄）の方法を選択していることがわかる。

また、健一氏の証言から、一回の出漁期間は、日ノ岬や印南沖周辺の漁場では10日から20日程度、三重県の志摩市浜島周辺の漁場では2か月程度を要し、船上で宿泊しながら現地に滞在していたとされる。比較的長期間にわたり、漁場付近の漁港への停泊を伴いながら出漁し、漁獲物は出漁先の漁港で水揚げしていた。

船は「サゲブネ」と呼ぶ小型漁船であり、櫓船では３名、エンジン導入に伴う動力化以後は２名(健一氏と父)が乗船していた。健一氏は櫓船から、20歳の時に導入された電気着火式エンジンによる漁船動力化への移行期を経験しているが、19歳の時には浜島へ出漁していたこと、また櫓船による日ノ岬周辺への出漁の証言から、紀中地域から三重県南部への出漁に櫓船を用いた時期があることがわかる。

また、当時の雑賀崎の漁師のすべてが同様の漁場を選択して活動していたのではなく、漁師ごとにその活動範囲が異なっていたことにも注意される。房総半島（千葉県）へ出漁する漁師や、日ノ岬までの紀伊水道を主要な漁場とする漁師もいたとされ、その活動範囲が一律ではなかったことは、個々の漁師の戦略に基づいて漁業活動がおこなわれていたことを示している。

２．漁具について

健一氏が所蔵する一本釣り漁等で使用した漁具について、釣具箱及び釣具箱収納漁具のほか、イカ用疑似餌・釣具一式、サワラ用釣具一式について調査を実施した。その詳細は、第２表及び、写真１～27、図１～７に示すとおりである。

以下では、タイ等の一本釣り漁に用いたカブラや、サワラ用釣具のほか、第１表の年間漁業歴には示されない漁法に用いたタコ用釣具、イカ用釣具などに係る所見と、ヒアリング内容から推測される各漁具の使用法について触れていきたい。

一本釣り用の釣針は、「カブラ」と呼称される。釣針に鉛、撚紐、輪状のナイロンを装着したもので（写真５）、手作業により製作された。池田健一氏によると、錘となる鉛は、溶解させて型にいれた後、中央を途中まで切断後、撚紐、釣針等を挟み、叩いて製作したとされる。

資料調査の結果、釣具箱には完成品であるカブラのほかに、部品である釣針、撚紐、ナイロン、鉛が多数現存していた。

写真３・４・７は、カブラ用の釣針で、複数の法量が認められる。チモトまでの高さで法量を表すと、20㎜が43本、26㎜が４本、31㎜が１本、33㎜が72本、35㎜が61本、39㎜が５本であり、

第１表　聞き取り調査による昭和20年代の雑賀崎一本釣り漁師の年間漁業歴（池田作成）

漁場	漁獲物	漁法　（　）内は餌	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
浜														
磯														
沖	マダイ	一本釣り（カブラ+小エビ）			五島列島（宇久島）（長崎県）			白浜周辺（和歌山県）	串本・勝浦（和歌山県）熊野・尾鷲・浜島（三重県）					
	アカッポ(アカハタ)	一本釣り（カブラ+小エビ）							周参見・串本（和歌山県）					
	メダイ（メイチダイ）	一本釣り（カブラ+小エビ）			五島列島（宇久島）（長崎県）				周参見・串本（和歌山県）			勝浦（和歌山県）尾鷲・浜島（三重県）		
	ブリ	一本釣り（カブラ+小エビ）			五島列島（宇久島）（長崎県）							勝浦（和歌山県）尾鷲・浜島（三重県）		
	イサギ	一本釣り（カブラ+小エビ）			五島列島（宇久島）（長崎県）			有田・由良・日の岬（和歌山県）						
	タチウオ（夜間）	一本釣り（アジ・サバ）						有田・由良・日の岬（和歌山県）						
	サラワ	（一本釣り＋擬似餌+板）						有田・由良・日の埼（和歌山県）						

＊底引き網漁への転換以前における漁業歴

20㎜と33㎜、35㎜の釣針が多用されていたと考えられる。また鉛を装着したカブラ（写真５）15本のすべてが、釣針本体の法量が35㎜であり、当該法量が多く用いられている。一方、20㎜の釣針は、ナイロンが結ばれていることから、カブラに接続するもう一本の釣針（孫針）と判断される。これらの釣針は、形状の細部にまで斉一性が認められて個体差が少ないこと、写真３に示す包装紙の存在から、流通した既製品であるとみられる。

写真５は、鉛で、直径17㎜、重量は19.0～20.5ｇでほぼ一定する。切断痕跡より、棒状の鉛を製作後、一定の間隔で断面が台形となる形状に切断したとみられ、池田氏の証言より手作業による自家製作品とみられる。

以上の資料群から、カブラは、まず釣針に撚紐を装着したのちに（写真８）、当該釣針と輪状のナイロンを鉛の切り込みに挟んでから、鉛を叩いて整形して製作されたことが明らかである（写真９）。

実際の一本釣り漁においては、テグスとカブラからなる仕掛けが、船上から海中に下ろされて用いられた。釣針につけたエサは小エビであり、健一氏によると餌にはジャコを多く用いたという。また、マダイを対象とする場合には、水深が30尋（約45m）の海底ではなく、20～25尋（約30～38m）の深さに生息することを意識して漁をおこなったという。

写真19・20はサワラ用釣具である。擬餌針（写真19）は本体が樹脂製の既製品である。仕掛けは（図6）、疑似餌にナイロン（透明）を接続し、さらに錘を等間隔で装着したナイロン（透明）、撚り合わせたナイロン（黒色）を接続したもので、全長は33.3ｍである。

健一氏によると、当該仕掛けはサワラのほかに、アジも対象としたとされる。使用法は、船を停止したのちに、糸をたぐりながら引き寄せる曳縄の方法によったという。

写真15～18はイカ用疑似餌および釣具である。疑似餌は、手作りにより製作され、頭部側には撚紐が、尾部側には釣針、本体下部には錘の鉛が装着される。仕掛け（写真18、図７）は、疑似餌にナイロン（透明）を接続し、さらに錘を等間隔で装着したナイロン（透明）と撚り合わせたナイロン（黒色、朱色）を接続する。全長は約51.2ｍである。

当該漁具の対象はアオリイカであり、櫓船でアオリイカを釣る場合には、片手で仕掛けを曳きながら、もう片方の手で櫓をもち、船を進めながら釣る方法をとったという。

以上のサワラ用、イカ用釣具等の各仕掛けには、ナイロンテグス（透明）に小型の錘が等間隔に付けられるが、これらの錘は切り込み部に当該テグスを挟む方法で装着される。池田氏は、錘をテグスに装着する際に、竹製の用具（写真27、図5）をもちいてテグスを挟み込んで固定する方法をとっており、これを「もむ」と表現する。同方法は、カブラの仕掛けにも用いられた。

写真21・22はタコ用釣具である。木製の台木を穿孔して釣針を装着し固定するとともに、背面には鉛製錘を銅線を巻いて固定する。また一方の釣針からは50㎝の麻紐が延び、先端に釘が接続する。当該漁具は、餌を台木に固定して釣る構造とみられ、麻紐はこの餌を固定するものであろう。仕掛（図１・２）は、台木・釣針にナイロンテグス（透明）と柿渋で染めた麻紐が接続し、全長は25.1ｍである。

写真23～25は台木またはその製作途中の未製品であり、手作業による自家製品とみられる。写真24は、写真23と類似した法量であることから、同一形状に加工する前段階の工程を示している。写真22は、上記に比して奥行が長いが、上部の形状や厚みの類似性から同一の用途とみられる。これらはタコ用釣具の台木とみられ、釣針と錘を装着して用いられたことが推測される。

以上から、一本釣り漁で用いられる漁具は、ナイロンテグスや釣針などの既製品を入手しつつも、自家製作によるカブラ用の鉛や台木などと組み合わせながら、カブラやタコ・イカ用釣具などを手作業で製作していたことが、資料の所見及びヒアリング内容から明らかである。また、漁具の使用

第２表　調査対象漁具の名称・法量・員数一覧

資料名称	写真・図番号	対象 （太字は聞き取り）	法量・員数	
釣具箱	写真1・2		本体（底部幅265㎜・奥行200㎜・高さ210㎜）・内箱（底部幅240㎜・奥行182㎜）・蓋（上面幅290㎜・奥行220㎜・高さ55㎜）	木製
釣針	写真3	**タイ他**	釣針（31㎜ 1本・35㎜ 61本 うち8本は撚紐付・39㎜ 4本）、撚紐（10本）、テグス（16本）	包装紙（「品質堅固　ハガネ釣針　高木助五郎商店謹製」印刷・「十八号　打附」印影）に収納 写真8・9（一部）
釣針	写真4	**タイ他**	釣針(32～33㎜ 35本・39㎜ 1本)	ビニール袋に収納
釣針（カブラ）	写真5	**タイ他**	釣針（カブラ）(39～42㎜　重量16.0～22.0ｇ 15本)	釣針（35㎜）に鉛・撚紐・テグスが結合 写真9（一部）
カブラ用の鉛	写真6	**タイ他**	完成品（直径17㎜ 重量19.0～20.5ｇ 33個）、未製品（最大長22～23㎜ 2個）	自家製品 写真9・10（一部）
釣針	写真7	**タイ他**	釣針(20㎜ 43本 テグス結合・26㎜ 4本 テグス結合)	マッチ箱に収納
釣針	写真11		釣針(22㎜)	ビニールケース（「純金袖形7号　王冠針　13本入」印刷紙入）に収納
錘	写真12		錘本体148㎜・総重量222.5ｇ（テグス・サルカン・麻紐・松葉サルカン付）	錘本体鉛製
天秤・錘	写真13		錘本体112㎜・天秤166㎜・総重量400.5ｇ（サルカン付）	錘本体鉛製
天秤・錘	写真14		錘本体38㎜・天秤175㎜・総重量49.5ｇ（松葉サルカン付）	錘（鉛製）は既製品か
イカ用疑似餌	写真15	**アオリイカ**	本体長150㎜	疑似餌本体木製
イカ用疑似餌	写真16	**アオリイカ**	本体長140㎜ ・針長30㎜	疑似餌本体木製
イカ用疑似餌・釣具一式	写真17・18 図7	**アオリイカ**	疑似餌（本体長105㎜・針長20㎜ サルカン長6㎜）・仕掛け一式は図7参照	疑似餌本体木製
サワラ用疑似餌	写真19	**サワラ・アジ**	長88㎜ 1個・100㎜ 1個・103㎜ 1個・105㎜ 1個	疑似餌本体樹脂製
サワラ用釣具一式	写真20・図6	**サワラ・アジ**	図6参照	
タコ用釣具	写真21･22 図1・2	タコ	釣具（幅43㎜・奥行92㎜・高さ56㎜）・仕掛け一式は図1参照	
台木（未成品）	写真23・図3	タコ	幅40㎜・奥行60㎜・厚さ7㎜	木製
台木（未成品）	写真24	タコ	幅40㎜・奥行59㎜	木製
台木	写真25・図4	タコ	幅44㎜・奥行118㎜・厚さ8㎜	木製
釣針	写真26	イカか	釣針（3～4本連結）（幅65㎜・高さ47㎜ 5個）	
錘取付け用具	写真27・図5		幅18㎜・奥行224㎜・厚さ9㎜	竹製
鉛	写真28		長さ58㎜	
釣針		**タイ他**	釣針（33㎜ 37本うち23本は撚紐結合）、松葉サルカン（17㎜ 2個）	包装紙（「品質堅固　ハガネ釣針　高木助五郎商店謹製」印刷・「十七号　打附」印影）に収納
天秤・錘			錘本体25㎜・天秤145㎜・総重量50.0ｇ（サルカン付）	錘は既製品か
天秤			140㎜（サルカン付）	
錘			錘本体43㎜・総重量41.0ｇ	既製品か
ナイロンテグス			糸巻直径約85㎜　2個	既製品

方法については、ヒアリング結果からその一部を明らかにすることができた。資料の帰属時期は、ヒアリングより昭和期を主体とするとみられる。

３．まとめ

以上、昭和 20 年代頃の年間漁業歴及び、使用された漁具の資料調査から、昭和期の雑賀崎漁師の漁業活動の事例を紹介した。

池田健一氏から伺った当時の漁業活動の情報や現存する漁具は、近世以来伝統的な旅漁を生業とした雑賀崎漁師の最後の世代の活動内容を知りうるものであり、当該地域の漁業史を理解するうえで重要と考えられる。今後も、当地域における同様の調査を継続し、情報の蓄積に務めていきたい。

最後になりましたが、雑賀崎の漁師として長年にわたり活躍され、調査にも好意的にご協力いただいた池田健一氏は、令和４年にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

写真１　釣具箱収納漁具一式

写真２　釣具箱（中箱）収納漁具一式

写真３　釣針

写真４　釣針

写真５　釣針（カブラ）

写真６　カブラ用の鉛

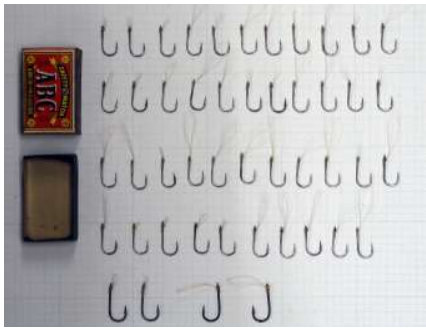


写真７　釣針

写真８　釣針と撚り紐

写真９　釣針（撚り紐付）・テグス・鉛・釣針（カブラ）

写真 10　カブラ用の鉛
（上面（中央）と各側面）

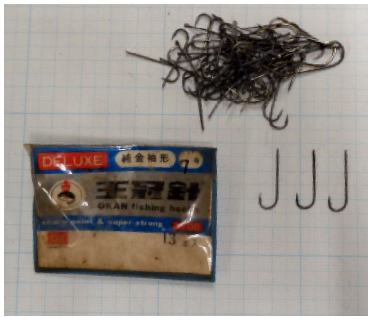


写真 11　釣針

写真 12　錘

写真 13　天秤・錘

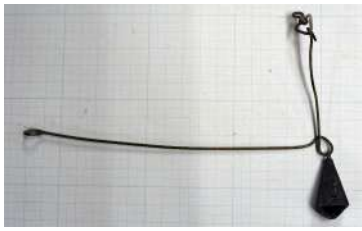


写真 14　天秤・錘

写真 15　イカ用疑似餌

写真 16　イカ用疑似餌

写真 17　イカ用疑似餌

写真 18　イカ用釣具一式（疑似餌は写真 17 に同じ）

写真 19　サワラ用疑似餌

写真 20　サワラ用釣具一式

写真 21　タコ用釣具（写真 22 と同一仕掛け）

写真 23　台木（未製品）

写真 25　台木

写真 22　タコ用釣具（写真 21 と同一仕掛け）

写真 24　台木（未製品）

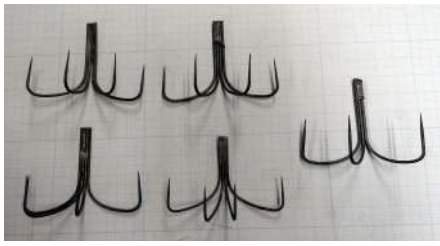


写真 26　釣針

写真27　錘取付け用具

写真28　鉛

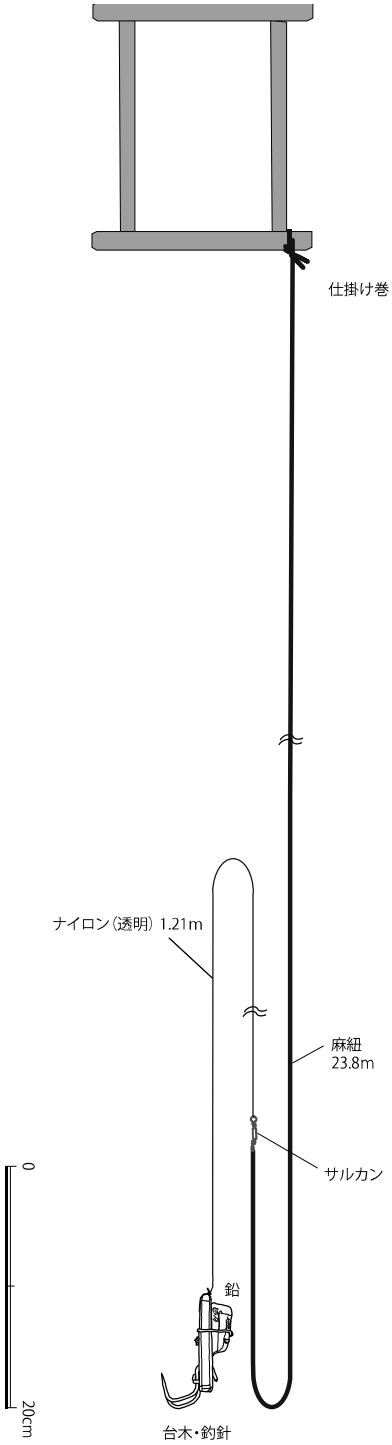


図１　タコ用釣具模式図

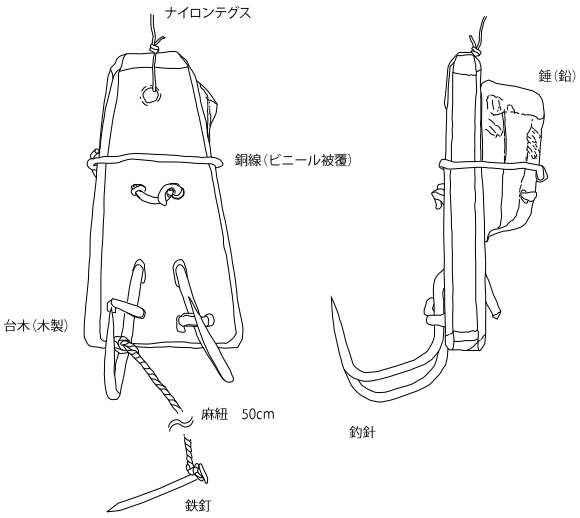


図２　タコ用釣具（釣針・台木）実測図

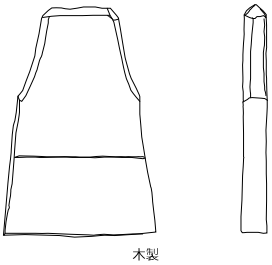


図３　台木（未製品）実測図

図４　台木実測図

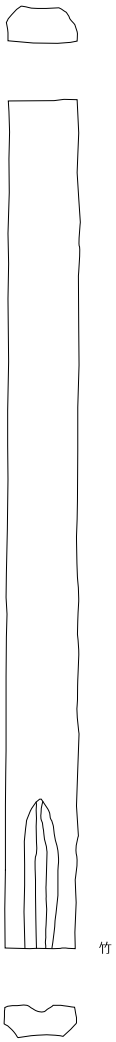
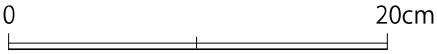


図５
錘取付け用具実測図



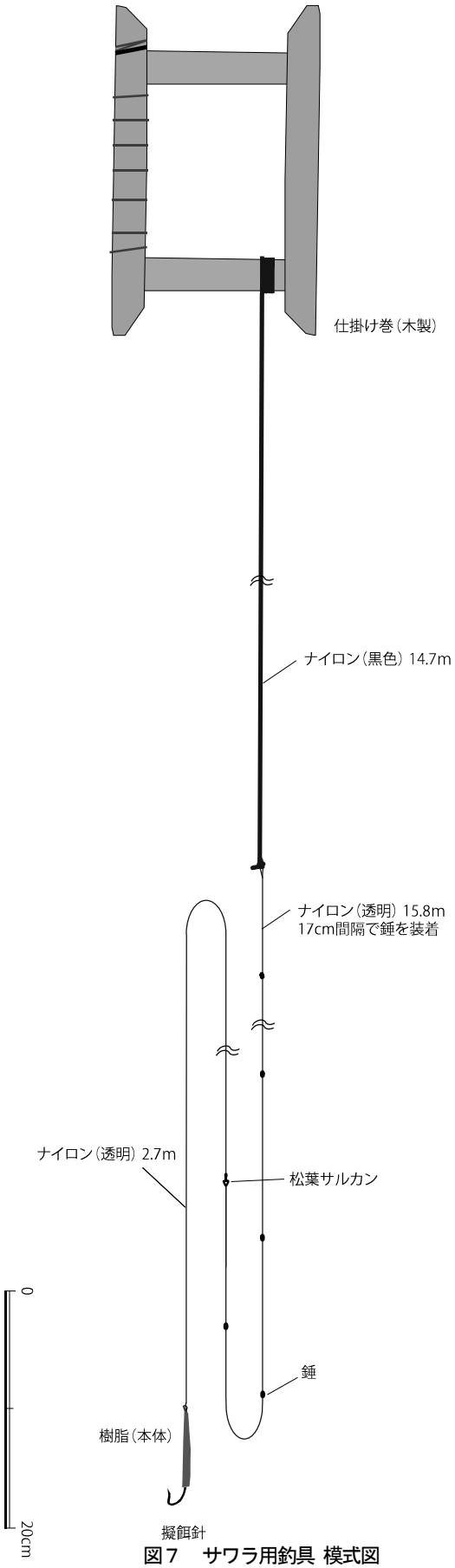


図７　サワラ用釣具 模式図

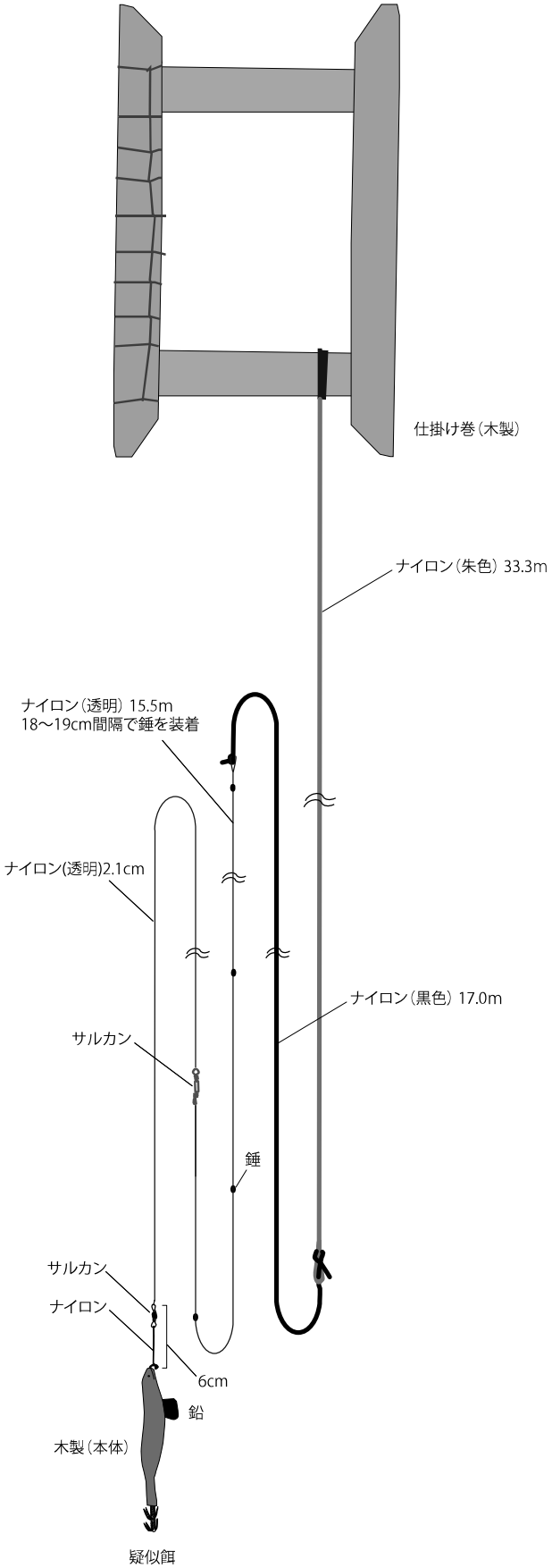


図８　イカ用釣具 模式図

〈活動報告・シンポジウム開催記録〉

シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」討論記録

川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・櫻井敬人・蘇理剛志・萩野谷正宏

はじめに

本稿は、和歌山県立紀伊風土記の丘令和３年度秋期特別展「海に挑み、海をひらくーきのくに七千年の文化交流史ー」の関連事業として実施したシンポジウムのうち、討論の記録である。

シンポジウムは、「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」と題し、紀伊半島沿岸における縄文時代から近代に至るまでの海の道を通じた日本列島各地との交流の歴史と特色に注目し、これを広く周知する目的で開催した。内容は、民俗学及び考古学を専門分野とする４名の講師による講演、当館職員による特別展関連の報告、コーディネーターとして櫻井敬人氏を迎えた討論で構成され、次のプログラムにより実施した。

日時：令和３年 11 月 21 日（日）
　10：00 ～ 16：30
場所：和歌山県立紀伊風土記の丘
内容：
講演１「カツオ漁と紀州人」
　川島秀一（東北大学災害科学国際研究所）
講演２「古式捕鯨時代の紀州と西海の交流」
　中園成生（平戸市生月町博物館 島の館）
講演３「伊勢・志摩・熊野の海人の実像を追う」
　穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）
講演４「海と生きた縄文・弥生時代の人々―かれらが海に乗り出した理由―」
　寺前直人（駒澤大学）
報告「紀伊半島沿岸における海の生業と文化」
　蘇理剛志・萩野谷正宏（当館）
討論　コーディネーター：櫻井敬人（太地町歴史資料室）

上記シンポジウムのうち、講演１から講演４までは、以下の文献に講演録として掲載している。

川島秀一・中園成生・穂積裕昌・寺前直人・蘇理剛志・萩野谷正宏 2003「シンポジウム「紀伊半島をめぐる海の道と文化交流」講演記録」『令和３年度紀伊風土記の丘年報第 49 号』和歌山県立紀伊風土記の丘

本稿は、上記に引き続いてシンポジウムの討論の概要を記録としてまとめたものである。内容は、萩野谷が当日の記録を基に文章化し、各講師が加筆修正した。

なお、シンポジウムのうち萩野谷、蘇理が実施した報告については、当該特別展に関連する考古資料及び民俗資料の概要説明を中心とする内容であることから、本稿への掲載を割愛している。特別展の概要については当該特別展展示図録等を参照されたい。

シンポジウム討論

櫻井　討論のコーディネーターを務めます太地町歴史資料室の櫻井です。よろしくお願いします。

紀州ではクジラ、マグロ、カツオ、イワシなどの漁が盛んで、中世末から近世になると漁業者が「旅網」を行うようになり、やがて定住するものも現れました。今回の特別展「海に挑み、海をひらく」では、そのことを物語る資料が多数展示されていました。

さて、明治 20 年代以降は大勢の男女が海外出稼ぎに従事しました。例えばニューヨークで画家として活動した石垣栄太郎は、すでにカナダ BC 州で働いていた父の正次に呼ばれて渡米しました。政次は船大工ですから、紀州人がたくさんいたスティーブストンで船大工をやっているわけです。それで息子を呼んでおいて、なぜか今度は船大工をやめて製材所に行き、次はオイルが湧いているカルフォルニア州ベーカーズフィールドで車の修理工になる。太地の人びとが大勢いたのはロサンゼルスの港で、缶詰工場で働いている。で、

櫻井 敬人 氏

父が息子に言うんですね。辛い仕事だろう。でも、4、5年経ったら太地へ帰って金物屋でもやろうなって。これは、その当時の海外出稼ぎの考え方を表す言葉なのかなと私は思っています。

狭い太地でも、いろいろな生き方があるんですね。カナダに行く人、アメリカに行く人、あるいはオーストラリアへ行って真珠貝をとるとか。あるいは時代が変わると南極海へクジラを捕りに行く人もいます。細かく見ると、人々の戦略というか、いろいろな考え、事情があったりするわけです。この紀伊半島の自然環境は多様で、また、人々の多様な生きざまがあるのだろうと思います。今回の特別展を見て、紀伊半島の海に生きる人びとはどういう人たちなのか、ということが、詳細にわかってきたように思います。

さて、午前中の川島先生のお話のなかで「伝播から伝承へ」との言葉がありました。それを受けて、考古学、つまりモノを見て研究する方々から、非常に重い言葉だと受け止められたそうです。まずは、ここから、話をふくらませていきたいと思います。川島先生、講演の最後にご発言された「伝播から伝承へ」という言葉について、あらためてご説明をお願いします。

川島　はい。私は民俗学に長らく関わってきたのですが、民俗学は、現在から過去を遡っていくような方向をもっています。ただし、単に後ろ向きの研究という学問ではなくて、今いる人がどういう思いをして生活しているのかということから、過去についてもそれを想像していくということですね。

それで、紹介にありましたように私は現在、福島県の新地町というところで、原発事故後の漁業の試験操業のお手伝いをしています。週に2回は漁にでているのですが、そんな勇敢でも何でもないのですけども、朝起きるだけつらいといつも思っています。そこで、漁師さんたちと暮らしている中で感じたことから、過去の資料なり、漁具を読み取ることができる、何かがあるなということをいつも感じております。

例えば、私の親方は漁師を絵に描いたような人なのですが、先日、刺網に大きなタコがかかった。そのタコを、すぐに売るのかと思いましたら、ネットに入れてホッキ貝を餌にして、毎回秤で測っています。どんどん大きくなっていくんですね。高く売れるはずなのですが、それをみんなに見せて自慢をしている。先程、寺前先生が、海を介した活動を通じて名誉と名声がもたらされたということとおっしゃっていますが、まさしくそのような考え方がよく分かりました。

このように、今の感性なり、生活感情みたいなものから読むと、近世の古文書も先ほど紹介したように、色んなものが見えて、何が大事だったのかということも逆に見えてきます。例えば一本釣り漁師や曳縄の漁師の場合には、疑似針を一つ得るために飛行機で紀伊半島まできて買っていくんですね。そのくらい懸けております。それから一本釣りの漁師さんが自分で擬餌針を作るのですが、きれいに作った釣り針ほど釣れない。どうでもいいと思って作った釣り針のほうが釣れて、それを大事にして、更に大事にしていると、逆に魚に取られてしまう。

このような、漁師の漁具に対する思いから、分布図などをみていかないと、やはり、なぜ、ここに、こういうものが分布しているのは分からないのではないか。そういう意味では、伝播というのは何か自然に水を流すように流れていくような感覚が

川島 秀一 氏

するのですが、それには人が関わっていて、人が選択をしているということを、何かもっといい言葉で説明できないかということで、「伝承」という言葉を使いました。最近は、災害を伝えることだけが伝承というようになって、非常に「伝承」という言葉も扱いにくくなったのも確かなので、そういう意味で使わせていただいたという次第です。

櫻井　ありがとうございます。では、考古学分野の寺前さん、川島さんのこの言葉を重く受け止められているということでしたが、そのあたりを説明していただけますか。

寺前　はい。考古学というのは、物言わぬモノを扱う分野ですので、とにかく土器や石器などをずっと観察しながら、モノ事態に入れ込んでいく傾向があります。先ほどの萩野谷さんの発表にもありましたが、土器に残された工具の痕跡の特徴を細かく観察する。それは、あたかもモノが擬人化していくような習慣を、私たち考古学者はどうしてももってしまいがちだなと思うんです。それに対して、川島先生のお話からは、モノはモノであって、そこには介在する人があって、それが動いたり、真似られたりするのには、意思が必ず介在するんだというところが印象的でした。そんな生々しい文化現象をまとめて伝播という言葉であらわしてしまいますと、何か大事なものがこぼれているのではないか、というご提案だったと思います。それはおっしゃる通りで、考古学者は、ついついモノが、人であるかのように、比較したり、分布図を作ってしまいがちなんですが、その点、本日午前中のお話のストーリーの中で、すごく考えさせられました。

私の今日のお話でいうと、例えばヒスイとか南海産の貝輪について、「交易」とか「流通」という言葉を使ってしまいましたが、これはおそらくそうではなくて、人類学では盛んに議論になっていますけども、「贈与」という行為である。もっと言いますと、川島先生の最後の話ではないんですけども、遠い島に行った時に、そこに魅力的な女性が来たら、自分のとっておきの石を手渡して口説こうとするとか、そういう色々な人間関係が形成されたり、失敗したりする中で、モノの動き、あるいはそれが人から人へと渡っていくということが起きたと想像することができます。ただし、難しいのは、それを実証することが困難である点。このあたりは、今日の個別具体的な民俗学的な話が、ものすごく参考になるというように思います。

櫻井　ありがとうございます。蘇理さん、「伝承」についてコメントお願いします。

蘇理　伝承という言葉のイメージは色々あり、例えば昔話などの民間伝承をイメージするような言葉でもあるのですけれども、元々の言葉の意味と

寺前 直人　氏

しては、伝達、継承ですね。物事が伝わって、それが次の世代に伝わっていくという、継承されるというような言葉の語彙があると思います。川島先生がおっしゃった「伝承」というのはそういうそれぞれの地域に伝わっていった文化や技術というものが、まだその地域で受け継がれており、一つの形として定着していく。そういう流れ、一つの過程を表すような言葉として、「伝承」と捉え直してみようということだったのかなと思いました。

今回の展示を通じて私が感じたことですが、日本各地に残っている紀州的なもの、言葉、食文化、暮らしぶり、信仰などがたくさんあり、紀伊国の人びとは、漁業に限らず、移動ということについて、一つの見識というのか、自信というのか、そういうものをもちながら、盛んに動いていたのだろうと思います。その過程で、いろいろな情報や技術が伝わっていく、伝えていくという流れがあり、担ってきた歴史があるのだ感じました。

櫻井　つづいて、博物館について。博物館は、複合的でモノや情報が集められる場所ですから、いろいろな可能性があり、今回のような面白い特別展なども実現できるわけですけれども、一方で、萩野谷さんの発表のなかでは、和歌山県の博物館の事情について、少し危機感をもたれている旨の発言があったと思いますが、その辺についてもう一度お願いできますか。

萩野谷　今回、和歌山県と三重県の各資料館で収蔵されている資料を調査させていただき、あらためて感じたことについてです。考古資料と民俗資料はそれぞれ収蔵までの経緯は異なりますが、両資料をあわせた視点から、紀伊半島の海の文化について探ろうとした時に、収蔵資料についてかなり地域的な偏在性があることを感じました。

もちろん、各資料館の学芸員の皆さんは、それぞれ懸命に業務に取り組まれておりますので、全ての分野に目配せすることはできない。そういう状況の中で、当館も含めて各地の市町村の学芸員さんとも協力しながら、資料や情報を残すために取り組むべきこともあると思いました。例えば漁業に関することでは、今現在失われつつある、今この瞬間でもどんどん失われている情報というものが、かなりあるのではないかということを感じています。漁師さんたちの中には、非常に漁業に思い入れがあり、何とか自分たちの文化を次の世代に継承しようと考えている方もいれば、やむを得ず自分の代で陸にあがろうという漁師さんもきっといるはずです。うまく言い表せませんが、そういう状況の中で、博物館の役割というのは何かということを、考古資料、民俗資料に限らず、強く感じているところです。

櫻井　海の文化をテーマとする博物館施設では、三重県に鳥羽市立海の博物館があります。海の博物館は本当にユニークで、あれだけの資料が集まっているという事例は世界中でもほかにないんですね。世界一と言ってもいいと思います。そこで、穂積さんに、海の博物館を含め、三重県側の海の文化、文化財を取りまく状況について、教えていただけますか。

穂積　はい。三重県では、海女の文化ということで、平成29年に「鳥羽・志摩の海女漁の技術」が重要無形民俗文化財に指定されました。ユネスコの無形文化も目指していたのですが、これは実現していません。日本では、ユネスコ関係を目指すには、まずは国指定を目指さなければならないという事情もありますので、前提として海女の習

穂積 裕昌 氏

俗ということで、指定されたわけです。また、三重県では、鳥羽市の海の博物館さんが有形民俗文化財を含む民俗資料の収集を一生懸命されているほか、無形民俗文化財の記録化などにも取り組んでいます。それは、やはり保護すべき存在である祭礼行事や祭りがどんどんなくなっているという現実があります。

今回、話題にあげました熊野市の二木島祭り、そこで使用される関船が、古墳時代の宝塚1号墳出土の船形埴輪と非常に似ていて、おそらく共通するような意識が前提として存在するのだろうというお話をしましたが、この祭りにしても、2010年を最後に後継者不足により休止となっています。私は休止2年前に見に行くことができましたが、そういう意味で、地域の祭礼行事などの無形民俗は非常に憂慮されるべき状況にあるわけです。

今回の紀伊風土記の丘さんの取り組みは、そういうものの再認識の契機になるのではないかなと思います。三重県には海の文化だけでなく山の文化も含めていろいろな民俗文化財がありますが、そういったことについてもしっかりと記録したり守っていく必要があります。

そうした視点で各地を見ていくと、有形民俗文化財に関して言えば、例えば岐阜県飛騨市は、山の文化にかかる優れた博物館、収蔵施設をお持ちです。現在飛騨市となっている旧宮川村では、東京都立大学考古学研究室が、昔の道具の調査、一種の民俗調査をおこなっており、私も参加させてもらったことがあります。そこで行われた調査は、昔の機織りをはじめとする道具類の調査や、搗屋という米をつく水車小屋についての聞き取り・実測調査、あるいは水利用の民俗調査などでした。このうち、水利用をみると、古墳時代の奈良県南郷大東遺跡で発見された導水施設とよく似たものが、日常の生活の中で使われていました。古墳時代の導水施設は、祭祀の場ともいわれてますが、旧宮川村の事例の場合では飲用や洗浄といった生活の一部として取り込まれている。考古学と民俗学の接点というのは、まだまだいろんな可能性があるというのが私の実感です。

中園 成生 氏

櫻井　ありがとうございました。中園さんに伺いたいと思います。今回、紀伊半島、それも和歌山、三重に関わるいろいろな話題がありました。中園さんは九州からお越しになり、捕鯨関連では私もいろいろなところでご一緒させていただいておりましたが、常に紀州と比較する機会があったと思います。その九州からみて、紀州については、どのようにお考えですか。

中園　今回、「伝承」という話があり、それを人にまで還元していきたいなと思うのですが、紀州については、先生方のいろいろなお話を聞いた時に、いくつか思うことがありました。

まず一つは、やっぱり九州というのは遠いなという印象です。そういう遠いところへ、紀州の人たちがなぜわざわざ出ていかなければならなかったのか、それは東北や関東も同じですが。やはりそれを考えるときに「交換」といいましょうか、海と陸の交換、そういうものが大事であったのではないのかと思うのです。それは地元紀州の海でも同じで、クジラのことでも、最初の熊野や土佐でクジラ取りをやっている人たちは、畿内のたくさんの人たちがいるところに、鯨肉を食べたいという人がたくさんいるので、そこで成り立ってきたのだと思います。

では、後発の九州でどうしてクジラ取りが成り立ったのかというと、畿内周辺の需要は肉ですが、西海ではどちらかというと日持ちがし、価値が下

がらない鯨油というものに、特化していたのではないか。そういう風に考えるときに、紀州の、特に北部の方の人たちが経営する突組が九州に進出した理由は、もしかしたら雑賀の人たちや根来の人たちが、もともと油を商っていたことと関わりがあるのではないのかなと思うところがあります。その事がすごく気になっているのですが、ただ今のところ、その仮説の証拠がまだ見つけられていないので、もう少し追求していきたいなと思っています。中世には、荏胡麻から採れる非常に高級な油を貴族の人たちなどしか利用できなかったのですが、鯨油というものが灯油に利用できるようになって、庶民の人びとも夜なべ仕事ができるようになり、生産力があがっていくとか、そういう問題もあります。

そのように、漁業が成り立っていく背景には、必ず海で取れたものの消費という問題がある。つまり「交換」という事が、とても重要なのではないかと思うのです。先ほど、寺前先生から、好きな女の子がいたら道具をあげるような「贈与」の事をお話されていましたが、僕は、そこにも「交換」の原理が働いていたのではないかと思いました。「これをあげるから、ちょっとデートしようよ」などと言った風に。海の人と、陸の人との交流の中では、そのような「交換」がすごく大事ではなかったかと思います。

だから、紀州の人たちが地元で漁業をするうえでも、漁場の後背地や、畿内の中心である大坂、京都、奈良などとの関係が気になりますし、彼らが外に出ていった時代の、陸上での農耕などの生産が伸びたり、江戸という街が発展したり、各地に城下町ができていく状況と、紀州の人たちの動きには総体的な関係があるのではないかと思います。どちらかというと、大きなグローバルな話になってしまったかもしれませんが、そういう全体的な歴史のダイナミズムと紀州の人びとの進出が、必ず結びついているのだと思いますが、その際に、紀州の人びとがやれるスキルというのがすごく大事だったのだと思った次第です。

櫻井　はい、ありがとうございます。太地で高齢者に聞くと、彼らは言うのですよね。お祖父さんに連れられて、海の見えるところに行ってですね。東の方を指差して「よく見ろよ。アメリカが見えるだろ。あそこに、お前の親父も行っているだろう。」と聞かれると、「うん、見えた」と答えたという。また、南の方を見て「オーストラリア、見えるだろう」と聞かれると、「ああ、見えた」と。見えた気がしたのであって、本当にそんなことはないとは思いますよ。だけど、彼らには見えたのでしょうし、海に出ていく人とは、そういうものではないかと、と私は思いました。

それでは、今日ご参加された会場の皆さんに、ご質問、ご意見を伺いたいと思います。

質問１　本日はありがとうございます。中園先生に質問です。西海では、鯨油をとることがメインであり、一方で畿内や紀州では鯨肉がメインであるとのことでしたが、例えば、紀州や畿内において、時代や地域によっては、鯨油と鯨肉の割合が変わったとか、そうした特徴はあるのでしょうか。

中園　紀州の捕鯨における生産工程については、まだ分からない部分があります。なぜかというと、紀州の鯨とりは、鯨は獲って解体まではするんですが、あとの部分はそのまま売ってしまって、買った商人たちがいろいろやっているようなのです。その中で、当然、鯨油も採っていたとは思うのですが、その点についてあまりはっきり分かっていません。西海の方で、なぜ鯨油がメインか分かるかというと、鯨組自体が精油の組織や施設をもっていて、鯨油を生産するさまざまなプロセスがあったことが分かっているからです。そういうところからすると、たとえば土佐でも、イサバ商人が兵庫まで鯨肉を運んで行くとかいう話は、明治時代には出てくるのですが、解体の工程などを見ても、あまり鯨油を効率的に取るようなやり方ではないなという印象を持っています。当然、時代によって変わっている可能性はあるのですが、今のところは、そこまで細かくみきれていません。

質問２　寺前先生へ質問です。古事記や日本書紀の海幸彦・山幸彦の神話で、釣り針と弓矢の交換の逸話に交換の原理が組み込まれていることに非

常に興味深く感じます。その後、日本では山幸彦が支配するような形になってしまうとのことでしたが、では、海幸彦はどうなってしまうのかということをお聞きしたいです。

寺前　予稿集にも神話について少し触れましたが、このあたりのことは穂積先生が詳しい分野でもあるのですけども、海幸彦の子孫も登場します。ただし、中央のそういった存在ではなくて、周辺地域の民の祖先として描かれていますので、まさに山の系譜が天皇の名前に連なっていき、同じ神様ではあるのですけども、海の系譜というのは、いい方は難しいですが、虐げられる側、攻め滅ばされる側となっていくという描き方がされています。ただし、これは社会の一面的な理解でして、要は支配秩序に乗ったグループと、それを必要としなかったグループというのが古墳時代、古代あるいは中世も含めてあるのかなというように私は考えています。

また、本日のお話で、最後に話そうと思って忘れてしまったことなのですが、古墳の分布の話をしようと思っていました。実はこの紀伊半島の南側、それから四国の南側、高知県のあたりは、前方後円墳はほとんど分布しないですね。数基程度であり少ない。それは、私が本日のお話でお見せした地図のように読み取れます。これは私の想像ですけれども、日本海沿岸に関しては、朝鮮半島、中国大陸に連なる文化、技術の流通圏があって、更に縄文時代以来の玉などの希少な交換財があった。そういうエリアに対して、この紀伊半島あるいは四国島の南部は、そのような希少財や、中国、朝鮮半島との交流の直接的な場合にはならなかったので、支配原理、つまり支配と被支配の原理からは外れてきた。それゆえに前方後円墳は分布しない。ただし、優秀なお墓もあっていろいろな副葬品が入っているものが見つかっていますので、差があったというよりは､そのネットワークに乗っているか、乗っていないかという、そういう違いではないかと考えています。

穂積　私の方から一言。和歌山県の那智勝浦から三重県の紀伊長島、現在の紀北町までの間には、古墳が分布していません。前方後円墳だけではなく、普通に古墳がない。一方、海岸埋葬という埋葬法といいますか、さきほど寺前先生がおっしゃったように、和歌山も含めて海岸、あるいは海岸沿いの岩陰といったところに、海人といいますか、そういった人びとと非常に調和性があるような集団の墓がある。それから、三重県の志摩半島でも、海岸の砂浜に埋葬した事例もあるので、これらの地域には、古墳というものになじまない集団がいたということは確実だろうと思います。

一方、その支配・被支配とは裏腹になりますが、午前中に私がお話しした贄というのは、律令時代の米を中心とする負担体系とは別に、天皇家に魚介類や山の食材などを直接貢納したものです。特に御食つ国と呼ばれた志摩国（三重県）や若狭国（福井県）、淡路国（兵庫県）のほか、日間賀島などの三河湾三島や紀伊国牟婁郡なども贄の貢進地として著名ですが、こうした贄を天皇家に貢納するということはそれだけ王権に対して隷属性があったということであり、志摩も紀伊の一部もそのような地域であったということが言えるかと思います。

中園　これは完全によそ者の意見ではあるのですが、紀州の歴史を見ると、やはり支配というものに対する抵抗といいますか、そういったものを、ふつふつと感じます。雑賀の鉄砲衆あたりもそうですし、根来もそうですね。それから熊野の湛増の、源平合戦のときの動きもそうですし、やはり政権に対してのカウンター的な存在だったというところがあるんじゃないでしょうか。天皇の熊野詣でもそうなのですが、畿内の中心からみると、紀伊国、紀州という場所は、自分達にとっての聖地であるのと同時に、やはり都から離れた場所だという、両方をもっているように感じます。しかし、そこにいる人たちからすると、都の原理から離れたような、一種独特の存在だという認識があったのかもしれないですね。

質問３　古代における、紀伊国と伊勢国と志摩国の国境はいつ頃にできたのでしょうか。その前提となるのは古代の郷名や古墳の分布だと思います

が、はっきりわかりません。

穂積　古代の国境と、中世の国境は変わります。本日は古代のお話をしましたが、現在の大紀町（旧紀勢町）の辺りまでは志摩国です。また、現在の熊野市二木島、尾鷲市との境ぐらいまでが志摩国という考えもあります。ところが、中世になってくると、旧紀勢町の辺りは度会郡になります。度会郡というのは伊勢神宮のあるところです。ですから、現在は志摩半島の鳥羽市と志摩市に志摩は限定されていますが、これは中世辺りに志摩国と紀伊国の間に伊勢国度会郡が入ったことによります。つまり、志摩国と紀伊国が隣り合わせであった段階から、その間に伊勢国度会郡が入り、その段階でその西側が志摩国から紀伊国牟婁郡になったとみられます。それから紀伊国牟婁郡は、本来は一つの郡だったのですが、明治時代になり北東側が三重県北牟婁郡と南牟婁郡に、南西側が和歌山県東牟婁郡と西牟婁郡に編入されとなって、熊野川が県境となる。このように、時代ごとに国境や県境が変わるというのが実態です。ですから、古代の紀伊国、志摩国、あるいは伊勢国について考える場合には、それぞれの時代の国境を考えるとともに、地域ごとの考古資料などを比較したうえで、なぜそこの場所で国境線が定められたのかということを、考えていく必要があるのではないかと思います。

シンポジウム実施風景

櫻井　ありがとうございます。だいぶ時間も超過いたしましたので、そろそろ討論を終えたいと思います。このシンポジウム討論では、考古学、民俗学の両分野から、紀伊半島の海の文化に関連する有意義な討論ができたと思います。どうもありがとうございました。

令和４年度　紀伊風土記の丘　年報　第 50 号
紀伊風土記の丘　研究紀要　第 12 号

発　行　日　　令和６年３月 31 日
編集　発行　　和歌山県立紀伊風土記の丘
和歌山市岩橋 1411
TEL 073-471-6123 ／ FAX 073-471-6120
印　　刷　　株式会社　土井印刷